兵庫県文化財調査報告　第294冊

西　脇　市

板　波　町　遺　跡

－加古川水系加古川中小河川改修事業に伴う発掘調査－

２００６年３月

兵　庫　県　教　育　委　員　会

西　脇　市

いたばちょういせき

板　波　町　遺　跡

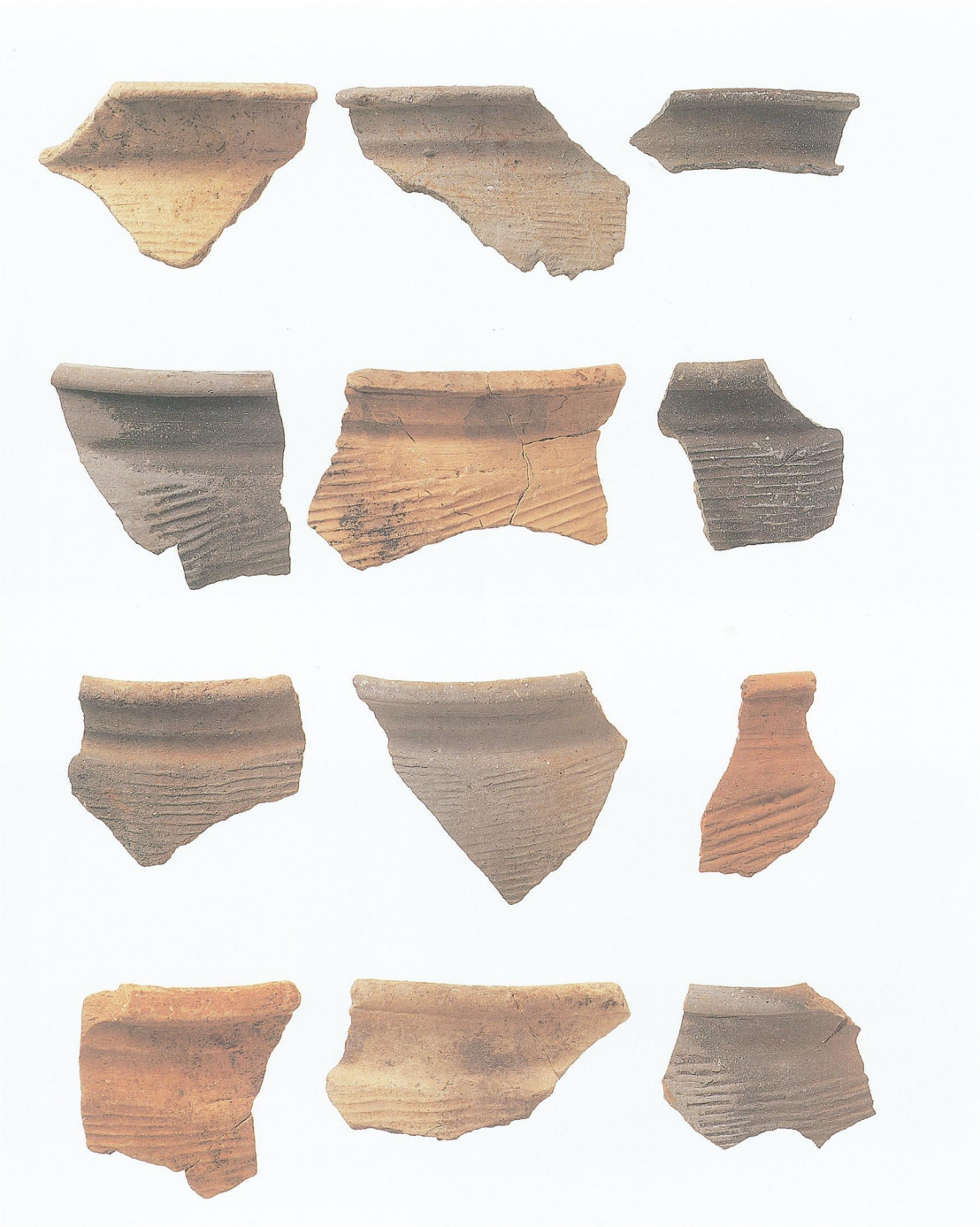
－加古川水系加古川中小河川改修事業に伴う発掘調査－

２００６年３月

兵　庫　県　教　育　委　員　会

遺跡遠景　南上空から

遺跡遠景　東上空から



出土土師器鍋

例　言

1．本書は、兵庫県西脇市板波町に所在する板波町遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、加古川水系加古川中小河川改修事業に先立つもので、兵庫県社土木事務所からの委託を受け、兵庫県教育委員会が平成６年度に第１次確認調査を、平成９年度に第２次確認調査と本発掘調査を実施した。なお、本発掘調査は２次に分けて行っているが、本報告は両調査を合せて報告するものである。

　第１次確認調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所西口圭介・杉原正行が、第２次確認調査と本発掘調査は、同山田清朝・松岡千寿が担当した。なお、本発掘調査の遺跡調査番号は、第１次が970156、第２次が970248である。

3．調査後の空中写真の撮影は、株式会社ワールドに委託して行った。他の遺構の写真撮影は調査員が、実測は調査員と調査補助員が実施した。

4．整理作業は、平成15年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。

5．遺物の接合・実測・復元・トレースについては、上記事務所整理保存班で行った。

6．遺物写真の撮影は、株式会社谷口フォトに委託し、平成17年度に行った。

7．調査は、兵庫県社土木事務所が設置した基準点をもとに三級基準点を設置し、これを基準とした。なお、調査地は第Ｖ系に位置する。

　なお、座標値については、調査時における測量では旧測地系に基づいたものであったが、本報告では、国土地理院が公開するプログラム「ＴＫＹ２ＪＧＤ」により、世界測地系への変換をおこなっている。経緯度についても同様である。

8．本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

9．本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。

10．本書の編集は岸野奈津子の補助を得て山田が行い、第４章を青木哲哉が、石器については藤田　淳が、他は山田が執筆した。

11．本報告にかかわる遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。

12．最後に、発掘調査および報告書の作製にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。記して深く感謝の意を表するものである。

　青木哲哉（立命館大学）　岸本一郎（西脇市教育委員会）宮原文隆（中町教育委員会）千葉　豊（京都大学）

目　次

第１章　板波町遺跡…… 1
　第１節　地理的環境…… 1
　第２節　歴史的環境…… 5
第２章　調査の経緯…… 7
　第１節　調査の契機…… 7
　第２節　本発掘調査…… 9
　第３節　整理作業…… 11
第３章　調査の成果…… 12
　第１節　基本層序と遺構の検出…… 12
　第２節　第１面の調査…… 14
　第３節　第２面の調査…… 75
第４章　板波町遺跡の地形環境…… 90
第５章　まとめ…… 96
　第１節　出土遺物…… 96
　第２節　遺構…… 102

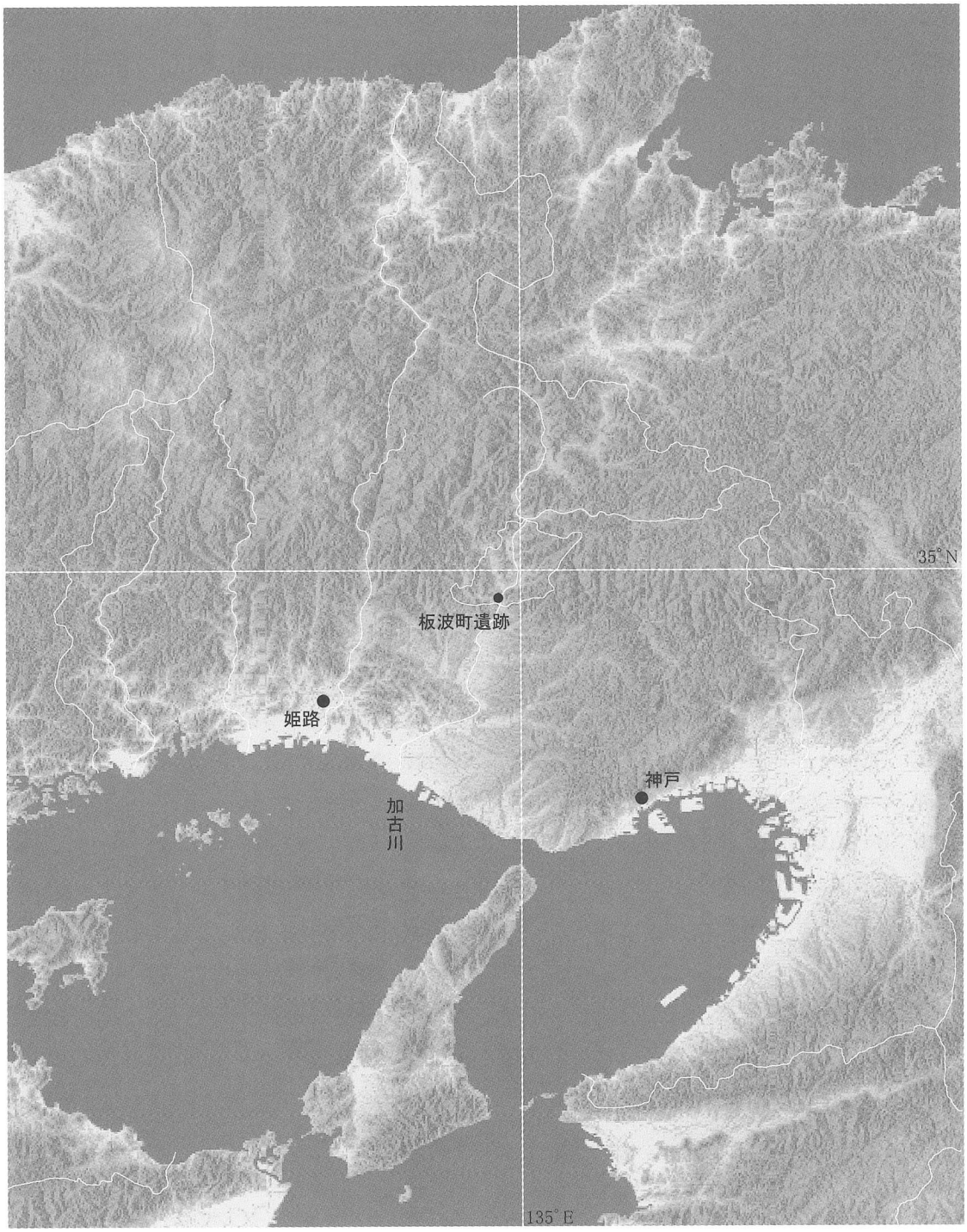
挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置…… iii
第２図　大正12年の遺跡周辺…… 1
第３図　遺跡周辺の地形環境…… 2
第４図　遺跡の立地…… 3
第５図　主要周辺遺跡…… 4
第６図　調査位置…… 7
第７図　確認調査位置図…… 8
第８図　地区割図…… 9
第９図　本発掘調査位置…… 10
第10図　現地説明会…… 11
第11図　基本土層図（Ⅰ・Ⅲ区南壁）…… 12
第12図　第１面…… 13
第13図　第１面出土土器…… 14
第14図　第１面出土金属製品…… 15
第15図　第１面出土石製品…… 16
第16図　第１面（Ⅱ区）…… 16
第17図　第１面（Ⅰ・Ⅲ区）…… 17
第18図　ＳＢ01…… 18
第19図　ＳＢ02…… 19
第20図　ＳＢ03…… 20
第21図　ＳＢ04…… 22
第22図　ＳＢ05…… 22
第23図　ＳＢ06…… 24
第24図　ＳＢ07…… 25
第25図　ＳＢ08…… 26
第26図　ＳＢ08出土土器…… 27
第27図　ＳＢ09…… 27
第28図　ＳＢ10…… 28
第29図　ＳＢ10出土土器…… 29
第30図　ＳＢ11…… 30
第31図　ＳＢ12…… 31
第32図　ＳＢ13…… 32
第33図　ＳＢ13出土土器…… 32
第34図　ＳＢ14…… 34
第35図　ＳＢ14出土土器…… 35
第36図　ＳＢ15…… 36

第37図　ＳＢ15出土土器…… 37
第38図　ＳＢ16…… 38
第39図　ＳＢ16出土土器…… 39
第40図　ＳＢ17…… 40
第41図　柱穴（Ｐ１～Ｐ５）出土土器…… 41
第42図　Ｐ６出土土器…… 42
第43図　柱穴出土土器（Ｐ７～Ｐ20）…… 43
第44図　ＳＫ04出土土器…… 47
第45図　ＳＫ07…… 48
第46図　ＳＫ07出土土器…… 48
第47図　ＳＫ09の検出…… 49
第48図　ＳＫ09…… 50
第49図　ＳＫ09出土土器…… 51
第50図　ＳＫ14…… 52
第51図　ＳＫ14出土土器…… 53
第52図　ＳＫ15出土土器…… 53
第53図　土坑出土土器…… 54
第54図　ＳＫ04の実測…… 55
第55図　ＳＤ03…… 56
第56図　ＳＤ03出土土器（１）…… 57
第57図　ＳＤ03出土土器（２）…… 59
第58図　ＳＤ03出土土器（３）…… 60
第59図　ＳＤ06出土土器…… 62
第60図　ＳＤ07…… 63
第61図　ＳＤ07出土土器…… 63
第62図　ＳＤ08・14出土土器…… 64
第63図　ＳＤ09…… 64
第64図　ＳＤ09出土土器（１）…… 65
第65図　ＳＤ09出土土器（２）…… 66
第66図　畠１…… 71
第67図　畠２…… 72
第68図　畠２出土土器…… 73
第69図　第２面…… 74
第70図　第２面出土土器…… 75
第71図　第２面出土石器（１）…… 76
第72図　第２面出土石器（２）…… 78
第73図　Ⅱ区第２面…… 78
第74図　Ⅰ・Ⅲ区第２面…… 79
第75図　ＳＫ33…… 83
第76図　ＳＫ50出土土器…… 88
第77図　遺跡周辺の地形面区分図…… 91
第78図　遺跡付近の地質断面図…… 93
第79図　調査区の南壁断面図…… 93
第80図　須恵器椀の法量…… 96
第81図　須恵器椀の分類…… 97
第82図　須恵器鉢の分類…… 97
第83図　土師器皿の分類…… 98
第84図　土師器鍋の分類（１）…… 99
第85図　土師器鍋の分類（２）…… 100
第86図　遺構の変遷（１）…… 103
第87図　遺構の変遷（２）…… 104
第88図　遺構の変遷（３）…… 105
第89図　遺構の変遷（４）…… 106

表　目　次

第１表　主要周辺遺跡…… 5
第２表　ＳＢ01建物・柱穴規模一覧表…… 19
第３表　ＳＢ02建物・柱穴規模一覧表…… 20
第４表　ＳＢ03建物・柱穴規模一覧表…… 21
第５表　ＳＢ04建物・柱穴規模一覧表…… 21
第６表　ＳＢ05建物・柱穴規模一覧表…… 23
第７表　ＳＢ06建物・柱穴規模一覧表…… 23
第８表　ＳＢ07建物・柱穴規模一覧表…… 25
第９表　ＳＢ08建物・柱穴規模一覧表…… 26
第10表　ＳＢ09建物・柱穴規模一覧表…… 28
第11表　ＳＢ10建物・柱穴規模一覧表…… 29
第12表　ＳＢ11建物・柱穴規模一覧表…… 29
第13表　ＳＢ12建物・柱穴規模一覧表…… 31
第14表　ＳＢ13建物・柱穴規模一覧表…… 33
第15表　ＳＢ14柱穴規模一覧表…… 33
第16表　ＳＢ14建物規模一覧表…… 34
第17表　ＳＢ15建物規模一覧表…… 36
第18表　ＳＢ15柱穴規模一覧表…… 37
第19表　ＳＢ16建物規模一覧表…… 38
第20表　ＳＢ16柱穴規模一覧表…… 39
第21表　ＳＢ17建物・柱穴規模一覧表…… 40



第１図　遺跡の位置

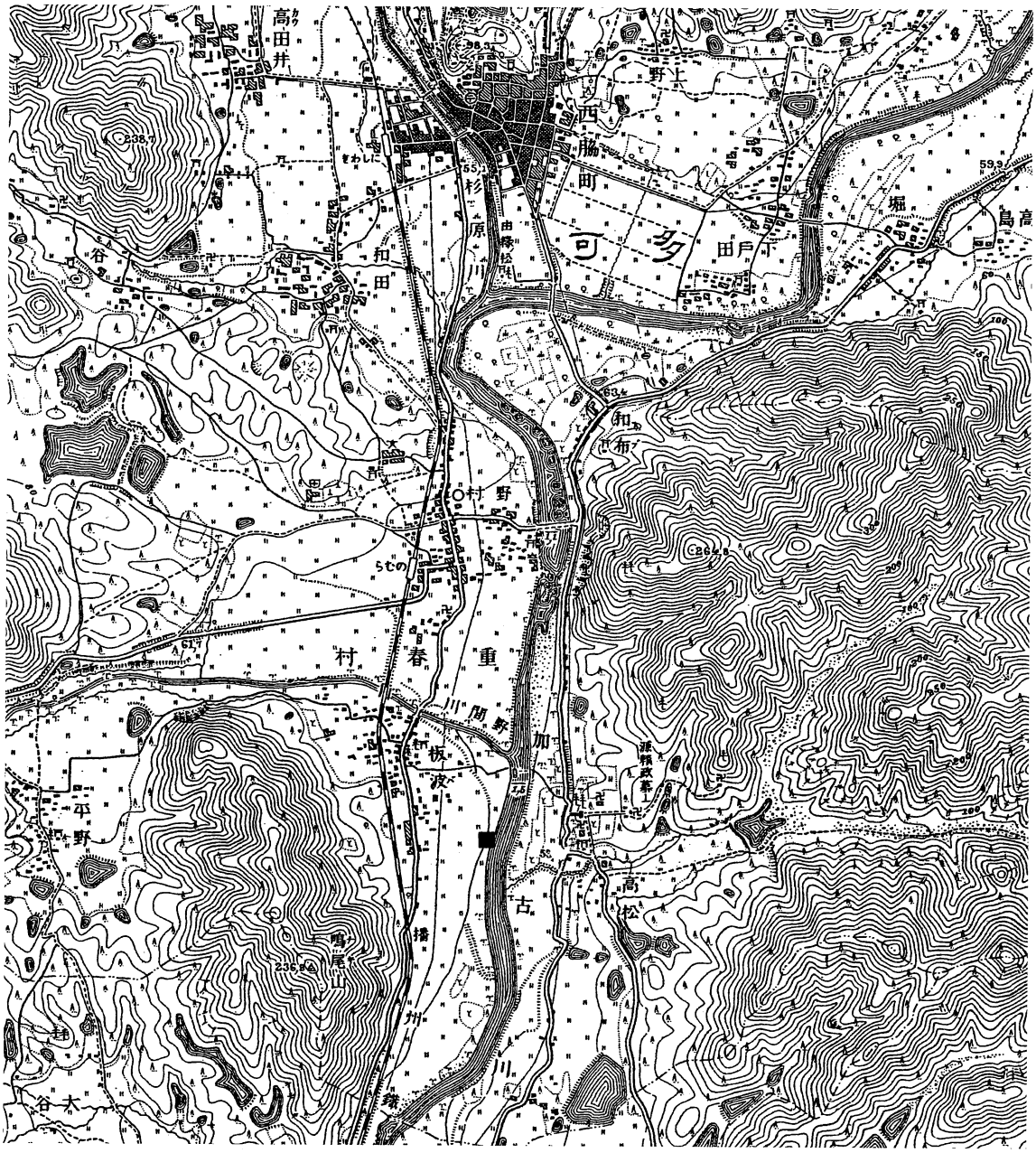
第１章　板波町遺跡

第１節　地理的環境

西脇市

板波町遺跡は、兵庫県西脇市板波町に所在する。板波町遺跡の所在する西脇市は、兵庫県のほぼ中央部に位置するとともに、東経135′と北緯35°が交差し、「日本のへそ」と称されている(第１図)。「播州織」と「釣針」を基幹産業として発展してきた町である。

西脇市は、昭和27年４月（1952）に、西脇町・日野村・重春村・比延庄村が合併して市制が施行されたものである。[1] そして、板波町遺跡の所在する板波町は、旧重春村にあたる(第２図)。その後、昭和29年に加西郡芳田村を編入し、さらに、平成17年10月、いわゆる

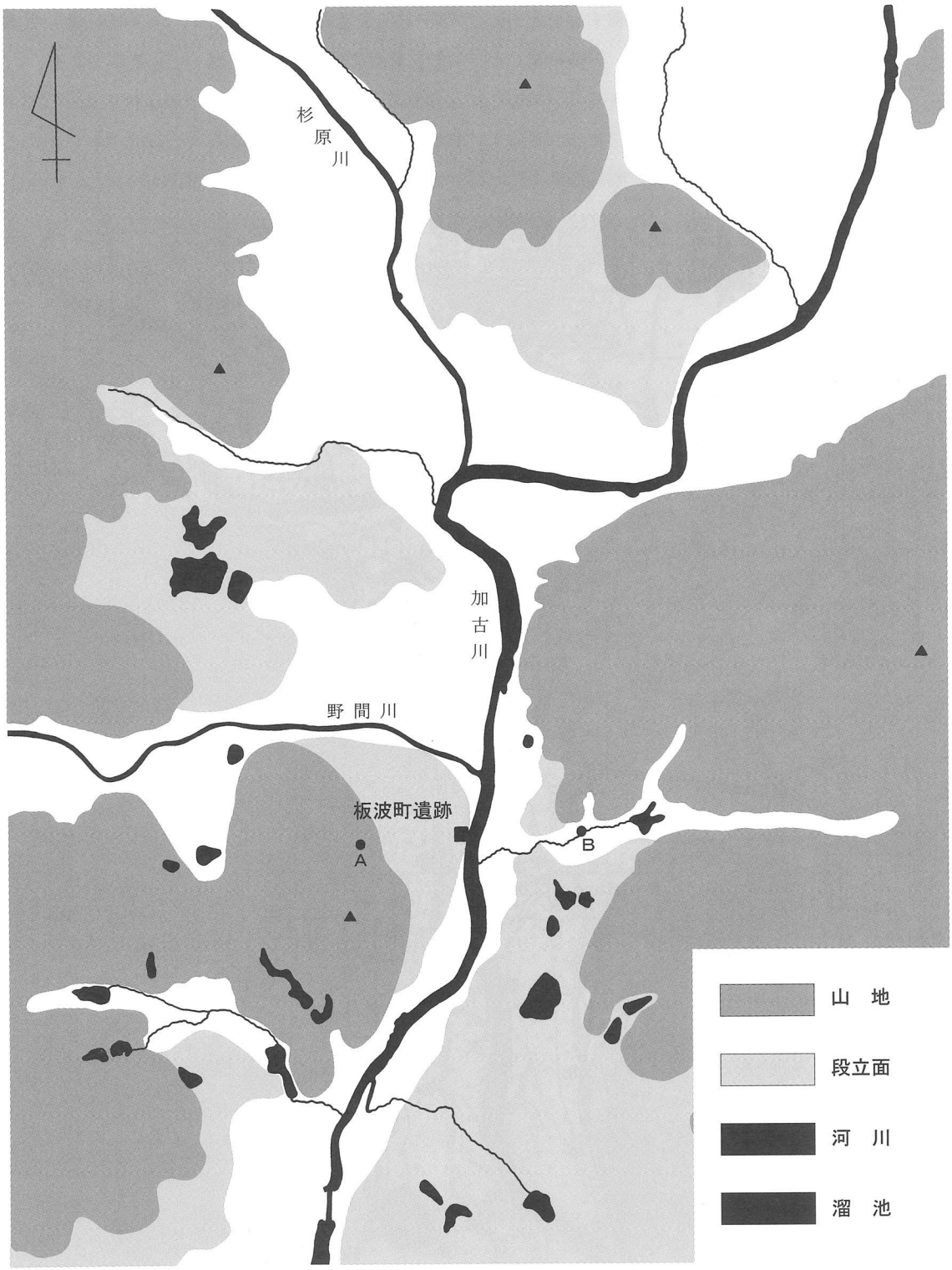


第２図　大正12年の遺跡周辺

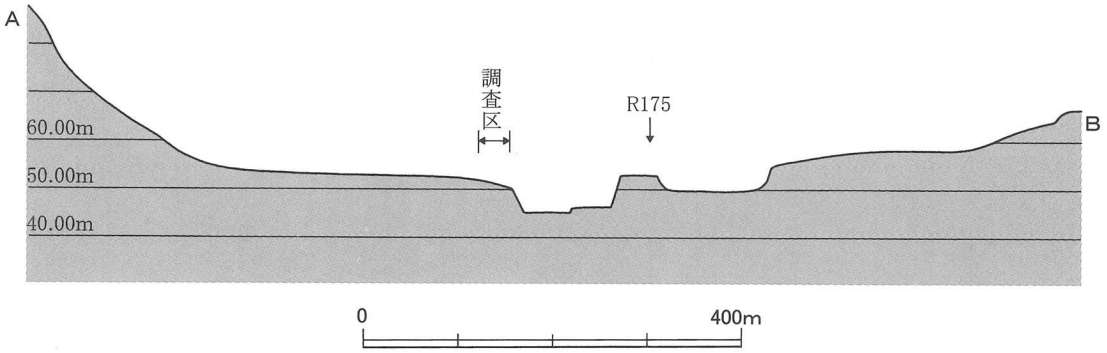
平成の大合併により、多可郡黒田庄町と合併し、現在の西脇市となっている。人口は約45000人（平成17年10月現在）で、その面積は132㎢に及ぶ。

北側は丹波市と、北西側から西側は多可郡多可町と、南側は滝郡社町・滝野町と境をなしている。

加古川に杉原川および野間川が合流する一帯を中心に盆地が形成され、この盆地一帯に市の中心部が形成されている（第３図）。



第３図　遺跡周辺の地形環境



第４図　遺跡の立地

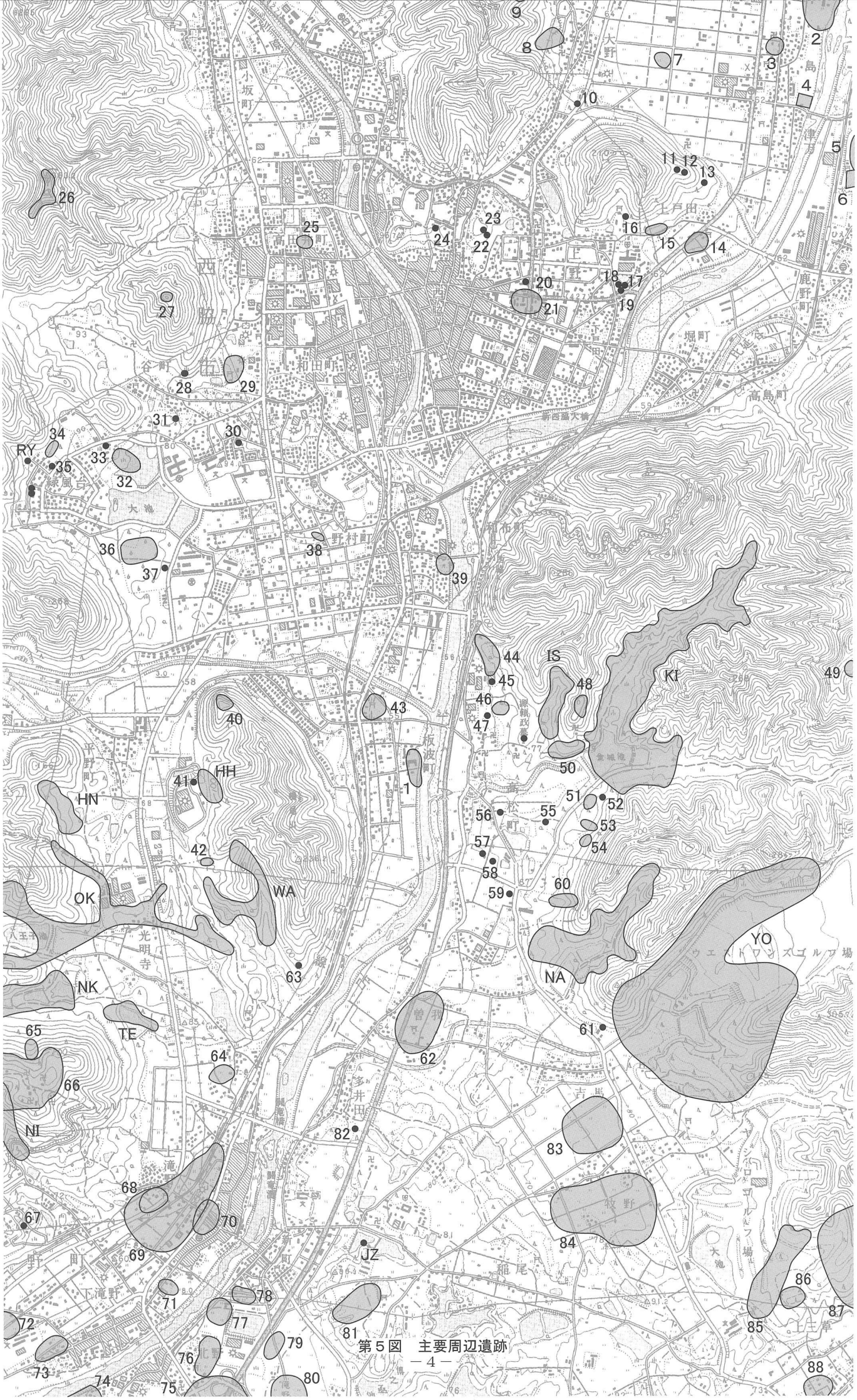
板波町遺跡　板波町遺跡の所在する板波町は、西脇市の南部、加古川に野間川が合流する地点の南西側、加古川右岸に位置する(第３図)。

加古川　板波町遺跡のすぐ東側を流れる加古川は、兵庫県のほぼ中央部を南北に瀬戸内海へ流下する一級河川である。丹波と但馬の旧国境に位置する粟賀山の南側（丹波市青垣：旧氷上郡青垣町)に源を発し、加古川市と高砂市の間で、瀬戸内海へ注いでいる。総延長約96kmを測り、その流域面積は1730km²に及ぶ[(2)]。西脇市は、この加古川流域のなかでも中流域にあたり、板波町遺跡は、加古川河口部から直線で約30.4km、河川長36.4kmの位置にあたる。

地形環境　板波町遺跡は、加古川によって形成された完新世段丘面上に立地する(第４図)。この段丘面の西側は鳴尾山(なきやま)によって隔てられており、この段丘面の東西方向の幅は約300ｍを測る。特に、この段丘面上においては、現在の加古川に隣接している。調査地の、現地表面の標高は51.4ｍで、加古川水面との比高は、約５ｍである。

〔参考文献〕

（１）西脇市史編纂委員会『西脇市史　本篇』西脇市役所　1983
（２）国土交通省姫路河川国道事務所　ホームページによる。


大野
小坂町
高田町
西脇
和田町
谷町
緑風台
大池
野村町
上戸田
鹿野町
堀町
高島町
新西脇大橋
源頼政墓
板波町
金城池
光明寺
多井田
古里
牧野
稲尾
下滝野
上生草
ウエストワンズゴルフ場
RY
HN
OK
NK
TE
NI
WA
HH
IS
KI
NA
YO
JZ

第５図　主要周辺遺跡

第２節　歴史的環境

はじめに

板波町遺跡周辺の遺跡については、多くは周知されていない。特に、板波町遺跡のように低位段丘面上に立地する遺跡は、北約１kmに位置する野村溝居跡(39)以外、ほとんど周知されていない。多くは、周囲の山麓部を中心に、窯跡群・古墳群等が周知されている。

本節では、今回の調査で検出された、縄文時代・奈良時代・鎌倉時代・室町時代を中心に、なかでも、調査等によりその内容が明らかとなっている遺跡を中心にみていくことにする。また、行政的には、西脇市と加東郡社町の両地域を対象とする(第５図)。

縄文時代

野村・笹野遺跡（32）が周知されているが、調査が行われておらず、その実態は不明である。このため、本報告は、当該地域での最初の調査例となるものである。

奈良時代

上ノ段遺跡[1](36)、上滝野・宮ノ前遺跡[2](68)、北野・黒深遺跡[3](76)が周知されている。

上ノ段遺跡

奈良時代前期の寺跡（野村廃寺）と考えられ、調査により、礎石建物・掘立柱建物・基礎地業建物・築地・井戸・幢竿遺構などが検出され、築地に囲まれた内部に金堂・塔・講堂・僧坊などを配した寺跡であることが明らかとなっている。屋瓦・九輪片・塼仏片などが出土している。

上滝野・宮ノ前遺跡

奈良時代末～平安時代にかけての官衙的性格が強いと考えられている。調査では、条里地割に沿った道路状遺構などが検出され、墨書土器・硯・木簡などが多く出土している。

北野・黒深遺跡

平安時代初頭の溝状遺構が検出されている。

平安～鎌倉時代

東播北部古窯址群[4](89)、北野・神田木遺跡[3](77)が、周知されている。

北部古窯址群

板波町遺跡の西側から北東側一帯にかけて周知されている。板波町遺跡は、当古窯跡群の

第１表　主要周辺遺跡

	遺跡名（県遺跡番号）		遺跡名（県遺跡番号）		遺跡名（県遺跡番号）
1	**板波町遺跡（140469）**	31	谷古墳（140288）	60	金城池16号散布地（140457）
2	大垣内遺跡（140137）	32	野村・笹野遺跡（140286）	61	飯盛山古墳（230030）
3	嶋・大堂遺跡（140462）	33	笹野古墳（140285）	62	曽我・大蔵遺跡（240184）
4	伝・島村城跡（140299）	34	笹野古墳群（140282～1402284）	63	鳴尾山古墳（240035）
5	比延前田遺跡(140475)	35	中の多和遺跡（140281）	64	上滝野・東平池遺跡（240186）
6	鹿野宮ノ前遺跡（140477）	36	上ノ段遺跡(140287)	65	光明寺裏遺跡（240075）
7	嶋・馬渡り遺跡（140074）	37	緑ヶ丘古墳（140338）	66	光明寺関連遺跡(240070)
8	大野古墳群（140067～140073）	38	横山１号墳（140294）	67	下ノ山12号墳(240046)
9	西林寺南方山頂遺跡（140473）	39	野村構居跡(140349)	68	上滝野・宮ノ前遺跡(240068)
10	大野古墳（140298）	40	鳴尾山城跡（140339）	69	上滝野条里(240182)
11	東八日山古墳２号墳（140303）	41	経ヶ芝古墳（140340）	70	上滝野・二反田遺跡(240183)
12	東八日山古墳３号墳（140304）	42	長池上古墳群（240058～240060）	71	上滝野・清蔵寺遺跡(240178)
13	東八日山古墳１号墳（140302）	43	石上神社遺跡（140350）	72	下滝野・下ノ山遺跡（240066）
14	上戸田遺跡（140301）	44	高松古墳群（140353～140366）	73	下滝野・奥瀬遺跡(240176)
15	八日山古墳２号墳（140306）	45	蔵谷窯址（140367）	74	穂積・高町遺跡（240011）
16	八日山古墳１号墳（140305）	46	高松・寺ノ垣内遺跡（140368）	75	滝野条里（240185）
17	下戸田古墳４号墳（140314）	47	北垣内古墳（140369）	76	北野・黒深遺跡(240173)
18	下戸田古墳２号墳（140312）	48	石ヶ谷山遺跡（140422）	77	北野・神田木遺跡(240172)
19	下戸田古墳３号墳（140313）	49	古高松遺跡（140351）	78	新町・北坂根遺跡（240069）
20	きつね塚古墳（140300）	50	石ヶ谷古墳群（140371～140420）	79	北野・南坂根遺跡（240175）
21	西脇城跡（140465）	51	金城池13号散布地（140454）	80	上中・片山遺跡（230056）
22	上本町大塚２号墳（140297）	52	金城池16号窯址（140467）	81	上中古墳群（230114～230119）
23	上本町大塚１号墳（140296）	53	金城池14号窯址（140455）	82	多井田古墳（240036）
24	童子山窯址（140295）	54	金城池15号窯址（140456）	83	吉馬・茄子岡遺跡（230087）
25	高田井遺跡（140292）	55	平見古墳（140421）	84	牧野・池田遺跡（230086）
26	矢筈山城跡（140293）	56	金城池15号窯址（140460）	85	牧野古墳群（230337～230342）
27	春日山遺跡（140474）	57	金城池14号窯址（140459）	86	上三草中近世墓群（230076）
28	谷窯址（140289）	58	金城池13号窯址（140458）	87	上三草古墳群（230157～230253）
29	和田・上ノ垣内遺跡（140290）	59	横山古墳（140352）	88	三草藩本陣跡（230078）
30	苦木古墳（140291）				
89	東播北部古窯址群				
IS	石ヶ谷支群(140423～140429)	NA	鍋子支群(240061・240062・240076～102)	TE	天神山支群(240159～240161)
NI	仁王谷支群(240162～240166)	JZ	地蔵寺窯址支群(240167)	OK	奥ノ谷支群(240144～240189)
RY	緑風台支群(140278～140280)	HH	平野東支群(140341～140344)	WA	鷲谷支群（240145～240158）
HN	平野西支群(140345～140348)	NK	中ノ池支群(240103～240117)	KI	金城池支群(140431～53・141463)
YO	吉馬支群(230050・230431～460)				

ほぼ中央部に位置する。当古窯址群は、計18の支群からなり、播磨・緑風台窯址[5]（RY）・吉馬支群[6]（YO）で調査が行われている。

緑風台支群　12世紀末に操業年代が求められる窯址で、窯の構造・製品ともに瀬戸方面からの影響が指摘されている。その一方、これらの製品を、丹波焼の範疇で理解する見解もある。板波町遺跡出土の当該期の土器のいくつかは、当窯の製品の可能性が考えられる。

吉馬支群　飛鳥時代から平安時代にかけての窯址群で、平安時代の窯跡としては、部分的な調査も含めて、平成17年現在、計11基の調査が行われている。

北野・神田木遺跡　平安時代後期の土坑・溝状遺構が検出されている。

室町時代　野村溝居跡[7]（39）、比延前田遺跡[8]（5）、北野・黒深遺跡（76）が周知されている。

野村溝居跡　平成元年度に県教育委員会が加古川河川改修に伴い、東堀を中心に調査を行っている。その後、1994年から1996年にかけて、西脇市教育委員会が、主郭部を中心に、住宅建設に伴う調査と学術調査を４次にわたって行っている。

この結果、当遺跡は、14世紀代から築かれはじめ、16世紀後半の天正八年ころまで機能した堀と土塁に囲まれた城郭であることが、明らかとなっている。城郭内には、50m四方の方形の主郭部をもち、ここからは、園池遺構や土坑墓などが検出されている。板波町遺跡の約１km北側と、近接した位置関係にあり、当遺跡との関連が注目される。

比延前田遺跡　野村構居跡とほぼ同時期に機能していた城館跡で、小学校改築に伴い、西脇市教育委員会により、1998年から2000年の３期にわけて調査が行われている。この結果、城館に伴う堀跡・柵跡・井戸等が明らかになるとともに、輸入陶磁器・丹波焼・青銅製香炉などが出土している。また、堀においては、堀障子を有することが明らかとなっている。

北野・黒深遺跡　室町時代中葉の掘立柱建物跡が検出されている。

北野・神田木遺跡　室町時代中葉の井戸・土坑・溝状遺構が検出されている。

〔註〕

（１）岸本一郎『上ノ段遺跡（野村廃寺）発掘調査報告書』西脇市教育委員会　2002

（２）加東郡教育委員会『上滝野土地区画整理事業に係る調査　上滝野・宮ノ前遺跡』1992

（３）小川真理子『北野・黒深遺跡　北野・神田木遺跡～滝野町北野土地区画整理事業にかかる調査～』加東郡教育委員会　1999

（４）岸本一郎・森下大輔「東播北部古窯址群の基礎資料－西脇市南部及び加東郡北部に分布する奈良・平安時代の窯址群－」『今里幾次先生古希記念　播磨考古学論叢』今里幾次先生古希記念論文集刊行会　1990

（５）岸本一郎『播磨・緑風台窯址』西脇市教育委員会　1983

（６）中村　浩『社・吉馬－古窯跡群等の発掘調査報告書－』吉馬古窯跡群埋蔵文化財調査会　1990
中村　浩『社・牧野－古窯跡群等の発掘調査報告書－』牧野古窯跡群埋蔵文化財調査会　1990

（７）別府洋二『野村構居跡』兵庫県教育委員会　1991
岸本一郎『野村構居跡遺跡Ⅱ　第１次～４次確認調査報告書』西脇市教育委員会　1997

（８）岸本一郎『比延前田遺跡』西脇市教育委員会　2000
岸本一郎『比延前田遺跡Ⅱ』西脇市教育委員会　2001

第２章　調査の経緯

第１節　調査の契機

工事計画

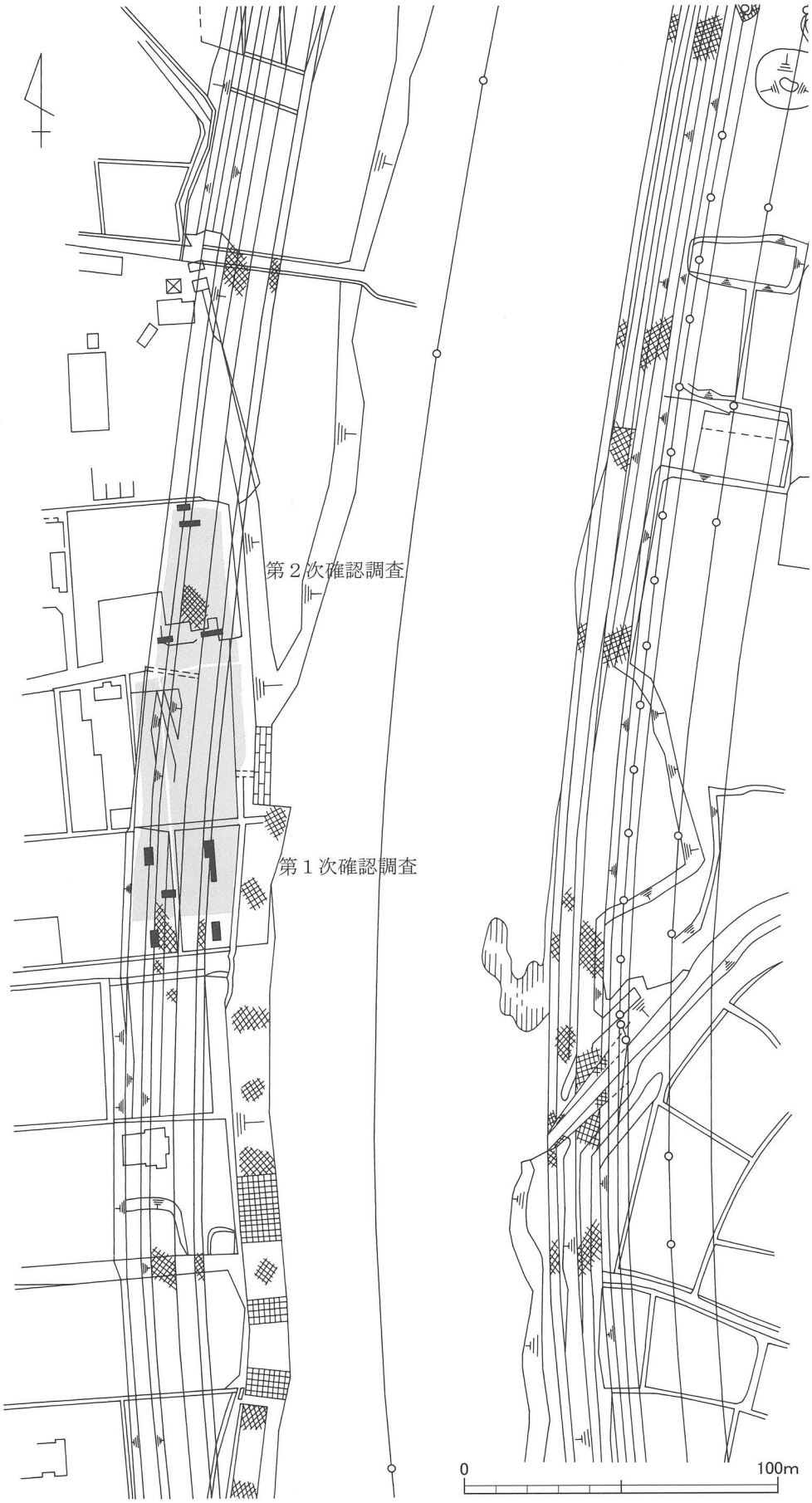
前章でも触れたように、調査地の北側約200mにおいて、多哥町（旧多可郡八千代町）を源とする野間川が加古川に合流している。さらに1.5km上流では、多哥町（旧多可郡加美町）を源とする杉原川が加古川に合流している。そしてこの２地点間にある野村橋と野村大橋の間は「野村滝」と称され、岩盤が露出するほどである[(1)]。この２箇所の合流地点付近を中心に、大雨の際、水流の逆流現象が起き、幾度か氾濫がおきていた。このため、この水害を防ぐため、加古川右岸の堤防の強化が計画されることとなった。

以上の計画に先立ち、平成６年度に分布調査・確認調査をおこなった。この結果、埋蔵文化財の包蔵が明らかとなり、今回報告する本発掘調査を実施することとなった。

野村溝居跡

なお、同様の経緯により、同市野村町に所在する「野村溝居跡」の調査が、兵庫県教育委員会により、平成元年から２年にかけて行われている。その成果は『野村溝居跡』（1991）として、兵庫県教育委員会によりまとめられている[(2)]。

第６図　調査位置



第７図　確認調査位置図

分布調査　平成６年５月25日に実施した。この結果、今回報告する範囲を中心に、遺物の散布が認められた。

確認調査　２次にわたって実施した（第１次確認調査・第２次確認調査：第７図）。

第１次確認調査　平成６年６月16日に実施した。５箇所に２ｍ×４ｍのトレンチを設定し、調査を行った。当初の調査対象地全域を調査することができず、実際にできたのは、今回報告するⅠ区とⅢ区の南側に限られる。

この結果、確認できた遺構は柱穴に限られるが、出土した土器から、縄文時代から平安時代にかけての遺構が予想されるとの結論に至った。

第２次確認調査　Ⅰ区の本発掘調査に先立ち、平成９年５月13日に実施した。１ｍ×２ｍのトレンチを１箇所、１ｍ×５ｍのトレンチを３箇所に設定し、調査を行った。今回報告するⅡ区に相当する。

調査の結果、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構を確認した。加えて、遺構検出面を２面確認した。

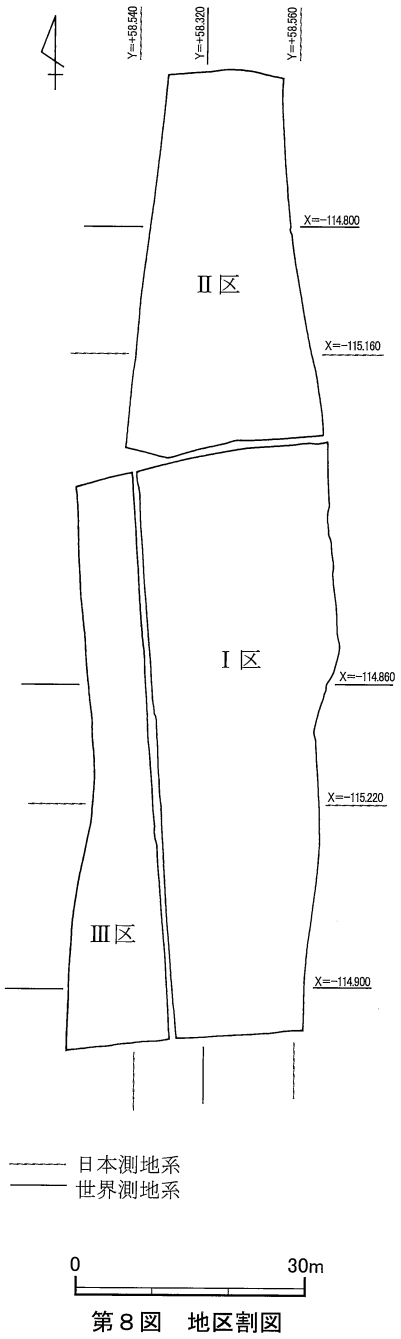
第２節　本発掘調査

平成９年度に実施した。当初、確認調査で埋蔵文化財が包蔵されていると判断された範囲を調査対象とし、調査をすすめていった。その後、調査が進むにつれて、確認調査が十分できなかった北側・西側にも埋蔵文化財包蔵地の拡大が明らかとなった。そこでこれらの地区の調査については、第２次調査として、第１次調査に引き続き実施した。

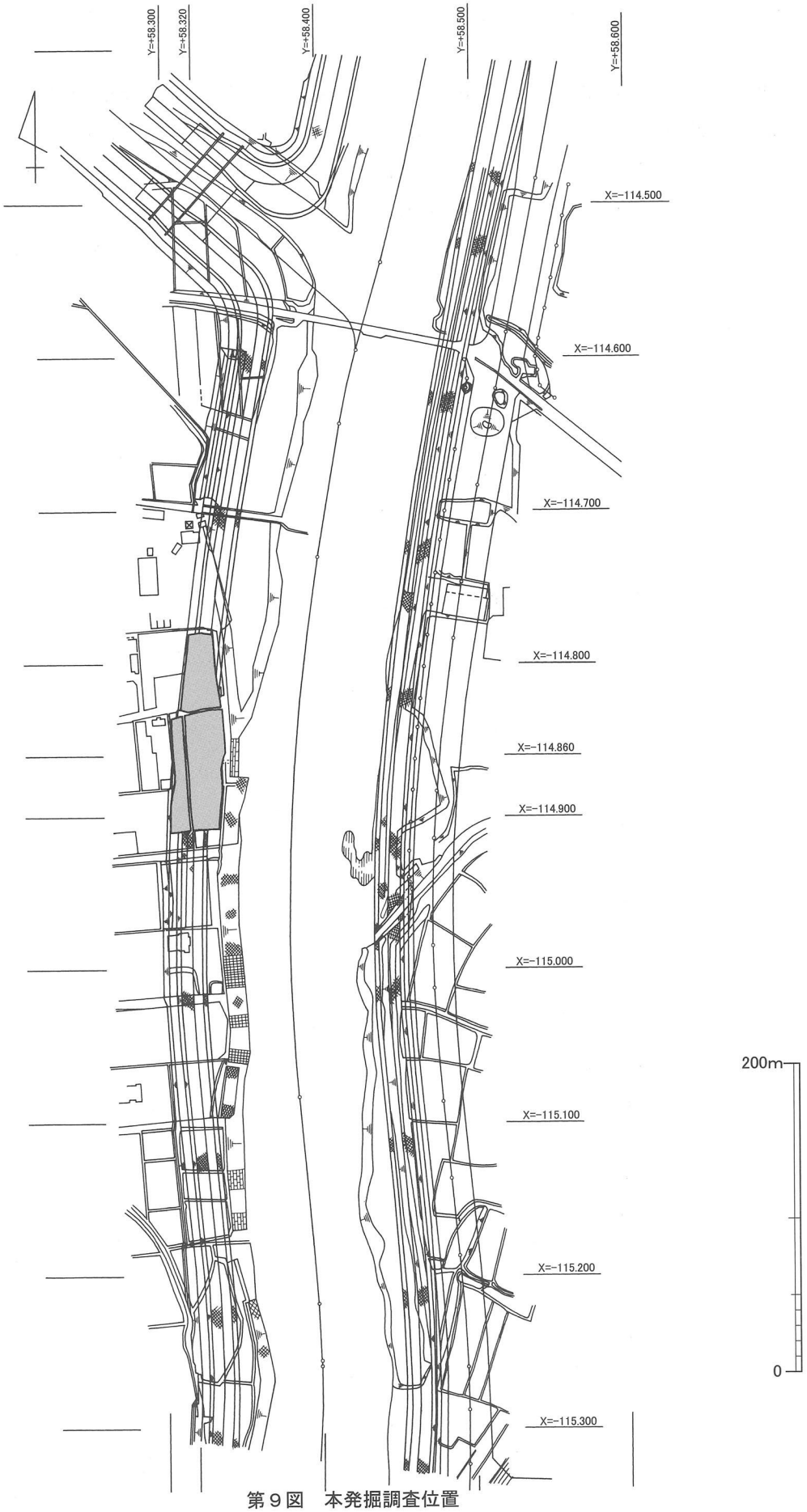
遺跡名　なお、当遺跡の遺跡名についてであるが、兵庫県遺跡地図においては「板波・舟戸遺跡」として周知されている。しかし、調査時から「板波町遺跡」として扱ってきたため、本報告でも「板波町遺跡」として報告する。

地区割　当初の調査区をⅠ区、その後北側へ拡張した地区をⅡ区、西側へ拡張した地区をⅢ区と称し、調査・整理を進めていった。これら３地区は互いに隣接するもので、その位置関係は、第８図のとおりである。

第１次調査　平成９年５月７日から８月８日まで実施した。Ⅰ区を調査対象とし、その面積は1736㎡である。調査後は、空中写真撮影を実施したが、図化に関しては、現地での実測による。



第８図　地区割図


Y=+58.300
Y=+58.320
Y=+58.400
Y=+58.500
Y=+58.600
X=-114.500
X=-114.600
X=-114.700
X=-114.800
X=-114.860
X=-114.900
X=-115.000
X=-115.100
X=-115.200
X=-115.300
200m
0

第９図　本発掘調査位置

第２次調査　平成９年８月18日から11月21日まで実施した。Ⅱ区・Ⅲ区を調査対象とし、その面積は1873㎡（Ⅱ区1109㎡・Ⅲ区764㎡）である。調査後は、空中写真撮影と合わせて、写真測量による図化を行った。

現地説明会　Ⅰ区調査中の平成９年６月26日と、Ⅱ・Ⅲ区調査中の同年10月７日に、地元市民を対象とした現地説明会を実施した(第10図)。

第10図　現地説明会

第３節　整理作業

整理作業は、平成15年度から、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。各年度の整理作業内容、および整理体制は、以下のとおりである。

平成15年度　土器の実測を行った。

整理担当職員　長浜誠司
　　山田清朝・松岡千寿
整理担当嘱託員　岸野奈津子

平成16年度　出土金属製品の実測、出土遺物の写真撮影・遺構図の製図・トレースを行った。

整理担当職員　長浜誠司
　　山田清朝
整理担当嘱託員　岸野奈津子

平成17年度　原稿の執筆・編集作業を行い、本書の刊行に至った。

整理担当職員　別府洋二
　　山田清朝
整理担当嘱託員　岸野奈津子

〔註〕

(１)田中智彦「舟運に利用された河川の現状」『加古川・円山川の舟運』兵庫県教育委員会　1995
(２)別府洋二『野村構居跡』兵庫県教育委員会　1991

第３章　調査の成果

第１節　基本層序と遺構の検出

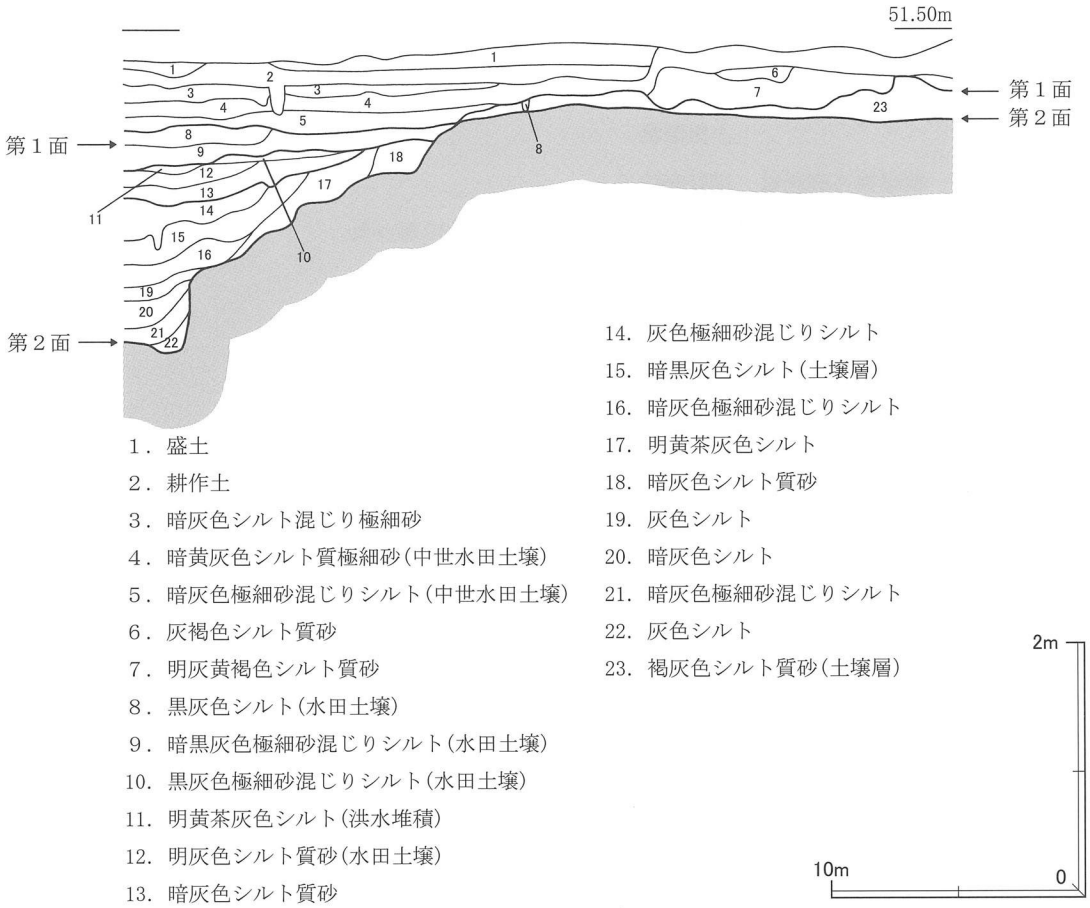
基本層序

当遺跡の層序は比較的単純である。基本土層としては、上から、耕土層・床土層・褐灰色シルト質砂・黄褐色シルトの層序が認められた(第11図)。調査地の大半はほぼ同様の層序であり、顕著なレベル差は認められないが、Ⅰ区南西隅からⅢ区南端部にかけては旧河道にあたり、大きく落ち込んでいる。このため、この箇所の土層堆積は複雑となっている。

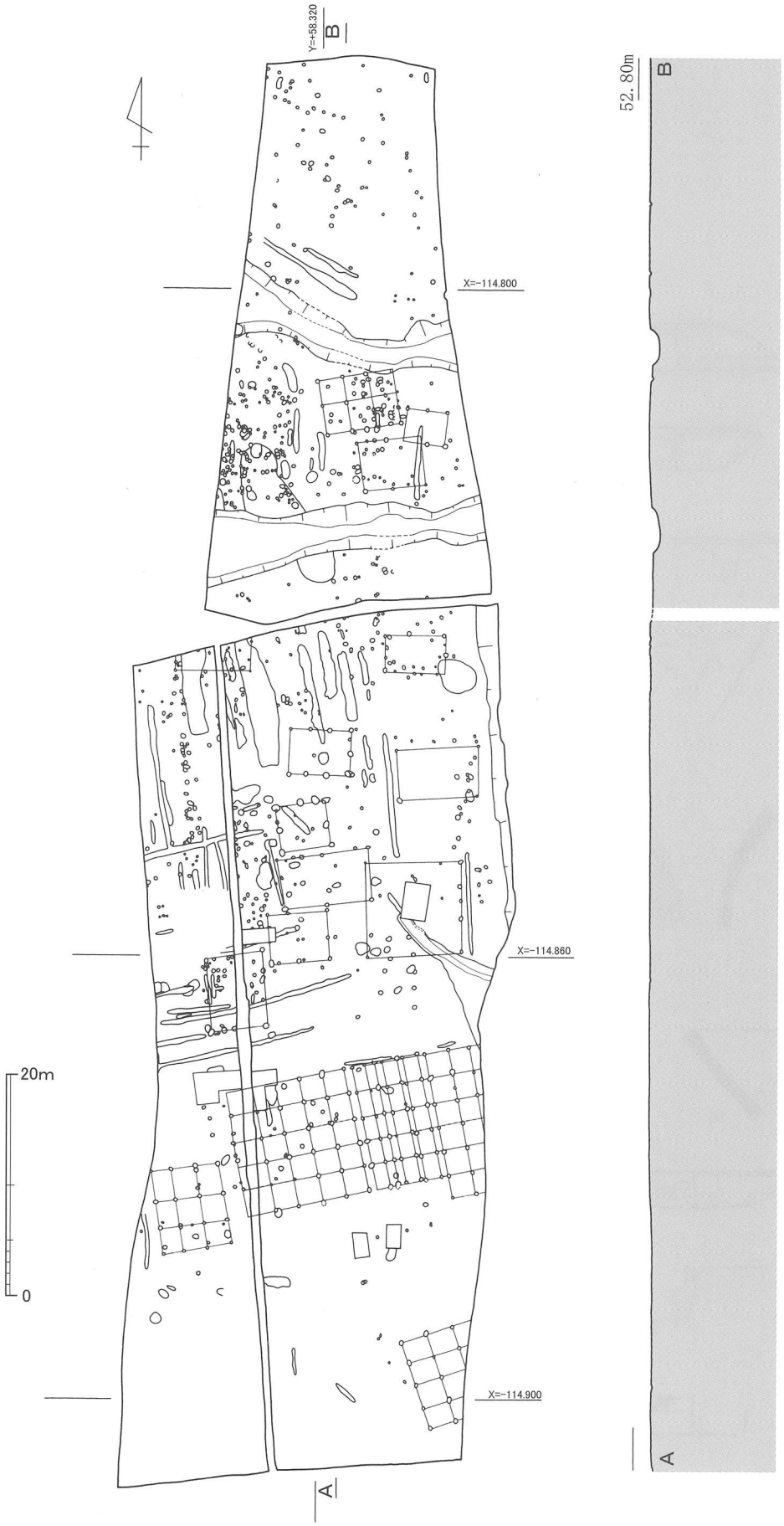
旧河道は、数次の洪水に起因する堆積によって埋没している。この過程において、数層の土壌層（第９層・第10層・第12層）が認められた。これらの土壌層は、その層相から、水田土壌と考えられる。ただし、断面観察では、畦畔を確認することはできなかった。いずれにしても、旧河道の埋没過程において、数度にわたって水田として利用されていたことが理解できる。

遺構検出

第２・第３層の褐灰色シルト質砂が土壌層で、調査区のほぼ全域で認められた。この層の上面と下面で遺構を検出している(第12図・第69図)。上面を第１面、下面を第２面と呼称し、調査を進めていった。本報告においても同様に呼称する。第１面と第２面のレベル差は、平均して20cmである。現地表面から第１面までの深さは40cmである。



第11図　基本土層図（Ⅰ・Ⅲ区南壁）



第12図　第1面

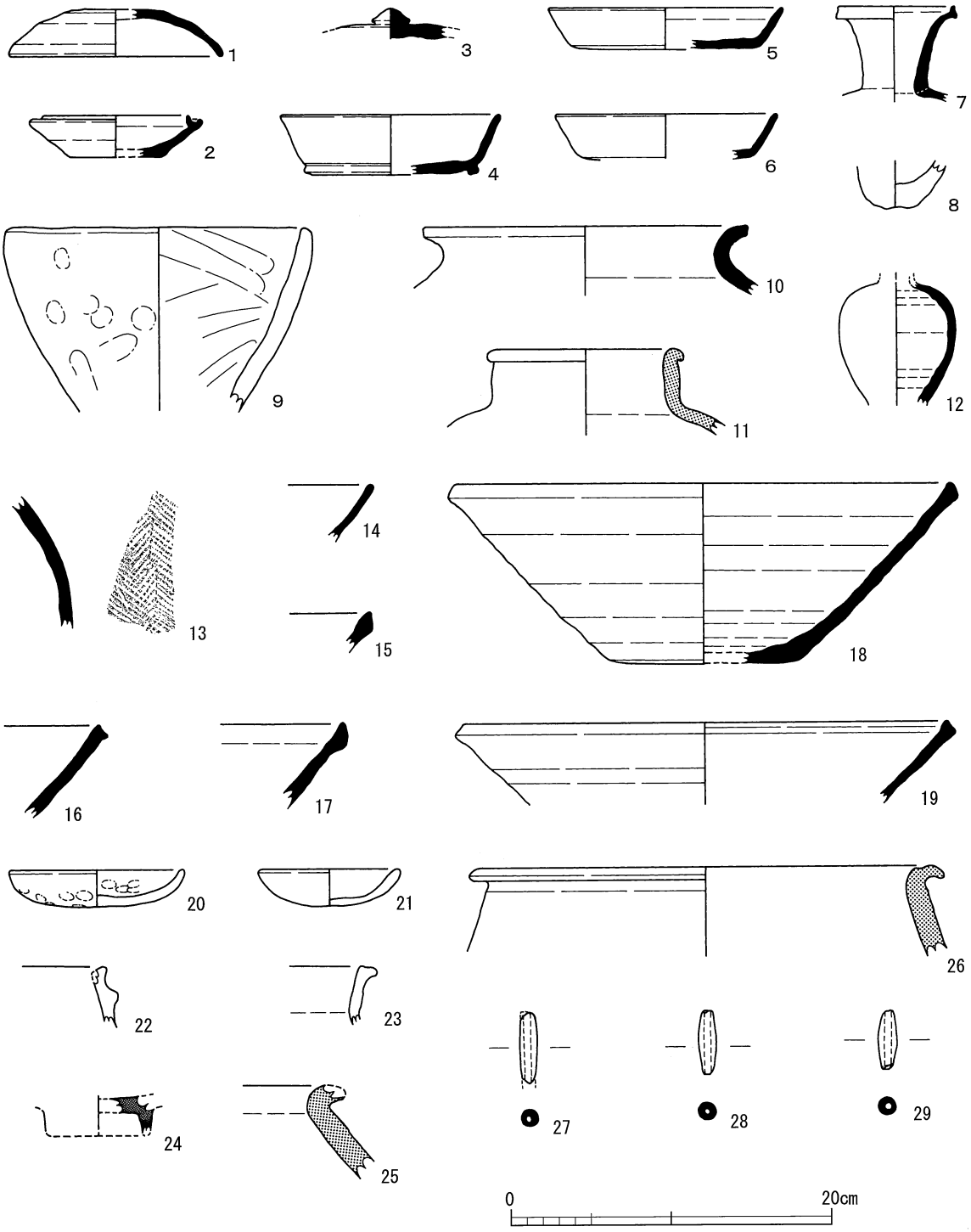
第２節　第１面の調査

１．包含層出土遺物

第１面を検出した際、土器・金属製品・石器が出土している。特に、土器が多く出土している。これらの土器については、第１面で検出した遺構の時期を検討するうえで参考となるものである。以下、図化できた遺物について報告する(第13図・第14図)。

（１）土器(写真図版19)

飛鳥時代・奈良時代・鎌倉時代・室町時代の土器が出土している。



第13図　第１面出土土器

飛鳥時代　須恵器の杯身・杯蓋が出土している。

奈良時代　須恵器・土師器・製塩土器が出土している。須恵器は、杯Ａ（５・６）・杯Ｂ（４）・長頸壺（７）が出土している。製塩土器は９の１個体で、内外面とも手づくねにより仕上げられている。８の土師器についても、外面を中心に手づくねにより仕上げられており、製塩土器の可能性が考えられる。

鎌倉時代　須恵器・土師器・白磁が出土している。

須恵器　甕（10・13）・椀（14）・捏鉢（15～19）・小壺（12）が出土している。甕の外面には羽状の叩きが施されている。捏鉢については、12世紀代～14世紀代と時期幅が認められる。小壺については、平安時代まで遡る可能性が考えられる。

土師器　小皿（20・21）が出土している。20は、手づくね整形後、口縁部が１段の横ナデ調整により仕上げられている。21は、全体的に指押さえとナデ調整により仕上げられている。

白磁　24の１個体で、底部のみの小片である。Ⅳ類碗の底部と考えられる。

室町時代　土師器・丹波焼・備前焼が出土している。

土師器　鍋（22・23）が出土している。22は、端部を外方に拡張するとともに、その下に断面蒲鉾形の突帯が付く。内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。23は、横ナデ調整により仕上げられている。焼成は良好で、酸化焔焼成されている。

丹波焼　26の1個体である。甕の口縁部片で、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

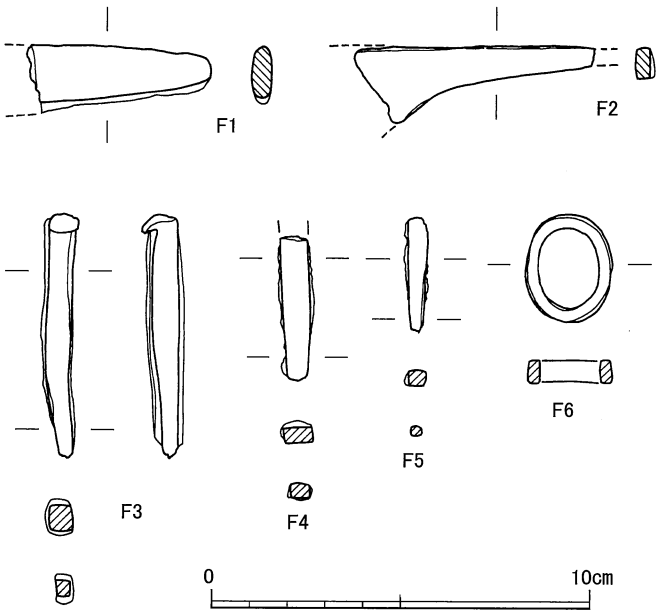
備前焼　11と25の２個体が出土している。11は、壺の口縁部片である。口径に対して頸部高が短いことから、室町時代後半と考えられる。25は、甕の口縁部の小片である。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

その他　土錘が３点（27～29）出土している。いずれも小型の土錘である。全長は、27は4.4cm残存し、28は4.0cm、29は3.6cmを測る。最大径は、いずれも1.1cmである。ＳＢ14出土の土錘(第35図)との類似から、鎌倉時代を中心とした時期と考えられる。

（２）金属製品

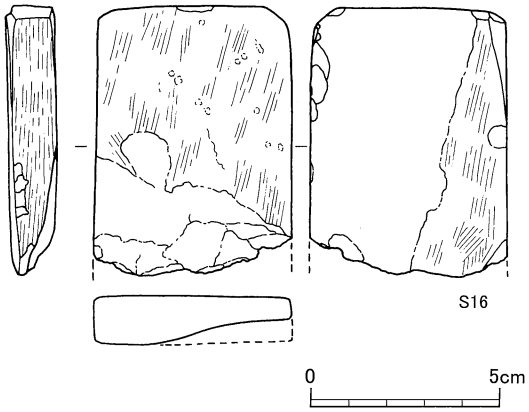
５点出土した(第14図)。Ｆ１は、刀子等の茎と考えられる。4.8cm残存し、最大幅1.8cm、厚さ0.5cmを測る。断面は長楕円形を呈する。Ｆ３は鉄釘である。頭部は頭巻で、断面は方形をなす。6.5cm残存し、断面は７mm×６mmである。

Ｆ４は、釘の可能性も考えられる。断面は長方形を呈する。3.8cm残存し、断面の規模は７mm×４mmである。



第14図　第１面出土金属製品

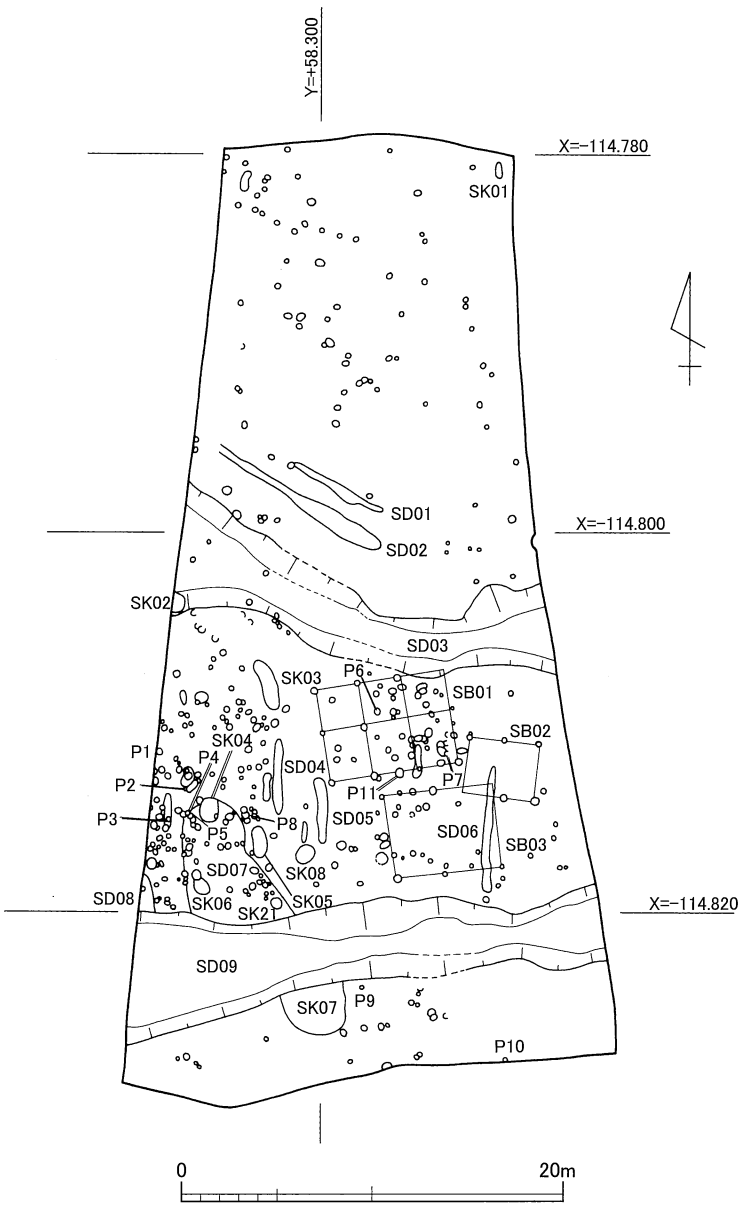
Ｆ５は、鉄釘の一部と考えられる。頭部は残存せず、先端部付近を中心に残存する。3.0cm残存し、断面は５㎜×４㎜の方形を呈する。Ｆ６は、環状を呈するものであるが、その用途は明らかにでない。平面は、2.2cm×2.8cmの楕円形を呈する。断面は3.5㎜×６㎜の長方形をなす。



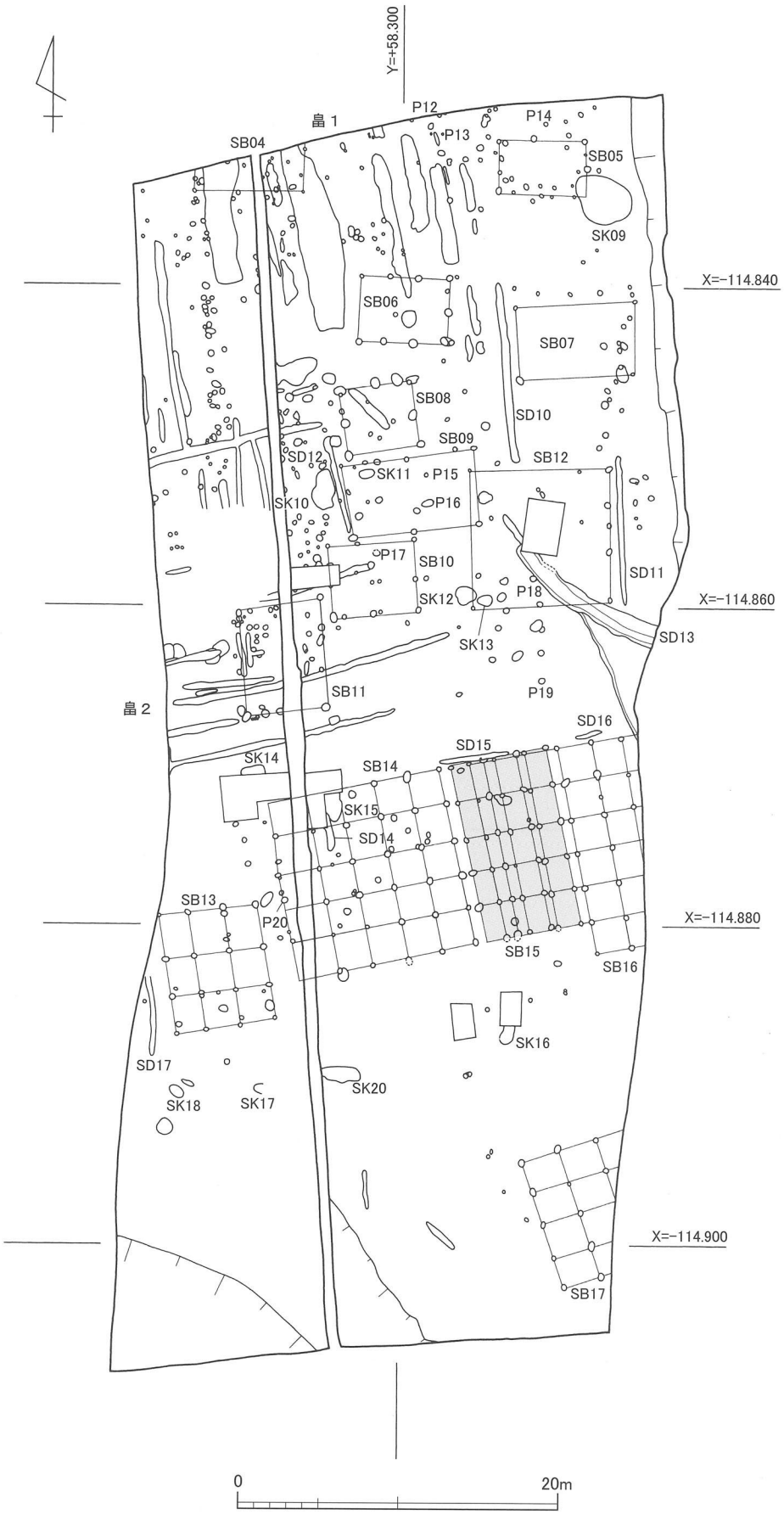
第15図　第１面出土石製品

（３）石器（写真図版30）

Ｓ16は凝灰岩製の砥石である。薄い長方形に成形され隅は面取りされている。両側面と面取り部分には成形時の痕跡と考えられる荒い擦痕を留める。表裏両面が使用されているが、砥面は平坦である。



第16図　第１面（Ⅱ区）


Y=+58.300
畠１
畠２
SB04
P12
P13
P14
SB05
SK09
X=-114.840
SB06
SB07
SB08
SD10
SB09
SD12
SK11
P15
SB12
SK10
P16
P17
SB10
SD11
SK12
P18
X=-114.860
SK13
SD13
SB11
P19
SD16
SD15
SK14
SB14
SK15
SD14
SB13
P20
X=-114.880
SB15
SB16
SK16
SD17
SK20
SK18
SK17
X=-114.900
SB17
0
20m

第17図　第１面（Ⅰ・Ⅲ区）

２．遺構と遺物

掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝・畠を検出している(第12図)。Ⅱ区南半からⅠ・Ⅲ区北半にかけて遺構が集中して検出されている。

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ０１

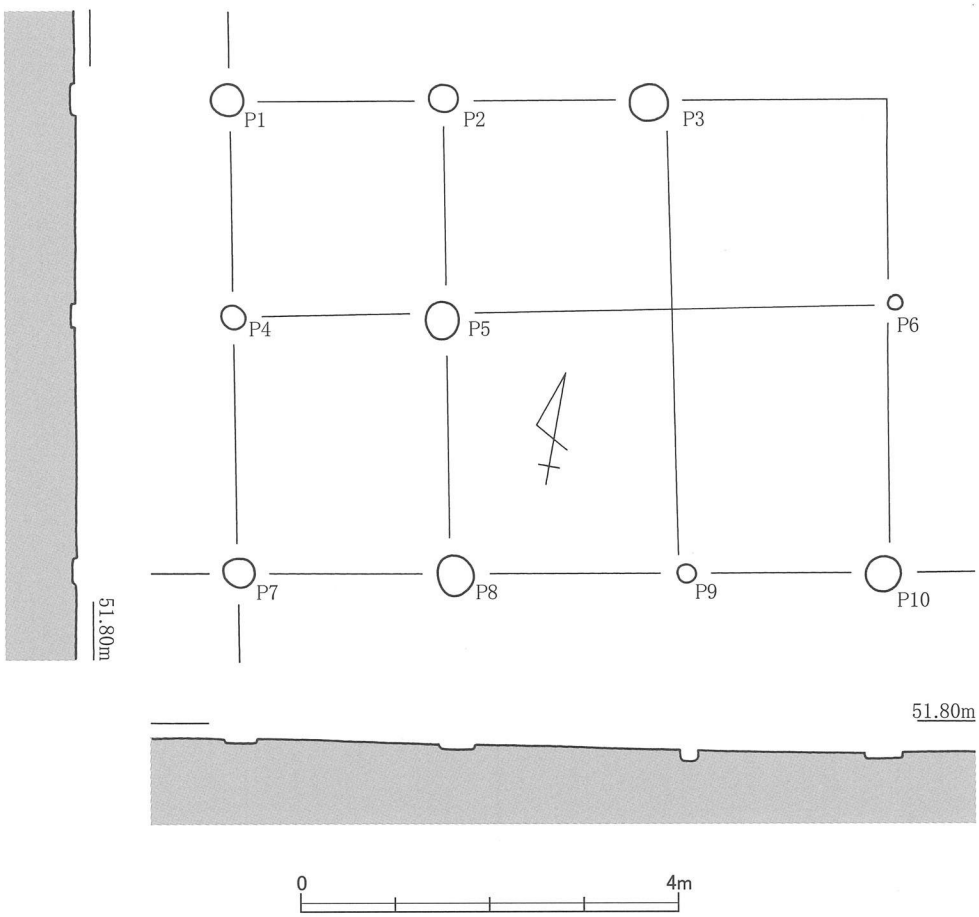
検出状況　Ⅱ区中央部で検出した(第16図)。ＳＢ02の北西側、ＳＢ03の北側、ＳＤ03の南側に位置する。当建物の北東隅は、ＳＤ03と平面的に重複し、検出することはできなかった。両者の前後関係は、調査では明確にできなかった。

形状・規模　桁行３間、梁行２間の総柱建物である(第18図)。ただし、北東隅とＰ３－Ｐ９間の２穴を欠く。南桁行を基準とした棟軸方向は、N79°Ｅを示す。南桁行で6.82m、西梁行で4.95mを測り、両者を基準とした平面積は33.75㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第２表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形を基本形とする。その規模は、径が15cm～43cm、検出面からの深さが３cm～12cmを測る。いずれの柱穴においても、柱痕は検出できなかった。各柱穴の規模については、第２表のとおりである。埋土は、褐色シルト質砂である。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　ＳＢ14～ＳＢ16との棟軸の一致から、鎌倉時代前半と考えられる。



第18図　ＳＢ01

第２表　ＳＢ01建物・柱穴規模一覧表

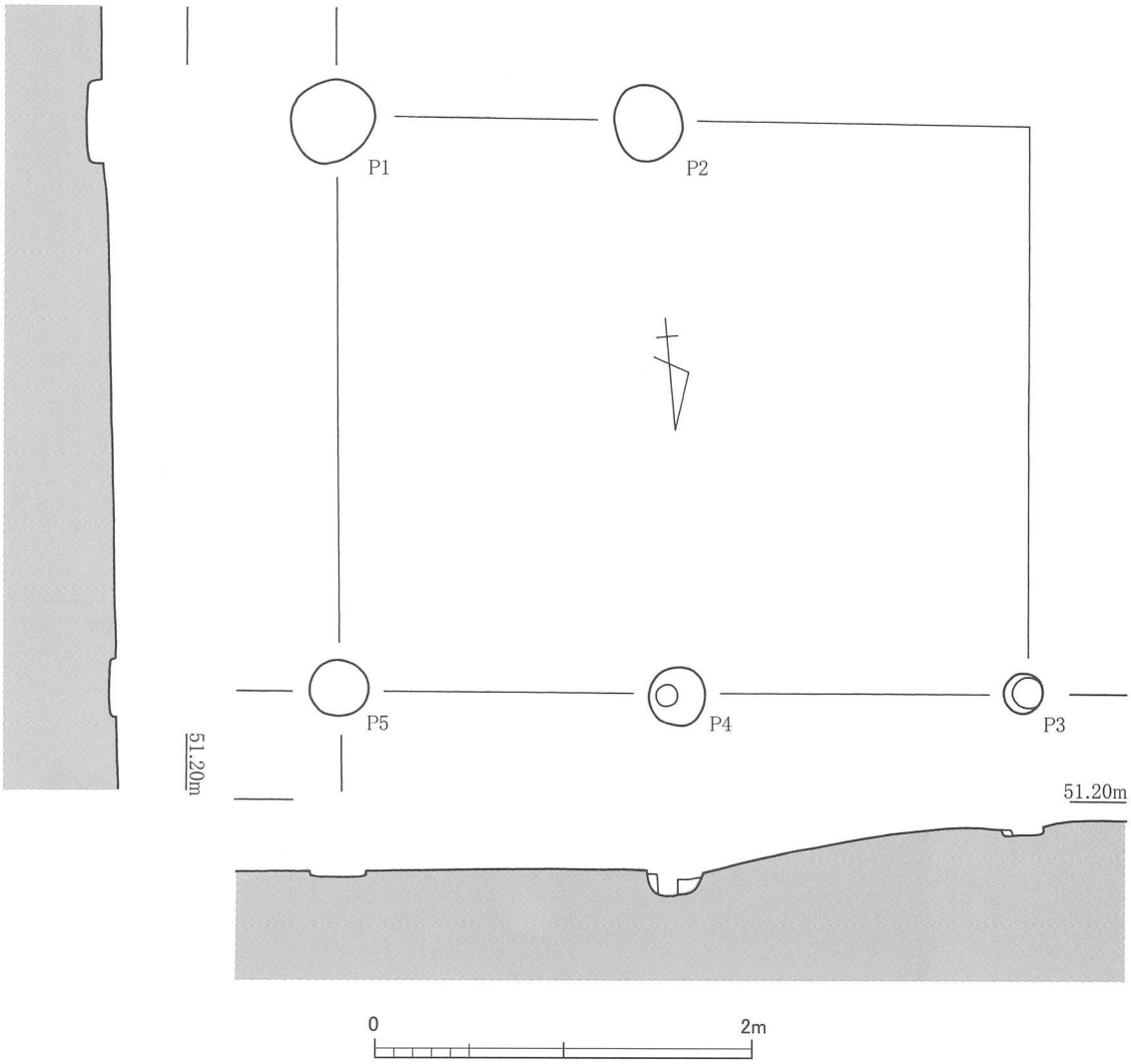
No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	34.0		4.0
Ｐ２	31.0		10.0
Ｐ３	40.0		3.0
Ｐ４	26.0		3.0
Ｐ５	39.0		4.0
Ｐ６	15.0		4.0
Ｐ７	33.0		3.0
Ｐ８	43.0		4.0
Ｐ９	20.0		12.0
Ｐ10	38.0		5.0

	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
南桁行	Ｐ７－Ｐ８	2.30	6.82	2.27
	Ｐ８－Ｐ９	2.42		
	Ｐ９－Ｐ10	2.10		
西梁行	Ｐ１－Ｐ４	2.25	4.95	2.48
	Ｐ４－Ｐ７	2.70		

ＳＢ０２（写真図版８）

検出状況　Ⅱ区南東部で検出した（第16図）。ＳＢ01の南東側、ＳＢ03の北東側に位置し、ＳＢ03とは一部平面的に重複している。当建物全体を検出できたが、南西隅の１穴を欠く。

形状・規模　桁行２間、梁行１間の側柱建物である（第19図）。北桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ



第19図　ＳＢ02

第３表　ＳＢ02建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	45.0		8.0
Ｐ２	31.0		15.0
Ｐ３	21.0	17.0	4.0
Ｐ４	30.0	10.0	14.0
Ｐ５	31.0		3.0

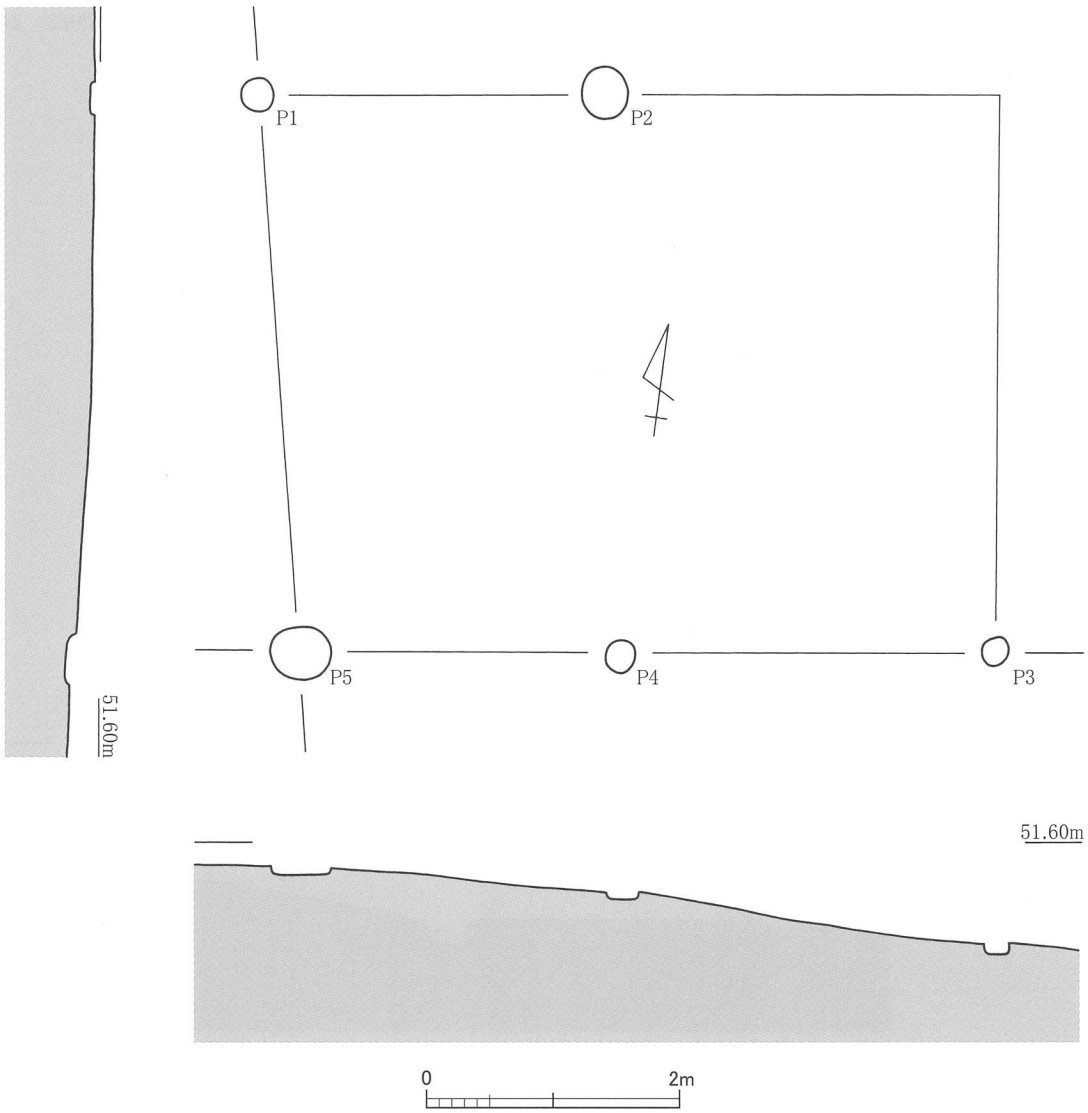
	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
北桁行	Ｐ３－Ｐ４	1.92	3.66	1.83
	Ｐ４－Ｐ５	1.74		
東梁行	Ｐ１－Ｐ５	3.04	3.04	3.04

89°30′Ｗを示す。北桁行で3.66ｍ、東梁行で3.04ｍを測り、両者を基準とした平面積は11.12㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第３表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形を基本形とする。その規模は、径が21cm～45cm、検出面からの深さが３cm～15cmを測る。これらのなかで、Ｐ３とＰ４において、柱痕を検出することができた。各柱穴の規模は、第３表のとおりである。埋土は、灰褐色シルト質砂である。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　遺物を伴わないため時期の特定は困難である。



第20図　ＳＢ03

ＳＢ０３

検出状況　Ⅱ区南東部で検出した(第16図)。ＳＢ01の南側、ＳＢ02の南西側、ＳＤ09の北側に位置し、ＳＢ02とは一部平面的に重複している。また、ＳＤ06と平面的に一部重なり、この部分に該当する北東隅の柱１穴を検出することはできなかった。ただし、当建物の規模を明らかにすることはできた。なお、ＳＤ06との前後関係は、調査では明らかにできなかった。

形状・規模　桁行２間、梁行１間の側柱建物である(第20図)。南桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ82°Ｅを示す。南桁行で5.47ｍ、西梁行で4.40ｍを測り、両者を基準とした平面積は24.06㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第４表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形を基本形とする。その規模は、径が25cm～48cm、検出面からの深さが５cm～９cmを測る。いずれの柱穴においても、柱痕は検出できなかった。各柱穴の規模については、第４表のとおりである。埋土は、褐色シルト質砂である。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　遺物を伴わないため時期の特定は困難である。

第４表　ＳＢ03建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	27.0		5.0
Ｐ２	40.0		6.0
Ｐ３	25.0		9.0
Ｐ４	25.0		6.0
Ｐ５	48.0		7.0

	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
南桁行	Ｐ３－Ｐ４	2.95	5.47	2.74
	Ｐ４－Ｐ５	2.52		
西梁行	Ｐ１－Ｐ５	4.40	4.40	4.40

ＳＢ０４

検出状況　Ⅰ区北西部からⅢ区北東部にかけて検出した(第17図)。Ⅱ区において、当建物に対応する柱穴が検出されていないため、Ⅰ・Ⅲ区とⅡ区の境が建物の北側にあたるものと考えられる。ＳＢ05の西側、ＳＢ06の北西側に位置する。

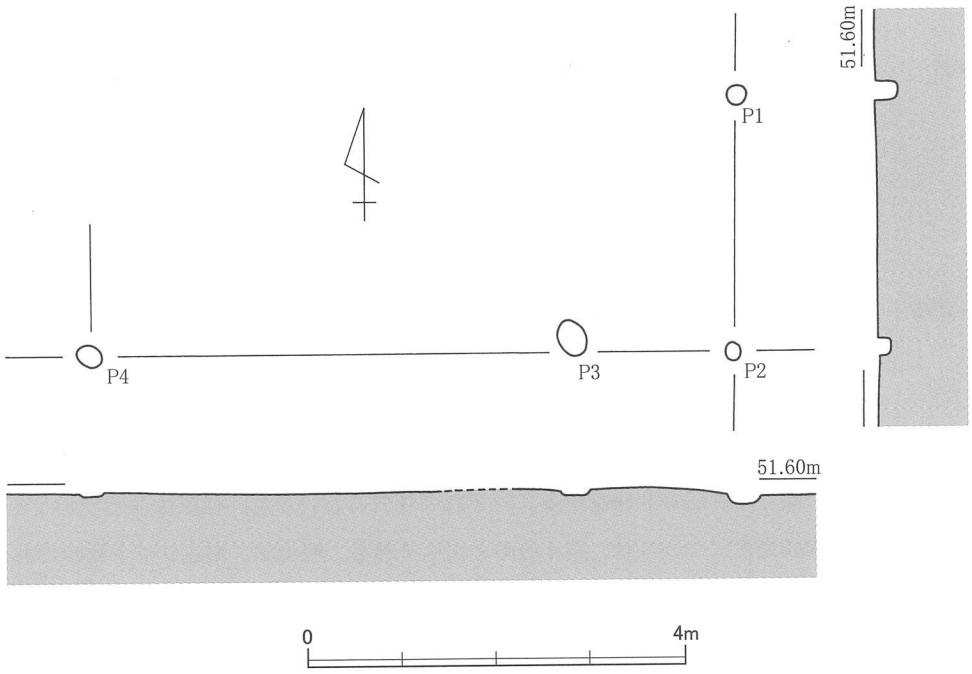
形状・規模　桁行３間、梁行１間＋αの側柱建物と考えられる(第21図)。南桁行については、Ｐ３とＰ４の間にもう１穴あるものと考え、桁行３間と判断した。南桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ90°Ｅを示す。南桁行で6.85ｍを測り、東梁行で2.70ｍ検出した。両者を基準とすると、当建物の平面積は18.49㎡以上と考えられる。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第５表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形を基本形とする。その規模は、径が18cm～40cm、検出面からの

第５表　ＳＢ04建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	22.0		23.0
Ｐ２	18.0		12.0
Ｐ３	40.0		5.5
Ｐ４	27.0		3.0

	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
南桁行	Ｐ２－Ｐ３	1.70	6.85	3.43
	Ｐ３－Ｐ４	5.15		
東梁行	Ｐ１－Ｐ２	2.70	2.70	2.70

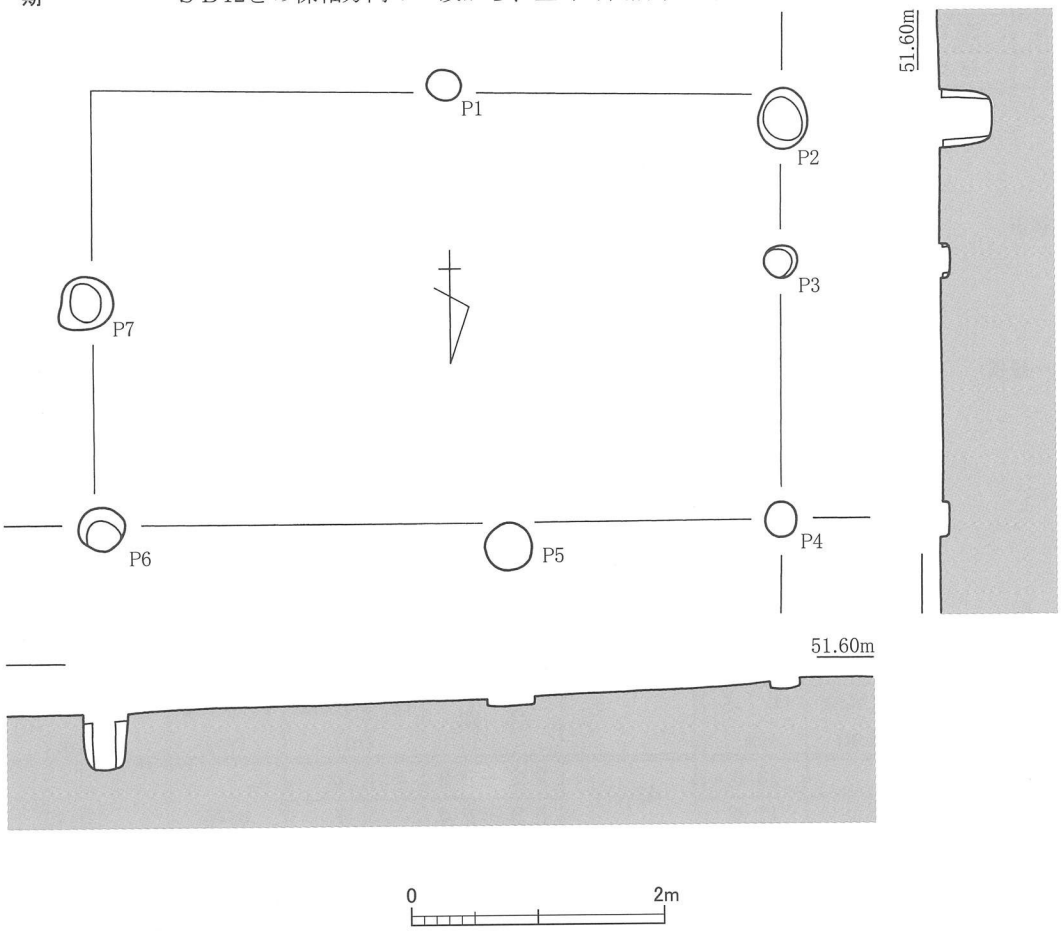


第21図　ＳＢ04

深さが３cm～23cmを測る。いずれの柱穴においても、柱痕は検出できなかった。各柱穴の規模については、第５表のとおりである。埋土は、灰白色シルト質砂である。

出土遺物　全く出土してない。

時　　期　ＳＢ12との棟軸方向の一致から、室町時代前半と考えられる。



第22図　ＳＢ05

第６表　ＳＢ05建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	27.0		5.0
Ｐ２	47.0	32.0	41.0
Ｐ３	26.0	23.0	5.0
Ｐ４	28.0		5.0
Ｐ５	38.0		5.0
Ｐ６	36.0	28.0	42.0
Ｐ７	47.0	27.0	25.5

	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
北桁行	Ｐ４－Ｐ５	2.15	5.35	2.68
	Ｐ５－Ｐ６	3.20		
西梁行	Ｐ２－Ｐ３	1.10	3.10	1.55
	Ｐ３－Ｐ４	2.00		

ＳＢ０５

検出状況　Ｉ区北東部で検出した(第17図)。全体を検出することはできたが、南東隅はＳＫ09と切り合い関係にあり、検出できなかった。ただし、ＳＫ09との前後関係は、調査では明らかにできなかった。ＳＢ04の東側、ＳＢ06の北東側に位置する。

形状・規模　桁行２間、梁行２間の側柱建物である(第22図)。西梁行については、Ｐ３が西側面の中央部に位置しないが、東梁行におけるＰ７の位置から、２間と判断した。北桁行を基準とした棟軸方向は、N90゜Ｅを示す。北桁行で5.35m、西梁行で3.10mを測り、両者を基準とした平面積は16.58㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第６表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形を基本形とする。その規模は、径が26cm～47cm、検出面からの深さが５cm～42cmを測る。Ｐ２・Ｐ３・Ｐ６・Ｐ７において、柱痕を検出することができた。各柱穴の規模については、第６表のとおりである。埋土は、褐色シルト質砂である。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　ＳＢ12との棟軸方向の一致から、室町時代前半と考えられる。

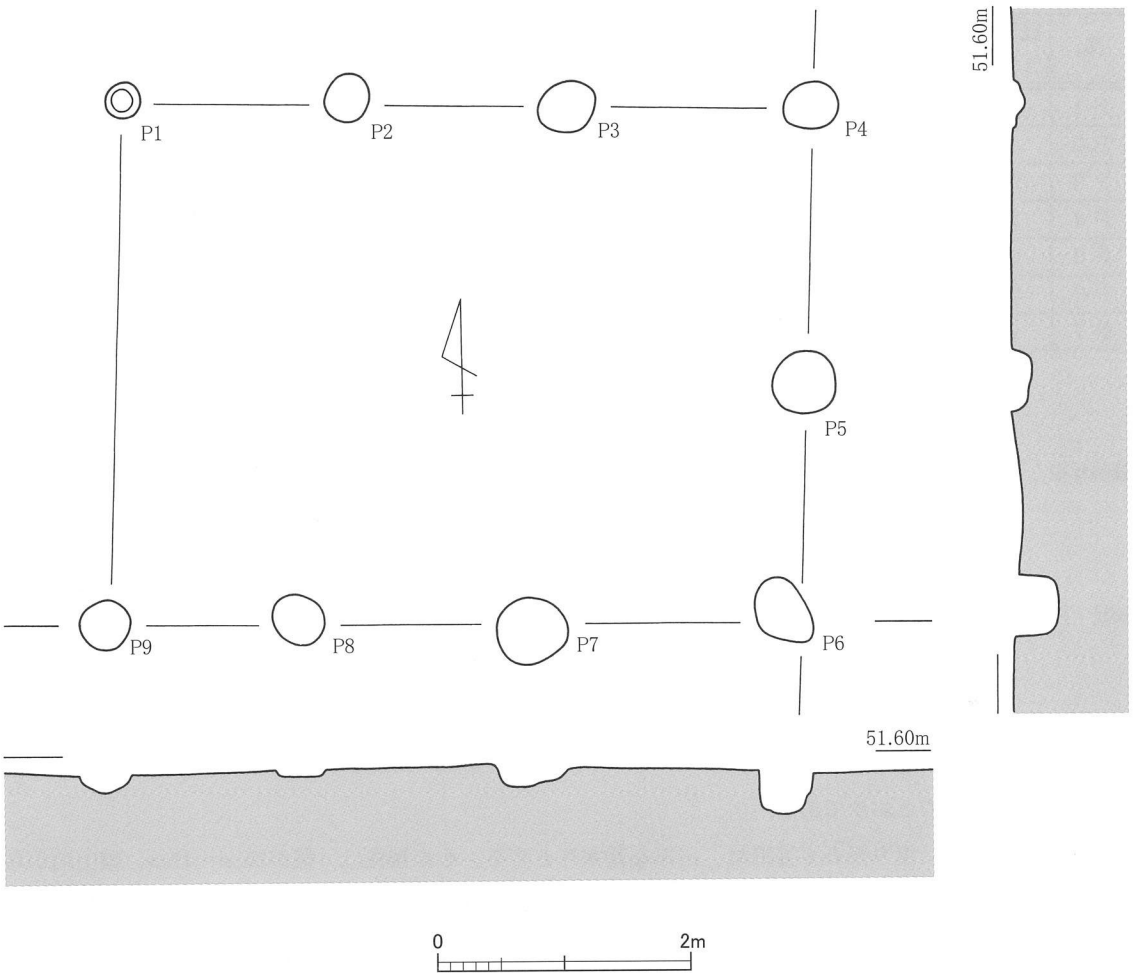
ＳＢ０６(写真図版８)

検出状況　Ｉ区北西部で検出した(第17図)。畠１と一部平面的に重複する以外は、他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、全体を検出することができた。ＳＢ07の西側、ＳＢ08の北側に位置する。

第７表　ＳＢ06建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	35.0	25.0	19.0
Ｐ２	38.0		20.0
Ｐ３	40.0		32.0
Ｐ４	42.0		8.0
Ｐ５	51.0		16.0
Ｐ６	58.0		34.0
Ｐ７	56.0		17.0
Ｐ８	42.0		5.0
Ｐ９	40.0		13.0

	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
南桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.76	5.43	1.81
	Ｐ２－Ｐ３	1.75		
	Ｐ３－Ｐ４	1.92		
西梁行	Ｐ４－Ｐ５	2.16	3.90	1.95
	Ｐ５－Ｐ６	1.74		
南桁行	Ｐ６－Ｐ７	1.98	5.32	1.77
	Ｐ７－Ｐ８	1.84		
	Ｐ８－Ｐ９	1.50		
西梁行	Ｐ１－Ｐ９	4.10	4.10	4.10



第23図　ＳＢ06

形状・規模　桁行３間、梁行２間の側柱建物である(第23図)。ただし、西梁行においては、中間部の１穴を欠く。北桁行を基準とした棟軸方向は、N88°30′Wを示す。北桁行で5.43m、東梁行で3.90mを測り、両者を基準とした平面積は21.17㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第７表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形を基本形とする。その規模は、径が35cm～58cm、検出面からの深さが５cm～34cmを測る。Ｐ１においてのみ、柱痕を検出することができた。各柱穴の規模については、第７表のとおりである。埋土は、灰褐色シルト質砂である。

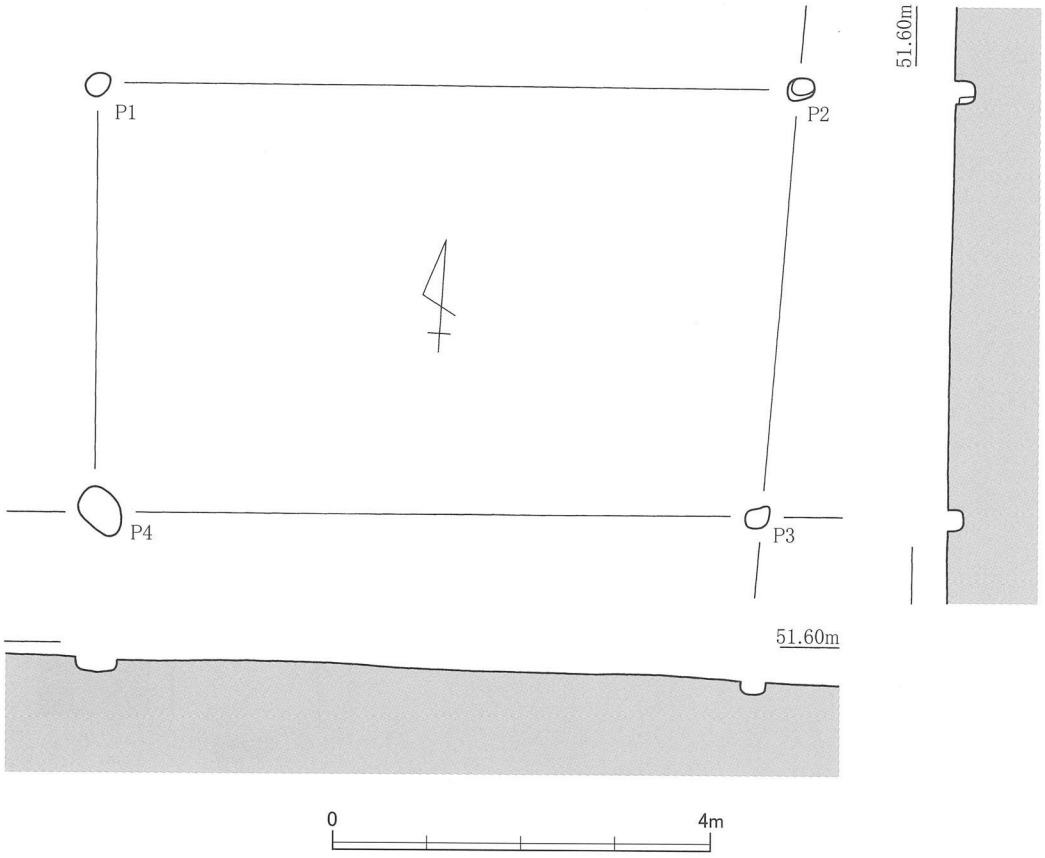
出土遺物　全く出土していない。

時　期　ＳＢ12との棟軸方向の一致から、室町時代前半と考えられる。

ＳＢ０７

検出状況　Ｉ区北東部で検出した(第17図)。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、全体を検出することができた。ＳＢ05の南側、ＳＢ06の東側、ＳＢ12の北側、ＳＤ10の東側に位置する。特に、ＳＤ10については、ほぼ同様の方向性を示すことから、一体的に機能していたと考えられる。

形状・規模　桁行１間、梁行１間の側柱建物である(第24図)。北桁行と南桁行の規模が異なり、平面形は台形傾向にある。北桁行を基準とした棟軸方向は、N86°Eを示す。北桁行で



第24図　ＳＢ07

7.44m、西梁行で4.50mを測り、両者を基準とした平面積は33.48㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第８表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形を基本形とするが、各柱穴とも歪みが顕著である。その規模は、径が25cm～55cm、検出面からの深さが５cm～22cmを測る。いずれの柱穴においても、柱痕は検出できなかった。各柱穴の規模については、第８表のとおりである。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　ＳＢ10との棟軸方向の一致から、室町時代前半（Ⅱｅ期）と考えられる。

第８表　ＳＢ07建物・柱穴規模一覧表

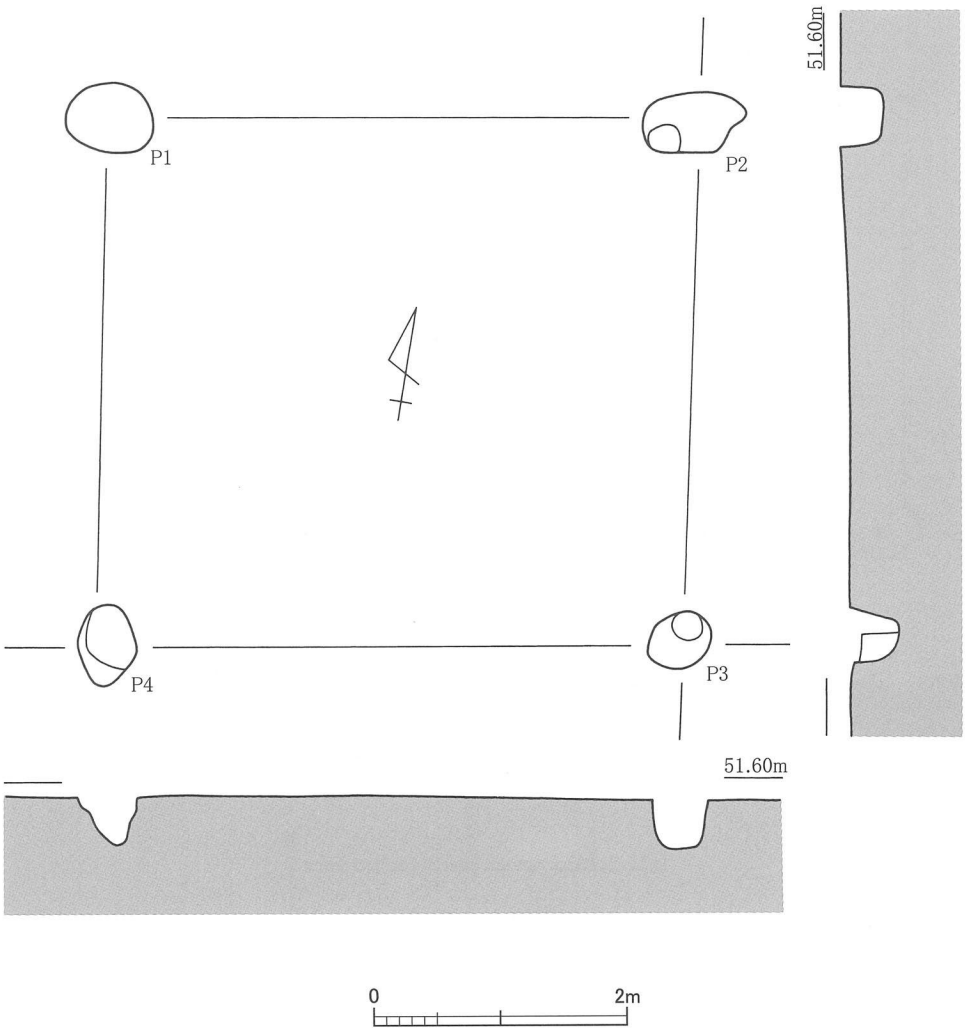
No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	26.0		5.0
Ｐ２	28.0	18.0	22.0
Ｐ３	25.0		11.0
Ｐ４	55.0		11.0

	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	7.44	7.44
東梁行	Ｐ２－Ｐ３	4.55	4.55
南桁行	Ｐ３－Ｐ４	7.00	7.00
西梁行	Ｐ１－Ｐ４	4.50	4.50

ＳＢ０８（写真図版８・９）

検出状況　Ｉ区北西部で検出した（第17図）。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、全体を検出することができた。ＳＢ06の南側、ＳＢ09の北側、ＳＤ10の西側に位置する。

形状・規模　桁行１間、梁行１間の側柱建物である（第25図）。桁行と梁行の規模がほぼ同じで、平面形は方形傾向にある。北桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ80°Ｅを示す。北桁行で



第25図　ＳＢ08

4.35ｍ、西梁行で4.12ｍを測り、両者を基準とした平面積は17.92㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第９表のとおりである。

柱　穴

掘り形の平面形は、大きく変形した楕円形傾向にある。その規模は、径が46cm～78cm、検出面からの深さが35cm～38cmを測る。Ｐ１を除いては、柱痕を検出することができた。各柱穴の規模については、第９表のとおりである。埋土は、褐色シルト質砂である。

第９表　ＳＢ08建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	66.0		36.0
Ｐ２	78.0	21.0	35.0
Ｐ３	48.0	24.0	37.0
Ｐ４	46.0	40.0	38.0

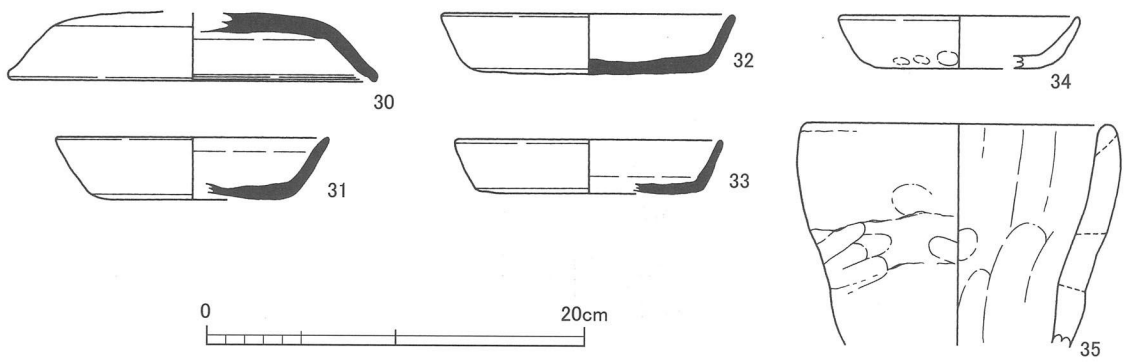
	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	4.35	4.35
東梁行	Ｐ２－Ｐ３	3.80	3.80
南桁行	Ｐ３－Ｐ４	4.55	4.55
西梁行	Ｐ１－Ｐ４	4.12	4.12

出土遺物

須恵器・土師器・製塩土器が出土している（第26図）。

須恵器

杯Ａ（31～33）と、蓋（30）が出土している。杯Ａの底部はいずれも回転ヘラ切りにより切り離され、体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。蓋は、口縁端部内面に沈線が施され、ての字状を呈する。天井部外面はヘラ切りの後ナデ調整により仕上げられているが、つまみは残存せず、その有無は判断できない。他は、内外面と



第26図　ＳＢ08出土土器

も回転ナデ調整により仕上げられている。

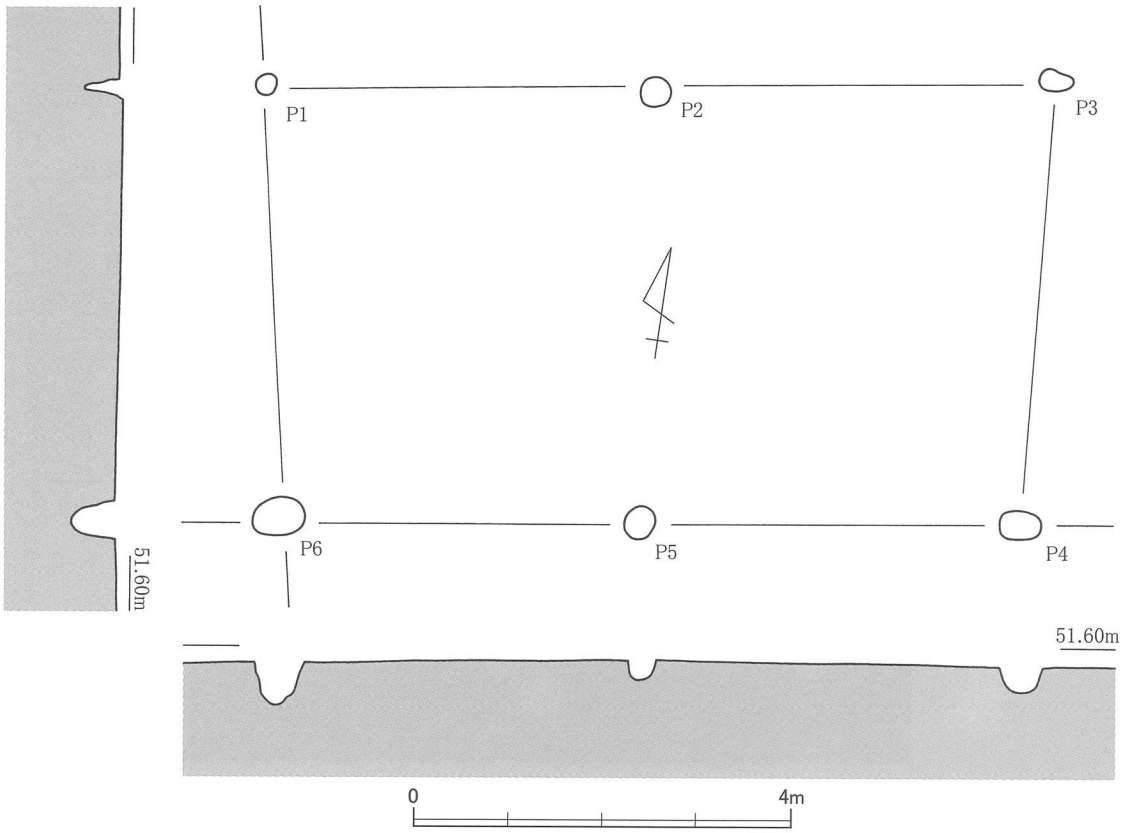
土師器　34の杯Ａの１個体である。底部はわずかに残存するのみで、ナデ調整により仕上げられている。体部から口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

製塩土器　35の１個体である。内外面とも手づくねにより仕上げられている。

時　期　出土土器の特徴から、奈良時代～平安時代前半と考えられる。

ＳＢ０９（写真図版９）

検出状況　Ｉ区中央部北側で検出した（第17図）。ＳＢ12と平面的に一部重複する以外は、他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、全体を検出することができた。ＳＢ08の南側、ＳＢ10の北側、ＳＤ12の東側に位置する。



第27図　ＳＢ09

第10表　ＳＢ09建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	24.0		38.0
Ｐ２	32.0		36.0
Ｐ３	38.0		5.0
Ｐ４	45.0		27.0
Ｐ５	28.0		18.0
Ｐ６	54.0		44.0

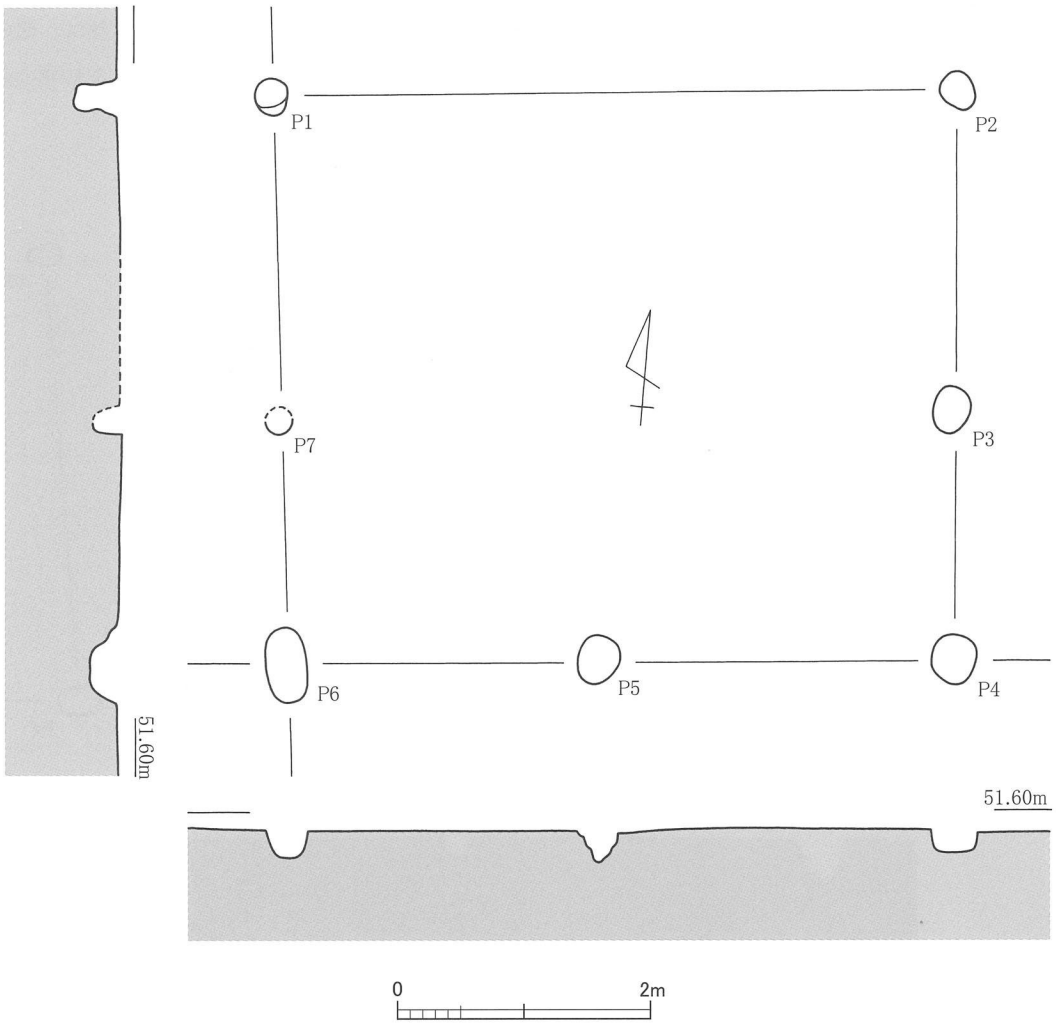
	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	4.12	8.36	4.18
	Ｐ２－Ｐ３	4.24		
東梁行	Ｐ３－Ｐ４	4.74	4.74	4.74
南桁行	Ｐ４－Ｐ５	4.00	7.84	3.92
	Ｐ５－Ｐ６	3.84		
西梁行	Ｐ１－Ｐ６	4.58	4.58	4.58

形状・規模　桁行２間、梁行１間の側柱建物である(第27図)。北桁行と南桁行の規模が異なるため、平面形は台形傾向にある。北桁行を基準とした棟軸方向は、N81°30′Ｅを示す。北桁行で8.36m、西梁行で4.58mを測り、両者を基準とした平面積は38.28㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第10表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形を基本形とするが、楕円形傾向のものも認められる。その規模は、径が24cm～54cm、検出面からの深さが５cm～44cmを測る。いずれの柱穴においても、柱痕を検出することはできなかった。各柱穴の規模については、第10表のとおりである。埋土は、灰褐色シルト質砂である。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　ＳＢ08との棟軸方向の一致から、奈良時代～平安時代前期と考えられる。



第28図　ＳＢ10

第11表　ＳＢ10建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	30.0	20.0	33.0
Ｐ２	30.0		44.0
Ｐ３	35.0		42.0
Ｐ４	38.0		15.5
Ｐ５	35.0		24.0
Ｐ６	58.0		22.0
Ｐ７	20.0		22.0

	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	5.38	5.38	5.38
東梁行	Ｐ２－Ｐ３	2.50	4.45	2.23
	Ｐ３－Ｐ４	1.95		
南桁行	Ｐ４－Ｐ５	2.80	5.25	2.63
	Ｐ５－Ｐ６	2.45		
西梁行	Ｐ６－Ｐ７	1.90	4.44	2.22
	Ｐ７－Ｐ１	2.54		

ＳＢ１０（写真図版９）

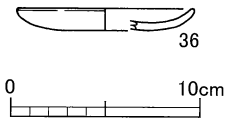
検出状況　Ｉ区中央部西側で検出した（第17図）。他の遺構との切り合い関係は認められず、全体を検出することができた。ＳＢ09の南側、ＳＢ11の北東側、ＳＢ12の西側に位置する。

形状・規模　桁行２間、梁行２間の側柱建物である（第28図）。ただし、北桁行中央部の１穴を欠く。北桁行を基準とした棟軸方向は、N84°Ｅを示す。北桁行で5.38m、西梁行で4.44mを測り、両者を基準とした平面積は23.88㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第11表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、楕円形を基本形とするが、歪みが目立つ。その規模は、径が20cm～58cmと一定していない。また、検出面からの深さは15.5cm～44cmを測る。いずれの柱穴においても、柱痕を検出することができなかった。各柱穴の規模については、第11表のとおりである。埋土は、灰褐色シルト質砂である。

出土遺物　Ｐ１から、土師器の小皿１個体（36）が出土している（第29図）。内外面とも摩滅が顕著で、調整法は観察できない。

時　期　出土土器の特徴から室町時代前半（Ⅱｅ期）と考えられる。



第29図　SB10出土土器

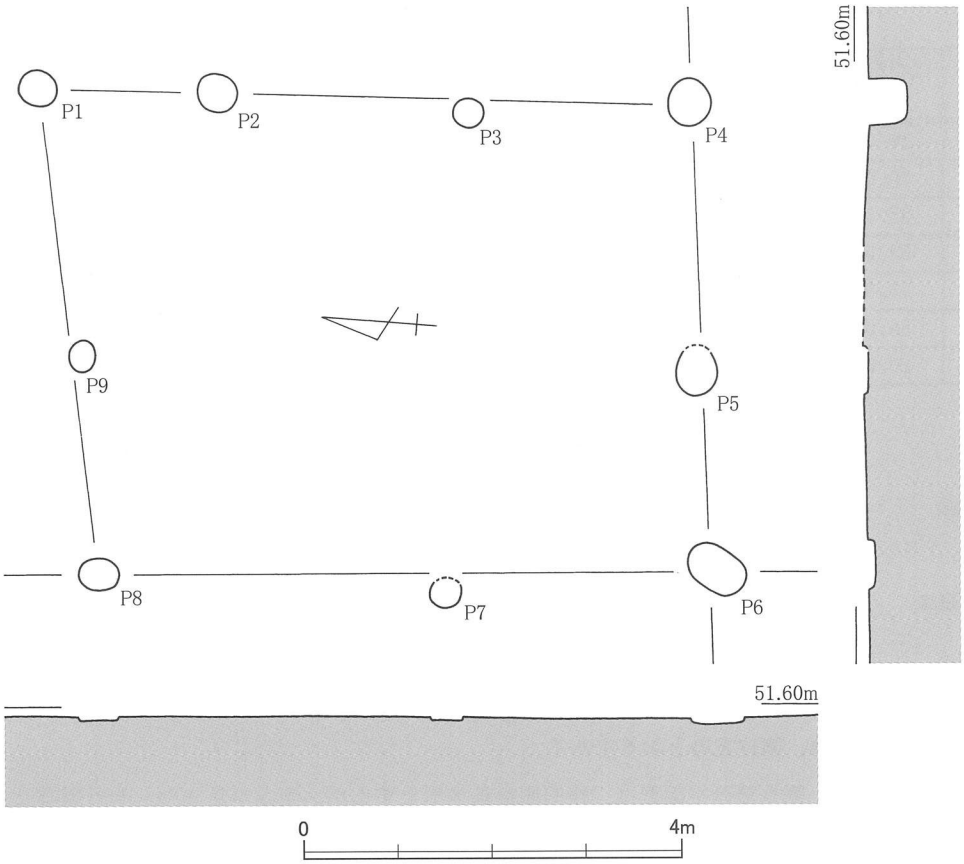
ＳＢ１１

検出状況　Ｉ区中央部西側からⅢ区中央部東側にかけて検出した（第17図）。畠２と平面的に重複する以外は、他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、全体を検出することができた。ただし、地区ごとに調査を実施したため、調査時には認識できなかった建物である。ＳＢ10の南西側、ＳＢ14の北側に位置する。

第12表　ＳＢ11建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	42.0		47.0
Ｐ２	42.0		24.0
Ｐ３	22.0		36.5
Ｐ４	50.0		39.0
Ｐ５	50.0		5.0
Ｐ６	65.0		8.0
Ｐ７	24.0		1.0
Ｐ８	43.0		4.0

	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
東桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.90	6.92	2.31
	Ｐ２－Ｐ３	2.65		
	Ｐ３－Ｐ４	2.37		
南梁行	Ｐ４－Ｐ５	2.80	4.94	2.47
	Ｐ５－Ｐ６	2.14		
西桁行	Ｐ６－Ｐ７	2.86	6.56	3.28
	Ｐ７－Ｐ８	3.70		
北梁行	Ｐ８－Ｐ９	2.32	5.18	2.59
	Ｐ９－Ｐ１	2.86		



第30図　ＳＢ11

形状・規模　西桁行２間、東桁行３間、梁行２間と、柱並びが変則的な側柱建物である（第30図）。東桁行と西桁行の規模が異なるため、平面形は台形傾向にある。東桁行を基準とした棟軸方向は、N84°Ｅを示す。東桁行で6.92m、南梁行で4.94mを測り、両者を基準とした平面積は34.18㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第12表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形または楕円形に近い。その規模は、径が22cm～50cm、検出面からの深さが１cm～47cmを測る。いずれの柱穴においても、柱痕は検出されなかった。各柱穴の規模については、第12表のとおりである。埋土は、淡褐色シルト質砂である。

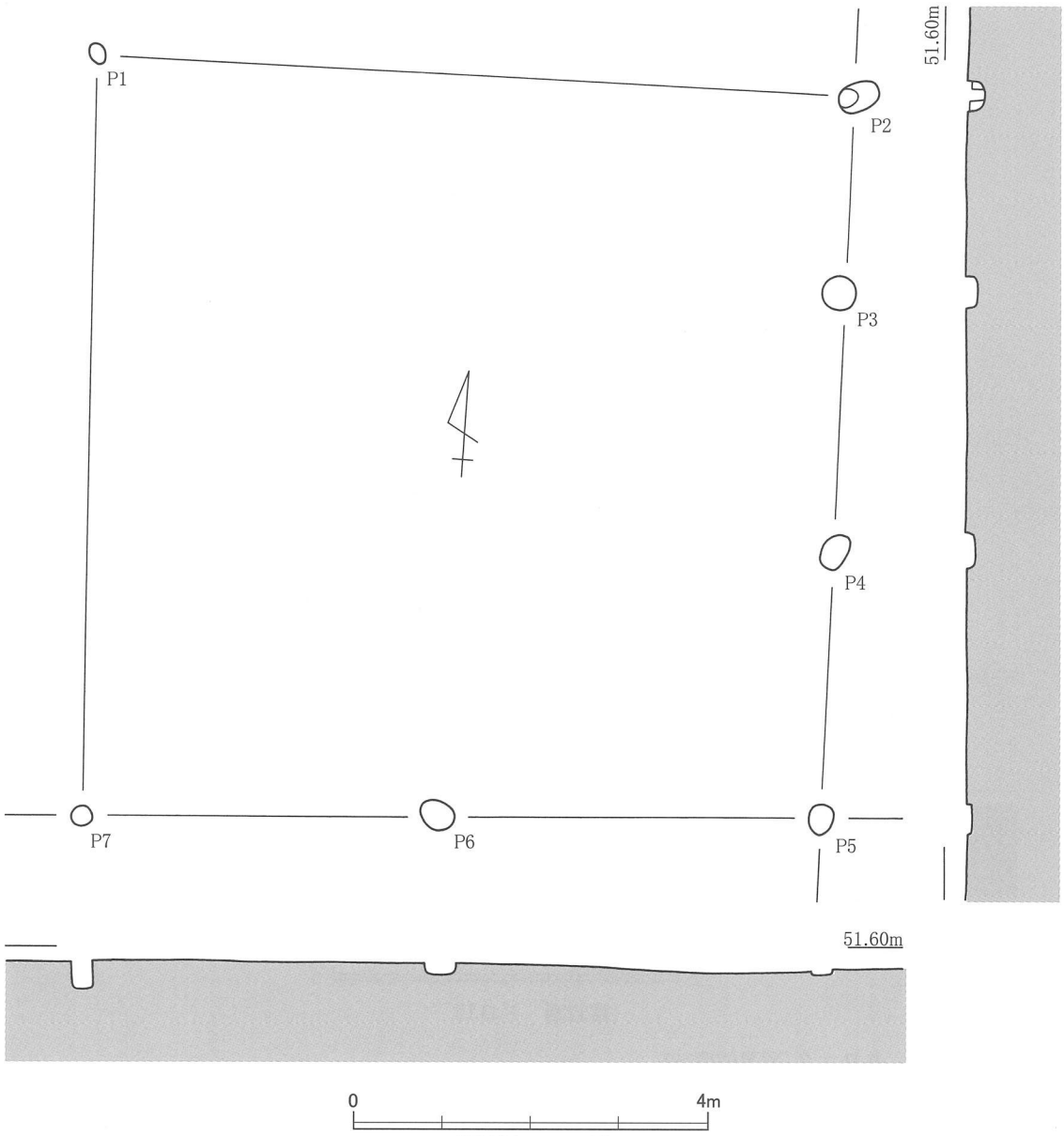
出土遺物　全く出土していない。

時　期　ＳＢ10・ＳＢ12との方向性の一致から、室町時代前半（Ⅱｅ期）と考えられる。

ＳＢ１２

検出状況　Ｉ区中央部東側で検出した（第17図）。ＳＢ09・ＳＤ13・ＳＫ12・ＳＫ13と平面的に重複するが、全体を検出することができた。ＳＢ09・ＳＢ10の東側、ＳＢ07の南側に位置する。また、当建物の東側のＳＤ11とはその方向性を同じくすることから、一体として機能していたものと考えられる。

形状・規模　桁行３間、梁行２間からなる側柱建物である（第31図）。ただし、北桁と西梁行においては、中間の柱を検出することはできなかった。東梁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ０°30′Ｗを示す。東桁行で8.14m、南梁行で8.34mを測り、両者を基準とした平面積は67.88㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第13表のとおりである。



第31図　ＳＢ12

柱　穴　　掘り形の平面形は、円形を基本形とするが、楕円形に近い形態の柱穴も認められる。その規模は、径が22cm～47cm、検出面からの深さが５cm～30cmを測る。Ｐ２を除いては、柱痕を検出することはできなかった。各柱穴の規模については、第13表のとおりである。

出土遺物　　全く出土していない。

時　期　　ＳＢ10との棟軸方向の一致から、室町時代前半（Ⅱｅ期）と考えられる。

第13表　ＳＢ12建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	23.0		5.0
Ｐ２	47.0	22.0	22.0
Ｐ３	38.0		14.0
Ｐ４	42.0		9.0
Ｐ５	34.0		5.0
Ｐ６	40.0		14.0
Ｐ７	22.0		30.0

	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
北梁行	Ｐ１－Ｐ２	8.52	8.52	8.52
東桁行	Ｐ２－Ｐ３	2.20	8.14	2.71
	Ｐ３－Ｐ４	2.92		
	Ｐ４－Ｐ５	3.02		
南梁行	Ｐ５－Ｐ６	4.32	8.34	4.17
	Ｐ６－Ｐ７	4.02		
西桁行	Ｐ７－Ｐ１	8.58	8.58	8.58

第32図　ＳＢ13

ＳＢ１３（写真図版10）

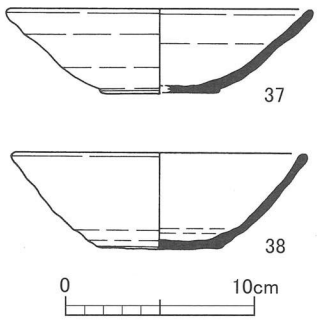
検出状況　Ⅲ区南半部で検出した（第17図）。他の遺構との切り合い関係は認められず、全体を検出することができた。ＳＢ14の南西側に位置する。

形状・規模　桁行３間、梁行３間からなる総柱建物である（第32図）。西桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ９°Ｗを示す。西桁行で7.61ｍ、南梁行で6.15ｍを測り、両者を基準とした平面積は46.80㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第14表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形を基本形とする。その規模は、径が25cm～42cm、検出面からの深さが13cm～44cmを測る。全ての柱穴において、柱痕を検出することができた。各柱穴の規模については、第14表のとおりである。埋土は、灰褐色シルト質砂である。

出土遺物　Ｐ９から、須恵器の椀が２個体（37・38）出土している（第33図）。２個体とも同タイプに分類されるもので、底部は回転糸切りにより切り離され、わずかに平高台の痕跡が認められる。

時　期　出土土器の特徴から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。



第33図　ＳＢ13出土土器

第14表　ＳＢ13建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	42.0	13.0	30.0
Ｐ２	40.0	16.0	32.0
Ｐ３	30.0	18.0	14.0
Ｐ４	25.0	12.0	26.0
Ｐ５	37.0	15.0	38.0
Ｐ６	30.0	14.0	32.0
Ｐ７	29.0	13.0	33.0
Ｐ８	28.0	15.0	13.0
Ｐ９	31.0	19.0	44.0
Ｐ10	36.0	13.0	26.0
Ｐ11	30.0	14.0	25.0
Ｐ12	28.0	10.0	20.0
Ｐ13	32.0	10.0	22.0
Ｐ14	40.0	18.0	25.0
Ｐ15	38.0	18.0	23.0
Ｐ16	26.0	16.0	23.0

	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
東桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.75	7.29	2.43
	Ｐ２－Ｐ３	2.42		
	Ｐ３－Ｐ４	2.12		
南梁行	Ｐ４－Ｐ８	2.20	6.15	2.05
	Ｐ８－Ｐ12	2.05		
	Ｐ12－Ｐ16	1.90		
西桁行	Ｐ16－Ｐ15	2.38	7.61	2.54
	Ｐ15－Ｐ14	2.43		
	Ｐ14－Ｐ13	2.80		
北梁行	Ｐ１－Ｐ５	2.12	6.20	2.07
	Ｐ５－Ｐ９	2.18		
	Ｐ９－Ｐ13	1.90		

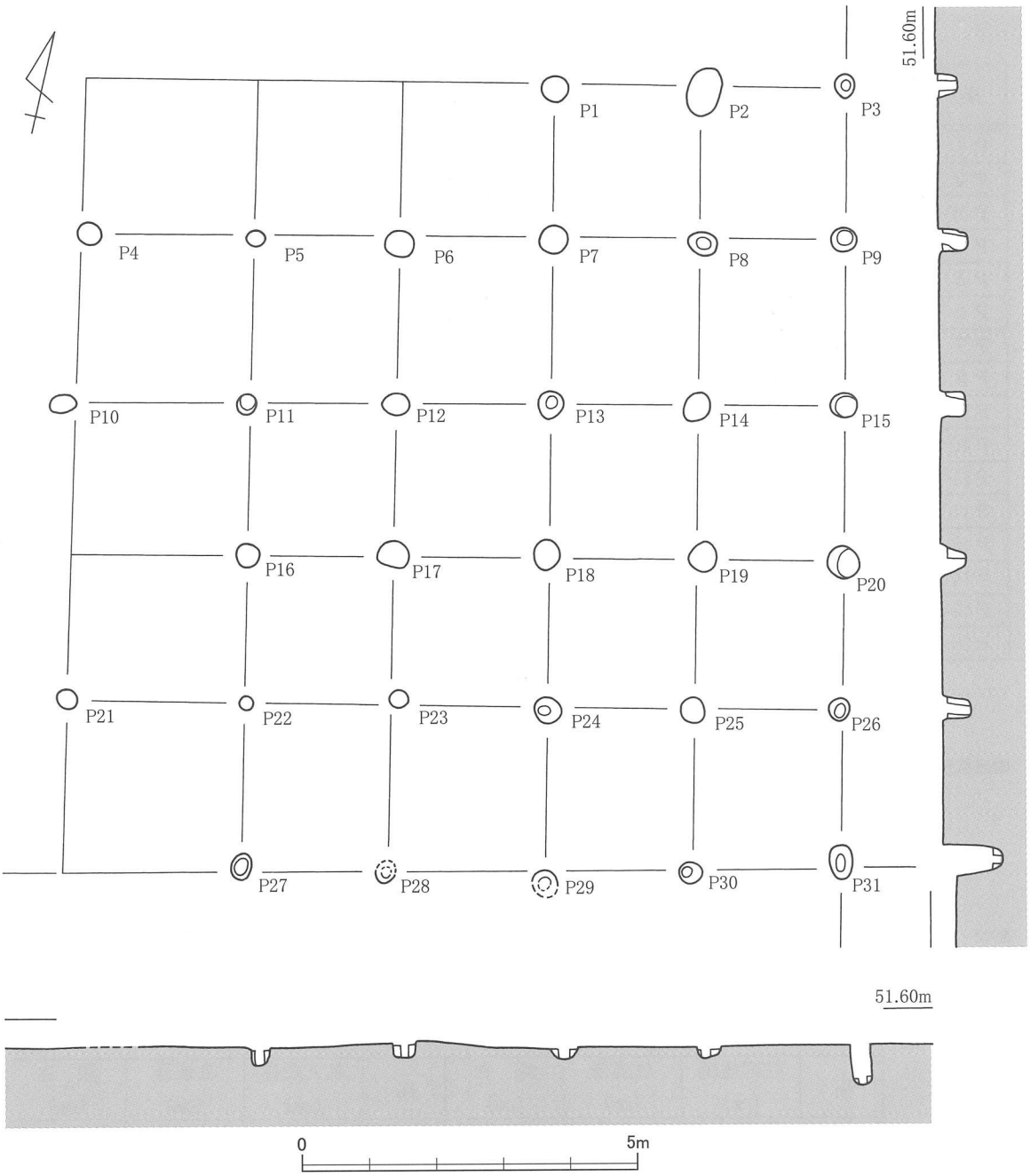
ＳＢ１４（写真図版11・12）

検出状況　Ⅰ区中央部西側からⅢ区中央部東側にかけて検出した（第17図）。地区ごとに調査を行ったため、調査後に規模が明らかとなった建物である。他の遺構との切り合い関係は認められず、全体を検出することができた。ＳＢ15・ＳＢ16の西側に位置し、両建物とは棟軸方向を同じくしている。

形状・規模　桁行５間、梁行５間からなる総柱建物である（第34図）。東桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ12°Ｗを示す。東桁行で11.15ｍを測り、梁行方向についてはＰ21－Ｐ26間を基準

第15表　ＳＢ14柱穴規模一覧表

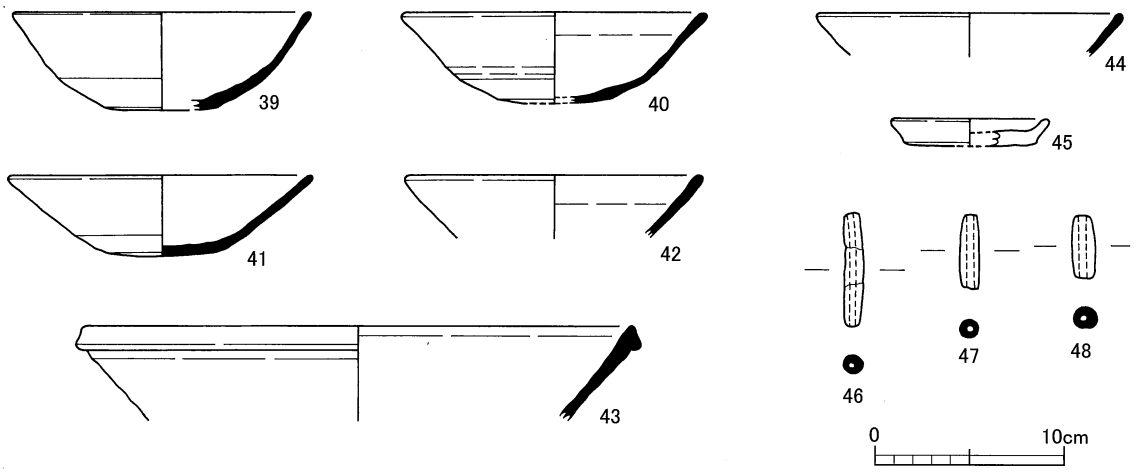
No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)	No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	40.0		37.0	Ｐ17	45.0		47.0
Ｐ２	70.0		45.0	Ｐ18	38.0		46.0
Ｐ３	25.0	12.0	33.0	Ｐ19	25.0		27.0
Ｐ４	35.0		6.0	Ｐ20	46.0	30.0	38.0
Ｐ５	23.0		32.0	Ｐ21	30.0		5.0
Ｐ６	40.0		33.0	Ｐ22	30.0		36.0
Ｐ７	40.0		44.0	Ｐ23	31.0		39.0
Ｐ８	43.0	25.0	46.0	Ｐ24	40.0	16.0	44.0
Ｐ９	38.0	24.0	42.0	Ｐ25	36.0		46.0
Ｐ10	40.0		5.0	Ｐ26	34.0	16.0	42.0
Ｐ11	44.0	14.0	32.0	Ｐ27	28.0	18.0	24.0
Ｐ12	40.0		36.0	Ｐ28	30.0	15.0	20.0
Ｐ13	37.0	15.0	43.0	Ｐ29	38.0	18.0	15.0
Ｐ14	40.0		40.0	Ｐ30	32.0	15.0	15.0
Ｐ15	38.0	30.0	34.0	Ｐ31	48.0	28.0	60.0
Ｐ16	36.0		39.0				



第34図　ＳＢ14

第16表　ＳＢ14建物規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
東桁行	Ｐ３－Ｐ９	2.20	11.15	2.23
	Ｐ９－Ｐ15	2.40		
	Ｐ15－Ｐ20	2.25		
	Ｐ20－Ｐ26	2.10		
	Ｐ26－Ｐ31	2.20		
南梁行	Ｐ21－Ｐ22	2.55	11.10	2.22
	Ｐ22－Ｐ23	2.20		
	Ｐ23－Ｐ24	2.10		
	Ｐ24－Ｐ25	2.15		
	Ｐ25－Ｐ26	2.10		



第35図　ＳＢ14出土土器

とすると11.10ｍを測る。両者を基準とした平面積は123.76㎡である。主な柱穴間距離、および柱間の平均値は、第16表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形を基本形とするが、楕円形傾向のものも認められる。その規模は、径が23cm～70cm、検出面からの深さが５cm～60cmを測る。約半分の柱穴において、柱痕を検出することができた。各柱穴の規模については、第15表のとおりである。埋土は、灰褐色シルト質砂である。

出土遺物　Ｐ12・Ｐ15・Ｐ20から、須恵器・土師器・土錘が出土している(第35図)。

須恵器　椀と捏鉢が出土している。

椀は、５個体出土している（39～42・44）。39は、わずかに平高台の痕跡が認められる。40と41は、同タイプに分類できるもので、底部は回転糸切りにより切り離されている。42と44の２個体は口縁部の小片である。

捏鉢(43)は、口縁端部をわずかに下方に拡張させ、明確な端面を有する。

土師器　小皿(45)が出土している。底部はヘラ切りにより切り離され、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

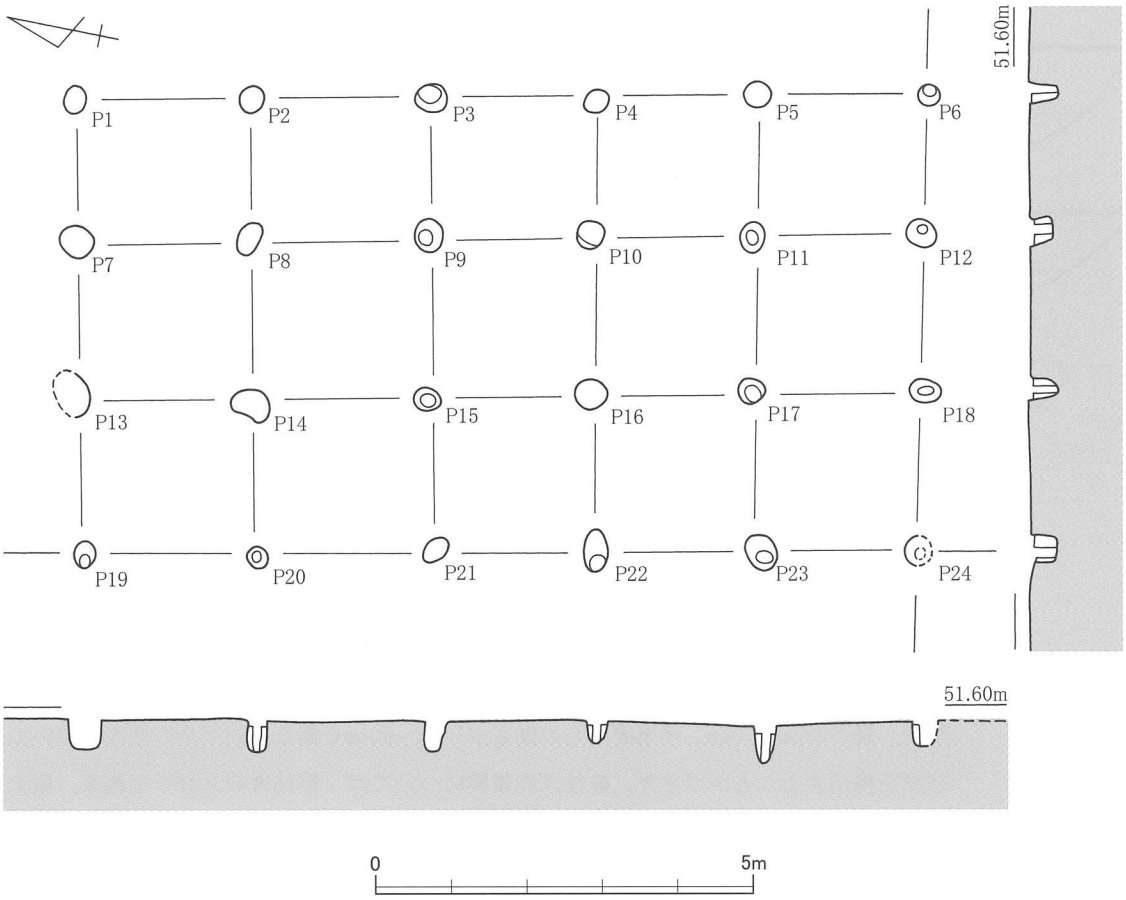
土錘　３点(46～48)出土している。46は、長さ6.1cm、最大径1.0cm、孔径3.5mmを測る。47は、長さ3.9cm、最大径1.1cm、孔径４mmを測る。48は、長さ3.3cm、最大径1.3cm、孔径3.5mmを測る。

時　期　出土土器およびＳＢ15・ＳＢ16との関係から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＢ１５(写真図版11)

検出状況　Ⅰ区中央部で検出した(第17図)。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、全体を検出することができた。ＳＢ14の東側に隣接し、ＳＢ16とは一部ではあるが平面的に重複する。また、ＳＢ14・ＳＢ16とは、棟軸方向がほぼ一致する。

形状・規模　桁行５間、梁行３間からなる総柱建物である(第36図)。西桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ11°Ｗを示す。西桁行で11.05ｍ、南梁行で6.08ｍを測り、両者を基準とした平面積は67.18㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第17表のとおりで、南北の梁行は同規模である。



第36図　ＳＢ15

柱　穴　　掘り形の平面形は、円形が基本形であるが、楕円形傾向も認められる。その規模は、径が26cm～58cm、検出面からの深さが25cm～58cmを測る。大半の柱穴で柱痕が検出されている。各柱穴の規模については、第18表のとおりである。埋土は褐色シルト質砂である。

第17表　ＳＢ15建物規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
東桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.35		
	Ｐ２－Ｐ３	2.35		
	Ｐ３－Ｐ４	2.20		
	Ｐ４－Ｐ５	2.15		
	Ｐ５－Ｐ６	2.28	11.33	2.27
南梁行	Ｐ６－Ｐ12	1.80		
	Ｐ12－Ｐ18	2.13		
	Ｐ18－Ｐ24	2.15	6.08	2.03
西桁行	Ｐ24－Ｐ23	2.05		
	Ｐ23－Ｐ22	2.22		
	Ｐ22－Ｐ21	2.13		
	Ｐ21－Ｐ20	2.40		
	Ｐ20－Ｐ19	2.25	11.05	2.21
北梁行	Ｐ１－Ｐ７	1.85		
	Ｐ７－Ｐ13	2.05		
	Ｐ13－Ｐ19	2.18	6.08	2.03

第18表　ＳＢ15柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)	No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	38.0		32.0	Ｐ13	58.0		44.0
Ｐ２	36.0		30.0	Ｐ14	40.0		25.0
Ｐ３	38.0	15.0	30.0	Ｐ15	35.0	20.0	36.0
Ｐ４	40.0		31.0	Ｐ16	40.0		43.0
Ｐ５	34.0		36.0	Ｐ17	35.0	14.0	42.0
Ｐ６	28.0	18.0	36.0	Ｐ18	42.0	22.0	40.0
Ｐ７	45.0		32.0	Ｐ19	48.0	16.0	42.0
Ｐ８	43.0		37.0	Ｐ20	26.0	12.0	43.0
Ｐ９	43.0	20.0	44.0	Ｐ21	38.0		40.0
Ｐ10	36.0	30.0	35.0	Ｐ22	55.0	20.0	30.0
Ｐ11	40.0	22.0	52.0	Ｐ23	50.0	20.0	48.0
Ｐ12	40.0	13.0	30.0	Ｐ24	38.0	12.0	34.0

出土遺物

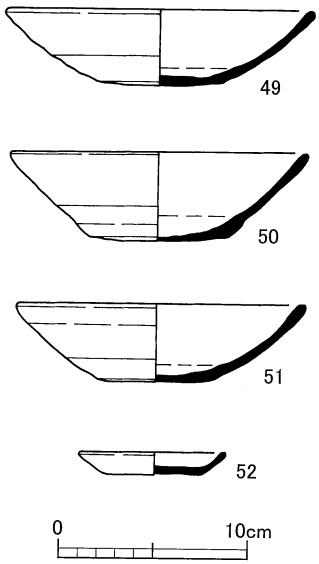
Ｐ11・19・22・23から、須恵器の椀と小皿が出土している(第37図)。

椀は３個体（49～51）出土している。49は、底部が回転糸切りにより切り離されている。50は、口径に対して底径がやや大きい。

小皿は、１点(52)出土している。底部は高台の痕跡が認められず、回転糸切りにより切り離されている。

時　　期

出土土器およびＳＢ14・ＳＢ16との関係から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。



第37図　ＳＢ15出土土器

ＳＢ１６(写真図版11・12)

検出状況

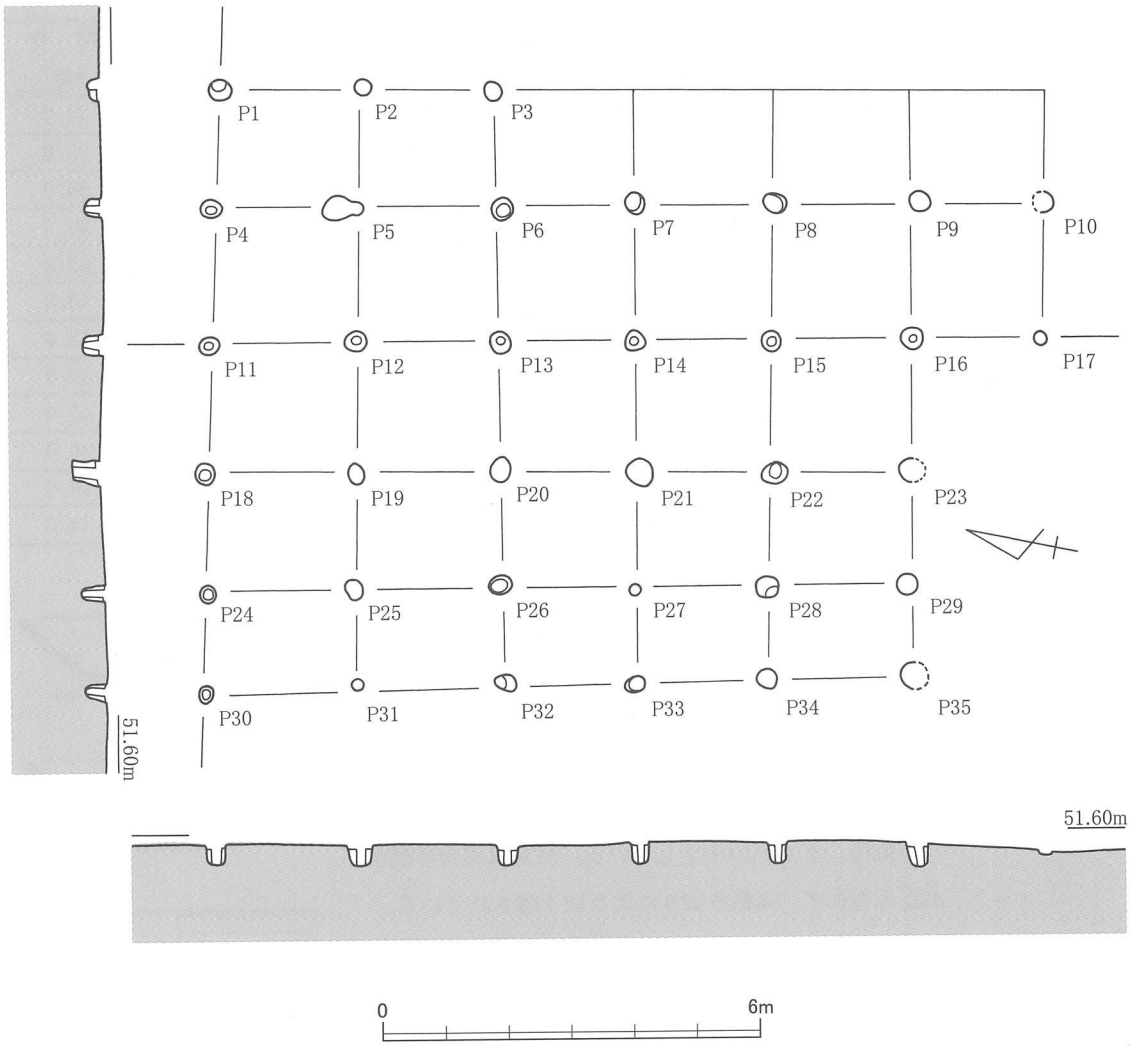
Ｉ区中央東側で検出した(第17図)。他の遺構との明確な切り合い関係は認められないが、多くは調査区外へ拡がっている。このため、全体を検出することはできなかった。ＳＢ15と平面的に一致し、ＳＢ14の東側に位置する。また、当建物の北側のＳＤ16とはその方向性を同じくすることから、一体的に機能していたものと考えられる。

形状・規模

桁行５間、梁行５間の建物の南東隅に１間×２間分が突出する、やや変則的な平面形をなす総柱建物である(第38図)。このため、桁行方向が最大６間となる。ただし、当建物の東側については、調査区外まで拡がっているため、梁行の規模がさらに大きくなる可能性が考えられる。Ｐ11－Ｐ17を基準とした棟軸方向は、N12° 30′ Wを示す。西桁行で11.28m、北梁行で9.65mを測り、突出部を含めた平面積は108.85㎡である。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第19表のとおりである。

柱　　穴

掘り形の平面形は、円形を基本形とする。その規模は、径が15cm～45cm、検出面からの



第38図　ＳＢ16

第19表　ＳＢ16建物規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
東桁行	Ｐ11－Ｐ12	2.35	13.21	2.20
	Ｐ12－Ｐ13	2.28		
	Ｐ13－Ｐ14	2.13		
	Ｐ14－Ｐ15	2.20		
	Ｐ15－Ｐ16	2.25		
	Ｐ16－Ｐ17	2.00		
西桁行	Ｐ30－Ｐ31	2.40	11.28	2.26
	Ｐ31－Ｐ32	2.27		
	Ｐ32－Ｐ33	2.18		
	Ｐ33－Ｐ34	2.10		
	Ｐ34－Ｐ35	2.33		
北梁行	Ｐ１－Ｐ４	1.95	9.65	1.93
	Ｐ４－Ｐ11	2.15		
	Ｐ11－Ｐ18	2.05		
	Ｐ18－Ｐ24	1.90		
	Ｐ24－Ｐ30	1.60		

第20表　ＳＢ16柱穴規模一覧表

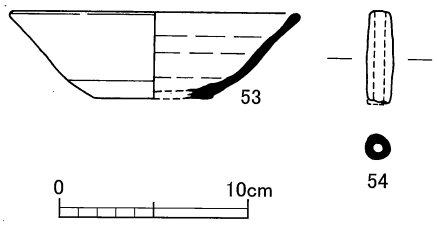
No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)	No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	25.0	15.0	20.0	Ｐ19	15.0		35.0
Ｐ２	26.0		30.0	Ｐ20	38.0		33.0
Ｐ３	26.0		22.0	Ｐ21	45.0		30.0
Ｐ４	35.0	15.0	28.0	Ｐ22	40.0	15.0	33.0
Ｐ５	62.0		24.0	Ｐ23	39.0		30.0
Ｐ６	36.0	20.0	28.0	Ｐ24	26.0	14.0	40.0
Ｐ７	38.0	27.0	25.0	Ｐ25	32.0		19.0
Ｐ８	35.0	30.0	26.0	Ｐ26	33.0	28.0	20.0
Ｐ９	33.0		21.0	Ｐ27	20.0		27.0
Ｐ10	35.0		5.0	Ｐ28	38.0	11.0	24.0
Ｐ11	32.0	13.0	34.0	Ｐ29	26.0		46.0
Ｐ12	36.0	15.0	34.0	Ｐ30	27.0	15.0	35.0
Ｐ13	35.0	12.0	35.0	Ｐ31	24.0		25.0
Ｐ14	30.0	12.0	33.0	Ｐ32	32.0	17.0	25.0
Ｐ15	32.0	17.0	35.0	Ｐ33	36.0	24.0	29.0
Ｐ16	36.0	12.0	35.0	Ｐ34	32.0		24.0
Ｐ17	20.0		5.0	Ｐ35	45.0		30.0
Ｐ18	40.0	17.0	42.0				

深さが５cm～46cmを測る。一部の柱穴を除いては、柱痕を検出することができた。各柱穴の規模については、第20表のとおりである。埋土は、褐色シルト質砂である。

出土遺物　Ｐ14・34から、須恵器と土錘が出土している(第39図)。

須恵器　椀１個体(53)と小皿が出土している。椀の底部には、わずかに平高台の痕跡が認められ、回転糸切りにより切り離されている。小皿は、小片のため図化できなかった。

土　錘　１点(54)出土している。長さ4.9cm、最大径1.5cm、孔径４mmを測る。



第39図　ＳＢ16出土土器

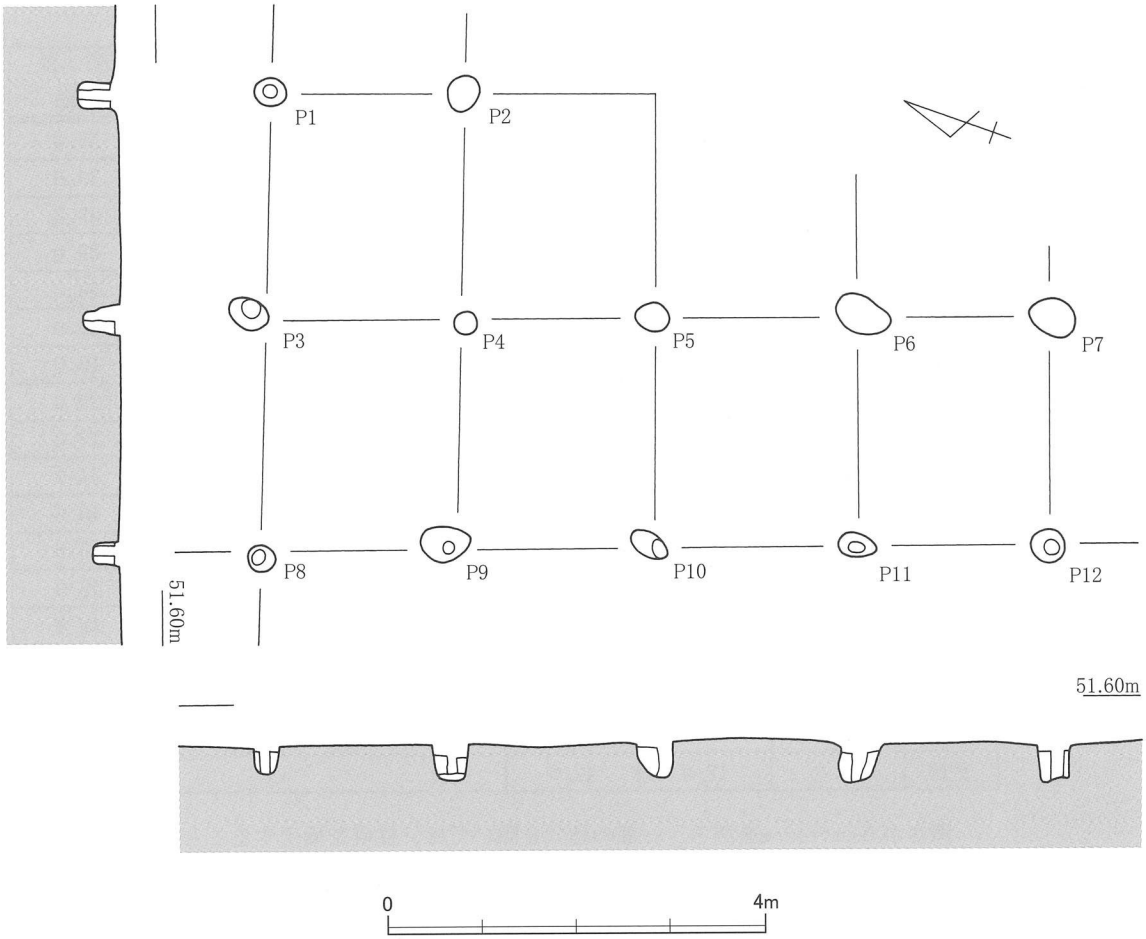
時　期　出土土器およびＳＢ14・ＳＢ15との関係から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＢ１７(写真図版12)

検出状況　Ｉ区南東部で検出した(第17図)。多くは調査区外へ拡がっている。このため、全体を検出することができなかった。ＳＢ15の南側に位置する。

形状・規模　桁行４間、梁行２間からなる総柱建物である(第40図)。ただし、当建物の東側は調査区外まで拡がっているため、梁行の規模はさらに大きくなる可能性が考えられる。西桁行を基準とした棟軸方向は、N20°Wを示す。西梁行で8.37mを測り、北桁行で4.88m検出し、両者を基準とすると、平面積は40.84㎡以上と考えられる。主な柱穴間距離および柱間の平均値は、第21表のとおりである。

柱　穴　掘り形の平面形は、円形を基本形とするが、楕円形傾向のものも認められる。その規模は、径が26cm～58cm、検出面からの深さが28cm～42cmを測る。半数以上の柱穴において、柱痕を検出することができた。各柱穴の規模については、第21表のとおりである。



第40図　ＳＢ17

埋土は、灰褐色シルト質砂である。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。須恵器は、平高台を有する椀と甕の体部片が、土師器は羽釜と器種を特定できない小片が出土している。いずれも、小片のため図化できなかった。

時　期　須恵器椀の特徴から、平安時代後期（Ⅱｃ期）と考えられる。

第21表　ＳＢ17建物・柱穴規模一覧表

No.	柱穴規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深　さ (cm)
Ｐ１	30.0	12.0	42.0
Ｐ２	38.0		35.0
Ｐ３	44.0	22.0	38.0
Ｐ４	27.0		33.0
Ｐ５	50.0		42.0
Ｐ６	58.0		40.0
Ｐ７	38.0		34.0
Ｐ８	26.0	12.0	28.0
Ｐ９	50.0	12.0	40.0
Ｐ10	38.0	15.0	34.0
Ｐ11	42.0	15.0	40.0
Ｐ12	35.0	14.0	38.0

	柱　間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
北桁行	Ｐ１－Ｐ３	2.30	4.88	2.44
	Ｐ３－Ｐ８	2.58		
西梁行	Ｐ８－Ｐ９	2.00	8.37	2.99
	Ｐ９－Ｐ10	2.22		
	Ｐ10－Ｐ11	2.10		
	Ｐ11－Ｐ12	2.05		

（２）柱穴

建物を構成する柱穴以外に、良好な遺物を伴うものが検出されている。これらの柱穴について、出土遺物を中心に報告する。

Ｐ１

検出状況　Ⅱ区南西部、調査区西端部で検出した(第16図)。Ｐ２の北西側に位置する。

出土遺物　土師器の小皿が１個体(56)出土している(第41図)。底部から口縁部にかけて指オサエとナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器特徴から、室町時代後半（Ⅱf期）と考えられる。

Ｐ２

検出状況　Ⅱ区南西部で検出した(第16図)。Ｐ１の南東側、Ｐ３の北東側、Ｐ４の北側に位置する。

出土遺物　土師器の鍋が１個体(61)出土している(第41図)。体部から口縁部にかけて直線的に立ちあがり、口縁端部を肥厚させている。その下方は、強い横ナデ調整により凹線状をなす。口縁端部は、内傾する緩やかな端面を有する。体部外面は叩き整形により、内面はナデ調整により仕上げられている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部外面に煤の付着が認められる。

時　期　出土土器の特徴から、室町時代後半（Ⅱf期）と考えられる。

Ｐ３

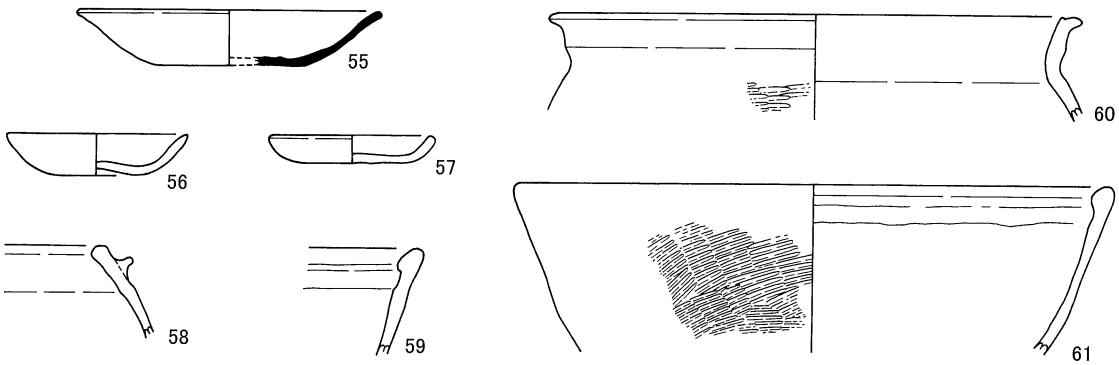
検出状況　Ⅱ区南西部で検出した(第16図)。Ｐ２の南西側、Ｐ４の西側に位置する。

出土遺物　須恵器の椀が１個体(55)出土している(第41図)。形態的には杯に近い特徴を有する。底部は回転糸切りにより切り離されている。

時　期　出土土器の特徴から、室町時代前半（Ⅱｅ期）と考えられる。

Ｐ４

検出状況　Ⅱ区南西部で検出した(第16図)。Ｐ２の南側、Ｐ３の東側、Ｐ５の西隣に位置する。



56　Ｐ1　出土土器　　61　Ｐ2　出土土器　　55　Ｐ3　出土土器
57・58　Ｐ４出土土器　　59・60　Ｐ５出土土器

0　20cm

第41図　柱穴（Ｐ１～Ｐ５）出土土器

出土遺物　土師器の小皿(57)と鍋(58)各１個体が出土している(第41図)。小皿は、底部から口縁部にかけて指オサエとナデ調整により仕上げられている。口縁端部の形状は一定していない。

鍋は、口縁部がわずかに残存する小片で、口縁部下外面にわずかな突帯が貼り付けられている。体部外面は叩き整形により、内面はナデ調整により仕上げられている。突帯から口縁部にかけての内外面は、横ナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器の特徴から、室町時代後半（Ⅱf期）と考えられる。

Ｐ５

検出状況　Ⅱ区南西部で検出した(第16図)。Ｐ４の東隣に位置する。

出土遺物　土師器の鍋が２個体（59・60）出土している(第41図)。

２個体はタイプを異にし、60は播丹型と称されるもので、体部外面は平行叩き、内面はナデ調整により仕上げられている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。焼成が良好で、酸化焔焼成されている。

59は口縁部がわずかに残存する。口縁端部内面を肥厚させ、その下部内面は強い横ナデ調整により凹線状をなす。体部外面は叩き整形、内面はナデ調整により仕上げられている。

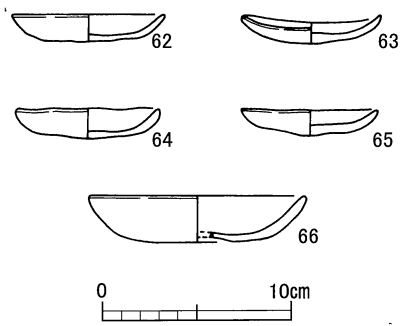
時　期　60については12世紀まで遡ると考えられるが、59の共伴から、室町時代後半（Ⅱf期）と考えられる。

Ｐ６

検出状況　Ⅱ区ほぼ中央部で検出した(第16図)。ＳＢ01と平面的に重複し、その中央部に位置する。

出土遺物　土師器の皿が５個体(62～66)出土している(第42図)。このなかで、法量的に62～65と66に分類できる。前者は小皿、後者は中皿と称されるものである。ただし製作技法は同じで、底部から口縁部にかけて指オサエとナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器の特徴から、室町時代後半（Ⅱf期）と考えられる。



第42図　Ｐ６出土土器

Ｐ７

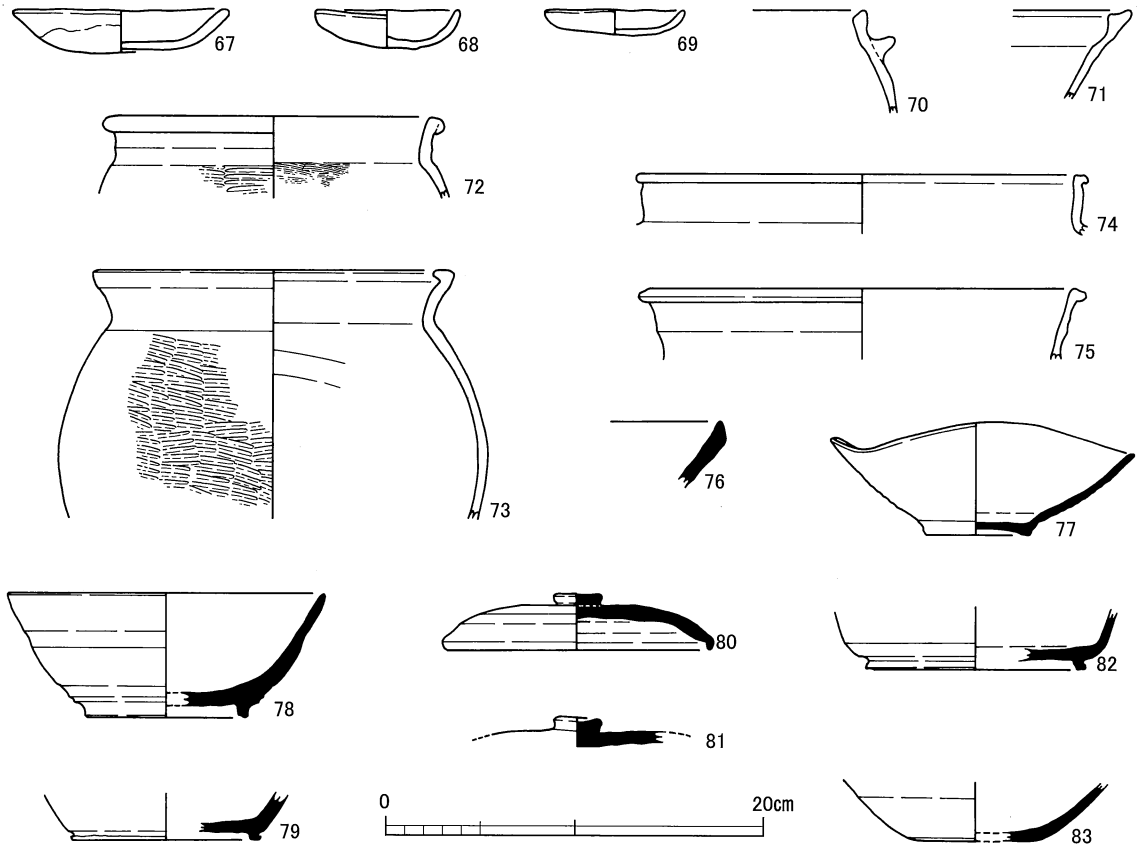
検出状況　Ⅱ区ほぼ中央部で検出した(第16図)。Ｐ６の南東側、Ｐ11の東側に位置する。ＳＢ01と平面的に重複し、その南東隅に位置する。

出土遺物　土師器の小皿１個体(67)出土している(第43図)。底部は指オサエとナデ調整により、口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器および埋土の特徴から、室町時代後半（Ⅱf期）と考えられる。

Ｐ８

検出状況　Ⅱ区南西部で検出した(第16図)。Ｐ４・Ｐ５の東側、ＳＫ05の北側に位置する。



67　Ｐ７出土土器　68　Ｐ８出土土器　70　Ｐ９出土土器　71　Ｐ10出土土器
72　Ｐ11出土土器　76　Ｐ12出土土器　74･75　Ｐ13出土土器　69　Ｐ14出土土器
78･79　Ｐ15出土土器　82　Ｐ16出土土器　73･77　Ｐ17出土土器　80　Ｐ18出土土器
81　Ｐ19出土土器　83　Ｐ20出土土器

第43図　柱穴出土土器（Ｐ７～Ｐ20）

出土遺物　土師器の小皿が１個体(68)出土している(第43図)。底部は指オサエとナデ調整により、口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。全体的に歪みが認められる。

時　期　出土土器の特徴から、室町時代後半（Ⅱf期）と考えられる。

Ｐ９

検出状況　Ⅱ区南部中央で検出した(第16図)。ＳＫ07の東側、ＳＤ09の南側、Ｐ10の北西側に位置する。

出土遺物　土師器の鍋が１個体(70)出土している(第43図)。口縁部を中心に残存する小片である。口縁部下外面に突帯が貼り付けられ、横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は叩き整形により仕上げられ、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器の特徴から、室町時代後半（Ⅱf期）と考えられる。

Ｐ10

検出状況　Ⅱ区南東隅で検出した(第16図)。ＳＤ09の南側、Ｐ９の南東側に位置し、調査区南端に接している。

出土遺物　土師器の鍋が１個体(71)出土している(第43図)。口縁端部を肥厚させ、その下方は強

い横ナデ調整により凹線状をなす。口縁端部は内傾する端面を有する。体部外面は叩き整形により、内面はナデ調整により仕上げられている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部外面に煤の付着が認められる。

時　期　　出土土器の特徴から、室町時代後半（Ⅱf期）と考えられる。

Ｐ１１

検出状況　　Ⅱ区中央部で検出した(第16図)。Ｐ６の南側、Ｐ７の西側に位置する。ＳＢ01と平面的に重複し、その南桁行ライン上に位置する。

出土遺物　　土師器の鍋が１個体(72)出土している(第43図)。播丹型に分類されるものである。体部外面は叩き整形により、内面はハケ調整により仕上げられている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。焼成は大変良好で、酸化焔焼成されている。

時　期　　出土土器の特徴から、鎌倉時代後半（Ⅱｅ期）と考えられる。

Ｐ１２

検出状況　　Ⅰ区北端部中央で検出した(第17図)。Ｐ13の北側、Ｐ14の西側に位置する。

出土遺物　　須恵器の捏鉢が１個体(76)出土している(第43図)。口縁部の小片で、端部はわずかに上方に拡張されている。

時　期　　出土土器の特徴から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

Ｐ１３

検出状況　　Ⅰ区北端部中央で検出した(第17図)。Ｐ12の南側、Ｐ14の西側に位置する。

出土遺物　　土師器の鍋が２個体（74・75）出土している(第43図)。いずれも口縁部の小片で、播丹型に分類されるものである。ただし、口縁端部の形態は若干異なる。

時　期　　出土土器の特徴から、鎌倉時代後半（Ⅱｅ期）と考えられる。

Ｐ１４

検出状況　　Ⅰ区北東部で検出した(第17図)。Ｐ12の東側、ＳＢ05の北側に位置する。

出土遺物　　土師器の小皿が１個体(69)出土している(第43図)。底部は指オサエとナデ調整により、口縁部は横ナデ調整により、仕上げられている。

時　期　　出土土器の特徴から、室町時代後半（Ⅱf期）と考えられる。

Ｐ１５

検出状況　　Ⅰ区北半部中央で検出した(第17図)。Ｐ16の北側、ＳＫ11の東側に位置する。ＳＢ09と平面的に重複し、その北東部に位置する。

出土遺物　　須恵器の杯Ｂが２点（78・79）出土している(第43図)。底部は輪高台を有し、体部から口縁部にかけて直線的に仕上げられている。底部は回転ヘラ削りにより仕上げられ、体部から口縁部内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。

時　期　　出土土器の特徴から、平安時代前半（Ⅱｂ期）と考えられる。

Ｐ１６

検出状況　Ⅰ区北半部中央で検出した(第17図)。Ｐ15の南側、Ｐ17の北東側に位置する。ＳＢ09と平面的に重複し、そのほぼ中央部に位置する。

出土遺物　須恵器の杯Ｂが１個体(82)出土している(第43図)。

時　期　出土土器の特徴から、奈良～平安時代前半（Ⅱｂ期）と考えられる。

Ｐ１７

検出状況　Ⅰ区北半部西側で検出した(第17図)。Ｐ16の南西側に位置する。ＳＢ10と平面的に重複し、その北側桁行付近に位置する。

出土遺物　須恵器の椀（77）と土師器の甕（73）が出土している(第43図)。

77は、全体的に大きく歪んでいる。平高台を有する椀で、回転糸切りにより切り離されている。口縁部は薄く仕上げられ、わずかに外反傾向にある。

73は、丸形の体部に口縁部がく字形に屈曲し、端部を内側に拡張させている。体部外面は平行叩きにより整形され、内面は板ナデ調整により仕上げられている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器の特徴から、平安時代後半（Ⅱｃ期）と考えられる。

Ｐ１８

検出状況　Ⅰ区中央部で検出した(第17図)。ＳＫ12・ＳＫ13の北東側に位置し、ＳＤ13の西側に接する。ＳＢ12と平面的に重複し、その中央部付近南側に位置する。

出土遺物　須恵器の杯Ｂ蓋が１個体(80)出土している(第43図)。

時　期　出土土器の特徴から、奈良～平安時代前半（Ⅱｂ期）と考えられる。

Ｐ１９

検出状況　Ⅰ区中央部で検出した(第17図)。ＳＢ12とＳＢ16の中間部に位置する。

出土遺物　須恵器の杯Ｂ蓋が１個体(81)出土している(第43図)。つまみを中心に残存する。

時　期　出土土器の特徴から、奈良～平安時代前半（Ⅱｂ期）と考えられる。

Ｐ２０

検出状況　Ⅲ区中央東側で検出した(第17図)。ＳＢ14西側桁行ライン上に位置する。

出土遺物　須恵器の椀が１個体(83)出土している(第43図)。底部を中心に残存し、底部は回転糸切りにより切り離されている。

時　期　出土土器の特徴から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

（３）土坑

ＳＫ０１

検出状況　Ⅱ区北東隅で検出した(第16図)。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、ややゆがんだ長楕円形を呈する。長軸方向で86cm、その直交方向で31cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは５cmを測る。

埋没状況　灰黄褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器が出土しているが、小片のため器種の特定は困難である。

時　期　出土土器および埋土の特徴から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＫ０２

検出状況　Ⅱ区中央部西端で検出した(第16図)。ＳＤ03と切り合い関係にあり、ＳＤ03を切っている。ただし、遺構の多くは調査区外まで拡がっているため、全体を検出することはできなかった。

形状・規模　平面形は、円形もしくは楕円形を呈するものと推定される。長軸方向で1.22mを測り、その直交方向で62cm残存する。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは33cmを測る。

埋没状況　上から、褐灰色シルト質砂、灰褐色シルト質砂、暗灰褐色シルト質砂の３層からなる。層相から判断して、上の２層については、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の鍋（111）が出土している(第53図)。口縁部の小片で、口縁部下外面に突帯が貼り付けられている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。また、外面突帯より下側には煤の付着が認められる。

時　期　出土土器の特徴から、室町時代後半（Ⅱｆ期）と考えられる。

ＳＫ０３

検出状況　Ⅱ区中央部で検出した(第16図)。ＳＤ03の南側、ＳＢ01の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、ややゆがんだ長楕円形を呈する。長軸方向で2.78m、その直交方向で81cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは18cmである。

埋没状況　褐灰色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の椀が出土している。

時　期　出土土器から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＫ０４(写真図版13)

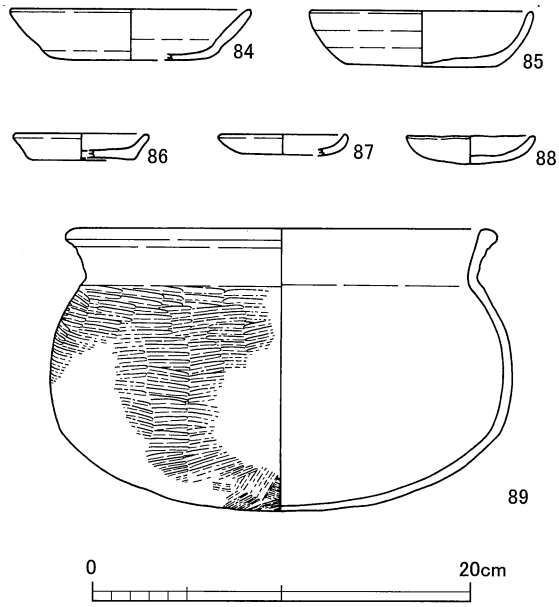
検出状況　Ⅱ区南西部で検出した(第16図)。ＳＤ07の北端部に位置する。柱穴を切る以外、他の遺構との明確な切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、隅円長方形を呈する。長軸方向で1.28m、その直交方向で96cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。

埋没状況　暗黄色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の皿と鍋が出土している（第44図）。

皿は、いわゆる小皿（86～88）と大皿（84・85）に分類できる。小皿は、底部が回転糸切りにより切り離される86と、底部から口縁部にかけて指押さえとナデ調整により仕上げられる87・88とに、細分できる。86は、底部に対して口縁部を斜方向に立ち上げ、横ナデ調整により仕上げられている。



第44図　ＳＫ04出土土器

大皿の84は、口縁部が２段の横ナデ調整、底部がナデ調整により仕上げられている。一方85は、同じく口縁部が２段の横ナデ調整により仕上げられているが、底部は回転糸切りにより切り離されている。また、底部はヘラ状のもので大きく抉られ、薄く仕上げられている。

鍋は、89の１個体で、完形に復元することができた。いわゆる、播丹型鍋と称されるものである。口縁端部を外方に拡張させ玉縁状をなし、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は平行叩きにより整形され、内面はナデ調整により仕上げられている。体部外面中位には煤の付着が認められる。

時　期　出土土器から、室町時代前半（Ⅱｅ期）と考えられる。

ＳＫ０５

検出状況　Ⅱ区南西部で検出した（第16図）。ＳＫ08の北西側に位置する。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は、長楕円形を呈する。長軸方向で1.66m、その直交方向で74cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは17cmである。

埋没状況　褐灰色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の壺（110）が出土している（第53図）。口縁部がわずかに残存し、緩やかに外反している。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。口縁端部には、キザミ目状の工具のあたりが認められる。

時　期　出土土器から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＫ０６

検出状況　Ⅱ区南西部で検出した(第16図)。ＳＫ04の南側、ＳＫ21の西側、ＳＤ09の北側に位置する。ＳＤ07と切り合い関係にあり、ＳＤ07を切っている。だだし、時期不明の土坑に北側の一部が切られている。このため、完存しない。

形状・規模　平面形は、歪な長楕円形をなす。長軸方向で82cm残存し、その直交方向は76cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは６cmである。

埋没状況　褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の椀の口縁部片（107）が出土している(第53図)。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

時　　期　出土土器から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＫ０７(写真図版13)

検出状況　Ⅱ区南部で検出した(第16図)。ＳＤ09の南側に位置する。ＳＤ09と切り合い関係にあり、ＳＤ09に切られている。

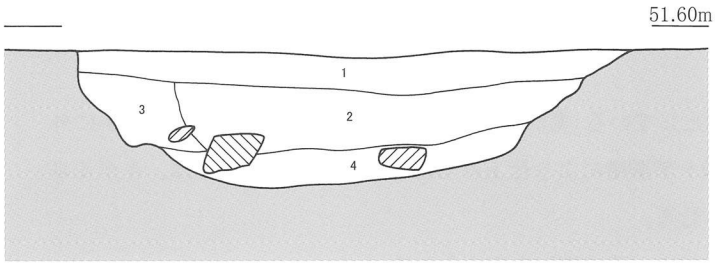
形状・規模　舌状を呈するが、当初の平面形は、ＳＤ09に切られているため明らかにできない。長軸方向で2.56m残存し、その直交方向で3.42mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは、66cmを測る。

埋没状況　４層からなる(第45図)。少なくとも１回の再掘削（３層堆積後）が認められる。層相から判断して、１層～４層は、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している(第46図)。

土師器　鍋が２個体分（93・94）出土している。いずれも口縁部の小片である。93は、口縁端部を玉縁状に肥厚させ、横ナデ調整により仕上げられている。94は、口縁端部を外方に拡張させ、横ナデ調整により仕上げられている。

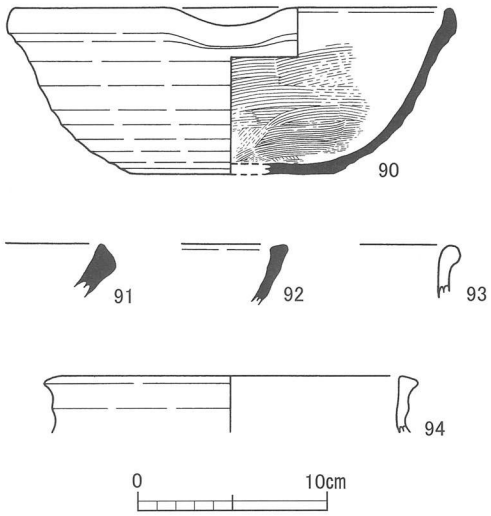
須恵器　鉢と捏鉢が出土している。鉢は92の1個体で、口縁部の小片が残存している。内湾気味に立ち上がる口縁端部は、横ナデ調整により内傾する端面を有する。



1．褐色極細砂　　3．褐灰白色シルト質砂
2．褐色シルト質砂　　4．暗褐色シルト質砂

0　2m

第45図　ＳＫ07



第46図　ＳＫ07出土土器

捏鉢は２個体（90・91）図化することができた。90はほぼ完形に図上復元できたもので、片口を有する。口縁端部を上方に拡張させ、端面は大きく膨らむ。体部内面は横方向のハケ調整により仕上げられている。底部は静止糸切りにより切り離され、離れ砂が認められる。体部外面と口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。また、底部から体部にかけての変換部外面に、わずかにヘラ削りが施されている。

91は口縁部の小片で、外傾する端面を有する。

時　　期　出土土器から、室町時代後半（Ⅱｆ期）と考えられる。

ＳＫ０８

検出状況　Ⅱ区中央部やや南側で検出した(第16図)。ＳＫ05の東側、ＳＤ09の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、円形に近い楕円形を呈する。長軸方向で1.06ｍ、その直交方向で92㎝を測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは20㎝である。

埋没状況　灰褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　土器が出土していないため時期の特定は困難であるが、埋土の特徴から、室町時代前半と考えられる。

ＳＫ０９(写真図版14)

検出状況　Ⅰ区北東部で検出した(第17図)。ＳＢ05南東隅と平面的に重複するが、調査では、その切り合い関係は、明確にすることはできなかった。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、ややゆがんだ楕円形を呈する(第48図)。長軸方向で3.82ｍ、その直交方向で2.86ｍを測る。横断面は逆台形を基本形とするが、一定していない。最深部における検出面からの深さは、47㎝を測る。

第47図　ＳＫ09の検出

１．褐灰色シルト質砂　　２．淡黄褐色シルト質砂

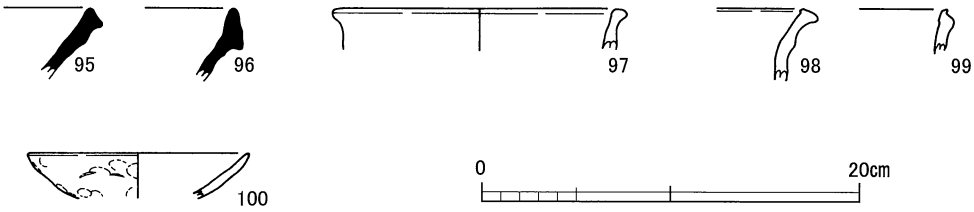
0　1m

第48図　ＳＫ09

埋没状況　２層からなる(第48図)。２層とも、層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。特に、下層には大礫が集中して認められた。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している(第49図)。

土師器　小皿と鍋が出土している。小皿は、100の1個体である。外面は指押さえとナデ調整に



第49図　ＳＫ09出土土器

より、内面はナデ調整により仕上げられている。

鍋は３個体分出土しているが、いずれも口縁部の小片である。97と98は同タイプの鍋と考えられ、端部が外方に大きく拡張されている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。99は、口縁部内端部がわずかにつまみ上げられている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

須恵器　捏鉢の口縁部片が２点出土している。95は、口縁部の立ち上がりに対して直交する端面を有し、外端部がわずかに拡張されている。96は、口縁端部を上方に大きく拡張させ、端面はわずかに弧状をなす。

時　期　出土土器から、室町時代前半（Ⅱｅ期）と考えられる。

ＳＫ１０

検出状況　Ⅰ区北西部で検出した(第17図)。ＳＫ11・ＳＢ09の西側にあたる。ＳＤ12と切り合い関係にあり、ＳＤ12に切られている。

形状・規模　平面形は、ややゆがんだ長楕円形を呈する。長軸方向で2.47ｍ、その直交方向で1.44ｍを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは39cmを測る。

埋没状況　上から、明黄淡灰色細砂・暗灰褐色シルト質砂の２層からなる。

出土遺物　須恵器の椀が１個体（106）出土している(第53図)。底部は回転糸切りにより切り離されている。

時　期　出土土器から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＫ１１

検出状況　Ⅰ区北西部で検出した(第17図)。ＳＫ10の東側に位置する。ＳＢ09と平面的に重複するが、ＳＢ09との前後関係は明確にできない。他の遺構とのと切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸方向で96cm、その直交方向で54cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは６cmである。

埋没状況　暗灰褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　土師器の小片が出土している。羽釜の一部と考えられ、平安時代前半の特徴が認められる。

時　期　出土土器から、平安時代前半（Ⅱｂ期）と考えられる。

ＳＫ１２

検出状況　Ⅰ区中央部で検出した(第17図)。ＳＫ13の西側に隣接する。ＳＢ12の一部と平面的に重複するが、ＳＢ12との前後関係は明確にできない。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は、楕円形を呈する。長軸方向で1.28ｍ、その直交方向で1.10ｍを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは11cmである。

埋没状況　淡灰褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器椀の小片が数点出土している。小片のため図化できなかった。

時　　期　出土土器から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＫ１３

検出状況　Ⅰ区中央部で検出した(第17図)。ＳＫ12の東側に隣接する。ＳＢ12と平面的に重複するが、調査ではＳＢ12との前後関係は明確にできなかった。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は、楕円形を呈する。長軸方向で92cm、その直交方向で64cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは15cmである。

埋没状況　淡灰褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　土師器の皿の小片が数点出土している。小片のため図化できなかった。

時　　期　出土土器から、鎌倉時代前半と考えられる。

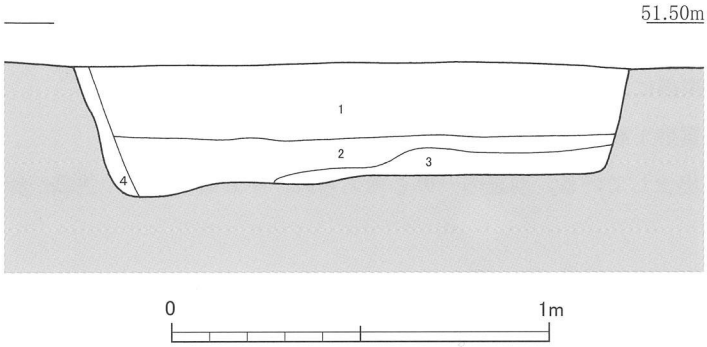
ＳＫ１４

検出状況　Ⅲ区中央部で検出した(第17図)。確認調査のトレンチによる撹乱を受け、全体を検出することはできなかった。他の遺構との切り合い関係は、認められない。

形状・規模　平面形は、隅円方形を呈するものと考えられる。長軸方向で1.44ｍを測り、その直交方向で49cm残存する。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは35cmである。

埋没状況　４層からなる(第50図)。層相から判断して、各層とも人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の椀（101）と小皿（102）が出土している(第51図)。

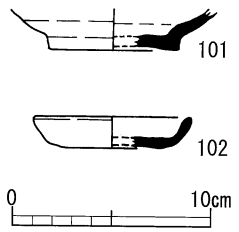


1．黒褐色シルト混じり
　　淡褐色シルト質砂
2．灰色シルト混じり
　　淡褐色シルト質砂
3．黒褐色シルト混じり
　　明黄灰色シルト質砂
4．淡黄色シルト質砂

第50図　ＳＫ14

椀は底部の小片で、内面見込みが明確に落ち込み、底部は平高台をなす。内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

小皿は、口縁部が横ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。



第51図　ＳＫ14出土土器

時　　期　出土土器から、平安時代後半（Ⅱｃ期）と考えられる。

ＳＫ１５

検出状況　Ⅰ区中央部西側で検出した(第17図)。確認調査のトレンチにより撹乱を受け、全体を検出することはできなかった。ＳＢ14と平面的に重複し、その主軸方向がほぼ一致することから、ＳＢ14に伴う施設の可能性も考えられる。

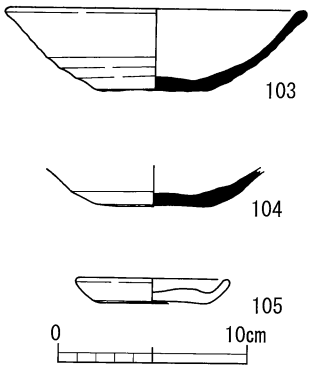
形状・規模　平面形は、長楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向で1.75m、その直交方向で1.05m残存する。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは７cmである。

埋没状況　暗灰色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している(第52図)。

土師器　小皿（105）の１個体のみである。口縁部は、一つまみの横ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

須恵器　椀が２個体（103・104）出土している。104は底部のみの残存であるが、103と同じタイプの椀と考えられる。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。



第52図　ＳＫ15出土土器

時　　期　出土土器から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＫ１６

検出状況　Ⅰ区中央部南側で検出した(第17図)。確認調査のトレンチによる撹乱を受け、全体を検出することはできなかった。ＳＢ15の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は、長楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向で1.11m残存し、その直交方向で78cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは14cmである。

埋没状況　青灰色シルトをブロック状に含む明黄色細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の椀の小片数点と、土師器の皿が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時　　期　出土土器から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＫ１７

検出状況　Ⅲ区南部で検出した(第17図)。東側の一部は、確認調査のトレンチにより撹乱を受け、検出することはできなかった。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は、楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向で58cm残存し、その直交方向で58cmを測る。横断面は、緩やかなＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは13cmである。

埋没状況　淡黄灰色シルト１層からなる。層相から、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　土師器の甕の口縁部片（113）が出土している(第53図)。く字形に屈曲する口縁部で、内外面が横ナデ調整により仕上げられている。また、わずかに残存する体部も、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

時　　期　出土土器から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＫ１８

検出状況　Ⅲ区南西部で検出した(第17図)。ＳＫ19の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。長軸方向で98cm、その直交方向で61cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは25cmである。

埋没状況　黒褐色シルト混じり灰色シルト１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の椀の口縁部の小片（109）が出土している(第53図)。

時　　期　出土土器から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

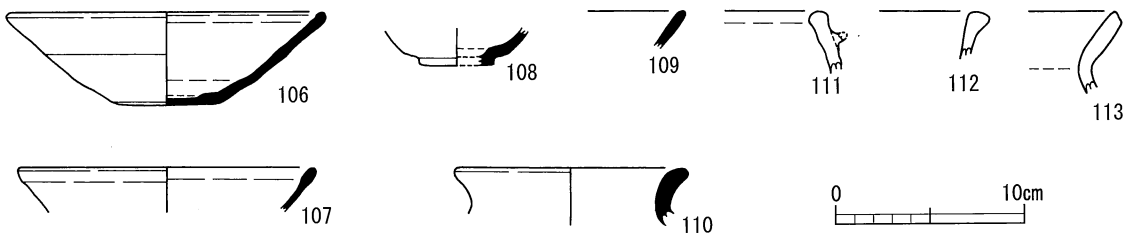
ＳＫ１９

検出状況　Ⅲ区南西部で検出した(第17図)。ＳＫ18の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は、やや歪んだ円形を呈する。その規模は、95cm×96cmである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは14cmである。

埋没状況　上から、褐色シルト質砂・炭層・褐色シルト質砂の３層からなる。焼土は認められなかった。最上層に関しては、層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の椀の底部片（108）が出土している(第53図)。内面見込みが明確に落ち込み、



111　SK02出土土器　　110　SK05出土土器　　107　SK06出土土器　　106　SK10出土土器
113　SK17出土土器　　109　SK18出土土器　　108　SK19出土土器　　112　SK21出土土器

第53図　土坑出土土器

平高台をなす。底部は回転糸切りにより切り離されている。

時　　期　出土土器から、平安時代後半（Ⅱｃ期）と考えられる。

ＳＫ２０

検出状況　Ⅰ区南西部で検出した(第17図)。西側の一部は、Ⅰ区とⅢ区の中間部まで拡がり、検出することができなかった。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は、長楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向で2.34m残存し、その直交方向で1.00mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは８cmである。

埋没状況　淡灰色シルトをブロック状に含む明灰黄色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の鍋と須恵器の椀が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時　　期　出土土器から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＫ２１

検出状況　Ⅱ区南西部で検出した(第16図)。ＳＫ05の南側、ＳＫ08の南西側、ＳＤ09の北側に位置する。ＳＤ07と切り合い関係にあり、ＳＤ07を切っている。

形状・規模　平面形は、円形に近い楕円形を呈する。長軸方向で62cm、その直交方向で56cmを測る。横断面は緩やかな逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは12cmである。

埋没状況　褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の鍋の口縁部片（112）が出土している(第53図)。口縁端部を外方に拡張させるもので、播丹型鍋の一部と考えられる。内外面が横ナデ調整により仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

時　　期　出土土器から、室町時代前半（Ⅱｅ期）と考えられる。

第54図　ＳＫ04の実測

（４）溝

ＳＤ０１

検出状況　Ⅱ区中央部北側で検出した（第16図）。ＳＤ02の北側に位置し、ＳＤ02とほぼ平行する。他の遺構との切り合い関係は認められない。北西－南東方向にほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。

形状・規模　5.31ｍ検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅24cm～62cmを測り、最深部における検出面からの深さは６㎝である。底部の標高は、北西端で51.65ｍ、南東端で51.61ｍと、ほぼ一定している。

埋没状況　灰黄褐色シルト質砂１層からなる。層相から、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　土器が出土していないため、時期の特定は困難である。埋土の特徴から、鎌倉時代以降と考えられる。

ＳＤ０２

検出状況　Ⅱ区中央部北側で検出した（第16図）。ＳＤ01の南側に位置し、ＳＤ01とほぼ平行する。他の遺構との切り合い関係は認められない。北西－南東方向にほぼ直線的にのびる溝で、北西端は撹乱を受け、南東端は調査区内で収束している。

形状・規模　9.85ｍ検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅30cm～1.00ｍを測り、最深部における検出面からの深さは６㎝である。底部の標高は、北西端で51.66ｍ、南東端で51.63ｍと、ほぼ一定している。

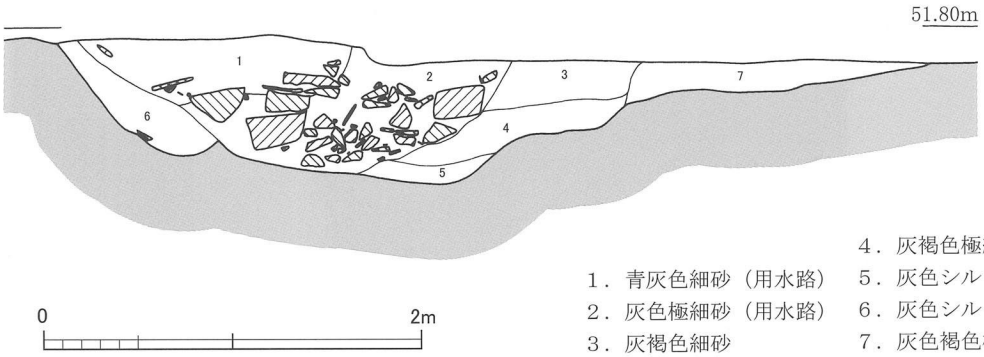
埋没状況　淡褐色シルト質砂１層からなる。層相から、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　土器が出土していないため時期の特定は困難である。埋土の特徴から、鎌倉時代以降と考えられる。

ＳＤ０３（写真図版14）

検出状況　Ⅱ区中央部で検出した（第16図）。ＳＤ02の南側に位置する。西端部でＳＫ02と切り合い関係にあり、これに切られている。東西方向に弧状にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。

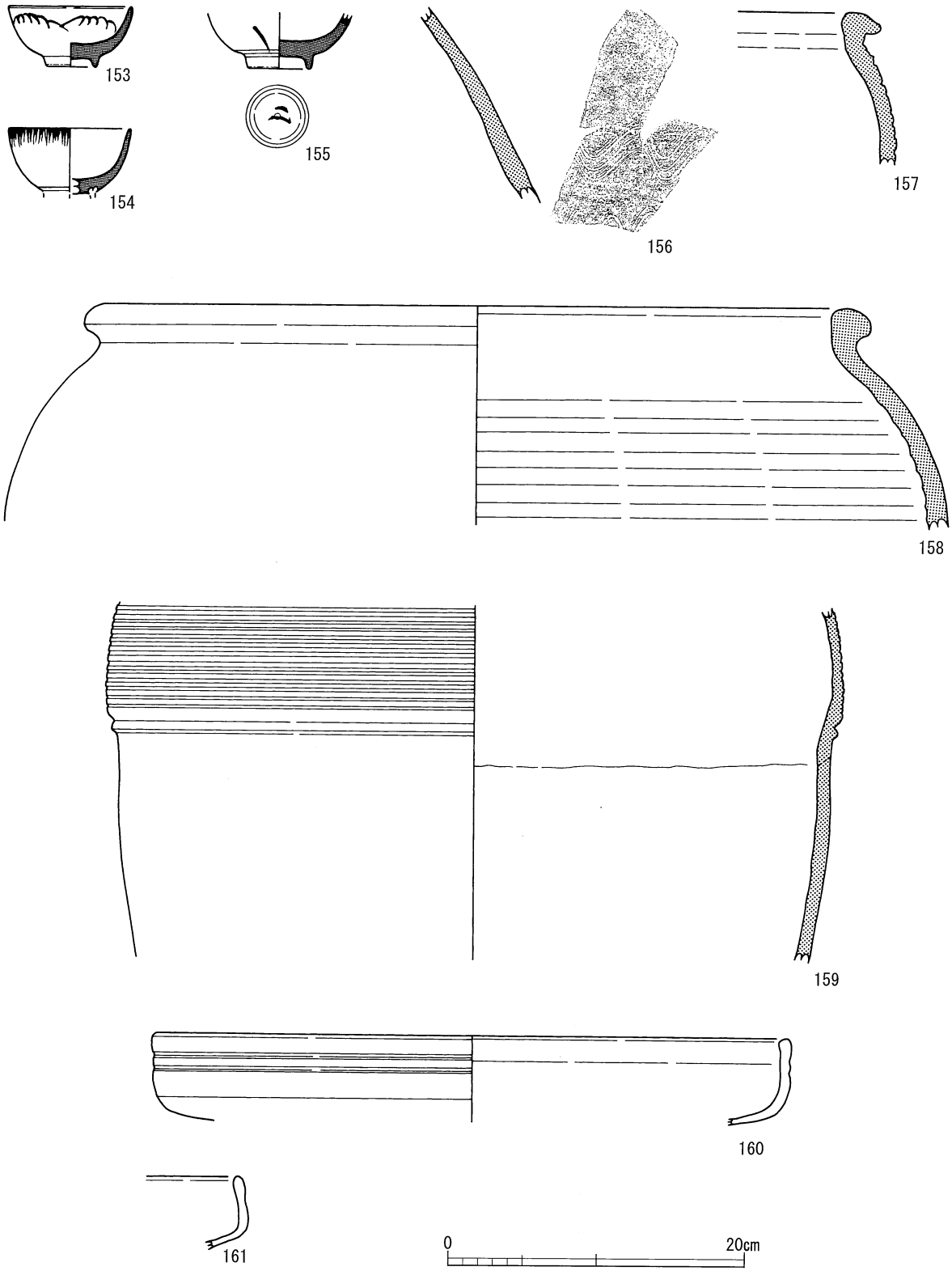


1．青灰色細砂（用水路）
2．灰色極細砂（用水路）
3．灰褐色細砂
4．灰褐色極細砂
5．灰色シルト質砂
6．灰色シルト質砂
7．灰色褐色極細砂

第55図　ＳＤ03

形状・規模　20.85m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は2.42m～7.04mを測る。最深部における検出面からの深さは68cmである。底部の標高は、北西端で50.98m、南東端で50.89mと、ほぼ一定している。

埋没状況　７層からなる(第55図)。少なくとも２回の再掘削が認められ、最終的には、大礫とともに人為的に埋められている（１層・２層）。



第56図　ＳＤ03出土土器（１）

出土遺物　１層・２層出土土器（以下、上層出土土器）と、それより下層から出土した土器（以下、下層出土土器）とでは、時期が大きく異なる。ただし、上層出土土器のなかに、形態的に古く位置付けられる土器も認められる。これらの土器については、下層出土土器として報告する。

上層出土土器　染付け・土師器・丹波焼が出土している(第56図)。

染付け　153～155の碗３個体を図化した。このなかで、153は波佐見産で、外面に草花文が描かれている。1680～1740年代に位置付けられるものである。154は肥前産で、外面には雨降り文が描かれている。19世紀前半に位置付けられる。

土師器　ほうらくが160と161の２個体分出土している。160は、体部外面が回転ヘラ削り、内面がナデ調整により仕上げられ、口縁部内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。口縁部外面には、２条の凹線状の窪みが認められる。161は口縁部の小片で、体部外面はヘラ削りが施され、他はナデ調整により仕上げられている。

丹波焼　甕が４個体分（156～159）出土している。158は赤塗部の甕で、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。17世紀後半～18世紀初頭に位置付けられる。159も赤塗部の甕で、体部のみ残存する。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。上半部には13条の凹線が認められる。156は、甕の体部片と考えられ、外面に７条を単位とする波状文が２段に施されている。157は、口縁部から体部にかけてわずかに残存する。外面には８条の凹線が認められる。伊丹郷町では17世紀後半から18世紀初頭に位置付けられている。

下層出土土器　土師器・須恵器・丹波焼・備前焼・瓦質土器・青磁・平瓦の各器種が出土している。

土師器　量的に最も多く出土している。鍋が最も多く、他に小皿と羽釜が出土している。

鍋　大きく３タイプに分類することができる。一つは、口縁部がく字形を呈し、端部をつまみ上げるものである。120の1個体のみで、体部外面は平行叩きにより仕上げられ、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

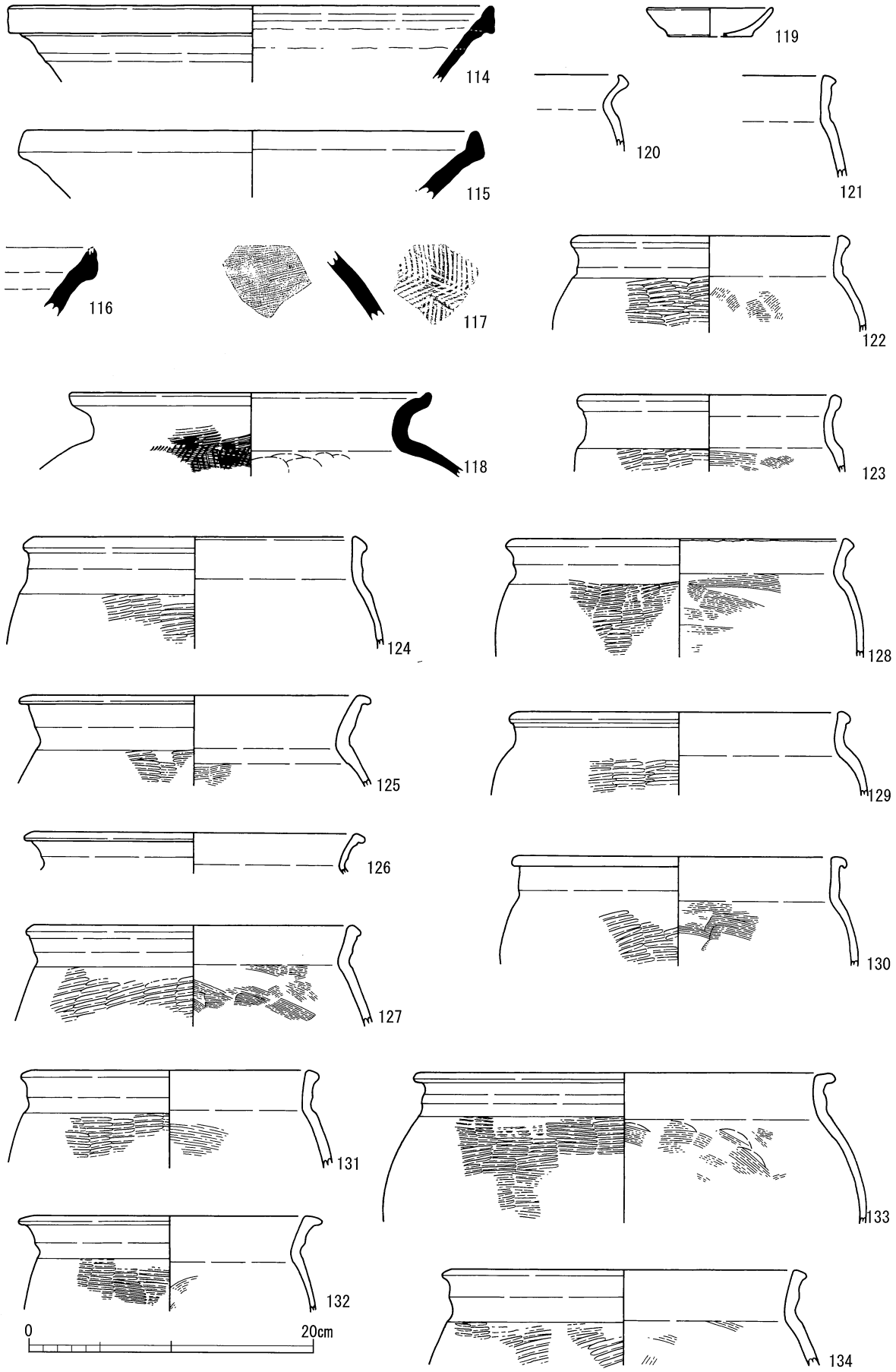
もう一つは、いわゆる播丹型に分類されるもので、体部に対して口縁部が直立し、端部を外方に拡張または肥厚させるものである。量的に最も多く出土しており、端部の形態に若干のバリエーションが認められる。体部外面は平行叩きにより、内面はハケ調整により仕上げられ、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

最後のタイプは、体部から口縁部にかけて内傾し、口縁部下外面が横ナデ調整により突帯状を呈するものである。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、体部外面は平行叩きにより仕上げられている。体部内面は、ハケもしくは板ナデ調整により仕上げられている。口縁端部と突帯の形状にバリエーションが認められる。

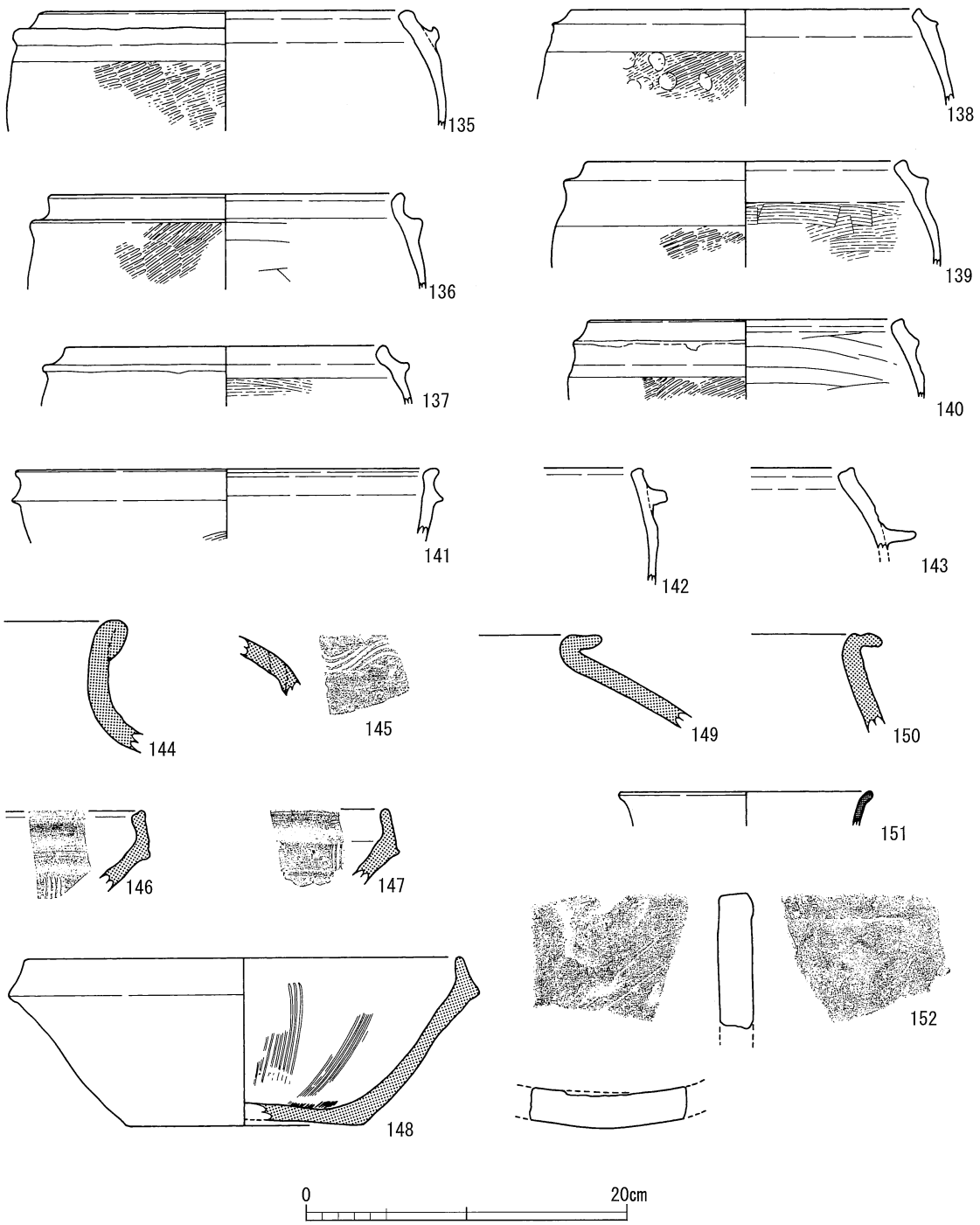
小皿　119の1個体のみである。底部は回転糸切りにより切り離され、体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。

羽釜　142と143の２個体である。142は口縁部の小片で、還元焼成されている。口縁部下に幅1.1cmの鍔が貼り付けられ、内外面を横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は平行叩きにより仕上げられ、内面はナデ調整により仕上げられている。143は、口縁部を中心とした小片で、口縁部下に幅２cmの鍔が貼り付けられている。

須恵器　捏鉢と甕が出土している。捏鉢は、114～116の３個体を図化することができた。いずれも口縁端部を上方に拡張させている。甕は、118と117の２個体分である。118は、口縁



第57図　ＳＤ03出土土器（２）



第58図　ＳＤ03出土土器（３）

部を中心に残存するもので、体部外面を叩き整形後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。117は、甕の体部の小片である。

丹波焼　甕の口縁部の小片が２点（149･150）出土している。口縁端部を外方に大きく屈曲させ、さらに外方に引き延ばしている。

備前焼　壺・甕・擂鉢が出土している。壺は145の１個体のみで、外面に５本を単位とした波状文が施されている。甕は144の１個体のみである。口縁端部を折り返し、玉縁状を呈する。擂鉢は３個体（146～148）出土している。148と147・146の２タイプが認められる。148に対して、後者は口縁部を上方に大きく拡張させている。

青磁　151の１個体のみで、碗の口縁部の小片である。

瓦　152の１点である。端部がわずかに残存する小片で、凸面は格子状の叩きが施され、凹面には布目が認められる。

時　期　出土土器の特徴から、室町時代後半（Ⅱｆ期）に当初の掘削と再掘削が行われ、再々掘削が江戸時代（Ⅱｇ期）に行われている。

ＳＤ０４

検出状況　Ⅱ区南半部西側で検出した(第16図)。ＳＢ01の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。南北方向にほぼ直線的にのびる溝で、両端は調査区内で収束している。

形状・規模　3.80m検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅は42cm～52cmを測り、最深部における検出面からの深さは９cmである。底部の標高は、51.51mと一定している。

埋没状況　褐灰色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　土器が出土していないため時期の特定は困難である。ただし、ＳＤ06と同様の方向性を示すことから、室町時代後半（Ⅱｆ期）と考えられる。

ＳＤ０５

検出状況　Ⅱ区南半部中央で検出した(第16図)。ＳＢ01の南西側、ＳＫ08の北東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。南北方向にわずかに弧状をなしてのびる溝で、両端は調査区内で収束している。

形状・規模　3.42m検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅は48cmを測り、最深部における検出面からの深さは10cmである。底部の標高は一定している。

埋没状況　褐灰色シルト質砂１層からなる。層相から、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　全く出土していない。

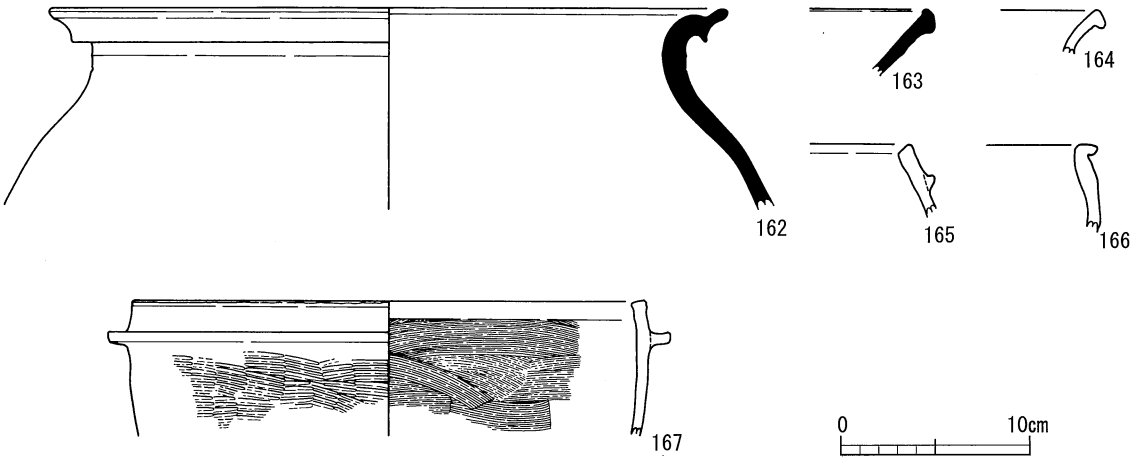
時　期　土器が出土していないため時期の特定は困難である。ＳＤ04と同様の方向性を示すことから、室町時代後半（Ⅱｆ期）と考えられる。

ＳＤ０６

検出状況　Ⅱ区南半部東側で検出した(第16図)。ＳＢ02・ＳＢ03と平面的に重複する。しかし、調査では、これらの遺構との前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との切り合い関係は認められない。南北方向にわずかに弧状を呈してのびる溝で、両端は調査区内で収束している。

形状・規模　6.66m検出した。横断面は、皿形～逆台形をなす。検出面における幅は31cm～48cmを測り、最深部における検出面からの深さは８cmである。底部の標高は、51.80mと一定している。

埋没状況　褐灰色シルト１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。



第59図　ＳＤ06出土土器

出土遺物　土師器と須恵器が出土している(第59図)。

土師器　鍋と羽釜が出土している。鍋は、164・165・166の３個体で、いずれも口縁部の小片である。164・166と165に分類でき、164と166は播丹型鍋に分類されるものと考えられる。両個体は、焼成が良好で、還元焼成もしくは酸化焔焼成されている。一見したところ、須恵器もしくは陶器のようである。口縁端部を外方に拡張させている。

165は、口縁部下外面が突帯状をなすもので、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

羽釜は、167の1個体である。口縁部下外面に幅１cmの鍔が貼り付けられている。鍔の断面形は方形を呈する。また、口縁端部も断面方形を呈する。鍔から口縁部にかけて横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は平行叩きにより、内面は横方向のハケ調整により仕上げられている。

須恵器　甕と捏鉢が出土している。甕は162の１個体が出土している。口縁端部を上下方向に拡張させ、さらに上外方に大きく引きのばされている。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。体部外面はヘラ削りの後ナデ調整により、内面は回転ナデ調整により仕上げられている。

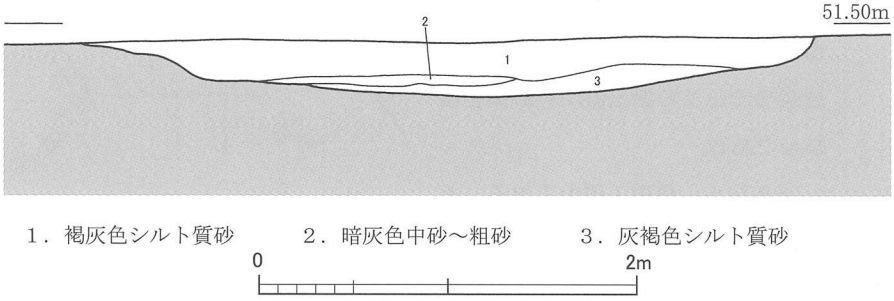
捏鉢は163の１個体である。口縁部の小片で、端部を肥厚させ、上方にわずかに拡張させている。

時　期　出土土器から判断して、室町時代後半（Ⅱｆ期）と考えられる。

ＳＤ０７(写真図版15)

検出状況　Ⅱ区南半部西側で検出した(第16図)。ＳＫ05の西側、ＳＤ09の北側に位置する。ＳＤ09・ＳＫ04・ＳＫ06・ＳＫ21と切り合い関係にあり、いずれの遺構にも切られている。特に、南側をＳＤ09に切られているため、舌状を呈し、溝状遺構というよりは、落ち込みに近い状況を示している。

形状・規模　6.90m検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅は5.26mを測り、最深部における検出面からの深さは27cmである(第60図)。底部の標高は、北端で51.53m、南端で51.18mと、南側へ傾斜している。



第60図　ＳＤ07

埋没状況　３層からなる(第60図)。いずれの層も、層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器・須恵器・陶器の各器種が出土している(第61図)。

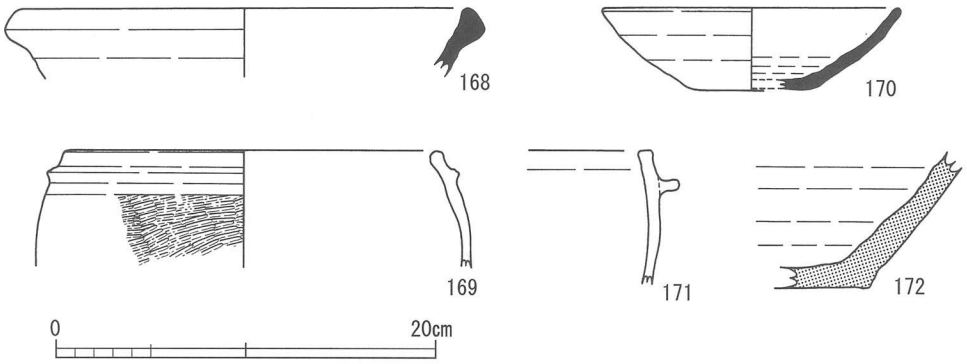
土師器　169の鍋と171の羽釜各１個体が出土している。171は、体部から口縁部にかけての小片で、口縁部下外面には、幅1.1cmの鍔が横ナデ調整により貼り付けられている。体部外面は叩き整形により、口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面はナデ調整により仕上げられている。

169の鍋は、還元焼成されている。色調は明赤褐色を呈する。体部外面を叩き整形後、口縁部下に断面三角形を呈する突帯がめぐり、口縁部内外面にかけて横ナデ調整により仕上げられている。

須恵器　椀・捏鉢・鍋が出土している。椀は170の１個体である。底部は回転糸切りにより切り離され、体部から口縁部にかけては内湾気味に立ちあがる。捏鉢は、168の１個体である。口縁端部が上下方向に拡張され、端面は弧状を呈する。

陶器　備前焼か丹波焼の底部片である。体部内外面は横ナデ調整により仕上げられているが、底部は未調整である。

時　期　出土土器から判断すると、時期差が顕著である。鎌倉時代から室町時代にかけて埋没したものと考えられる。



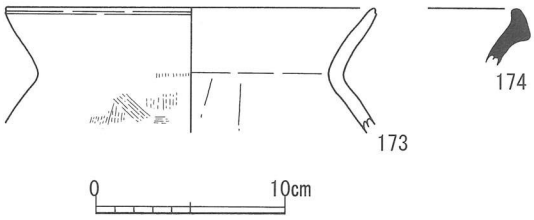
第61図　ＳＤ07出土土器

ＳＤ０８

検出状況　Ⅱ区南西部で検出した(第16図)。ＳＤ07の西側、ＳＤ09の北側に位置する。ＳＤ09と切り合い関係にあり、これに切られている。また、西側は調査区外まで拡がっている。このように、遺構の極一部を検出したのみで、確実に溝状遺構と断定できるものではない。

形状・規模　2.24m検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅94cm残存し、最深部における検出面からの深さは15cmである。

埋没状況　灰色シルト質砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。



第62図　ＳＤ08・14出土土器

出土遺物　土器と鉄製品が出土している。

土　器　須恵器の捏鉢１個体（174）が出土している（第62図）。口縁部の小片で、端部を上方に大きく拡張させ、端面は膨らむ。

鉄製品　Ｆ２の１点が出土している（第14図）。一部のみの残存であるが、包丁の茎の可能性が考えられる。6.3cm残存し、断面は４㎜×８㎜の長方形をなす。残存する最大幅は2.0cmである。

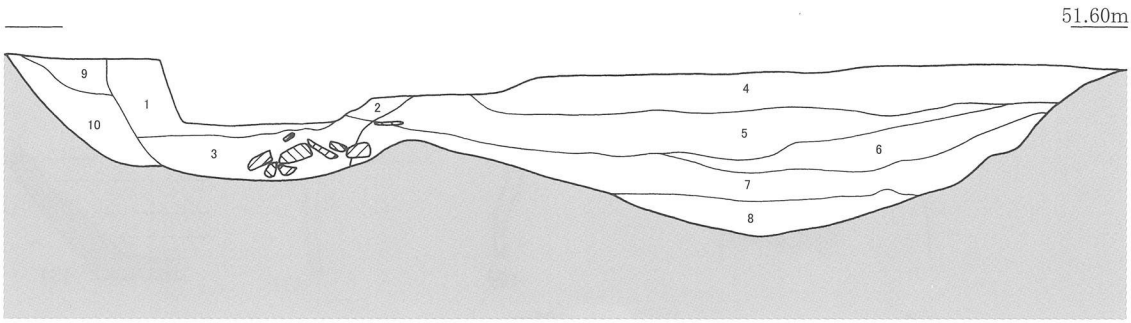
時　期　出土土器から、室町時代前半（Ⅱｅ期）と考えられる。

ＳＤ０９（写真図版15）

検出状況　Ⅱ区南側で検出した（第16図）。ＳＤ07・ＳＢ03の南側に位置する。ＳＤ07・ＳＤ08・ＳＫ07と切り合い関係にあり、これらの遺構を切っている。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。

形状・規模　23.90m検出した。溝の再掘削により、底部には土手状の高まりが認められる、横断面はＵ字形を二つ並べた様相を呈する。検出面における幅は4.14m～6.18mを測り、最深部における検出面からの深さは1.18mである。底部の標高は、西端で51.54m、東端で50.52mと、東側へ傾斜している。

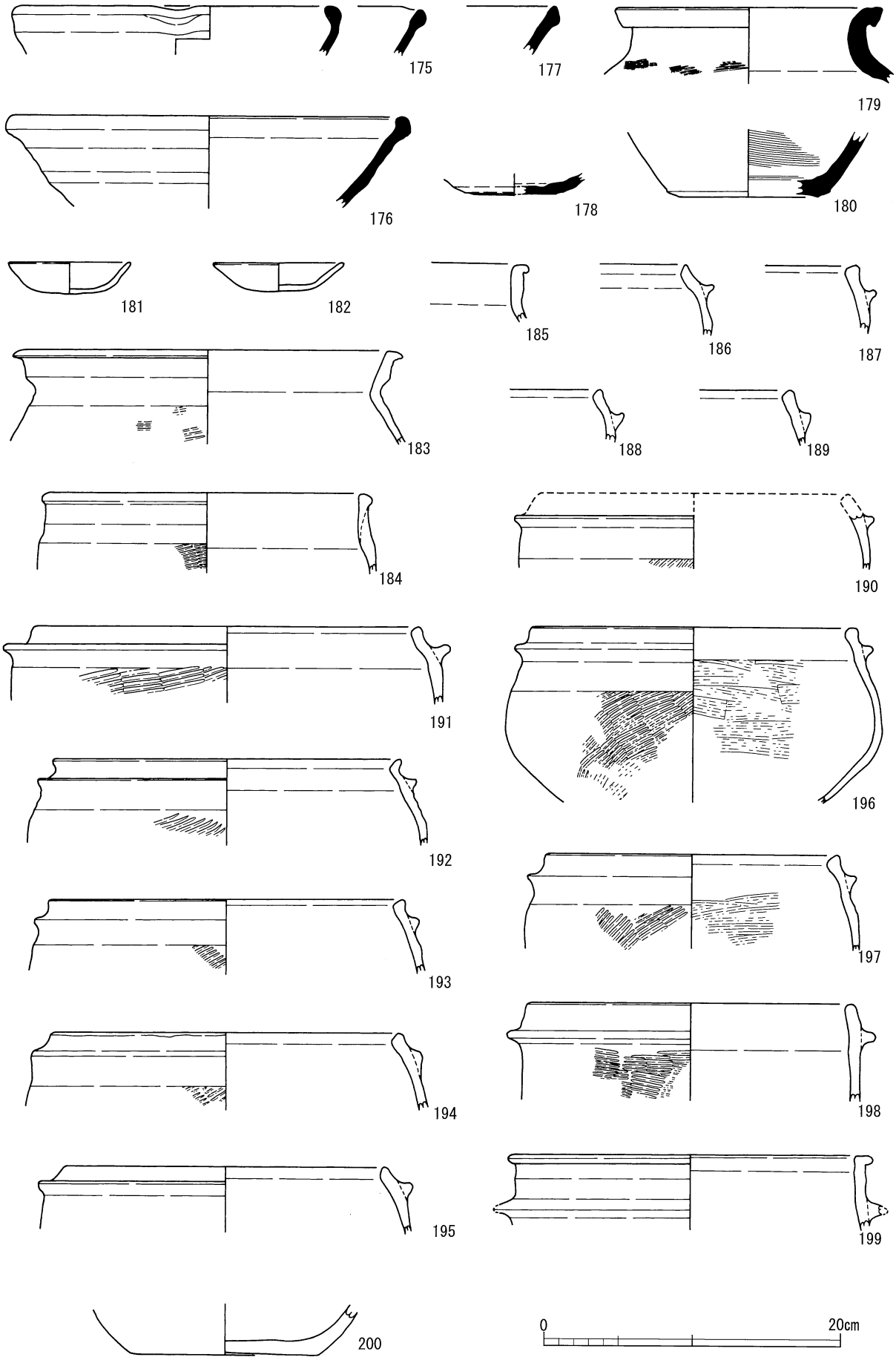
埋没状況　10層からなる（第63図）。当初の溝（４層～８層）の埋没後、南側へ移動させた形で再掘



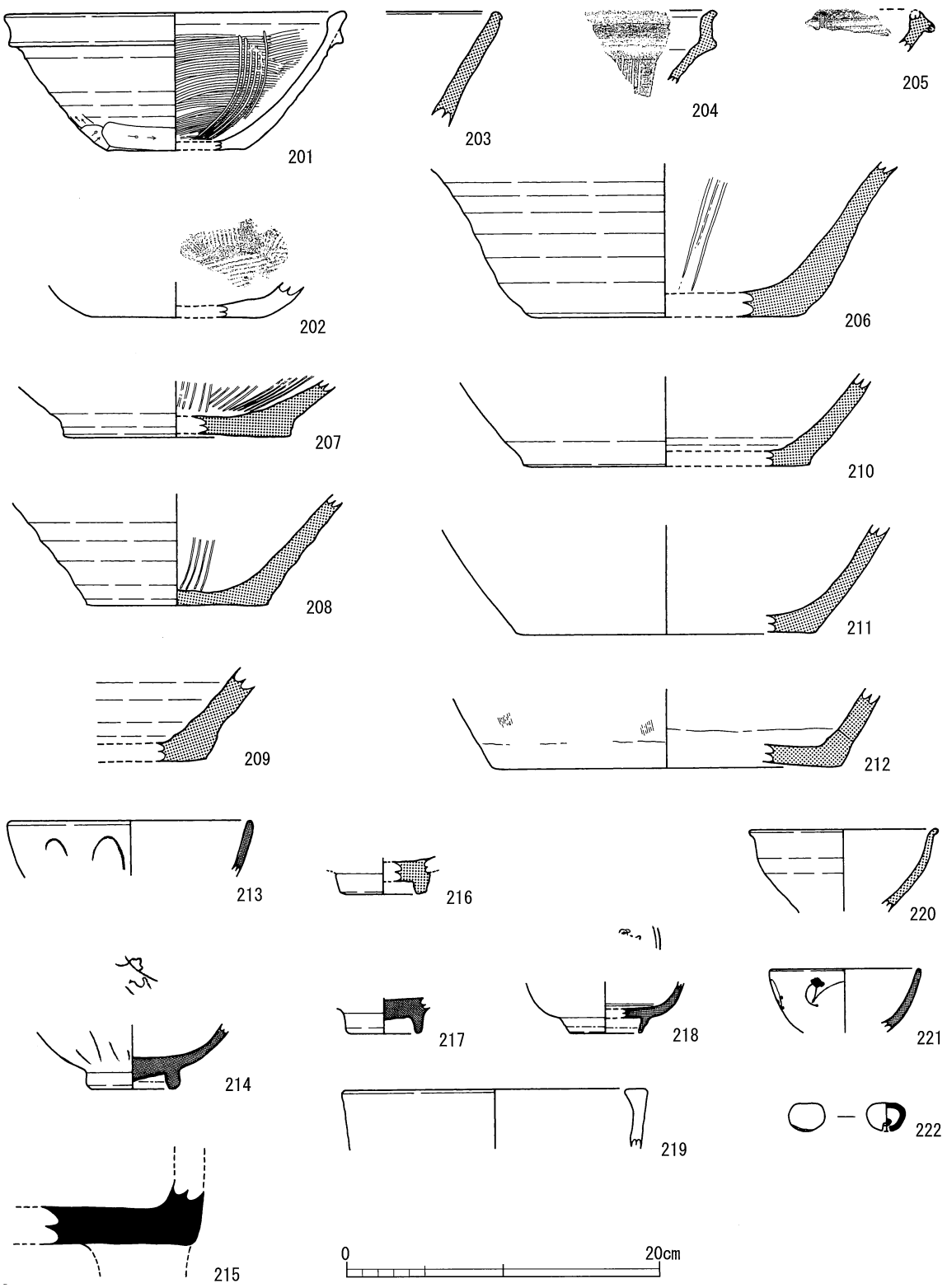
1．灰褐色シルト質極細砂（埋め土）
2．埋め土
3．灰褐色礫混じり中砂
4．灰褐色シルト質砂
5．褐灰色シルト質砂
6．明黄色シルト混じり褐灰色シルト質砂
7．明黄色シルト混じり暗褐灰色シルト質砂
8．青灰色シルト
9．黒褐色シルト質砂
10．灰褐色シルト質砂

0　2m

第63図　ＳＤ09



第64図　ＳＤ09出土土器（１）



第65図　ＳＤ09出土土器（２）

削されている。その後、この溝も埋没していくが、幾度か再掘削が行われ、今回の調査が行われる直前まで機能していた用水路へ踏襲されていく。

出土遺物　土師器・須恵器・瓦質土器・陶器・磁器が出土している（第64図・第65図）。

土師器　小皿・鍋・すり鉢・不明品の各器種が出土している。

小皿　181と182の２個体を図化することができた。２個体とも同タイプに分類できるもので、

口径に対して器高が高い特徴を有する。底部から口縁部にかけては指押さえとナデ調整により仕上げられている。また、口縁部には弱い横ナデ調整が施されている。

鍋　最も多く出土している器種である。口縁部下外面に突帯を貼り付けるタイプ（186～188・190～197）と、貼り付けないタイプ（184）に分類できる。前者は、体部を叩き整形後、突帯から口縁部にかけて、内外面が横ナデ調整により仕上げられている。口縁端部が残存するものは、192を除いては肥厚させず端面を有する。一方、192は端部を外方へ拡張させている。

後者は、184の１個体である。口縁端部を外方へわずかに肥厚させ、玉縁状を呈する。体部外面を叩き整形後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられ、体部と口縁部の境は明確な変換点をなす。

上記以外のタイプの鍋が３個体（183・185・189）出土している。183は、播丹型の鍋で、口縁部から体部にかけて残存する。口縁端部を外方へ拡張させているが、その断面形は三角形を呈する。口縁部内外面は横ナデ調整により、体部外面は平行叩きにより、内面はナデ調整により仕上げられている。189は、口縁部がわずかに残存するもので、外面には断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。内外面とも摩滅が著しいが、横ナデ調整により仕上げられている。

すり鉢　201と202の２個体である。201はほぼ完形に復元できた個体である。口縁端部は内側に肥厚し、内傾する端面を有する。また口縁部外面には、断面三角形をなす突帯が貼付けられている。内面は横方向を主体としたハケ調整により仕上げられた後、放射方向の卸目がヘラ描きされている。６本が１単位となっている。外面は全体的に横方向の回転ナデ調整により仕上げられ、その後、底部付近のみ静止ヘラ削り（左→右）が施されている。底部外面は未調整である。内面は、残存する範囲においてハケ調整が施されている。202は底部のみの残存で、内面に卸目が認められる。卸目は全面ではなく、９本を単位とし、見込みは同心円状に、体部は放射状に施されている。体部外面はナデ調整により仕上げられ、底部は未調整である。

不明品　219の１個体である。口縁部を中心とした小片で、端部は内側に大きく引き延ばされている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

須恵器　捏鉢・甕・火鉢・その他が出土している。

捏鉢　175～177の３個体で、175は片口を中心に残存する小片である。口縁端部を大きく肥厚させるとともに内側に屈曲させている。端面は弧状を呈する。

火鉢　215の１点出土している。底部から体部にかけての変換部が残存し、底部には脚の剥離痕が認められる。平面形は方形傾向にあるものと考えられる。外面はヘラナデ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。

この他、器種を特定できない底部片（180）が出土している。180は、外面はヘラナデ調整、内面はカキ目により仕上げられている。また、底部はナデ調整により仕上げられ、体部との変換部はヘラ削りにより仕上げられている。

陶磁器　備前焼・丹波焼・天目茶碗・唐津焼・青磁碗(213・214・217)・染付磁器(218・221)が出土している。

天目茶碗　220と223の２個体出土している。220は、底部を欠くが、全面に施釉が認められる。

唐津焼　216の１個体である。底部のみの残存で、高台外面・畳み付け部分のみ施釉が認められる。青磁の可能性も考えられる。

備前焼　擂鉢（206～208）と底部片（209・210）が出土している。擂鉢については、口縁部が残存しないため、時期の特定は困難である。

丹波焼　212の底部片が出土している。甕の底部と考えられる。

他　203～205・211の４個体図化することができた。いずれも、産地は不明である。203は鉢の口縁部片と考えられる。204は擂鉢で、口縁部を上方に大きく引き延ばし、回転ナデ調整により仕上げられている。内面には卸し目が認められる。205は、擂鉢と考えられるが、詳細は不明である。211は底部片であるが、器種を特定できない。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器のなかには、12世紀代まで遡ると考えられる土器（183）も認められるが、基本的には室町時代後半（Ⅱｆ期）に掘削され、江戸時代（Ⅱｇ期）まで機能していたものと考えられる。

ＳＤ１０

検出状況　Ⅰ区北側中央部で検出した(第17図)。ＳＢ07の西側に位置し、ほぼ同じ方向性を示すことから、ＳＢ07と一体の施設として機能していたものと考えられる。他の遺構との切り合い関係は認められない。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、両端は調査区内で収束している。

形状・規模　11.10m検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅は35cm～48cmを測る。最深部における検出面からの深さは７㎝である。底部の標高は、北端で51.50m、南端で51.43mと、わずかに南側へ傾斜している。

埋没状況　淡灰褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している。須恵器は椀と甕の小片が、土師器は羽釜の一部が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時　期　出土土器から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＤ１１

検出状況　Ⅰ区北側中央部で検出した(第17図)。ＳＢ12の東側に位置し、ほぼ同じ方向性を示すことから、ＳＢ12と一体のものとして機能していたと考えられる。他の遺構との切り合い関係は認められない。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、両端は調査区内で収束している。

形状・規模　9.15m検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅27cmを測る。最深部における検出面からの深さは３㎝である。底部の標高は、北端で51.32m、南端で51.36mと、ほぼ一定している。

埋没状況　灰褐色シルト質砂１層からなる。層相から、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している。いずれも小片のため、器種の特定は困難である。

時　期　ＳＢ12との関係から、室町時代前半（Ⅱｅ期）と考えられる。

ＳＤ１２

検出状況　Ｉ区北半西側で検出した(第17図)。ＳＢ09の西側に位置し、ほぼ同じ方向性を示すことから、ＳＢ09と一体の施設として機能していたものと考えられる。ＳＫ10と切り合い関係にあり、ＳＫ10を切っている。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、両端は調査区内で収束しており、全体が検出されている。

形状・規模　5.98m検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅20cm～42cmを測り、最深部における検出面からの深さは４cmである。底部の標高は、北端で51.49m、南端で51.45mと、ほぼ一定している。

埋没状況　褐色シルト混じり明黄灰色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器片が出土している。

時　　期　ＳＢ09との関係およびＳＫ10との切り合い関係から、鎌倉時代前半以降と考えられる。

ＳＤ１３(写真図版15)

検出状況　Ｉ区中央部東側で検出した(第17図)。ＳＤ11の南側、ＳＢ16の北側に位置する。ＳＢ12と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。北西－南東方向にわずかに弧状にのびる溝で、北西側は調査区内で収束し、南東側は調査区外までのびている。

形状・規模　平面的には扇状を呈するが、２段に掘り込まれており、下段は弧状を呈している。11.40m検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅1.1m～6.6mを測る。最深部における検出面からの深さは27cmである。底部の標高は、北西端で51.41m、南東端で51.40mと、ほぼ一定している。

埋没状況　２層からなる。２層とも、層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器椀・土師器の羽釜・青磁碗が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時　　期　出土土器から判断して、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＤ１４

検出状況　Ｉ区中央部西側で検出した(第17図)。ＳＫ15の南西側に位置する。ＳＢ14と平面的に重複するが、調査では、前後関係を明らかにすることはできなかった。ほぼ南北方向にのびる溝で、北側は確認調査トレンチにより切られ、南側は調査区内で収束している。

形状・規模　2.30m検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅は35cm～50cmを測る。最深部における検出面からの深さは６cmである。底部の標高は、北端で51.33m、南端で51.36mと、ほぼ一定している。

埋没状況　暗灰色シルト質砂１層からなる。層相から、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　土師器の甕の小片（173）が出土している(第62図)。体部外面をハケ調整により仕上げた後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

時　　期　出土土器から判断して、古墳時代（Ⅱａ期）と考えられる。

ＳＤ１５

検出状況　Ⅰ区中央部で検出した(第17図)。ＳＢ15の北側に隣接する。ＳＢ15と方向性が一致することから、ＳＢ15と一体で機能していたものと考えられる。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。

形状・規模　4.25m検出した。横断面はＵ字形をなし、検出面における幅は21cm～30cmを測る。最深部における検出面からの深さは９cmである。底部の標高は、西端で51.43m、東端で51.45mと、ほぼ一定している。

埋没状況　上から、明黄灰色シルト質砂、灰褐色シルト質砂の２層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　ＳＢ15との関係から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

ＳＤ１６

検出状況　Ⅰ区中央部で検出した(第17図)。ＳＢ16の北側に隣接する。ＳＢ16と方向性が一致することから、ＳＢ16と一体で機能していたものと考えられる。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。

形状・規模　1.61m検出した。横断面はＵ字形をなし、検出面における幅は18cm～22cmを測る。最深部における検出面からの深さは５cmである。底部の標高は、西端で51.44m、東端で51.43mと、ほぼ一定している。

埋没状況　明灰褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。図化もできなかった。

時　　期　ＳＢ16との関係から、鎌倉時代前半と考えられる。

ＳＤ１７

検出状況　Ⅲ区南西部で検出した(第17図)。ＳＢ13の西側に位置する。ＳＢ13と方向性が一致することから、ＳＢ13と一体で機能していたものと考えられる。南北方向にわずかに弧状をなしてのびる溝で、南側は調査区内で収束し、北側は調査区外までのびている。

形状・規模　4.98m検出した。横断面は緩やかなＵ字形をなし、検出面における幅は26cm～30cmを測る。最深部における検出面からの深さは８cmである。底部の標高は、北端で51.19m、東端で51.18mと、ほぼ一定している。

埋没状況　暗褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　ＳＢ13との関連から、鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）と考えられる。

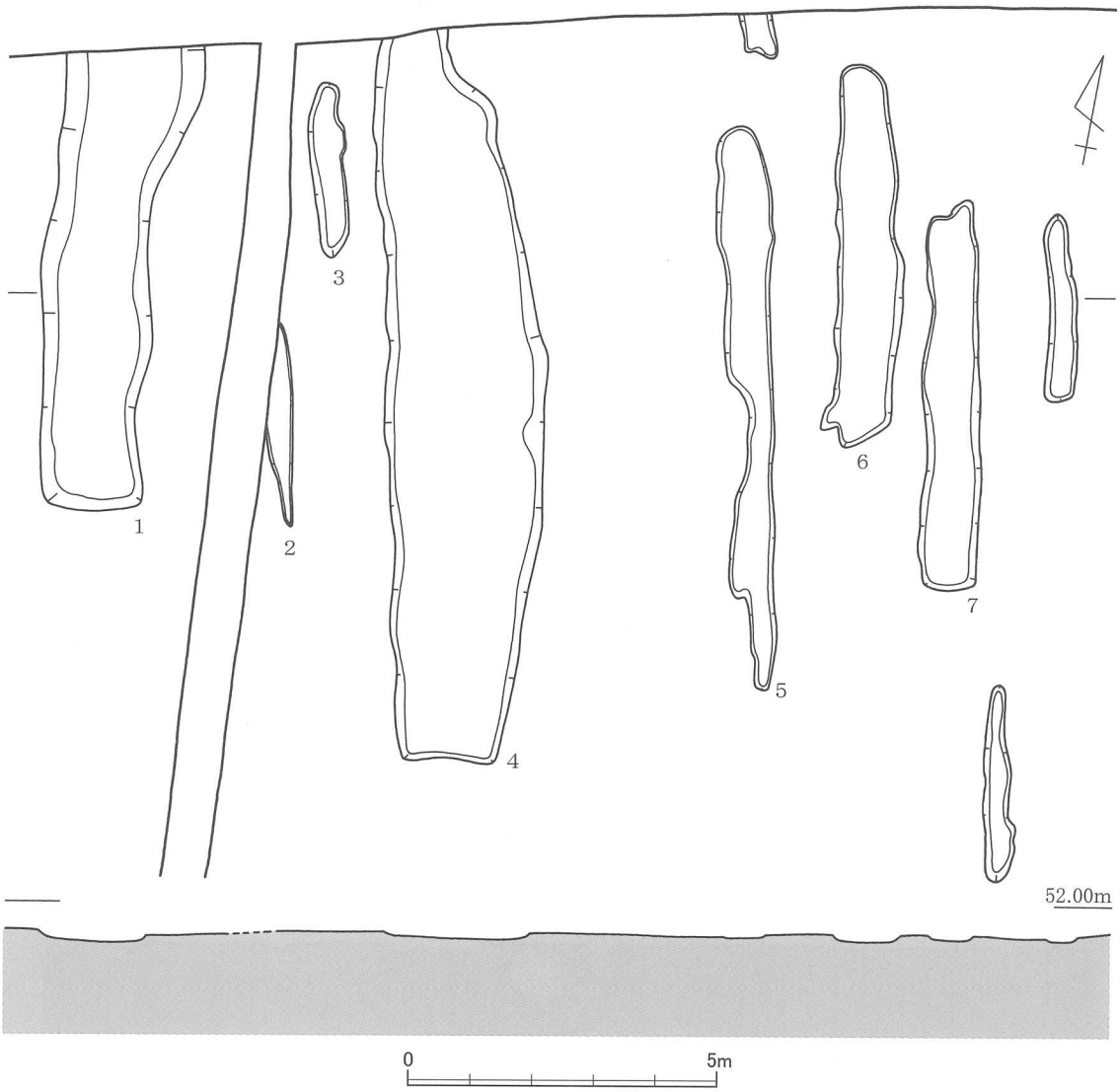
（５）畠

等間隔に平行する数条の浅い溝からなるものである。このような溝群を畠作に伴う遺構と考え、畠として報告する。今回の調査では、このような遺構を２箇所確認することができた（畠１・畠２）。以下、その概要を報告する。

畠１

検出状況　Ⅰ区からⅢ区にかけての北部で検出した(第17図)。ＳＢ05の西側に位置する。本報告では、１面の畠として報告するが、溝相互の間隔にばらつきが認められることから、少なくとも２単位の畠が存在したものと考えられる。北側は調査区北側まで拡がっているが、Ⅱ区では検出されなかったため、Ⅱ区では遺構面のレベルが高く削平されたか、もしくはⅡ区とⅠ・Ⅲ区の境で収束するものと考えられる。

形状・規模　溝相互の間隔から、溝１・溝４・溝６と溝２・溝５・溝７が、それぞれセット（畠１ａ・畠１ｂ）となるものと考えられる(第66図)。畠１ａは畝幅４ｍと復元され、その長さは溝４で11.50ｍを測る。畠１ｂは畝幅2.50ｍと復元され、その長さは溝５で8.90ｍを測る。検出面からの溝の深さは５㎝である。

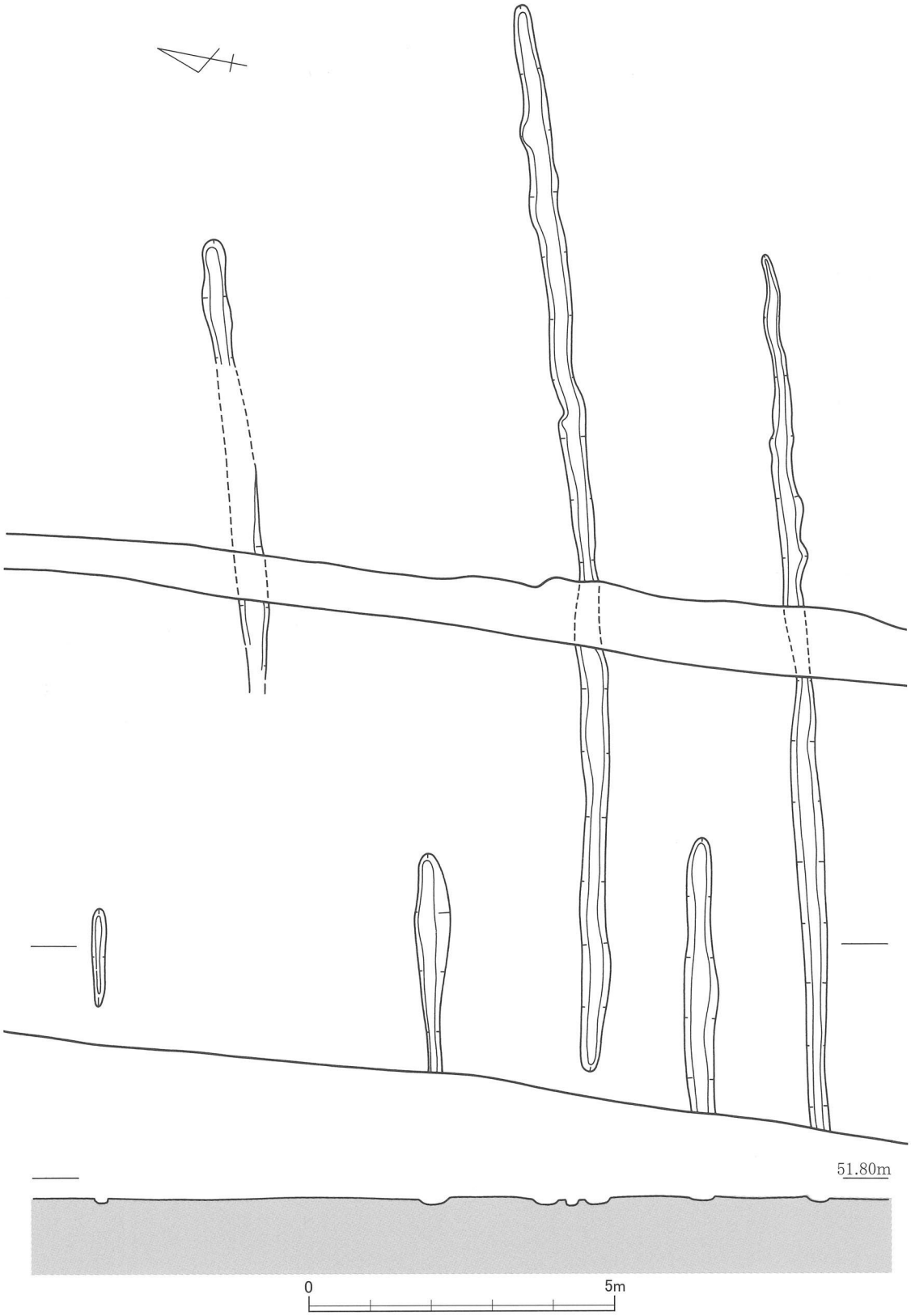


第66図　畠１

埋没状況　明黄灰色細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　平安時代から鎌倉時代に位置付けられる須恵器の椀、土師器の皿の小片が出土している。

時　　期　出土土器から、鎌倉時代以降と考えられる。

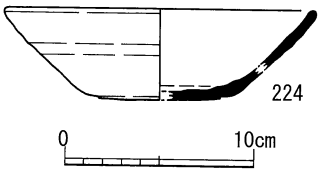


第67図　畠２

畠２

検出状況　Ⅰ区からⅢ区にかけての中央部で検出した(第17図)。ＳＢ14の掘立柱建物群の北側に位置する。全体を検出することはできず、一部はⅢ区の西側へ拡がっている。

形状・規模　６条の溝からなる５畝分を検出した(第67図)。畝幅は1.30m～2.10mを測り、その長さは最大で17.78mを測る。検出面からの溝の深さは５cmである。

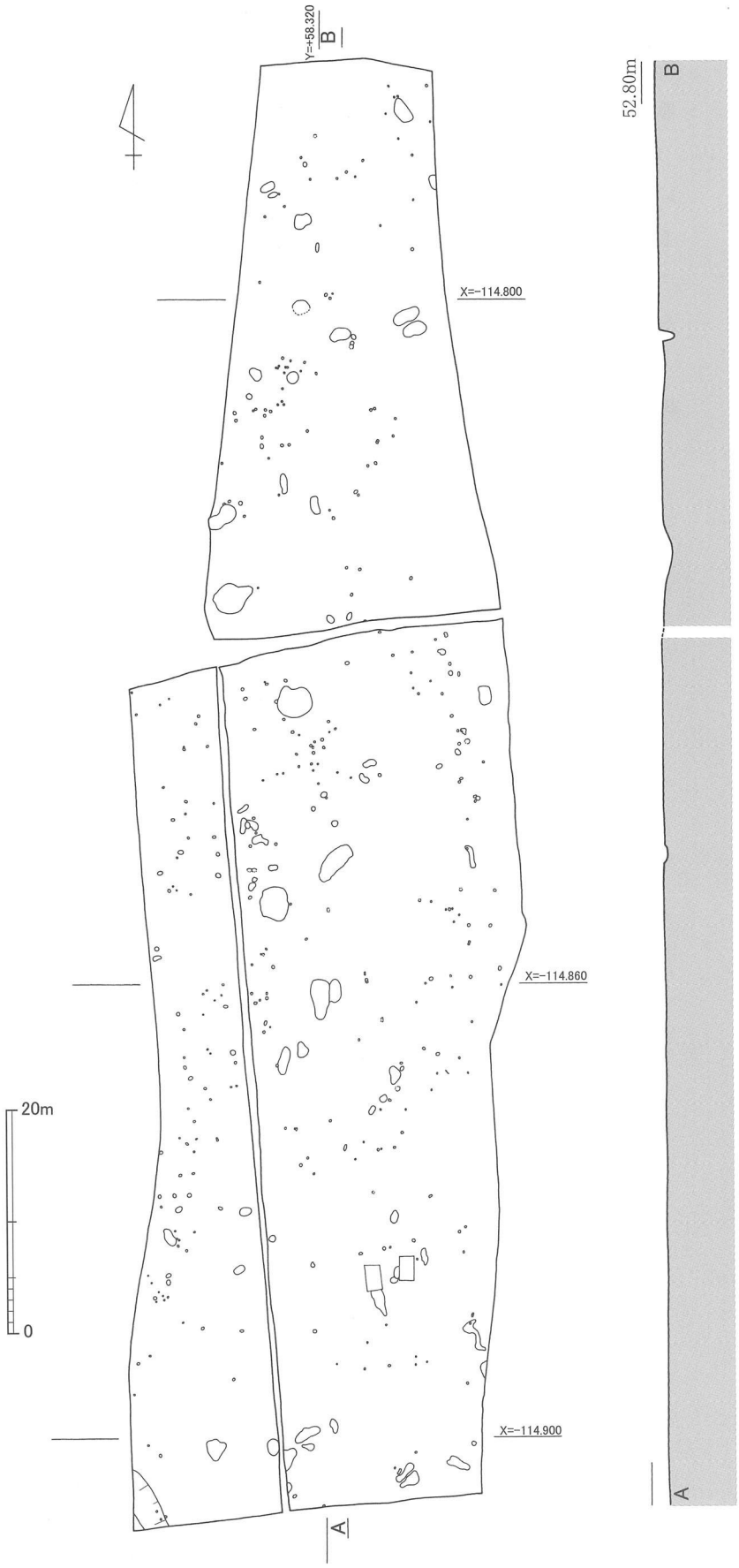


第68図　畠２出土土器

埋没状況　明黄灰色細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の椀１個体（224）が出土している(第68図)。図上でほぼ完形に復元できる個体で、底部は回転糸切りにより切り離されている。

時　　期　出土土器から、鎌倉時代以降と考えられる。



第69図　第２面

第３節　第２面の調査

１．第２面出土遺物

第２面を検出するにあたって、縄文土器を中心とした土器および石器が出土している。これらの遺物については、第２面で検出した遺構の時期を検討するうえで、参考となるものである。以下、図化できた土器について報告する(第70図)。

（１）土器

縄文土器

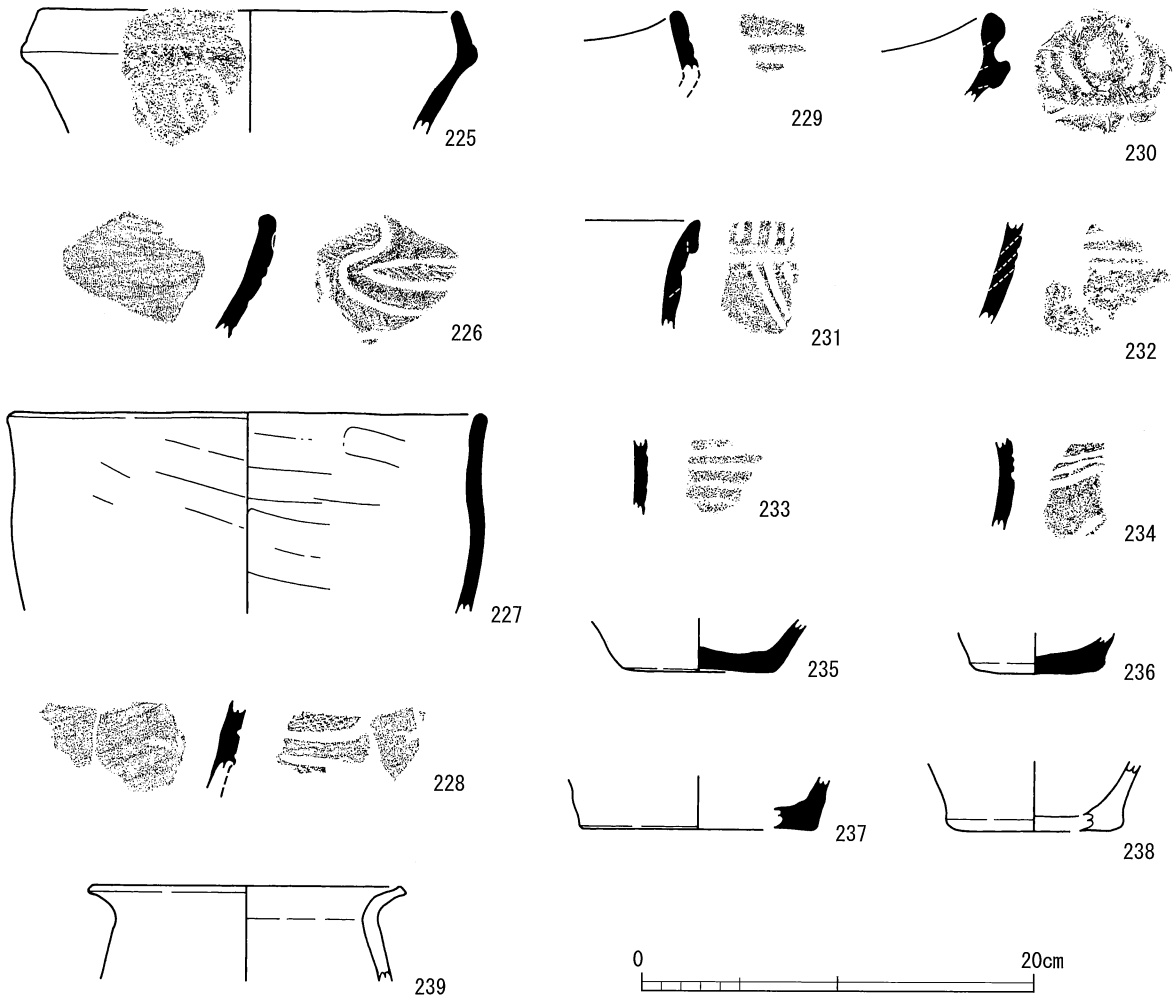
225は、口縁部を逆く字形に拡張させ、外面に沈線が施されている。また、頸部外面には渦巻文が施されている。片吹遺跡Ａ３類に分類された土器に類似し、中期末に位置付けられている。

226は、波状口縁をなす鉢である。２条沈線間に縄文が施されている。内面は条痕が施されている。

227と228は、深鉢である。228は体部片で、２条の沈線と縄文帯が認められる。縄文施文後沈線が施されており、中津式に分類される。

229は、波状口縁を有する鉢の突起部である。外面に２条の沈線が施されている。

230は、波状口縁を有する鉢の突起部である。中心部には巻貝によると思われる刺突が



第70図　第２面出土土器

認められる。北白川上層Ｉ期と考えられる。

231は、鉢の口縁部片である。口縁部を下方に拡張させ、端面にキザミ目を施す。また、頸部には縦方向の沈線が３条施されている。

232は深鉢の体部片で、３条の沈線が認められる。中期末～後期初頭と考えられる。

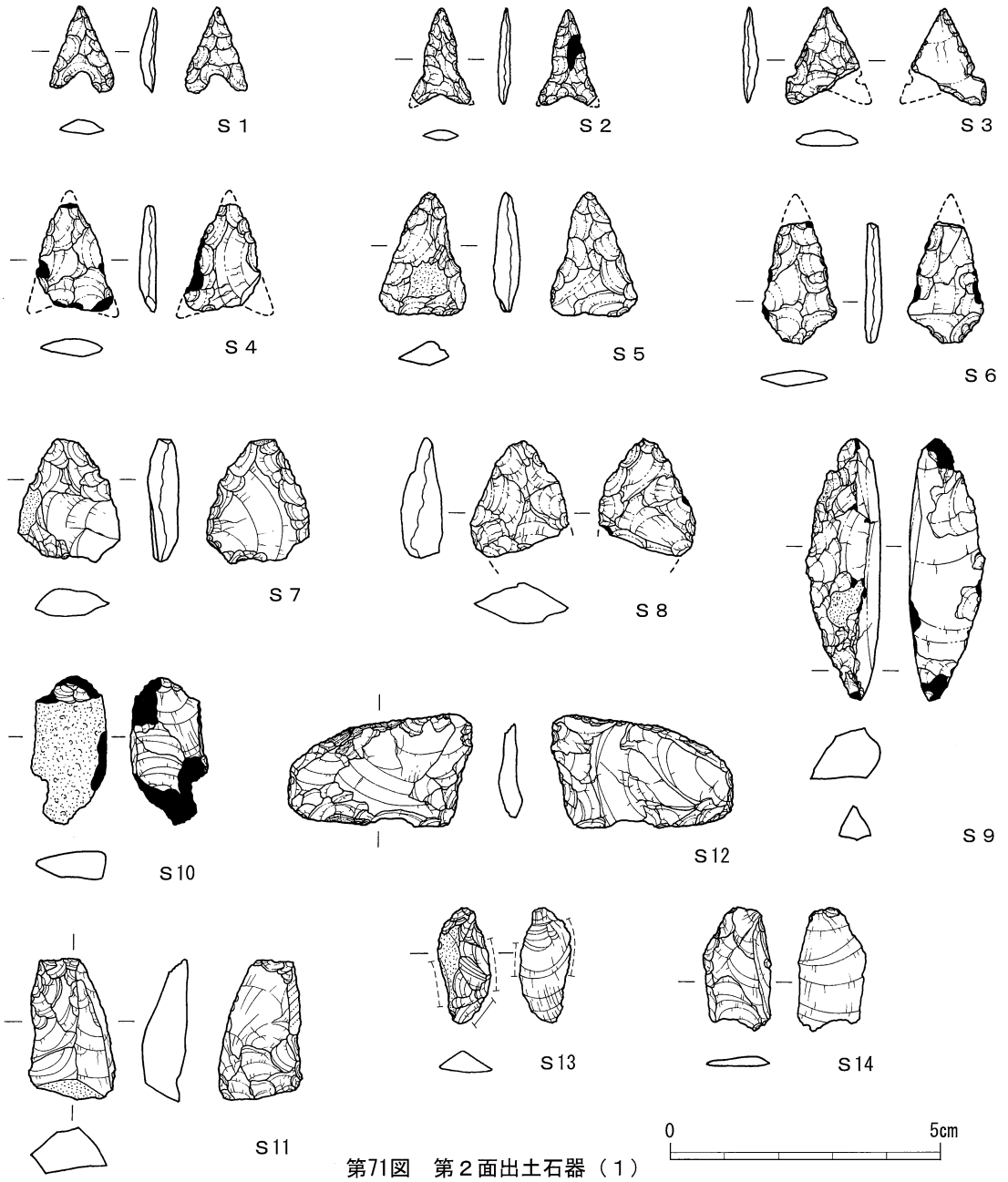
233と234は鉢の体部片で、233は４条の、234は３条の、沈線が施されている。

235～237は底部片である。いずれも平底である。

弥生土器　238と239の２個体である。239は甕の口縁部片と考えられ、胎土の特徴から弥生時代前期と考えられる。内外面の調整は不明である。

（２）石器

はじめに　板波町遺跡から出土した石器のうち石鏃・石錐・楔形石器などの打製石器類は、すべて当該期の遺構に伴うものではなく、中世の柱穴や土坑、水田土壌層中から出土している。



第71図　第２面出土石器（１）

石鏃の形態や黒曜石、チャートなどの石材が少量認められることから、これらの石器には縄文時代に属するものが含まれると考えられる。

Ｓ１～Ｓ６は石鏃で、基部形態はＳ１～Ｓ４が凹基、Ｓ５が平基、Ｓ６が凸基となる。凹基式の４点はそれぞれ形態の特徴が少し異なっている。Ｓ１は側縁が直線的で基部の抉りはやや深め、逆刺は丸みをもつ。全面加工で平面形は整っているが側面観のバランスは悪い。Ｓ２は側縁がＳ字状に屈曲、基部の抉りは浅く、逆刺は鋭い。全面加工で細身の整った形態に仕上げられている。Ｓ３とＳ４は直線的な側縁をもち、基部の抉りは浅い。Ｓ３では基部側に近い側縁に小さな抉りがあり、片面は周縁をごく小さな剥離で成形するにとどまる。Ｓ４はやや大きな剥離で成形されており、片面は周辺加工となる。平基式のＳ５は側縁が直線的であるが、左右は非対称気味である。両面とも素材面をわずかに残し、厚みがある。凸基式のＳ６は直線的な側縁をもち、両面とも比較的大きな剥離で薄く仕上げられている。摩耗が著しい。これらの石鏃はすべてサヌカイト製であるが、風化度はやや浅めのものが目立つ。肉眼観察にもとづけば、Ｓ２のみ石質が均質で肌理細かい特徴があり、二上山産の可能性がある。

Ｓ７はチャート製の尖頭器様石器で、小型で厚みがあり表裏に自然面などの素材面を大きく残すことから、石鏃の未製品とも考えられる。素材の腹面側に二次加工を連続させ、三角形状としているが、先端には自然面もしくは節理面が残存している。

Ｓ８はサヌカイト製の尖頭器様石器で、厚みがあり、石鏃にみられるよりも大きな剥離面が全面に及ぶ。下半が欠損するが、残存部の状況からみてあまり整った形態にはならなかったと思われる。

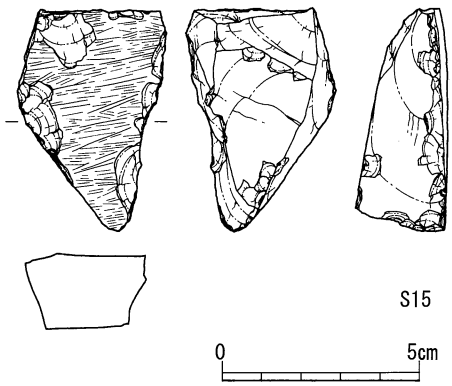
Ｓ９は石錐である。縦割れした断面三角形状の剥片を利用し、その先細りした一端を錐部に仕上げている。二次加工は一側縁にのみ連続したものが認められるが、丁寧には行われていない。Ｓ２と同様に均質で肌理細かいサヌカイトで、二上山産かと思われる。

Ｓ10～Ｓ12は楔形石器である。石材は異なり、Ｓ10が黒曜石、Ｓ11が黒灰色のチャート、Ｓ12がサヌカイトである。Ｓ10・Ｓ11は上下１対の、Ｓ12は上下左右で２対の作用部位がある。作用部位の縁辺は線状となるものがあり、階段状剥離も顕著に認められる。

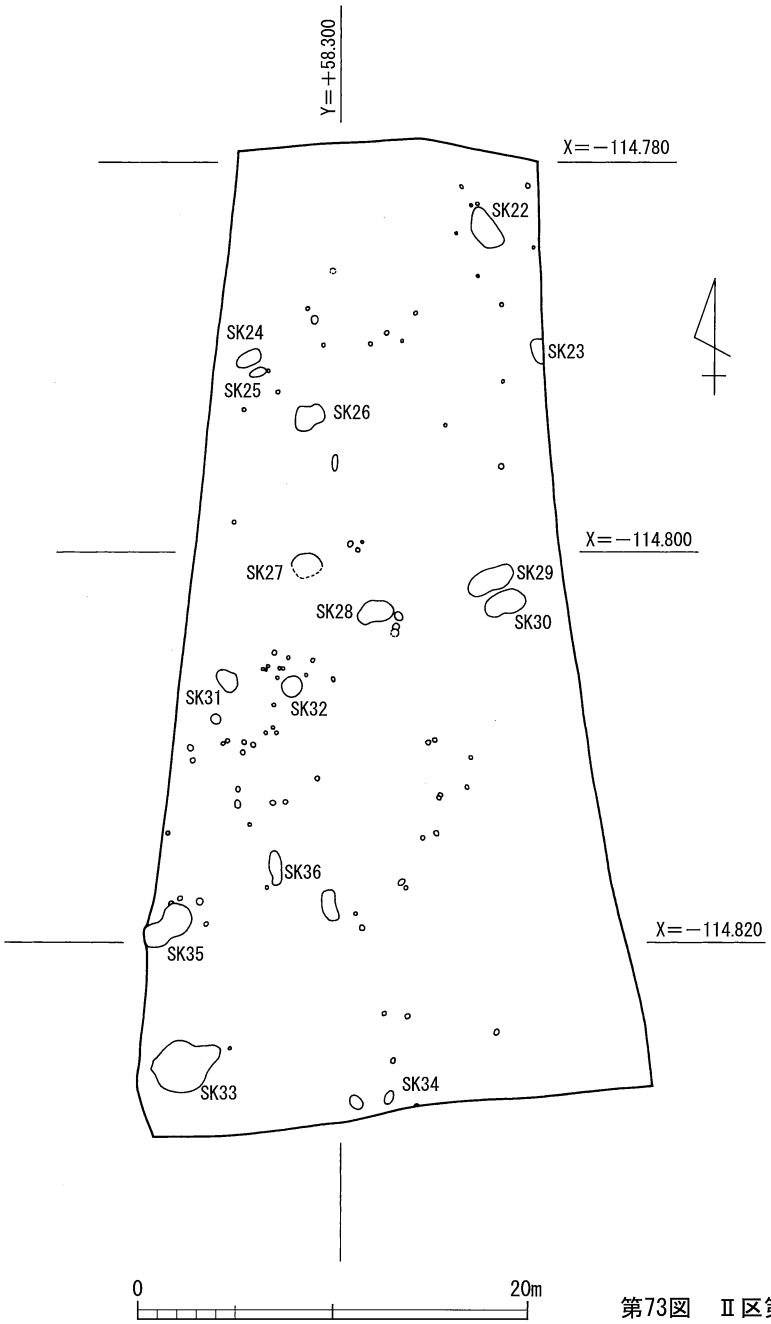
Ｓ13とＳ14は小型の剥片で、Ｓ13が黒曜石、Ｓ14が緑灰色のチャート製である。Ｓ13は長さ２㎝余りの小片で、自然面を1/2近くもとどめるにもかかわらず、縁辺には微細剥離痕が認められ、特に背面側右下端には小範囲ながら明瞭な小剥離が残る。このような微細剥離痕が偶発的に生じることもあるが、使用痕とすれば、最も近い黒曜石原産地である隠岐からでも直線距離で約200㎞も離れており、稀少石材ゆえの特殊性を想定することが可能である。Ｓ14は側縁が平行するごく薄手の剥片である。良質な石材であるが微細剥離痕は認められない。

Ｓ15は片面に明瞭な研磨痕を残すサヌカイト製石器である。側面はすべて折れ面で構成されているため、本来の形状や器種はうかがい知ることができない。研磨面は横断面ではわずかに凹面を成しているが、縦断面では緩やかに外彎する。縁辺には不規則な剥離が認められるが、剥離面の色調が少し異なっているものもあり、後世に偶発的に打ち欠かれたものかもしれない。他のサヌカイト製石器に比べ風化が浅く黒色に近い色調を呈する。

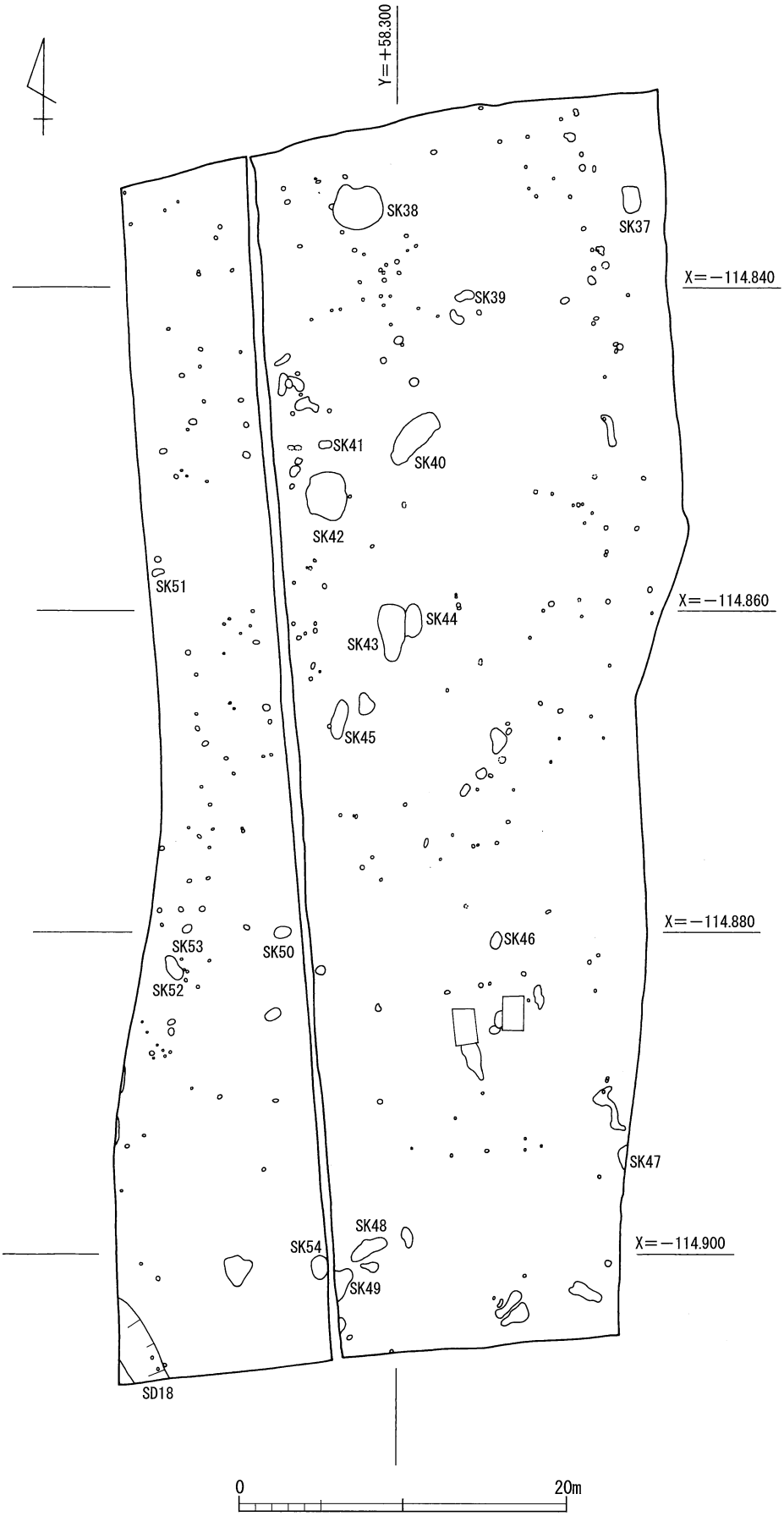
これらの石器のうち石鏃（Ｓ１～Ｓ３）は形態から縄文時代に属すると考えられる。尖頭器様石器や楔形石器、剥片のうちチャートや黒曜石を使用したものも弥生時代以降にはほとんど見られないものであるが、確実に旧石器時代のものとみなしうる石器は見られない。遺物包含層からは縄文時代後期の土器が出土しており、これらの石器も同時期と考えるのが自然であろう。また、他の石器についてもあえて異なる時期を想定する必要はないと思われるが、Ｓ15については風化度が浅く、より新しい時期を考えたほうが良いかも知れない。



第72図　第２面出土石器（２）



第73図　Ⅱ区第２面


Y=+58.300
X=−114.840
X=−114.860
X=−114.880
X=−114.900
SK37
SK38
SK39
SK40
SK41
SK42
SK43
SK44
SK45
SK46
SK47
SK48
SK49
SK50
SK51
SK52
SK53
SK54
SD18
0
20m

第74図　Ⅰ・Ⅲ区第２面

２．遺構と遺物

柱穴・土坑・溝を検出している。

（１）柱穴

数穴検出されているが、建物を復元することはできなかった。また、遺物を伴う柱穴はわずかである。

（２）土坑

ＳＫ２２

検出状況　Ⅱ区北東隅で検出した(第73図)。ＳＫ23の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で2.28ｍを測り、その直交方向で1.26ｍを測る。横断面は逆台形をなすが、底部は凹凸が顕著で、そのレベルは一定していない。最深部における検出面からの深さは58cmを測る。

埋没状況　褐灰色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ２３

検出状況　Ⅱ区北東部で検出した(第73図)。ＳＫ22の南東側に位置する。遺構の大半は東側調査区外まで拡がっている。このため、全体を検出することはできなかった。

形状・規模　平面形は、楕円形をなすものと推定される。その規模は、長軸方向で1.32ｍを測り、その直交方向で60cm残存する。残存する範囲で、横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは21cmである。

埋没状況　黒褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ２４

検出状況　Ⅱ区北西部で検出した(第73図)。ＳＫ25の北側に近接して位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、楕円形をなす。その規模は、長軸方向で1.30ｍ、その直交方向で76cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは23cmを測る。

埋没状況　黒褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ２５

検出状況　Ⅱ区北西部で検出した(第73図)。ＳＫ24の南側に近接して位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で90cm、その直交方向で42cmを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは17cmである。

埋没状況　暗黄色シルト混じり暗灰褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ２６

検出状況　Ⅱ区北半部で検出した(第73図)。ＳＫ25の南東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、歪な楕円形をなす。その規模は、長軸方向で1.58ｍ、その直交方向で1.20ｍを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは36cmを測る。

埋没状況　黒褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ２７

検出状況　Ⅱ区中央部で検出した(第73図)。ＳＫ28の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はないが、確認調査により撹乱を受け、約1/2を欠く。

形状・規模　平面形は、楕円形をなすものと推定される。その規模は、長軸方向で1.58ｍを測り、その直交方向で63cm残存する。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは46cmを測る。

埋没状況　黒褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ２８

検出状況　Ⅱ区中央部で検出した(第73図)。ＳＫ27の南東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で1.82ｍ、その直交方向で1.06ｍを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは70cmを測る。

埋没状況　黒褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ２９

検出状況　Ⅱ区中央部東側で検出した(第73図)。ＳＫ30の北側に近接して位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で2.38m、その直交方向で1.08mを測る。横断面は緩やかなU字形をなし、最深部における検出面からの深さは25cmを測る。

埋没状況　暗灰褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ３０

検出状況　Ⅱ区中央部東側で検出した(第73図)。ＳＫ29の南側に近接して位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形はやや歪んだ楕円形をなす。その規模は、長軸方向で2.06m、その直交方向で1.24mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは26cmを測る。

埋没状況　明黄色シルト混じり暗灰褐色シルト質砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ３１

検出状況　Ⅱ区中央西側で検出した(第73図)。ＳＫ32の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で1.28m、その直交方向で80cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmを測る。

埋没状況　暗灰褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ３２

検出状況　Ⅱ区中央西側で検出した(第73図)。ＳＫ31の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、円形に近い形状をなす。その規模は、1.15m×1.05mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。

埋没状況　暗灰褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ３３

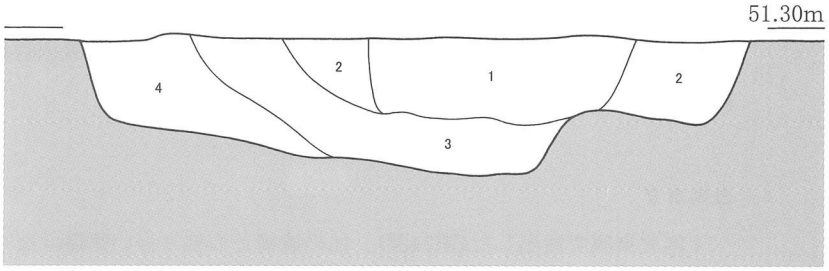
検出状況　Ⅱ区南西隅で検出した(第73図)。ＳＫ34の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は歪な円形をなす。その規模は、3.65ｍ×2.60ｍを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは70㎝を測る。

埋没状況　上から、黒褐色シルト質砂、灰色シルト質砂、黒褐色シルト質砂、明黄色シルト質砂の４層からなる(第75図)。堆積状況から判断して、当遺構は、風倒木痕の可能性も考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。



１．灰色シルト混じり黒褐色シルト質砂　　３．小礫混じり黒褐色シルト質砂
２．黒褐色シルト混じり灰色シルト質砂　　４．灰色極細砂混じり明黄色シルト質砂

第75図　ＳＫ33

ＳＫ３４

検出状況　Ⅱ区南端部中央で検出した(第73図)。ＳＫ33の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で75㎝、その直交方向で43㎝を測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは13㎝を測る。

埋没状況　暗褐色シルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ３５

検出状況　Ⅱ区南西部西端で検出した(第73図)。ＳＫ33の北側、ＳＫ36の南西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、やや歪んだ楕円形をなす。その規模は、長軸方向で2.80m、その直交方向で1.54mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは21cmを測る。

埋没状況　黄褐色シルト混じり暗灰褐色シルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ３６

検出状況　Ⅱ区南西部で検出した(第73図)。ＳＫ35の北東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、長楕円形をなす。その規模は、長軸方向で1.76m、その直交方向で55cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは14cmを測る。

埋没状況　暗灰褐色シルト質砂１層からなる。埋土中に大礫が含まれることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ３７

検出状況　Ⅰ区北東隅で検出した(第74図)。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、隅丸方形をなす。その規模は、長軸方向で1.63m、その直交方向で1.02mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは34cmを測る。

埋没状況　上から、明黄色シルト混じり褐灰色シルト質砂、褐灰色シルト質砂の２層からなる。少なくとも上層に関しては、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ３８

検出状況　Ⅰ区北西部で検出した(第74図)。ＳＫ39の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、歪な円形をなす。その規模は、2.69m×3.05mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは71cmを測る。

埋没状況　上から、黒褐色シルト質砂、灰黒褐色シルト質砂、灰黄色シルト質砂の３層からなる。堆積状況から判断して、当遺構は、風倒木痕の可能性も考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ３９

検出状況　Ｉ区北部中央で検出した(第74図)。ＳＫ38の南東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、歪な長楕円形をなす。その規模は、長軸方向で1.21ｍ、その直交方向で55cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。

埋没状況　灰褐色シルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ４０

検出状況　Ｉ区北部で検出した(第74図)。ＳＫ41の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は方形傾向の長楕円形をなす。その規模は、長軸方向で3.70ｍ、その直交方向で1.55ｍを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは28cmを測る。

埋没状況　上から、褐色シルト、明黄色砂混じり褐色シルトの２層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ４１

検出状況　Ｉ区北半部西側で検出した(第74図)。ＳＫ42の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で81cm、その直交方向で43cmを測る。横断面は箱形をなし、最深部における検出面からの深さは29cmを測る。

埋没状況　灰褐色シルト砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ４２

検出状況　Ｉ区北半部西側で検出した(第74図)。ＳＫ41の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、かなり歪んだ方形をなす。その規模は、長軸方向で3.01ｍ、その直交方向

で2.41mを測る。横断面は深い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは50cmを測る。

埋没状況　上から、黒褐色シルト質砂、灰黒褐色シルト質砂、黒褐灰色シルト質砂の３層からなる。堆積状況から判断して、当遺構は、風倒木痕の可能性も考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ４３

検出状況　Ｉ区中央部で検出した(第74図)。ＳＫ44の西側に隣接する。ＳＫ44にわずかに切られているが、ほぼ完存する。

形状・規模　平面形は長楕円形をなす。その規模は、長軸方向で3.48m、その直交方向で1.63mを測る。横断面は深い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは28cmを測る。

埋没状況　上から、黄褐色シルト混じり褐灰色シルト質砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ４４

検出状況　Ｉ区中央部で検出した(第74図)。ＳＫ43の東側に隣接する。ＳＫ43をわずかに切っており、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で2.01m、その直交方向で1.07mを測る。横断面はやや歪んだU字形をなし、最深部における検出面からの深さは50cmを測る。

埋没状況　上から、黄褐色シルト質砂、褐灰色シルト質砂の２層からなる。堆積状況から判断して、当遺構は、風倒木痕の可能性も考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ４５

検出状況　Ｉ区中央西側で検出した(第74図)。ＳＫ43の南西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は長楕円形をなす。その規模は、長軸方向で2.30m、その直交方向で90cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。

埋没状況　灰褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ４６

検出状況　Ｉ区中央やや南側で検出した(第74図)。ＳＫ50の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で71cm、その直交方向で65cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは４cmを測る。

埋没状況　暗灰色シルト質砂１層からなる。埋土中には、炭片・焼土片が含まれている。特に炭片については、炭層に近い状況を呈している。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ４７

検出状況　Ｉ区中央やや南東部で検出した(第74図)。ＳＫ46の南東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はないが、当遺構の大半は東側調査区外へ拡がっている。このため、検出できたのは、極一部に限られる。

形状・規模　検出できたのがわずかであるため、平面形は明らかにできない。横断面は、残存する範囲では逆台形を呈するものと推定される。

埋没状況　暗灰色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ４８

検出状況　Ｉ区南西隅で検出した(第74図)。ＳＫ49の北東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は、歪な長楕円形をなす。その規模は、長軸方向で2.38m、その直交方向で92cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは36cmを測る。

埋没状況　暗灰褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ４９

検出状況　Ｉ区南西隅で検出した(第74図)。ＳＫ48の南西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はないが、Ⅲ区との境まで拡がるため、全体を検出することはできなかった。Ⅲ区においては、当遺構の拡がりは確認できなかった。

形状・規模　平面形は、長楕円形をなすものと推定される。その規模は、長軸方向で1.35m残存し、その直交方向で1.85mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは34cmを測る。

埋没状況　灰褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

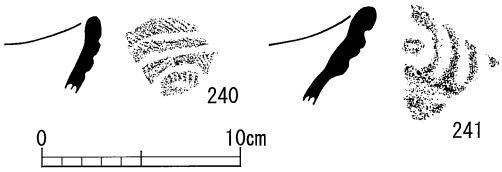
ＳＫ５０

検出状況　Ⅲ区中央部で検出した(第74図)。ＳＫ53の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。長軸方向で1.01m、その直交方向で70cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmを測る。

埋没状況　茶褐色シルト質砂１層からなる。炭片・焼土片が比較的多く含まれている。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　縄文土器が２個体（240・241）出土している(第76図)。241は、波状口縁の鉢の口縁部片である。中期末から後期初頭に位置付けられる。全体的に摩滅気味である。240も、波状口縁の鉢の口縁部片である。外面は、縄文が沈線によってすり消されている。



第76図　ＳＫ50出土土器

時　　期　出土土器から、縄文時代と考えられる。

ＳＫ５１

検出状況　Ⅲ区中央部西端で検出した(第74図)。ＳＫ42の南西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、やや歪んだ楕円形をなす。長軸方向で85cm、その直交方向で40cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。

埋没状況　黄褐色シルト混じり黒褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ５２

検出状況　Ⅲ区中央部やや南側で検出した(第74図)。ＳＫ53の南西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、やや歪んだ楕円形をなす。長軸方向で1.56m、その直交方向で84cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは11cmを測る。

埋没状況　黄褐色シルト混じり黒褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ５３

検出状況　　Ⅲ区中央部やや南側で検出した(第74図)。ＳＫ52の北東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　　平面形は、やや歪んだ楕円形をなす。長軸方向で64cm、その直交方向で44cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは11cmを測る。

埋没状況　　黒褐色シルト質砂１層からなる。

出土遺物　　全く出土していない。

時　　期　　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

ＳＫ５４

検出状況　　Ⅲ区南東隅で検出した(第74図)。ＳＫ49の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　　平面形は楕円形をなす。長軸方向で1.46m、その直交方向で98cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。

埋没状況　　黄色シルト混じり灰褐色シルト質砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　　全く出土していない。

時　　期　　出土土器から時期を特定することは困難である。第２面で検出されていることから、縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

（３）溝

ＳＤ18の１条のみ検出されている。

ＳＤ１８

検出状況　　Ⅲ区南東隅で検出した(第74図)。当溝の北東側肩部のみを検出したもので、全体の規模・形状等は明らかにできない。

形状・規模　　5.85m検出した。横断面はＵ字形に大きく落ち込むが、底部まで検出できなかった。検出面において、最大幅3.00mを検出し、検出範囲での最深部における検出面からの深さは1.00mである。

埋没状況　　12層～22層の11層からなる(第11図)。層相から判断して、湿地性の堆積からなり、後背湿地であったことが伺える。

出土遺物　　縄文土器が比較的多く出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　　期　　出土土器から、縄文時代と考えられる。

第４章　板波町遺跡の地形環境

青木　哲哉（立命館大学非常勤講師）

１．はじめに

地表は人間の活動舞台であり、そこに現出する地形環境は人間生活に大きな影響をおよぼす。地形環境は過去を通　じて変化してきた。人間は時代の流れとともに進展する自らの生活を地形環境に巧みに対応させて活動を続け、時には地形環境を改変することがあった。地形環境と人間活動とは密接に関わってきたと考えられ、地形環境は人間生活や遺跡の立地を理解する上での重要な要素となる。

人間活動に対応する地形環境は細かいオーダーで考察する必要がある。そのためには、地形環境を考古遺跡の発掘調査にともなって考察することが有効な手段となる。考古遺跡の発掘調査区では、微地形や堆積物が直接かつ詳細に観察できるため、細かいオーダーでの地形環境を復原することが可能である。復原された地形環境の時期については、発掘調査で検出された考古遺物から知られる。その上、考古学的な調査成果を加味することによって、地形環境と人間活動との関係をも解明できるのである。

本稿では、加古川中流部に位置する板波町遺跡の地形環境を明らかにしたい。調査では、主に１万分の１空中写真の判読と現地踏査による遺跡調査区周辺の地形分類、ならびに遺跡調査区における微地形と地質断面の詳細な観察を行った。これらに基づいて細かいオーダーでの地形環境を考察した。

２．調査区周辺の地形と堆積物

(1) 地形の分布と特徴

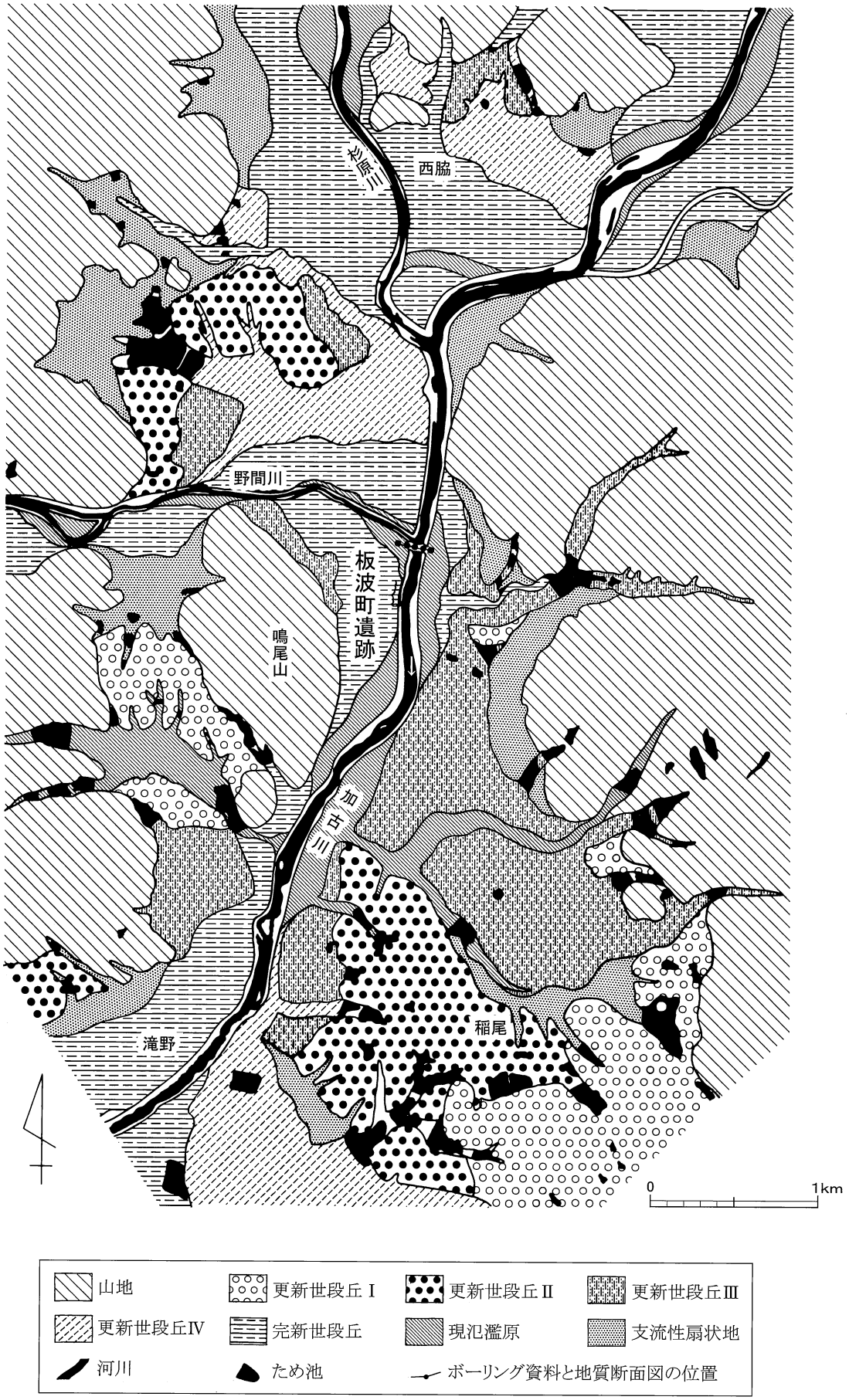
本遺跡の調査区周辺では、杉原川や野間川などが加古川に合流し、それらの河川に沿って平野がみられる。平野の周囲には、標高300m前後の山地が分布し、それらは主に流紋岩質の火砕岩からなる。こうした山地の間に発達した平野は、調査区より上流側で幅１～２kmと狭長なのに対して、下流側では比較的幅が広い。調査区周辺の平野は第77図に示したように更新世段丘、沖積低地に属する完新世段丘と現氾濫原、ならびに支流性扇状地に分けられる。それらのうち更新世段丘はさらに４面に区分され、ここではそれらを高位のものから順に更新世段丘Ⅰ～Ⅳと呼ぶことにする。調査区周辺にみられる各地形の特徴は次のとおりである。

〔更新世段丘Ⅰ〕調査区周辺には、この段丘が少なく、鳴尾山の西側や稲尾付近に分布するだけである。段丘面は、開析（侵食）が進んでいるためあまり残されておらず、起伏が比較的激しい。これは、最も古い時期に形成された段丘で、段丘崖は約10mの比高をもつ。

〔更新世段丘Ⅱ〕この段丘もあまり存在せず、西脇市街地の西方と稲尾付近にみられるのみである。段丘面には、段丘の形成後に刻まれた谷が比較的多いものの、その発達は更新世段丘Ⅰに比してよい。更新世段丘Ⅲとは比高およそ７～８mの段丘崖で接している。

〔更新世段丘Ⅲ〕これは、調査区より上流側で断続的に分布し、平野の幅が広がる下流側では比較的よく発達している。段丘面は、更新世段丘Ⅳより５～６m高い。遺跡調査区付近にみられる更新世段丘は主にこの段丘である。

〔更新世段丘Ⅳ〕更新世段丘の中では、最も新しい時期に形成されたものである。これは西脇の市街地付近、加古川と杉原川との合流点より西側、および滝野の南東側に分布し、段丘崖は１～２mの比高をもつ。段丘面は、ほとんど開析されておらず、緩やかに起伏する程度である。そこには、条里型土地割が部分的にみられる。



第77図　遺跡周辺の地形面区分図

〔完新世段丘〕この段丘は調査区周辺で最も発達がよい。段丘崖の比高は約１ｍで、段丘面は加古川の現河床よりおよそ５ｍ高い。段丘面はほぼ平坦で、条里型土地割が多く認められる。本遺跡の調査区はこの段丘面に位置する。

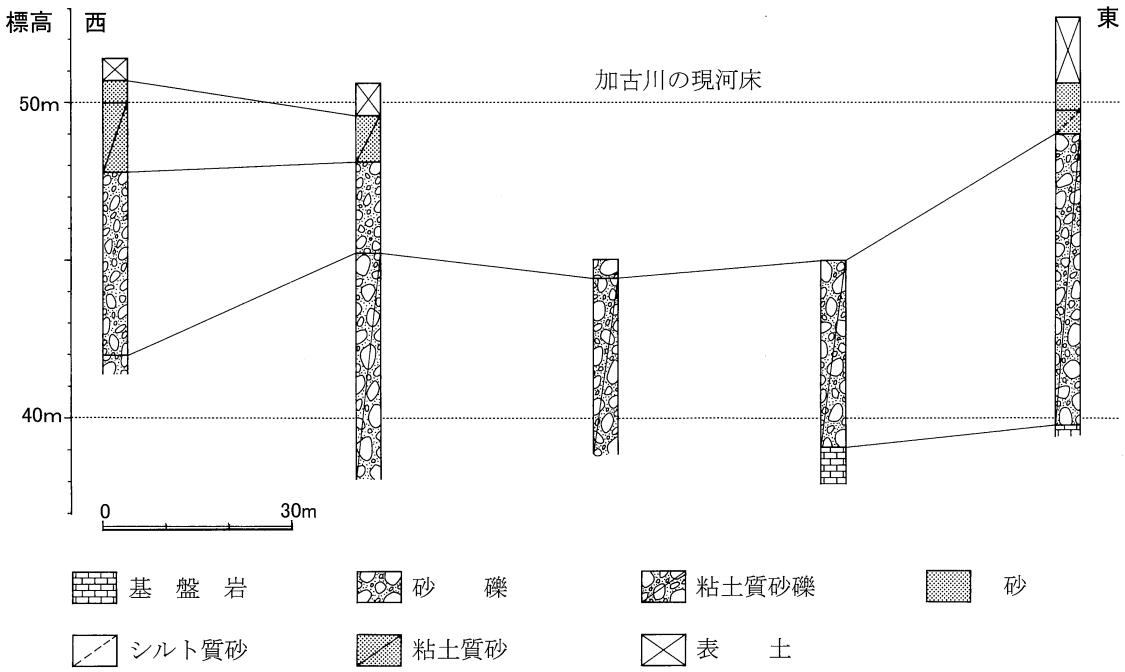
〔現氾濫原〕これは加古川とその支流に沿って断続的に細長く存在する。この地形面は、最も低く、河川の氾濫時には冠水する可能性がある。調査区の付近では、その上流側と下流側、ならびに加古川の対岸に分布している。

〔支流性扇状地〕この地形は小さい支流または土石流などによって形成された小規模な扇状地である。調査区周辺では、この扇状地が大きくみて２種類認められる。ひとつは、山麓を取り巻くように分布し、上面がおよそ15％の急傾斜で高度を下げるものである。これは、典型的な麓屑面[1]に相当し、調査区の東方約500ｍ地点などでみられる。他のひとつは、上面傾斜が５％前後の比較的緩いものである。これは山麓だけでなく、段丘崖下にも認められる。後者の場合、段丘を刻む谷からの堆積物によって形成されたものである。この支流性扇状地は鳴尾山の西側や滝野付近などに点在する。２種類の支流性扇状地がともにみられるところでは、緩傾斜のものが急傾斜のそれを下刻して発達しており、緩傾斜の扇状地がより新しい時期に形成されたと考えられる。

(2) ボーリング資料からみた地下地質

第78図は調査区から約500ｍ上流で加古川の現流路を横断するように描いた地質断面図である。そこでは、下位から基盤岩、黄灰色のシルト質砂礫、灰褐色の砂礫、灰褐色の細粒堆積物、および表土がみられる。

基盤岩の上面は起伏に富む。浅いところでは、加古川の現河床より約６ｍの深さに認められる。黄灰色のシルト質砂礫は、径９cm以上の大きい礫を多数含む。Ｎ値は50以上でよく締まっている。これは、この



第78図　遺跡付近の地質断面図

付近における堆積物の中で最も厚く、５～10mの厚さで堆積する。灰褐色の砂礫は、径２～５cmの礫を主体とし、黄灰色のシルト質砂礫より径の小さい礫からなる。Ｎ値は20～30であることが多く、比較的緩い。この堆積物は、加古川の西岸にみられる平野で認められ、厚さは３～６ｍである。これらの粘土質砂礫と砂礫は扇状地を構成する堆積物と考えられる。

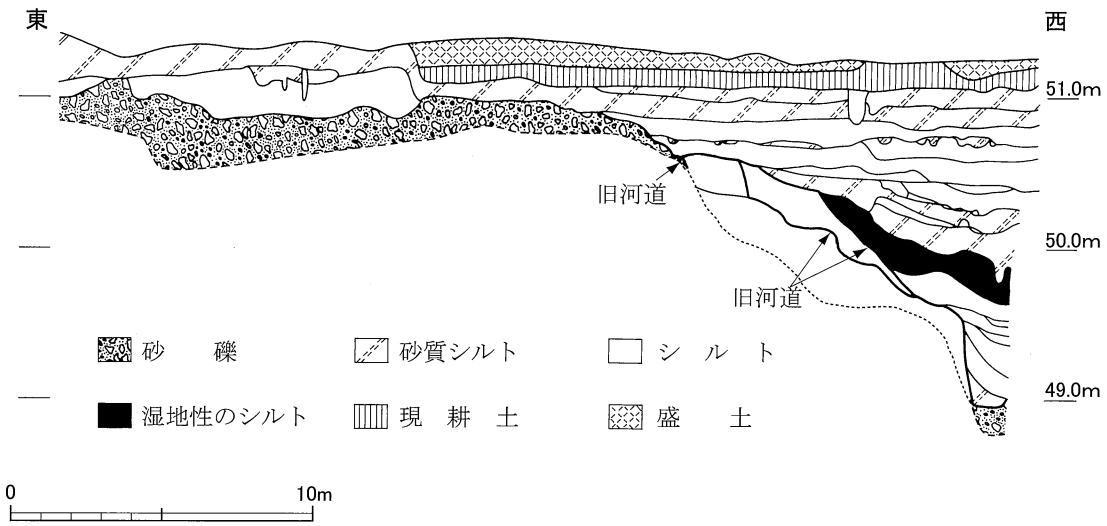
その上位にみられる細粒堆積物は砂や粘土質砂などからなる。これらは河川の氾濫堆積物で、厚さは1.5～３ｍと薄い。扇状地はこうした細粒堆積物によって埋もれている。調査区付近の完新世段丘でも、砂礫が細粒堆積物によって薄く被覆されており、それは浅く埋没した扇状地が段丘化したものと考えられる。なお、加古川の現河床では、数十cmの深さまで河床堆積物である砂礫がみられる。これには、径およそ１ｍの巨大な礫が観察される。

３．調査区における微地形と堆積物

調査区は、扇状地が段丘化した完新世段丘に位置する。調査区のほとんどは扇状地の微高地である旧中州上に広がり、南西隅に旧河道が認められる。第79図は調査区南壁の地質断面図である。これに示されているように旧中州が分布するところでは、明黄灰色を呈する砂礫の上に細粒堆積物がのる。砂礫は扇状地を構成するもので、旧中州ではその上面が約２ｍ高くなっている。砂礫中の礫は、径３cm前後を主体とし、最大で約10cmの径である。細粒堆積物は黄灰色や黒褐色の砂質シルトなどで、場所によって堆積物の分布状況が異なる。これらの堆積によって旧中州は埋没している。

一方、旧河道は調査区南西隅に３つ認められる。そこでは、古い旧河道の堆積物を切って新しい流路がみられ、これはほぼ同じ場所で流路の形成と埋積が３回繰り返されたことを物語る。最も古い旧河道は旧中州の形成期に流れていた流路の跡である。それは旧中州を構成する砂礫の上面が西へ高度を下げたところに存在する。この旧河道では、褐～青灰色のシルトとその上位にみられる暗灰色のシルトが観察される。両堆積物の境界付近からは縄文時代後期の遺物が検出されている。このことから、旧中州と１回目の流路は縄文時代後期以前に形成されたことが知られる。次につくられた流路跡の堆積物は、ほとんどが３回目に流れた流路によって侵食されており、明黄灰色のシルトだけが旧河道の東端にみられる。

３回目に形成された旧河道は堆積物が侵食されていないため、それは14に細かく分けられる。すなわち、下位から順に灰色の砂質シルト、暗灰色のシルト、灰色のシルト、暗灰色のシルト、灰色のシルト、灰色



第79図　調査区の南壁断面図

のシルト（灰白色のシルトが混入）、暗灰色のシルト、黒灰色のシルト、灰色の砂質シルト、暗灰色のシルト、暗灰色の砂質シルト、灰色のシルト、明灰色のシルト、および明黄灰色のシルトである[2)]。特に黒灰色のシルトには、植物遺体が多く混入する。これは、流路がある程度埋積されてもまだ凹地であった旧河道内に湿地がみられたことを示す。また、旧中州は３つの旧河道がそれぞれ埋積された時に約50cmの比高をもっていた。

これらの旧河道上には、下位から黒灰色のシルト（砂が混入）、黒灰色のシルト、黄灰色の砂質シルト、暗灰色のシルト、暗黄灰色の砂質シルト、ならびに暗灰色の砂質シルトが堆積する。３つの旧河道はこうした堆積物によって埋没している。調査区南部では、それらのうち暗灰色のシルトと暗黄灰色の砂質シルトが旧中州の上にまで連続して認められ、それを被覆する。旧中州が埋もれたところの地表は、30cm程度高く、微高地をなす。また、旧中州上では暗灰色シルト付近の層準から奈良時代、平安時代、12～13世紀、および15～16世紀の遺構が検出されている。このことから、２回目と３回目の流路は縄文時代後期以降奈良時代までのある時期に形成・埋積されたと考えられる。

なお、完新世段丘の段丘化期は縄文時代後期以降と考えられるものの、詳細は不明である。

４．地形環境の変遷

以上までに述べた事柄から、調査区付近における次のような地形環境が考察される。

〔ステージ１〕縄文時代後期以前、主に古加古川によってもたらされた砂礫が堆積し、扇状地が形成された。調査区では約２ｍの比高をもつ旧中州が形成され、その西側には調査区の南西隅をよぎる流路がみられた。この流路は縄文時代後期頃になって洪水にともなうシルトによって埋積された。

〔ステージ２〕最初の流路を埋めた堆積物を切って、再び流路が形成された。その後この流路も洪水によってシルトが堆積したために埋め立てられた。

〔ステージ３〕調査区南西隅では、ほぼ同じ箇所に流路が三度形成された。この流路は縄文時代後期から奈良時代までのある時期に埋積され、その過程で凹地であった流路内が湿地化した。湿地では、黒灰色のシルトが生成された。こうして流路が完全に埋積された時には、旧中州の比高はおよそ50cmになった。なお、縄文時代後期には、調査区の旧中州上で人間活動がなされ、土坑がつくられた。

〔ステージ４〕流路の埋積後、最初は旧河道上に、やがて旧中州の上にもシルトや砂質シルトからなる細粒堆積物が次々と堆積していった。その結果、旧中州と旧河道は埋没し、旧中州が埋もれたところはわずかな比高の微高地に変貌した。

〔ステージ５〕その後調査区付近は段丘化し、完新世段丘となった。また、奈良時代から中世にかけては、埋没した旧中州上で人間生活が行われた。

５．おわりに

本遺跡の調査区が位置する加古川中流部では、完新世段丘が最もよく発達する。これは扇状地が埋没した後段丘化したものである。調査区では、扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で認められる。調査区の大半には旧中州がみられ、南西隅に３つの旧河道がほぼ重複して分布する。

調査区における地形環境は、①砂礫の堆積にともなう中州の形成と調査区南西端における流路の形成、②細粒堆積物による流路の埋積、③さらに調査区南西端での２回にわたる流路の形成と埋積、④洪水堆積物の被覆にともなう旧河道と旧中州の埋没、⑤調査区付近の段丘化という順に変遷した。各地形環境の時期は、①が縄文時代後期以前、②が縄文時代後期頃、③が縄文時代後期頃から奈良時代にかけてのある時

期、④と⑤がそれ以降である。本遺跡における人間活動は、②から④または⑤の段階でみられ、比較的高燥な旧中州あるいは埋没した旧中州上でなされた。このように、地形環境と人間活動とは密接に関連したと考えられる。

注

1)　田中眞吾ほか「兵庫県・多紀連山地域の麓屑面」地理学評論59－5　1986年

2)　筆者も調査区における地質断面を観察したため、堆積物の記載が本章以前の記述と部分的に異なっている。

第５章　まとめ

第１節　出土遺物

１．はじめに

今回報告してきた出土遺物は、縄文時代から江戸時代にかけて、多岐にわたる。このなかで、最も量的に多く出土している中世の土器について、本節で検討する。

２．中世土器の検討

中世の土器としては、須恵器・土師器・丹波焼・備前焼が出土している。

須恵器

椀・小皿・捏鉢が出土している。当遺跡が所在する一帯は、東播北部古窯址群内に所在し、当該資料については、いくつかの分析がなされている[(1)]。この分析をベースに、当項において検討をすすめていきたい。

椀

底部形態を中心に分類する(第81図)。明確な平高台をなすもの（A）と平高台が認められないもの（B）、に大きく分けることができる。ただし、底部はいずれも回転糸切りにより切り離されている。

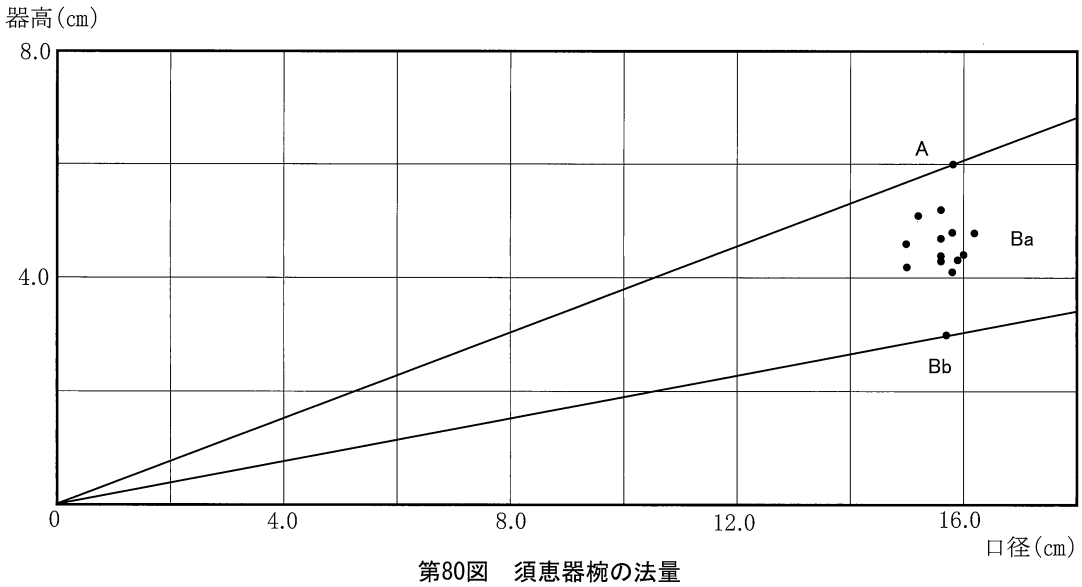
A

内面見込みが落ち込み、平高台状を呈するものである。77・101・108の３個体に限られるが、いずれも特徴を異にする。108は、岸本分類の中碗に相当するものと考えられる。時期的には、11世紀後半に位置付けられる。

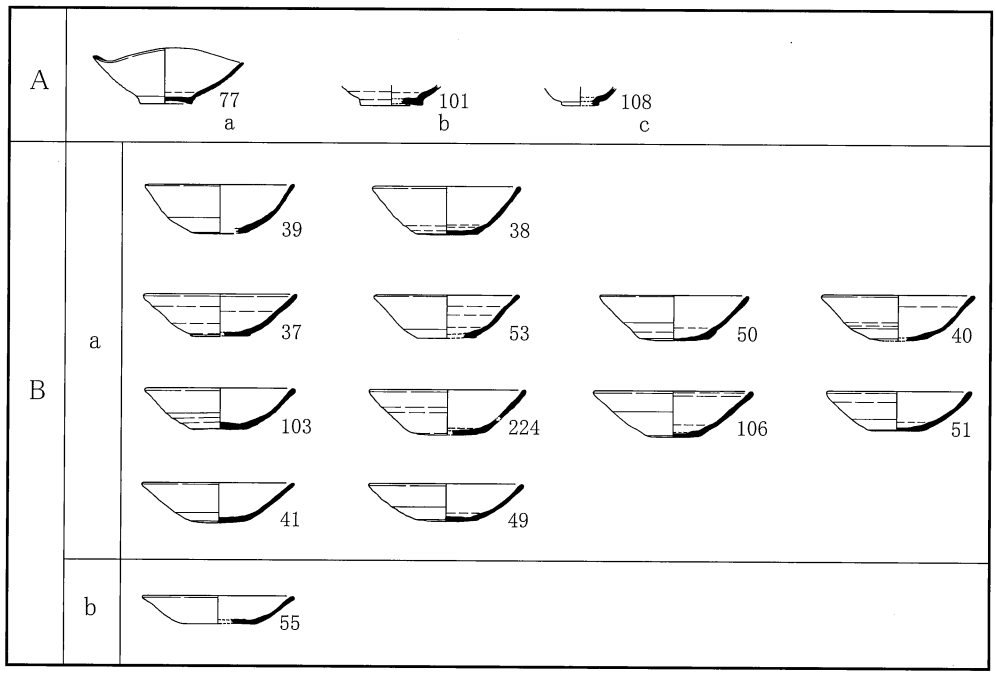
B

岸本分類の碗ＣⅢに相当するものである。まず、器高と口径との相関関係(第80図)から、55（Ｂb0）と、それ以外（Ｂa）に大きく分けることができる。当該期の須恵器椀の編年から、Ｂａ→Ｂｂと変化するものと考えられる。

Ｂａについては、器高指数の高低から、38・39を一つの群として抽出することができる。この一群以外については、明確な分離は困難である。ただし、Ｂａ→Ｂｂの傾向から判断して、37・53・50・40→41・49と変化傾向にあるものと考えられる。つまり、口径に対して器高が低くなる傾向が理解できる。



第80図　須恵器椀の法量

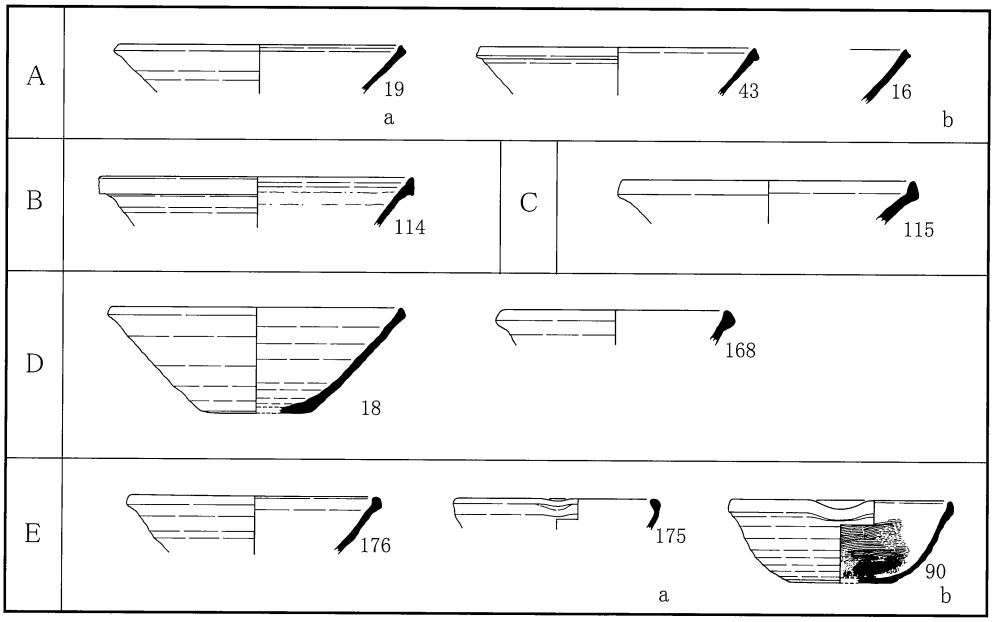


第81図　須恵器椀の分類

次に形態的にみると、底部内面がわずかに落ち込み平高台の痕跡をとどめるものと、その痕跡が認められないものとが認められる。前者の例としては、37・38・39・53が、後者の例としては、上記以外が該当する。これらについては、先の法量分析の結果と合わせると、前者→後者と変化するものと考えられる。

ところで、Ｂａに関しては、ＳＢ15における出土例等から、時期的に明確な差はないものと考えられる。変化傾向として理解するにとどめたい。Ｂａの時期については、岸本分析等から、12世紀～13世紀前半に位置付けられる。Ｂｂについては、蒲江大谷１号窯採集資料に類例を求めることができ、岸本分析によると、14世紀代に位置付けられている。

鉢　　捏鉢が主体である。口縁部特にその端部形態を中心に分類する（第82図）。



第82図　須恵器鉢の分類

A　断面形が方形を基本とするもの。端部をわずかに、上方（ａ）または下方（ｂ）に拡張させている。端部は比較的シャープである。11世紀後半～12世紀初頭。

B　端部を上下方向に拡張させるもの。端面は直立する平坦面をなす。

C　端部を上方向に大きく拡張させるもの。端面は丸みを帯びる。14世紀前半。

D　端部を肥厚させ、端面は丸みを帯びるもの。12世紀後半。

E　端部を内側に折り返すとともに肥厚させ、口縁部が玉縁状呈するもの。内面が横ナデ仕上げのもの（ａ）と、ハケ調整により仕上げるもの（ｂ）の２タイプが認められる。

小皿　52と102の２点のみの出土である。２点のみのため、分類は控えるが、器高と口径の比率に差が認められる。

土師器　皿・鍋・鉢・甕が出土している。

小皿　まず、整形にあたって、轆轤を使用したもの（A）と、使用せず全ててづくねによるもの（B）とに大きく分けることができる（第83図）。

A　底部をヘラにより切り離すもの（ａ）と糸切りにより切り離すもの（ｂ）の、２タイプに大きく分けることができる。

a　45の１個体のみである。

b　４個体出土している。法量的に中皿に分類できる85、底部に平高台の痕跡が認められる119、底部が完全な平底の86・105、の３タイプに細分可能である。

B　量的に最も多く出土している。

a　口縁部を２段の強い横ナデ調整により仕上げるものである。84の１個体出土している。12世紀代に位置付けられる。

b　口縁部を１段の横ナデ調整により仕上げるものである。20の１個体出土している。

c　底部から口縁部にかけて指押さえとナデ調整により仕上げるもの。法量により、以下のように９タイプに細分できる。

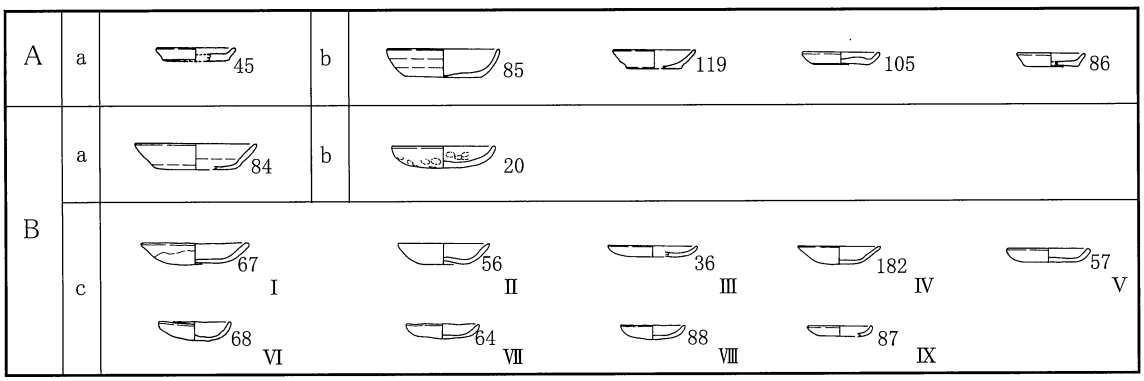
Ⅰ　口径11.0cm～11.4cmで、器高２cm以上の比較的深いタイプ（66・67）。

Ⅱ　深さはⅠとほぼ同じであるが、口径が9.5cmと小型のもの（56）。15～16世紀に位置付けられる。

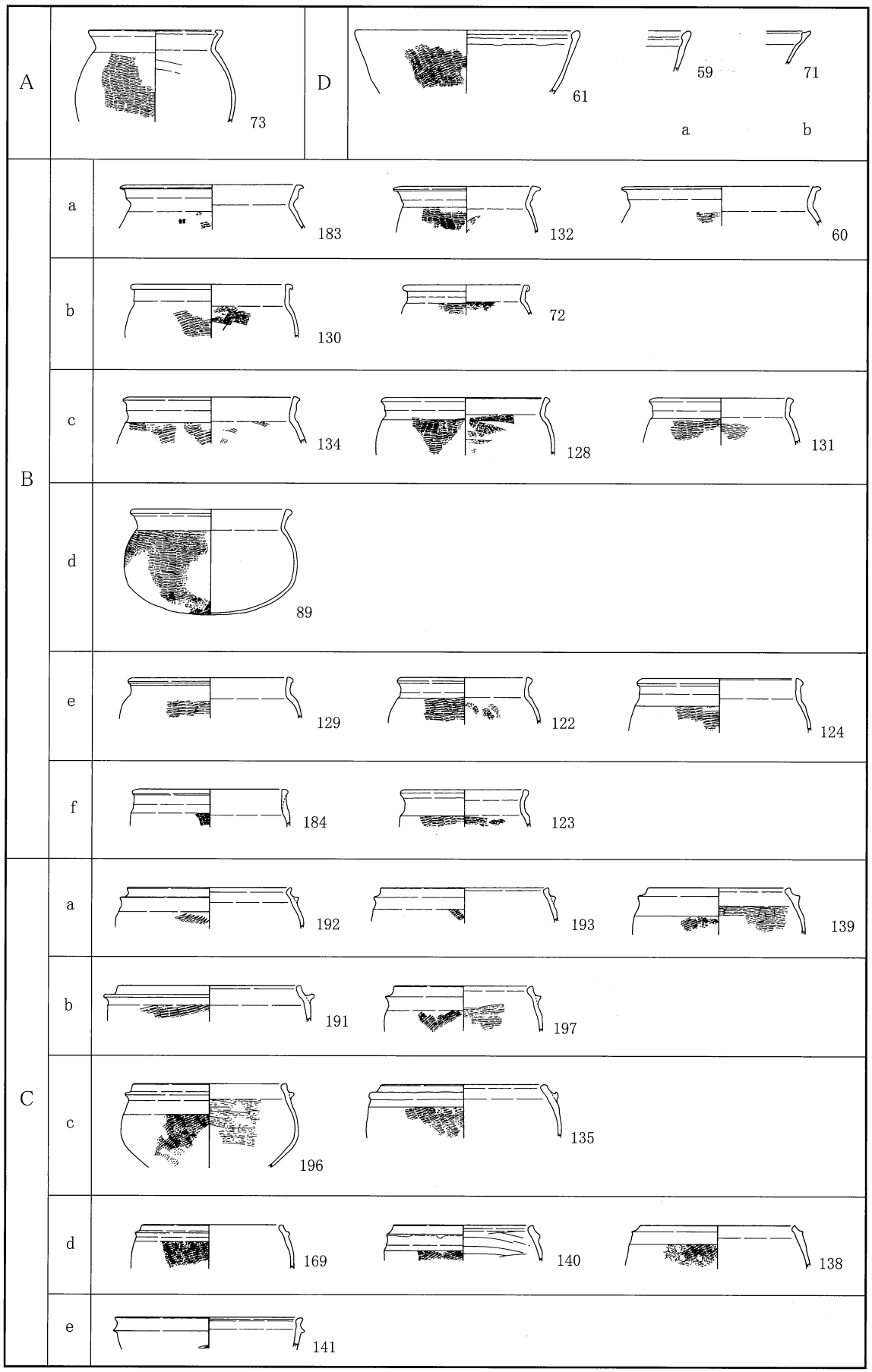
Ⅲ　口径はⅡと同じであるが器高が1.2cmと浅いもの（36）。14～15世紀に位置付けられる。

Ⅳ　器高はⅡとほぼ同じだが、口径が8.1cm～8.5cmと小型のもの（21・181・182）。

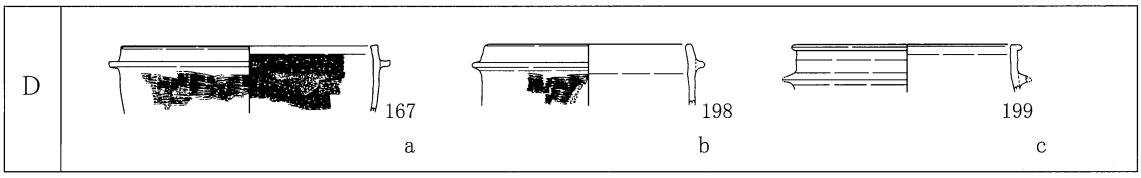
Ⅴ　口径はⅣとほぼ同じであるが、器高が1.4cm～1.5cmと浅いもの（57・62）。



第83図　土師器皿の分類



第84図　土師器鍋の分類（１）



第85図　土師器鍋の分類（２）

Ⅵ　Ⅴ同様器高はⅣと同じであるが、口径が7.4cmとさらに小型のもの（68）。

Ⅶ　口径はⅥとほぼ同じだが、器高が1.3cm～1.6cmと浅いもの（63～65・69）。

Ⅷ　器高はⅦとほぼ同じであるが、口径がより小型のもの（88）。

Ⅸ　口径はⅧとほぼ同じであるが、器高がより小型のもの（87）。

鍋　当器種は、土師器のなかでも最も多く出土している。大きく、Ａ～Ｅの５形式に分類できる(第84図・第85図)。５形式とも、体部外面は平行叩きにより仕上げられている。

Ａ　くの字形をなす口縁端部を内側につまみだす。体部は、球形もしくは球形に近い体部をなすもの。73の１個体である。基本的には播丹型鍋に先行するタイプの煮沸具と考えられる。類例として初田館跡出土例[2](52) を指摘することができ、12世紀後半に位置付けられている。また、宮原編年[3]のⅠ期に位置付けられ、12世紀後半に位置付けられている。

Ｂ　いわゆる「播丹型」と称されるもの。当形式については、宮原により北播地域を中心に分類・編年（以下、「宮原編年」）がある。[3]また、岡田・長谷川両氏により、詳細な分類・編年がなされている。[4]また、安平も杉原川上流域の岩座神神光寺遺跡において、この変化傾向を確認している。[5]これらを参考とすると、ａ～ｅの５型式に細分できる。なお、今回は十分検討できなかったが、当タイプの焼きあがりにおいて、かなり良好な焼成状況で酸化焔焼成に近いものから、本来の土師器らしい特徴のものまで、顕著な差が認められる。

ａ　口縁端部を外方につまみだすもの。宮原編年の「Ⅱａ期」（12世紀末）に対応。

ｂ　ａに対して、つまみだした部分をわずかに折り返すもの。あるいは、大きく折り返し口縁端部が玉縁状を呈するもの。13～14世紀。

ｃ　口縁外端部をヨコナデによりつまむもの。端部外側断面が三角形をなす。14世紀前半。

ｄ　口縁部は外側に開き、口縁外端部が肥厚し玉縁状をなすもの。14世紀後半。

ｅ　口縁部が直立し、端部は肥厚し玉縁状をなすもの。15世紀前半。

ｆ　口縁部は外反気味になり、端部は玉縁状を呈する。ａ～ｄと比べて、口径と体部径がほぼ同じである。15世紀前半。

Ｃ　口縁部下外面に突帯がつくもしくは突帯状をなすものである。口縁端部及び突帯の特徴から、ａ～ｅの５型式に細分できる。

ａ　口縁端部外側に対する横ナデにより、口縁部に対して直交する明確な平坦面を有する。また、突帯貼り付け部内面に強い横ナデを施さない。15世紀中葉。

ｂ　口縁端部を外方につまみだすもの。ａに対して端面が丸みを帯び、突帯貼り付け部内面に強い横ナデ調整が施されるもの。15世紀前半。

ｃ　口縁端部が肥厚気味になり明確な端面が認められなくなり、突帯がａ・ｂに対して退化するもの。15世紀代。

ｄ　口縁端部・突帯ともに退化が著しく、突帯は貼り付け、かつまみ出しか不明瞭なもの。16世紀中頃～後半に位置付けられる。

ｅ　口縁部が直立傾向にあるもの。突帯もｄ同様退化傾向にあり、ほぼ同時期と考えられる。

D　口縁部が大きく開く、いわゆる鉄兜形の鍋である。３点のみの出土であるが、口縁端部が大きく肥厚しその内面下側に強いナデ調整が施されるタイプ（ａ）と、口縁端部が肥厚しないタイプ（ｂ）に、細分できる。15世紀前半に位置付けられる。

E　直立する口縁部外面に、やや幅の狭い鍔がつくものである。ただし、本来の羽釜と比べて、鍔の幅は狭い。

すり鉢　201と202の２個体である。このような土師器のすり鉢については、近年播磨地方を中心に出土例が増加しつつあるもので、黒田恭正[(6)]と西口圭介[(7)]の分析がある。両氏とも、口縁部下外面に突帯が貼り付けられるものから、退化し消滅する変化傾向にあるものとして捉えている。これによると、201は、黒田恭正のａ類、西口圭介のＡ類に分類されるもので、黒田は16世紀前半頃に、西口は16世紀中頃に位置付けている。

丹波焼　甕のみが出土している。いずれも口縁部を中心とした同タイプ小片である。その形状から、長谷川編年[(8)]のⅢ期に相当し、14世紀後半に位置付けられる。

備前焼　壷・甕・擂鉢が出土している。壷（11）は、口縁部の特徴から室町時代後半に位置付けられる。甕（144）は、玉縁状をなすもので、同じく室町時代後半に位置付けられる。擂鉢（148）については、Ⅳ期（15世紀前半）に位置付けられるものである。

その他　本報告では須恵器として報告した火鉢（215）は、粟生間谷遺跡（大阪府箕面市）に類例が認められる[(9)]。土師器皿とともに土坑内から出土し、瓦質火鉢（1093）として報告され、14世紀中葉～15世紀前葉に位置付けられている。

３．小結

以上、中世の土器を中心に検討してきた。この結果、中世については、11世紀後半、12世紀後半～13世紀、14世紀前半、15世紀前半の４期からなることが明らかとなった。

〔註〕

（１）岸本一郎「考察・東播北部古窯址群について」『西脇市窯跡調査集報』兵庫県西脇市教育委員会　2005　以下、「岸本分類」と呼称。

（２）岡崎正雄『初田館跡』兵庫県教育委員会　1992

（３）宮原文隆「中世の土師質埚について」『門前・上山遺跡』兵庫県多可郡中町教育委員会　1992

（４）岡田章一・長谷川　眞『兵庫津遺跡－浜崎・七宮地区の調査』兵庫県教育委員会　2004

（５）安平勝利「遺物の検討」『岩座神神光寺遺跡』加美町教育委員会　2005

（６）黒田恭正「出土遺物の検討」『萩原城遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－第１・３・５次－　淡河地区圃場整備に伴う』神戸市教育委員会　2001

（７）西口圭介「出土遺物の検討」『三田城跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　2000

（８）長谷川　眞「中世丹波焼の変遷と技術移入・導入-杉本捷雄氏採集資料の再検討に向けて-」『中近世土器の基礎研究　ⅩⅦ』2003

（９）信田真美世『粟生間谷遺跡－古代・中世編－　国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う古代から中世の集落の調査』財団法人大阪府文化財センター　2003

第２節　遺　構

はじめに　本節では、遺構の変遷を明らかにして、本報告のまとめとしたい。遺構は、第１面と第２面の２面にわたって検出されていることから、第２面で検出された遺構を第Ⅰ期、第１面で検出された遺構を第Ⅱ期とする。

第Ⅰ期　第２面で検出した遺構である(第86図)。出土土器から判断して、縄文時代後期に位置付けられる。明確に指摘できるのは、この時期に限られる。土坑群からなるが、その機能は明らかにできない。

第Ⅱ期　出土土器から判断して、古墳時代（Ⅱａ期）・奈良時代～平安時代前半（Ⅱｂ期）・平安時代中期（Ⅱｃ期）・平安時代後期～鎌倉時代前半（Ⅱｄ期）・鎌倉時代後半（Ⅱｅ期）・室町時代（Ⅱｆ期）・江戸時代（Ⅱｇ期）の７期に分けられる(第86図～第89図)。

第Ⅱａ期　ＳＤ14のみである(第86図)。

第Ⅱｂ期　ＳＢ08・ＳＢ09とＰ16・Ｐ18・Ｐ19・ＳＫ11が該当する(第87図)。

第Ⅱｃ期　須恵器椀Ａに代表される、11世紀後半を中心とした時期である。ＳＢ17・Ｐ17・ＳＫ14・ＳＫ19が該当する(第87図)。

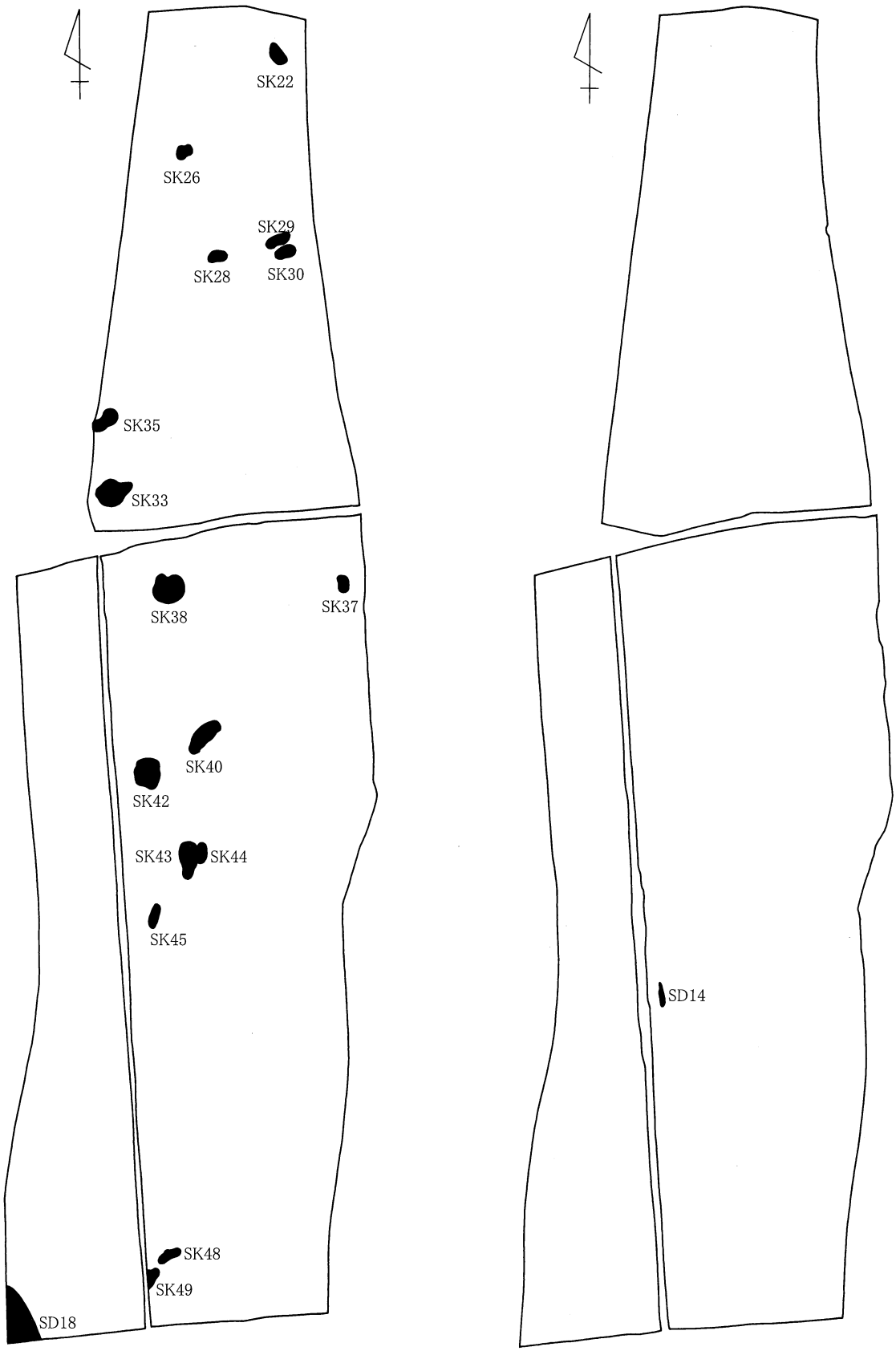
第Ⅱｄ期　須恵器椀Ｂに代表される、12世紀から13世紀前半にかけての時期である。今回報告する遺構のなかで、一つのピークをなす時期である。ＳＢ13～ＳＢ16・Ｐ12・Ｐ20・ＳＫ01・ＳＫ03・ＳＫ05・ＳＫ06・ＳＫ10・ＳＫ12・ＳＫ13・ＳＫ15～ＳＫ18・ＳＫ20・ＳＤ10・ＳＤ13・ＳＤ15～ＳＤ17が該当する。(第88図)。

第Ⅱｅ期　土師器鍋Ｂに代表される、14世紀前半を中心とした時期である。ＳＢ07・ＳＢ10・ＳＢ12・Ｐ11・ＳＫ09・ＳＫ21・ＳＤ08・ＳＤ11が該当する(第88図)。

第Ⅱｆ期　土師器鍋Ｃに代表される、15世紀前半を中心とした時期である。Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ10・ＳＫ02・ＳＫ04・ＳＫ07・ＳＤ03・ＳＤ06・ＳＤ09が該当する(第89図)。このなかで、ＳＤ09は16世紀代まで継続する。

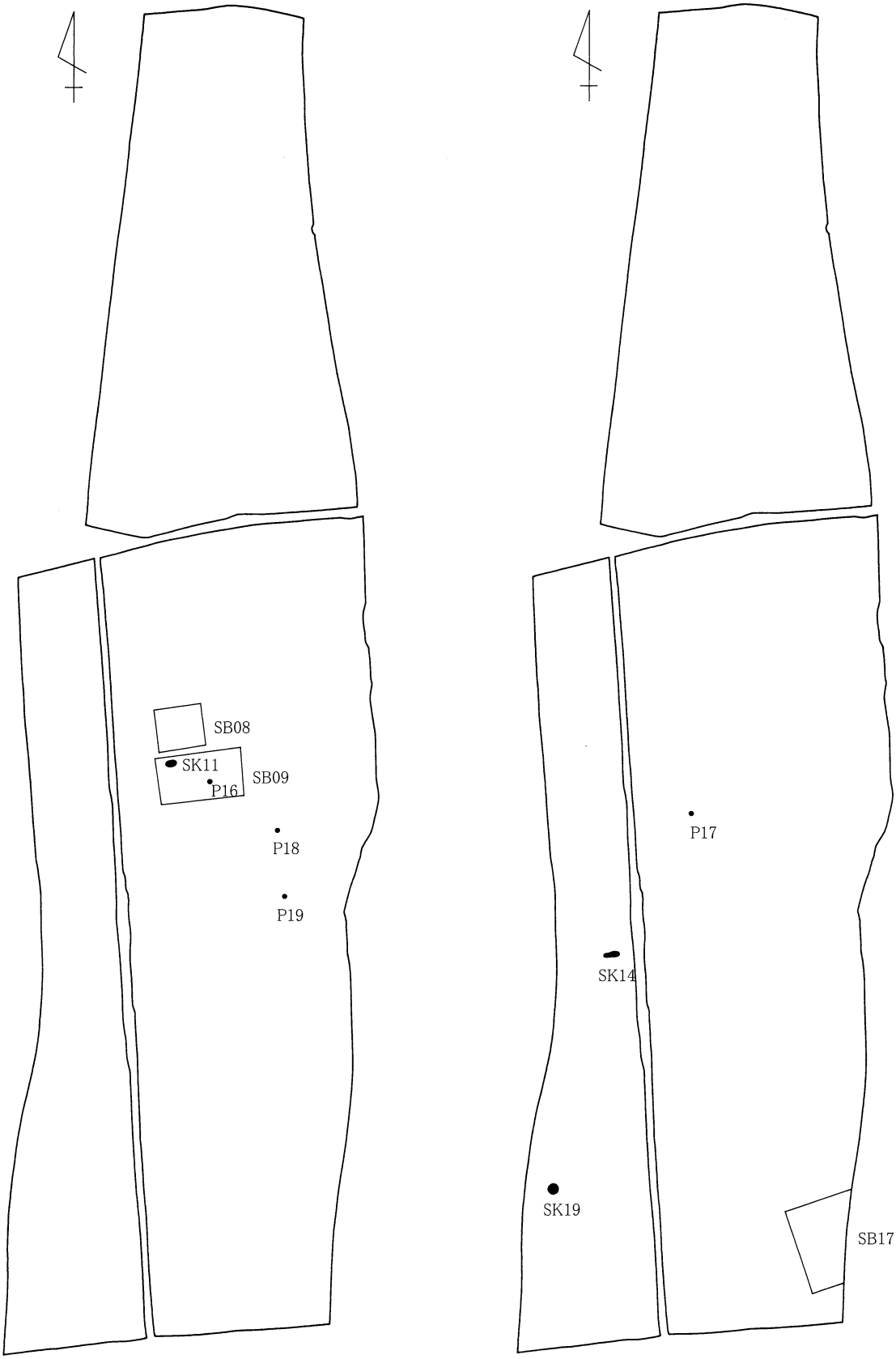
第Ⅱｇ期　江戸時代である。ＳＤ03とＳＤ09が該当する(第89図)。いずれも、Ⅱｆ期から継続する遺構である。

小　　結　以上が、今回報告した遺構の変遷である。Ⅱ期については、特にⅡｄ期が中心をなす時期と考えられる。また、Ⅱ期における遺構の分布をみると、Ⅱｃ期まではⅠ・Ⅲ区に限定される。これに対して、Ⅱｄ期になると、Ⅰ区～Ⅲ区全域にその分布が拡大する。しかし、Ⅱｆ期にかけて、その分布の中心はⅡ区に移動する。



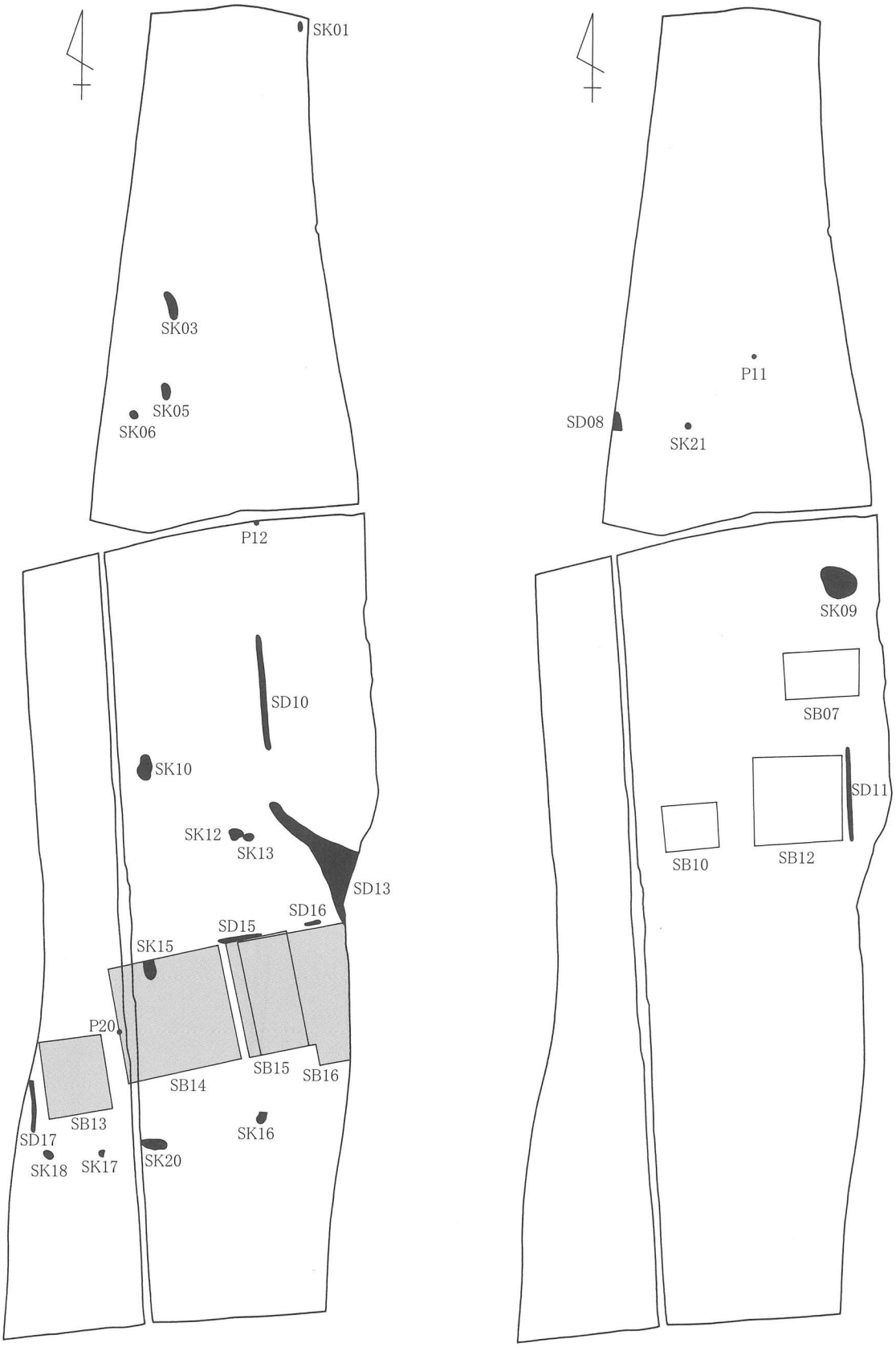
Ⅰ期　　Ⅱa期

第86図　遺構の変遷（１）

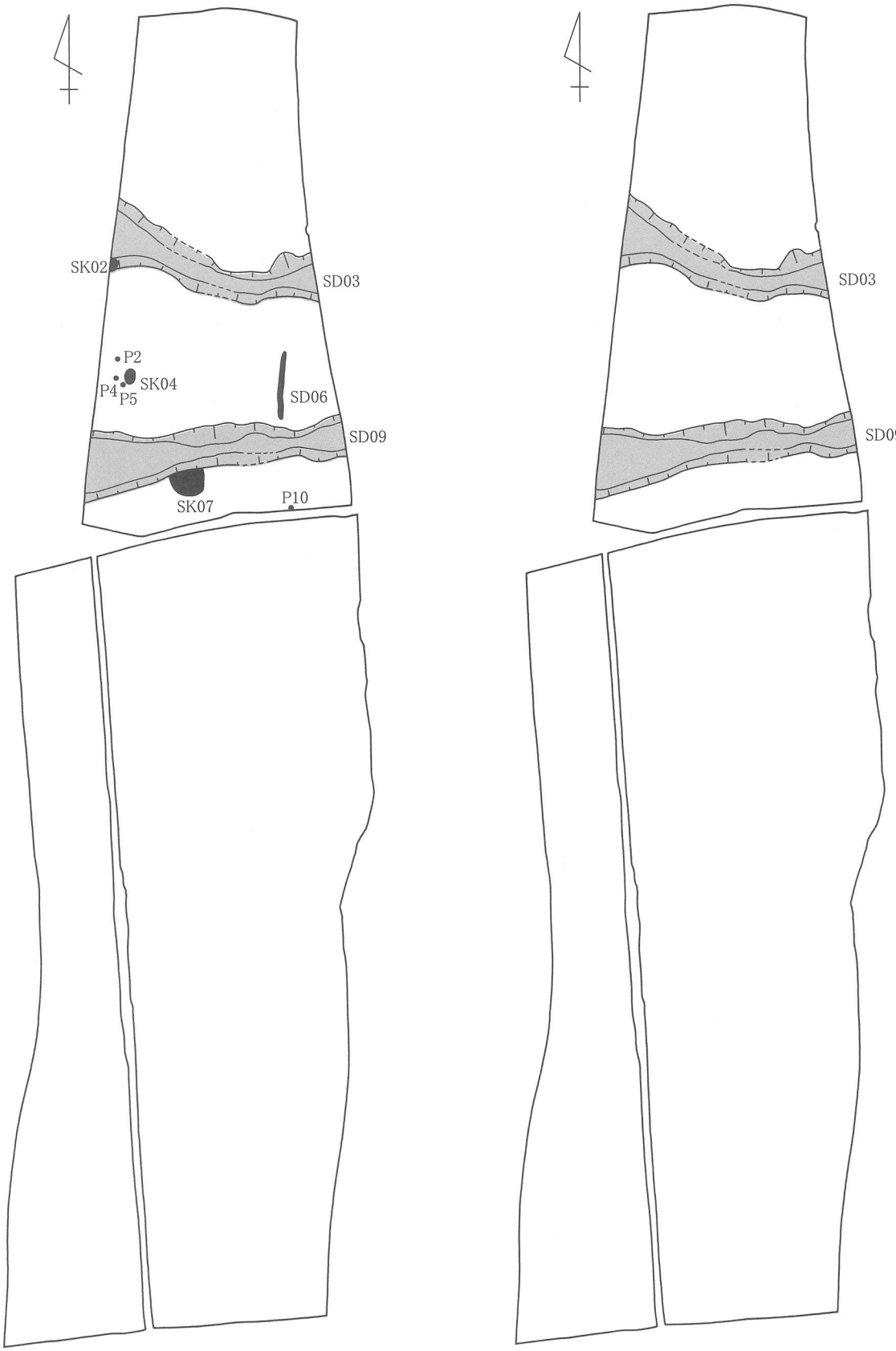


Ⅱb期　　Ⅱc期

第87図　遺構の変遷（２）


SK01
SK03
SK05
SK06
P12
SD10
SK10
SK12
SK13
SD13
SD16
SD15
SK15
P20
SB14
SB15
SB16
SB13
SD17
SK18
SK17
SK20
SK16
Ⅱd期
P11
SD08
SK21
SK09
SB07
SD11
SB10
SB12
Ⅱe期

第88図　遺構の変遷（３）



Ⅱf期　　Ⅱg期

第89図　遺構の変遷（４）

板波町遺跡出土土器観察表

No.	種別	器種	地区	遺構名	残存状況	法量(cm)			焼成	色調	挿図	図版
						口径	器高	底径				
1	須恵器	杯蓋	Ⅲ区	第１面	口縁部1/12 天井部1/6	12.9	2.9		普通	灰	13	
2	須恵器	杯身	Ⅱ区	第１面	底部1/4	8.9	2.6	5.6	普通	灰～灰白	13	
3	須恵器	杯蓋	Ⅱ区	第１面	つまみ1/2		1.9		普通	灰白	13	
4	須恵器	杯B	Ⅰ区	第１面	口縁部1/12 底部1/4	13.5	3.8	10.8	やや不良	灰白	13	
5	須恵器	杯A	Ⅰ区	第１面	1/3	14.3	2.6	11.8	良	灰白	13	19
6	須恵器	杯A	Ⅰ区	第１面	1/6	13.6	2.9	10.3	良	灰白	13	
7	須恵器	長頸壺	Ⅲ区	第１面	口縁部1/5 頸部完存	7.1	5.9		良	灰	13	19
8	土師器	底部	Ⅰ区	第１面	底部完存		3.0	2.7		にぶい赤褐	13	
9	土師器	製塩土器	Ⅰ区	第１面	口縁部1/4弱	18.0	11.4			明赤褐	13	
10	須恵器	甕	Ⅲ区	第１面	口縁部1/4	19.8	4.3		良	灰	13	
11	備前焼	壺	Ⅱ区	第１面	口縁部1/4	11.0	5.4		良	黄灰	13	
12	須恵器	小壺	Ⅰ区	第１面	体部1/8		7.7		良	灰	13	
13	須恵器	甕	Ⅱ区	第１面	体部破片		8.0		良	灰	13	19
14	須恵器	椀	Ⅲ区	第１面	口縁部破片		3.5		不良	灰白	13	
15	須恵器	捏鉢	Ⅰ区	第１面	口縁部破片		2.5		良	灰	13	
16	須恵器	捏鉢	Ⅲ区	第１面	口縁部破片		5.7		普通	灰～灰白	13	
17	須恵器	捏鉢	Ⅲ区	第１面	口縁部破片		5.3		普通	灰～暗灰	13	
18	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	第１面	底部1/3	30.5	11.2	11.6	やや不良	灰白	13	
19	須恵器	捏鉢	Ⅰ区	第１面	口縁部1/8	29.9	5.1		良	灰白	13	
20	土師器	小皿	Ⅰ区	第１面	口縁部2/5 底部1/2	10.6	2.3	7.3		橙	13	19
21	土師器	小皿	Ⅱ区	第１面	1/3	8.4	2.3			灰白～灰黄褐	13	
22	土師器	鍋	Ⅰ区	第１面	口縁部破片		3.8			にぶい黄橙	13	
23	土師器	鍋	Ⅱ区	第１面	口縁部破片		3.6			にぶい橙	13	
24	白磁	碗	Ⅲ区	第１面	高台部1/7		2.3		良	灰白	13	
25	備前焼	甕	Ⅱ区	第１面	口縁部破片		5.8		良	にぶい赤褐	13	
26	丹波焼	甕	Ⅰ区	第１面	口縁部1/10	27.8	5.6		良	にぶい赤褐 ～灰オリーブ	13	
27	土製品	土錘	Ⅰ区	第１面	ほぼ完存	縦4.4	横1.1	高1.0		にぶい黄橙	13	19
28	土製品	土錘	Ⅲ区	第１面	ほぼ完存	縦4.0	横1.1	高1.1		黒	13	
29	土製品	土錘	Ⅲ区	第１面	完存	縦3.6	横1.1	高1.1		灰白～黒褐	13	
30	須恵器	蓋	Ⅰ区	ＳＢ08	口縁部若干 天井部1/2	19.3	3.6		良	灰	26	
31	須恵器	杯A	Ⅰ区	ＳＢ08	口縁部1/4 底部1/2弱	14.3	3.3	10.8	やや不良	灰白～浅黄橙	26	19
32	須恵器	杯A	Ⅰ区	ＳＢ08	口縁部1/5 底部1/3	15.4	3.2	12.5	やや不良	灰白	26	

板波町遺跡出土土器観察表

No.	種別	器種	地区	遺構名	残存状況	法量(cm)			焼成	色調	挿図	図版
						口径	器高	底径				
33	須恵器	杯A	Ⅰ区	ＳＢ08	1/3	13.8	2.9	12.0	良	灰白	26	19
34	土師器	杯A	Ⅰ区	ＳＢ08	口縁部1/10 体部1/7	12.6	2.8	8.8		にぶい橙	26	
35	土師器	製塩土器	Ⅰ区	ＳＢ08	口縁部1/12 体部1/4	16.2	11.7			橙	26	
36	土師器	小皿	Ⅰ区	ＳＢ10	1/4	9.2	1.2	5.0		にぶい橙 ～にぶい黄橙	29	
37	須恵器	椀	Ⅲ区	ＳＢ13	口縁部1/4 底部1/3	16.0	4.4	6.4	良	灰	33	20
38	須恵器	椀	Ⅲ区	ＳＢ13	口縁部1/10 底部3/5	15.2	5.1	6.7	普通	灰	33	
39	須恵器	椀	Ⅰ･Ⅲ区	ＳＢ14	口縁部１/5 底部1/3	15.6	5.2	6.0	良	灰白	35	20
40	須恵器	椀	Ⅰ･Ⅲ区	ＳＢ14	口縁部1/2弱 底部1/4	15.8	4.8	6.0	良	灰	35	20
41	須恵器	椀	Ⅰ･Ⅲ区	ＳＢ14	口縁部1/3 底部2/3	15.9	4.3	6.4	良	灰	35	20
42	須恵器	椀	Ⅰ･Ⅲ区	ＳＢ14	口縁部1/6	15.4	3.3		普通	灰	35	
43	須恵器	捏鉢	Ⅰ･Ⅲ区	ＳＢ14	口縁部1/12	29.0	5.1		良	灰	35	
44	須恵器	椀	Ⅰ･Ⅲ区	ＳＢ14	口縁部1/9	15.8	2.3		良	灰	35	
45	土師器	小皿	Ⅰ･Ⅲ区	ＳＢ14	1/2弱	8.1	1.5	7.0		浅黄橙 ～にぶい橙	35	20
46	土製品	土錘	Ⅰ･Ⅲ区	ＳＢ14	ほぼ完存	縦6.1	横1.0	高1.0		灰白	35	19
47	土製品	土錘	Ⅰ･Ⅲ区	ＳＢ14	完存	縦3.9	横1.1	高1.0		灰白	35	19
48	土製品	土錘	Ⅰ･Ⅲ区	ＳＢ14	完存	縦3.3	横1.3	高1.1		橙	35	19
49	須恵器	椀	Ⅰ区	ＳＢ15	口縁部1/10底部1/2	15.8	4.1	6.8	良	灰	37	20
50	須恵器	椀	Ⅰ区	ＳＢ15	口縁部1/8 底部1/2	15.6	4.7	7.3	良	灰	37	20
51	須恵器	椀	Ⅰ区	ＳＢ15	口縁部1/2弱	15.0	4.2	6.2	やや不良	灰白	37	20
52	須恵器	小皿	Ⅰ区	ＳＢ15	口縁部1/4 底部完存	7.6	1.2	5.2	良	灰	37	20
53	須恵器	椀	Ⅰ区	ＳＢ16	口縁部1/8 底部1/2	15.0	4.6	6.3	良	灰	39	20
54	土製品	土錘	Ⅰ区	ＳＢ16	ほぼ完存	縦4.9	横1.5	高1.3		黒褐	39	19
55	須恵器	椀	Ⅱ区	Ｐ３	口縁部若干 底部3/7	15.7	3.0	8.0	普通	灰	41	
56	土師器	小皿	Ⅱ区	Ｐ１	1/2	9.5	2.2	5.3		浅黄橙 ～にぶい黄橙	41	20
57	土師器	小皿	Ⅱ区	Ｐ４	2/3	8.3	1.5	6.0		灰白	41	20
58	土師器	鍋	Ⅱ区	Ｐ４	口縁部破片		4.9			橙～浅黄橙	41	
59	土師器	鍋	Ⅱ区	Ｐ５	口縁部破片		5.7			にぶい橙 ～にぶい褐	41	
60	土師器	鍋	Ⅱ区	Ｐ５	口縁部1/8	27.2	5.5		良	にぶい褐	41	
61	土師器	鍋	Ⅱ区	Ｐ２	口縁部1/8	31.1	8.9			にぶい褐 ～にぶい橙	41	21
62	土師器	小皿	Ⅱ区	Ｐ６	口縁部1/2 底部完存	8.0	1.4	4.8		灰白	42	21
63	土師器	小皿	Ⅱ区	Ｐ６	ほぼ完存	7.3	1.6			灰黄～灰白	42	21
64	土師器	小皿	Ⅱ区	Ｐ６	完存	7.5	1.6	5.8		灰白	42	21

板波町遺跡出土土器観察表

No.	種別	器種	地区	遺構名	残存状況	法量(cm)			焼成	色調	挿図	図版
						口径	器高	底径				
65	土師器	小皿	Ⅱ区	P 6	2/3	7.2	1.4	5.2		灰白	42	21
66	土師器	中皿	Ⅱ区	P 6	1/2弱	11.4	2.5	4.3		灰白	42	21
67	土師器	小皿	Ⅱ区	P 7	口縁部1/2 底部2/3	11.0	2.4	7.2		灰白～浅黄橙	43	21
68	土師器	小皿	Ⅱ区	P 8	3/4	7.4	2.0			にぶい橙～橙	43	21
69	土師器	小皿	Ⅰ区	P14	口縁部2/3 底部完存	7.2	1.3	4.9		灰白	43	21
70	土師器	鍋	Ⅱ区	P 9	口縁部破片		5.3			にぶい橙～橙	43	
71	土師器	鍋	Ⅱ区	P10	口縁部破片		4.6			褐灰 ～にぶい褐	43	
72	土師器	鍋	Ⅱ区	P11	口縁部1/9	16.5	4.3			明赤褐 ～にぶい橙	43	
73	土師器	甕	Ⅰ区	P17	口縁部 ～頸部1/8	18.2	13.0			橙～灰黄褐	43	
74	土師器	鍋	Ⅰ区	P13	口縁部1/10	23.4	3.2			にぶい黄橙	43	
75	土師器	鍋	Ⅰ区	P13	口縁部1/10	22.2	3.7			橙	43	
76	須恵器	捏鉢	Ⅰ区	P12	口縁部破片		3.4		良	灰	43	
77	須恵器	椀	Ⅰ区	P17	口縁部1/2 底部	15.8	6.0	5.5	良	灰白	43	22
78	須恵器	杯B	Ⅰ区	P15	口縁部1/5 底部1/2強	16.4	6.5	8.5	良	にぶい橙 ～褐灰	43	
79	須恵器	杯B	Ⅰ区	P15	底部1/4		2.5	9.9	良	灰褐～褐灰	43	
80	須恵器	杯B蓋	Ⅰ区	P18	口縁部1/4 つまみ完存	13.8	3.0		良	灰	43	22
81	須恵器	杯B蓋	Ⅰ区	P19	つまみ付近完存		1.6		良	にぶい赤褐 ～にぶい黄橙	43	
82	須恵器	杯B	Ⅰ区	P16	底部1/5		3.2	11.5	良	灰	43	
83	須恵器	椀	Ⅲ区	P20	底部1/3		3.1	7.1	普通	灰	43	
84	土師器	大皿	Ⅱ区	SK04	1/2	12.7	2.7	8.2		灰白	44	22
85	土師器	大皿	Ⅱ区	SK04	口縁部3/4 底部完存	11.6	3.0	7.9		橙 ～にぶい黄橙	44	22
86	土師器	小皿	Ⅱ区	SK04	1/2弱	6.8	1.4	5.5		橙～にぶい橙	44	22
87	土師器	小皿	Ⅱ区	SK04	口縁部1/2	6.6	1.1	4.9		にぶい橙～橙	44	22
88	土師器	小皿	Ⅱ区	SK04	口縁部1/2 底部2/3	6.7	1.5			にぶい橙～橙	44	22
89	土師器	鍋	Ⅱ区	SK04	口縁部1/3 体底部若干	21.5	15.0			にぶい黄橙 ～浅黄橙	44	22
90	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	SK07	口縁部若干 底部1/7	23.0	8.8	10.8	良	灰	46	23
91	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	SK07	口縁部破片		2.8		普通	灰	46	
92	須恵器	鉢	Ⅱ区	SK07	口縁部破片		3.2		良	灰	46	
93	土師器	鍋	Ⅱ区	SK07	口縁部破片		2.8			浅黄橙	46	
94	土師器	鍋	Ⅱ区	SK07	口縁部1/12	18.0	3.0			にぶい赤褐 ～橙	46	
95	須恵器	捏鉢	Ⅰ区	SK09	口縁部破片		3.7		良	灰	49	
96	須恵器	捏鉢	Ⅰ区	SK09	口縁部破片		3.8		良	灰	49	

板波町遺跡出土土器観察表

No.	種別	器種	地区	遺構名	残存状況	法量(cm)			焼成	色調	挿図	図版
						口径	器高	底径				
97	土師器	鍋	Ⅰ区	SK09	口縁部1/10	14.4	2.2			灰黄～灰白	49	
98	土師器	鍋	Ⅰ区	SK09	口縁部破片		3.8			にぶい橙～橙	49	
99	土師器	鍋	Ⅰ区	SK09	口縁部破片		2.4			橙	49	
100	土師器	小皿	Ⅰ区	SK09	口縁部1/4	11.6	2.4			にぶい橙～にぶい褐	49	
101	須恵器	椀	Ⅲ区	SK14	底部1/4		2.1	6.6	普通	灰～灰白	51	
102	須恵器	小皿	Ⅲ区	SK14	1/4	7.8	1.6	5.2	良	灰	51	
103	須恵器	椀	Ⅰ区	SK15	口縁部2/3 底部完存	15.6	4.3	6.0	良	灰白	52	22
104	須恵器	椀	Ⅰ区	SK15	底部完存		2.2	6.1	良	灰白	52	
105	土師器	小皿	Ⅰ区	SK15	1/2	7.8	1.3	6.3		橙～にぶい橙	52	23
106	須恵器	椀	Ⅰ区	SK10	口縁部1/6 底部1/2	16.5	4.9	5.9	良	灰	53	
107	須恵器	椀	Ⅱ区	SK06	口縁部1/10	15.6	2.3		良	灰	53	
108	須恵器	椀	Ⅲ区	SK19	底部1/5		2.0	4.0	やや不良	灰白	53	
109	須恵器	椀	Ⅲ区	SK18	口縁部破片		2.0		良	灰	53	
110	須恵器	壷	Ⅱ区	SK05	口縁部1/4弱	11.9	3.0		良	灰	53	
111	土師器	鍋	Ⅱ区	SK02	口縁部破片		3.3			橙～にぶい黄橙	53	
112	土師器	鍋	Ⅱ区	SK21	口縁部破片		2.5			浅黄橙	53	
113	土師器	甕	Ⅲ区	SK17	口縁部破片		4.3		良	橙～浅黄橙	53	
114	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	SD03	口縁部1/8	32.7	5.2		良	灰	57	
115	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	SD03	口縁部1/10	30.8	4.6		普通	灰	57	
116	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	SD03	口縁部破片		4.7		良	灰	57	
117	須恵器	甕	Ⅱ区	SD03	体部破片		4.8		良	灰	57	
118	須恵器	甕	Ⅱ区	SD03	口縁部1/7	24.4	5.7		良	灰	57	
119	土師器	小皿	Ⅱ区	SD03	口縁部若干 底部1/3	8.5	2.0	5.8		にぶい橙～灰白	57	23
120	土師器	鍋	Ⅱ区	SD03	口縁部破片		5.3		良	灰赤～にぶい橙	57	23
121	土師器	鍋	Ⅱ区	SD03	口縁部破片		7.0			明赤褐～橙	57	24
122	土師器	鍋	Ⅱ区	SD03	口縁部1/12	18.0	6.5		良	褐灰～黄灰	57	
123	土師器	鍋	Ⅱ区	SD03	口縁部1/5	17.1	5.3			にぶい黄橙～にぶい橙	57	
124	土師器	鍋	Ⅱ区	SD03	口縁部1/12	22.0	7.8			橙	57	23
125	土師器	鍋	Ⅱ区	SD03	口縁部1/11	22.3	6.3			浅黄橙	57	
126	土師器	鍋	Ⅲ区	SD03	口縁部1/10	22.1	2.8		良	灰褐～灰	57	
127	土師器	鍋	Ⅱ区	SD03	口縁部1/8	22.0	7.0			にぶい橙～橙	57	
128	土師器	鍋	Ⅱ区	SD03	口縁部1/10	22.7	8.2		良	黄灰～にぶい橙	57	

板波町遺跡出土土器観察表

No.	種別	器種	地区	遺構名	残存状況	法量(cm)			焼成	色調	挿図	図版
						口径	器高	底径				
129	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/12	21.8	5.8		良	にぶい褐	57	
130	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/8	22.0	7.6		良	褐灰	57	24
131	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/8	19.0	6.7			褐灰 ～にぶい黄橙	57	24
132	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/10 頸部1/6	18.6	6.6		良	灰白～灰	57	
133	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/4	28.0	10.3			橙	57	24
134	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/8 頸部1/5	23.6	6.6			にぶい橙～橙	57	
135	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/8	22.5	7.5			橙	58	24
136	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/10	22.0	6.0			橙	58	
137	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/10	20.0	3.7			橙～にぶい橙	58	
138	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/10	22.0	6.1			にぶい橙	58	
139	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/4	19.7	6.7			橙～にぶい橙	58	24
140	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/6	19.5	5.0			浅黄橙～橙	58	
141	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/12	25.4	4.6			にぶい橙	58	
142	土師器	羽釜	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部破片		7.3		良	にぶい褐	58	24
143	土師器	羽釜	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部破片		5.2			灰黄～浅黄橙	58	
144	備前焼	甕	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部破片		8.4		良	灰褐	58	
145	備前焼	壺	Ⅱ区	ＳＤ03	体部破片		3.7		良	にぶい赤褐	58	25
146	備前焼	擂鉢	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部破片		5.1		良	赤灰	58	
147	備前焼	擂鉢	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部破片		4.7		良	にぶい赤褐	58	
148	備前焼	擂鉢	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部若干 底部1/3	27.0	10.5	14.9	普通	灰	58	25
149	丹波焼	甕	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部破片		5.9		良	にぶい褐 ～灰白	58	25
150	丹波焼	甕	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部破片		6.3		良	灰オリーブ ～にぶい赤褐	58	
151	青磁	碗	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/8	15.8	2.2		良	オリーブ灰	58	
152	瓦	平瓦	Ⅱ区	ＳＤ03	破片	長8.5	幅9.8	厚2.1	やや不良	灰白	58	
153	染付磁器	碗	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部3/5 底部完存	7.6	3.8	3.2	良	明褐灰～灰白	56	25
154	染付磁器	碗	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部 ～底部1/3	7.5	4.0		良		56	
155	染付磁器	碗	Ⅱ区	ＳＤ03	底部2/3		3.5	3.9	良		56	
156	丹波焼	甕	Ⅱ区	ＳＤ03	体部破片		12.2		良	暗赤褐～灰褐	56	25
157	丹波焼	甕	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部破片		9.4		やや不良	黄灰～灰黄褐	56	
158	丹波焼	甕	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/4	46.5	13.8		良	赤褐	56	25
159	丹波焼	甕	Ⅱ区	ＳＤ03	体部最大で1/4		22.3		良	にぶい赤褐	56	
160	土師器	ほうらく	Ⅱ区	ＳＤ03	口縁部1/8	39.4	5.5			にぶい橙	56	

板波町遺跡出土土器観察表

No.	種別	器種	地区	遺構名	残存状況	法量(cm)			焼成	色調	挿図	図版
						口径	器高	底径				
161	土師器	ほうらく	Ⅱ区	SD03	口縁部破片		4.6			にぶい赤褐～にぶい橙	56	
162	須恵器	甕	Ⅱ区	SD06	口縁部1/6	35.2	10.7		良	灰	59	25
163	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	SD06	口縁部破片		3.6		良	灰	59	
164	土師器	鍋	Ⅱ区	SD06	口縁部破片		2.4		良	灰褐～褐灰	59	
165	土師器	鍋	Ⅱ区	SD06	口縁部破片		3.9			にぶい橙	59	
166	土師器	鍋	Ⅱ区	SD06	口縁部破片		4.6		良	灰～にぶい橙	59	
167	土師器	羽釜	Ⅱ区	SD06	口縁部1/5	27.0	7.2			浅黄橙～にぶい黄橙	59	26
168	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	SD07	口縁部1/12	23.7	3.7		普通	灰	61	
169	土師器	鍋	Ⅱ区	SD07	口縁部1/10	19.2	6.2		良	灰～明赤褐	61	
170	須恵器	椀	Ⅱ区	SD07	口縁部1/4 底部1/6	15.6	4.4	6.0	普通	灰	61	
171	土師器	羽釜	Ⅱ区	SD07	口縁部破片		7.1			浅黄橙～にぶい黄橙	61	
172	陶器	底部	Ⅱ区	SD07	底部破片		7.3		良	灰赤	61	
173	土師器	甕	Ⅰ区	SD14	口縁部1/10	19.4	6.6			浅黄橙～灰白	62	
174	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	SD08	口縁部破片		3.0		普通	灰	62	
175	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	SD09	口縁部1/6	20.8	3.2		良	灰～オリーブ黒	64	
176	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	SD09	口縁部1/7	25.9	6.0		普通	灰	64	
177	須恵器	捏鉢	Ⅱ区	SD09	口縁部破片		3.2		良	灰	64	
178	須恵器	底部	Ⅱ区	SD09	底部1/4		1.4	5.6	普通	灰	64	
179	須恵器	甕	Ⅱ区	SD09	口縁部～頸部1/4	17.4	5.0		普通	灰	64	
180	須恵器	底部	Ⅱ区	SD09	底部1/8		4.3	10.8	良	灰	64	
181	土師器	小皿	Ⅱ区	SD09	3/4	8.1	2.1	5.1		にぶい黄橙	64	26
182	土師器	小皿	Ⅱ区	SD09	1/3	8.5	2.0	4.8		にぶい橙	64	26
183	土師器	鍋	Ⅱ区	SD09	口縁部1/10 頸部1/6	24.1	6.3			にぶい橙	64	
184	土師器	鍋	Ⅱ区	SD09	口縁部1/10	21.0	5.4			にぶい赤褐～橙	64	
185	土師器	鍋	Ⅱ区	SD09	口縁部破片		3.8			にぶい赤褐	64	
186	土師器	鍋	Ⅱ区	SD09	口縁部破片		4.7			橙	64	
187	土師器	鍋	Ⅱ区	SD09	口縁部破片		4.6			にぶい橙	64	
188	土師器	鍋	Ⅱ区	SD09	口縁部破片		3.5			橙	64	
189	土師器	鍋	Ⅱ区	SD09	口縁部破片		3.7			にぶい橙	64	
190	土師器	鍋	Ⅱ区	SD09	体部1/12		3.7			にぶい橙～にぶい褐	64	
191	土師器	鍋	Ⅱ区	SD09	口縁部1/9	25.3	5.2			にぶい黄橙～橙	64	26
192	土師器	鍋	Ⅱ区	SD09	口縁部1/5	23.0	5.8			にぶい褐～橙	64	26

板波町遺跡出土土器観察表

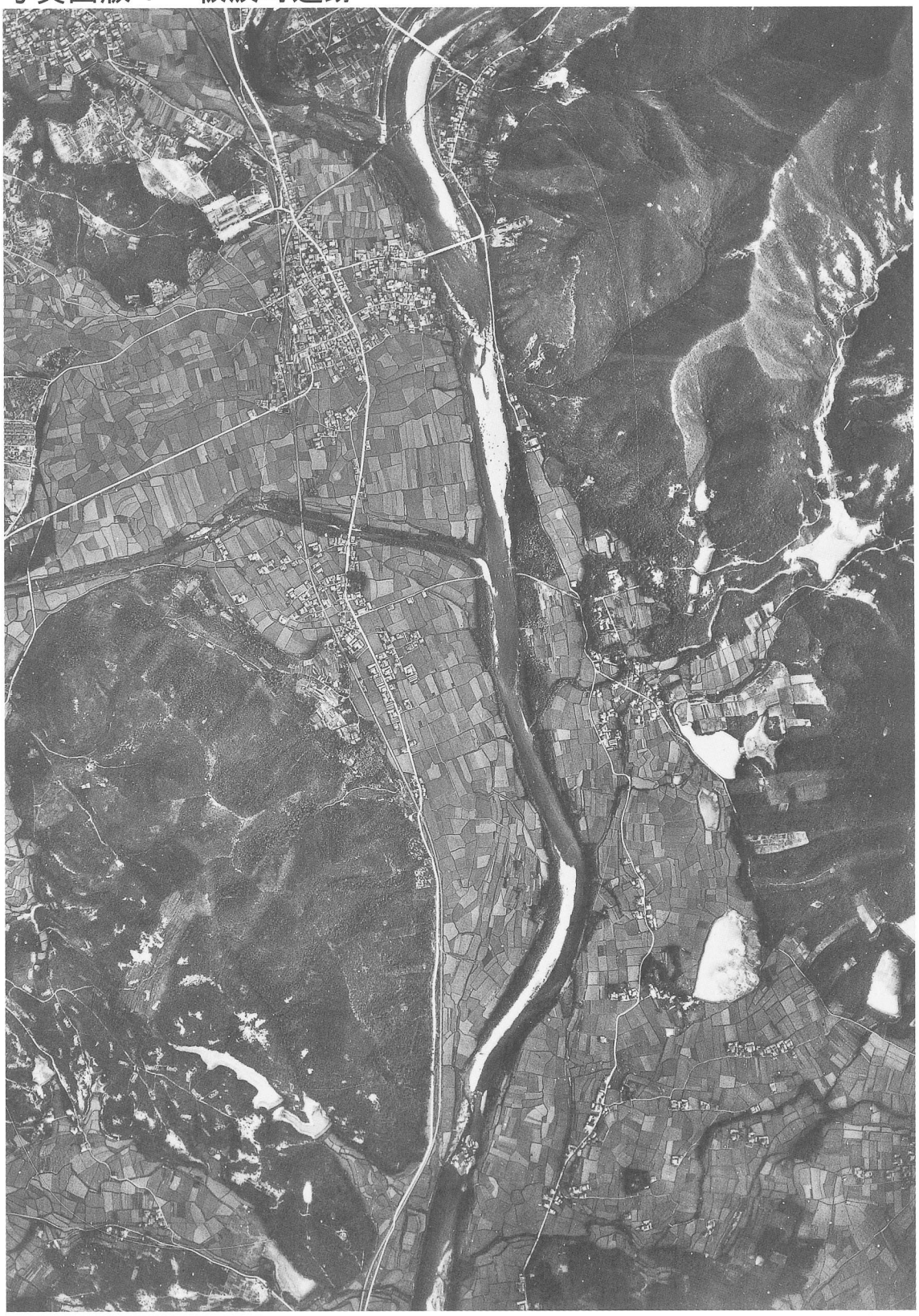
No.	種別	器種	地区	遺構名	残存状況	法量(cm)			焼成	色調	挿図	図版
						口径	器高	底径				
193	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部1/12	23.4	4.9			にぶい赤褐～にぶい橙	64	
194	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部1/9	23.0	5.1			にぶい橙～にぶい褐	64	
195	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部1/9	21.1	4.4			橙～にぶい褐	64	
196	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部1/8	20.8	11.8			橙	64	26
197	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部1/9	19.2	6.4			橙～にぶい黄橙	64	
198	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部1/10	21.4	6.5			にぶい褐～にぶい橙	64	
199	土師器	鍋	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部1/12	23.4	5.0			にぶい橙～にぶい黄橙	64	
200	土師器	底部	Ⅱ区	ＳＤ09	底部1/3		3.4	12.7		橙	64	
201	土師器	すり鉢	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部1/6 底部1/3	21.0	8.8	8.8		にぶい褐～橙	65	26
202	土師器	すり鉢	Ⅱ区	ＳＤ09	底部1/4弱		2.3	11.5		橙	65	
203	陶器	鉢	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部破片		7.3		良	暗赤褐～灰オリーブ	65	
204	陶器	擂鉢	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部破片		4.7		良	灰褐～褐	65	
205	陶器	擂鉢	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部破片		2.6		普通	にぶい橙～橙	65	
206	備前焼	擂鉢	Ⅱ区	ＳＤ09	底部1/10		9.8	17.8	不良	にぶい橙～にぶい黄橙	65	27
207	備前焼	擂鉢	Ⅱ区	ＳＤ09	底部1/2		3.6	14.5	不良	橙	65	27
208	備前焼	擂鉢	Ⅱ区	ＳＤ09	底部1/2弱		7.2	11.5	普通	にぶい黄橙	65	27
209	備前焼	底部	Ⅱ区	ＳＤ09	底部破片		5.9		良	にぶい褐	65	
210	備前焼	底部	Ⅱ区	ＳＤ09	底部1/9		5.8	18.2	良	灰褐	65	
211	陶器	底部	Ⅱ区	ＳＤ09	底部1/6		7.0	19.0	良	灰赤～赤灰	65	
212	丹波焼	甕	Ⅱ区	ＳＤ09	底部1/3		5.1	22.2	良	浅黄橙	65	25
213	青磁	碗	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部1/8	15.2	3.6		良		65	
214	青磁	碗	Ⅱ区	ＳＤ09	底部完存		4.1	5.9	良		65	
215	須恵器	火鉢	Ⅱ区	ＳＤ09	底部破片		4.2		良	灰～灰白	65	27
216	唐津	碗	Ⅱ区	ＳＤ09	底部1/3		2.4	5.4	良	にぶい黄褐～にぶい橙	65	
217	青磁	碗	Ⅱ区	ＳＤ09	底部完存		2.3	4.9	良		65	
218	染付磁器	碗	Ⅱ区	ＳＤ09	底部1/3		3.3	4.6	良		65	
219	土師器	不明	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部1/10	19.0	3.8			橙	65	
220	施釉陶器	天目茶碗	Ⅱ区	ＳＤ09	体部1/4弱	11.6	5.2		良	黒褐	65	28
221	染付磁器	碗	Ⅱ区	ＳＤ09	口縁部1/4弱	9.4	4.1		良		65	
222	土製品	土鈴	Ⅱ区	ＳＤ09	完存	縦2.3	横2.5	高1.8		浅黄橙	65	
223	施釉陶器	天目茶碗	Ⅱ区	ＳＤ09	体部破片				良			28
224	須恵器	椀	Ⅲ区	畠２	口縁部1/5 底部1/2	16.2	4.8	6.4	普通	灰	68	28

板波町遺跡出土土器観察表

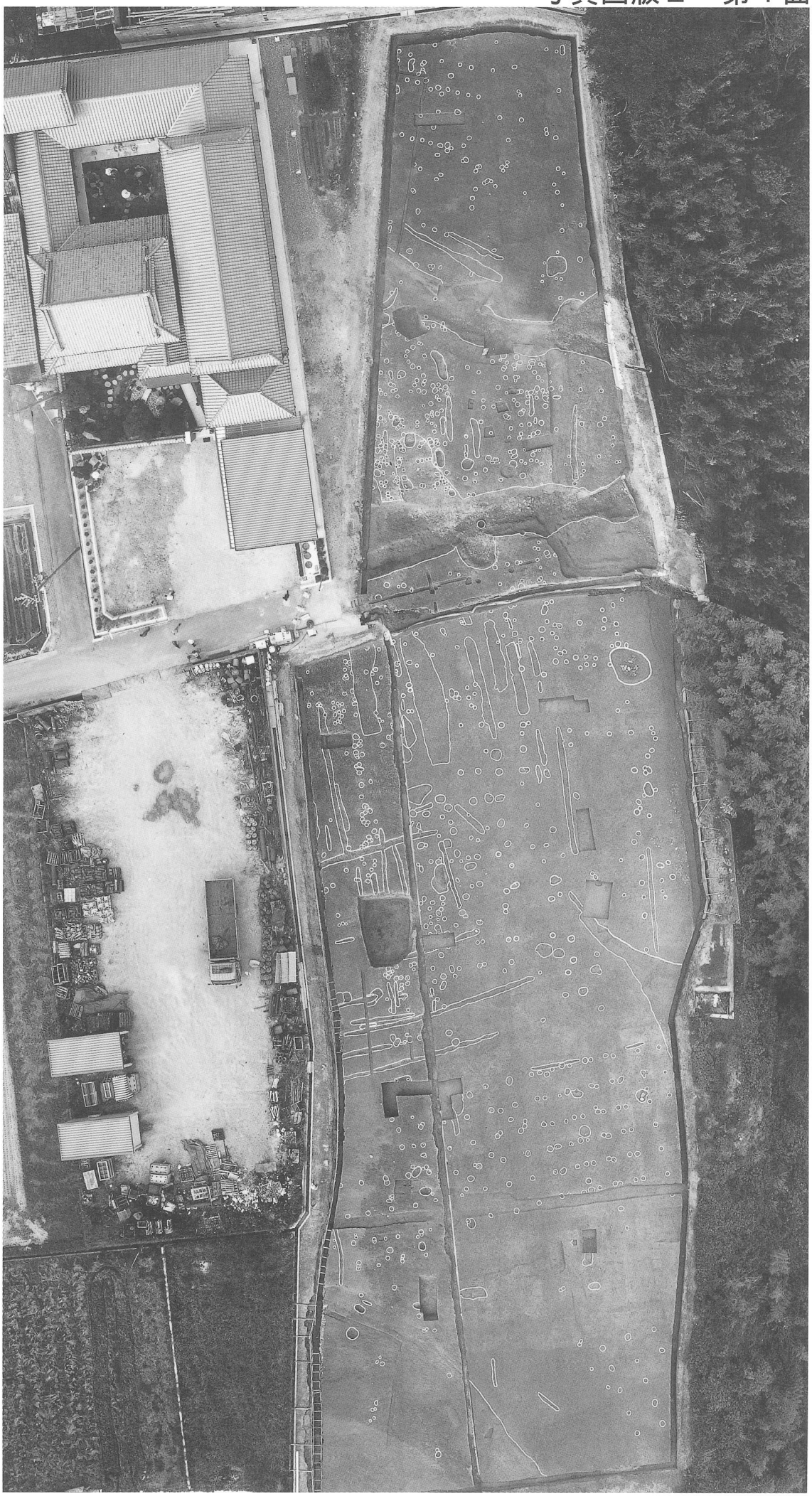
No.	種別	器種	地区	遺構名	残存状況	法量(cm)			焼　成	色　調	挿図	図版
						口径	器高	底径				
225	縄文土器	深鉢	Ⅰ区	第２面	口縁部1/12	20.9	6.2			褐灰～にぶい橙	70	28
226	縄文土器	鉢	Ⅲ区	第２面	口縁部破片		6.2			灰黄褐	70	28
227	縄文土器	深鉢	Ⅰ区	第２面	口縁部～体部1/8	23.5	10.1			灰黄褐	70	
228	縄文土器	深鉢	Ⅰ区	第２面	体部破片		4.5			灰黄褐～灰褐	70	28
229	縄文土器	鉢	Ⅲ区	第２面	口縁部破片		3.0			灰黄褐	70	28
230	縄文土器	鉢	Ⅲ区	第２面	口縁部破片		4.5			にぶい橙～にぶい黄橙	70	28
231	縄文土器	鉢	Ⅲ区	第２面	口縁部破片		5.5			灰黄褐～にぶい黄橙	70	29
232	縄文土器	深鉢	Ⅰ区	第２面	体部破片		5.2			灰白～灰黄褐	70	29
233	縄文土器	鉢	Ⅲ区	第２面	体部破片		3.8			にぶい黄橙～灰黄褐	70	29
234	縄文土器	鉢	Ⅲ区	第２面	体部破片		4.6			にぶい黄橙～灰黄褐	70	29
235	縄文土器	底部	Ⅲ区	第２面	底部2/5		2.7	7.8		にぶい黄橙～灰黄褐	70	
236	縄文土器	底部	Ⅰ区	第２面	底部1/3		2.0	6.8		にぶい黄橙	70	
237	縄文土器	底部	Ⅲ区	第２面	底部1/8		2.7	12.0		灰黄	70	
238	弥生土器	底部	Ⅰ区	第２面	底部1/3		3.6	8.9		にぶい黄橙～灰白	70	
239	弥生土器	甕	Ⅰ区	第２面	口縁部1/6	15.6	4.8			橙～浅黄橙	70	
240	縄文土器	深鉢	Ⅲ区	ＳＫ50	口縁部破片		3.8			灰黄褐	76	29
241	縄文土器	深鉢	Ⅲ区	ＳＫ50	口縁部破片		5.0			黄灰～灰白	76	29

写真図版

写真図版１　板波町遺跡

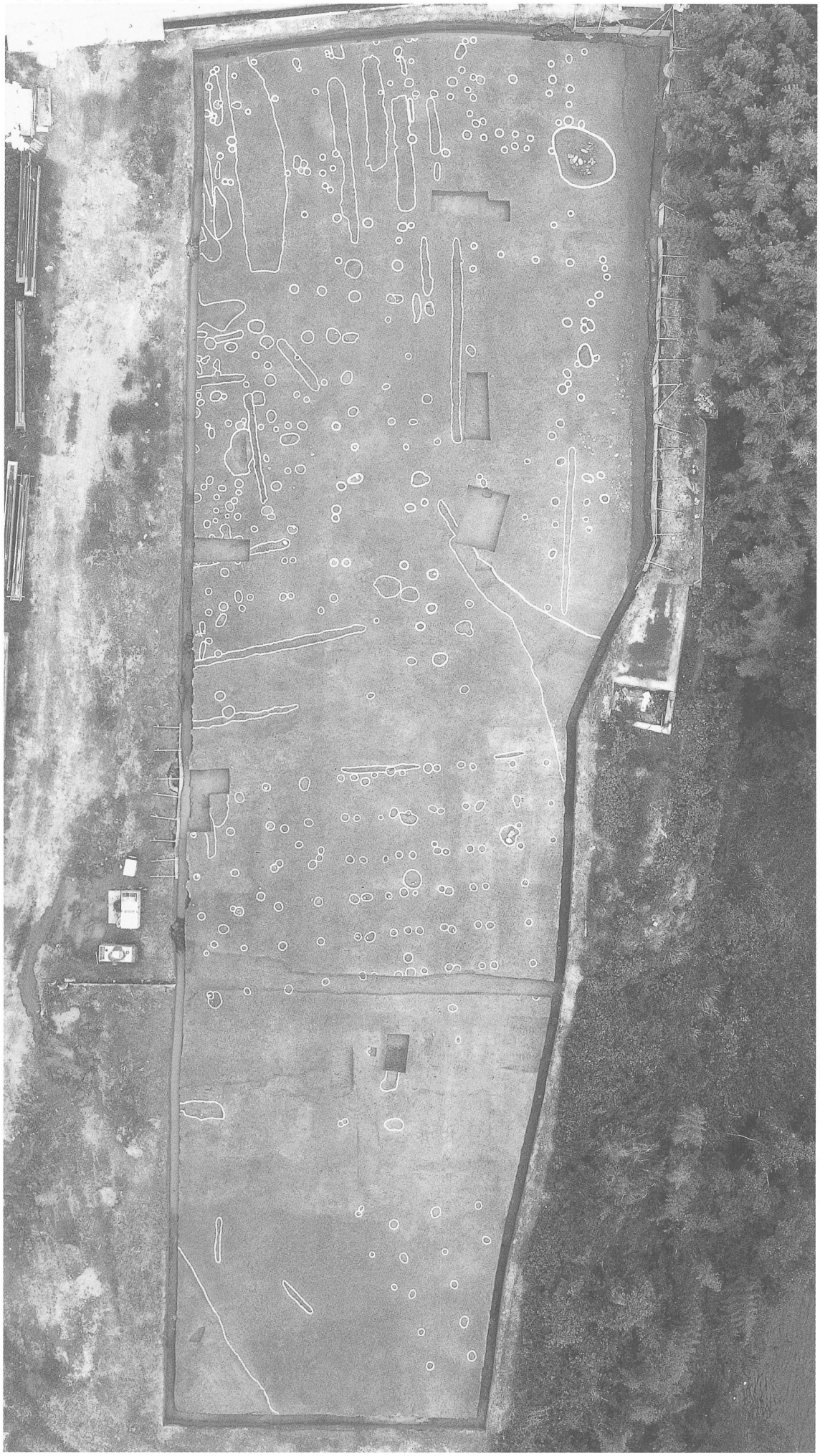


空中写真
（昭和22年　米軍撮影）

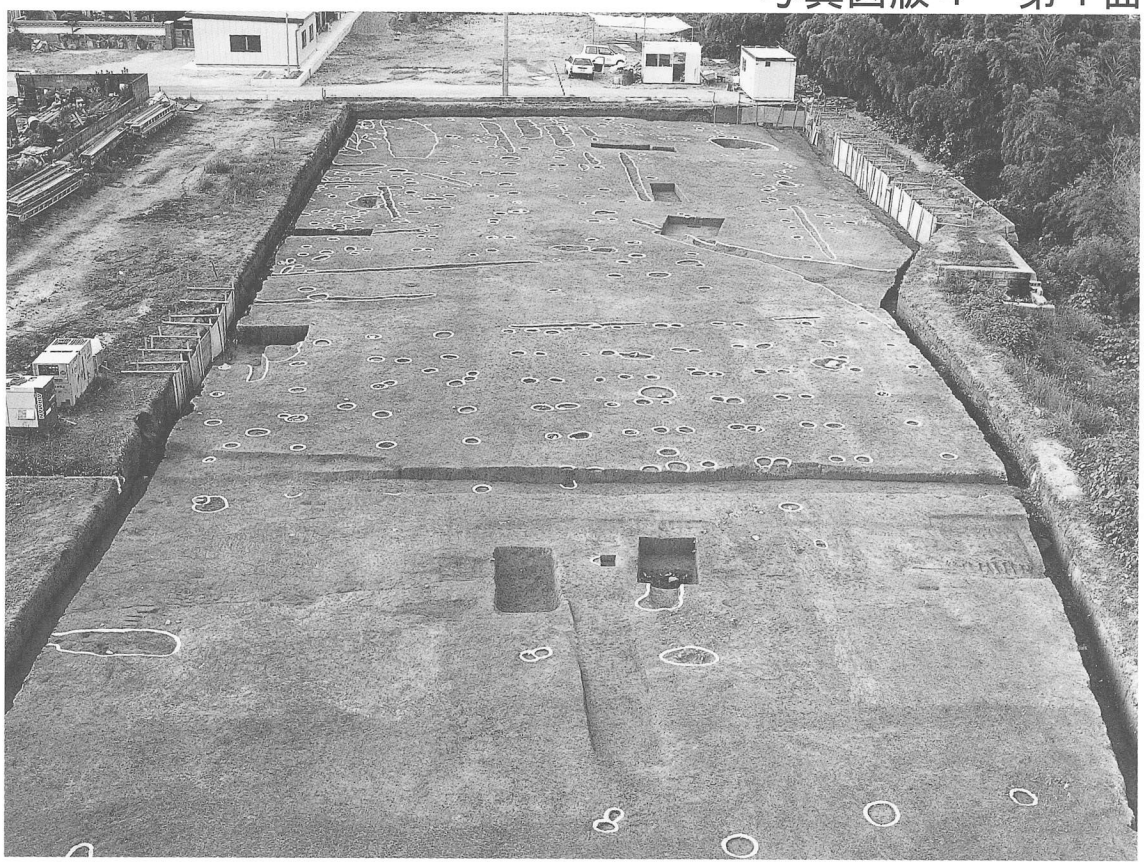


全景　真上から

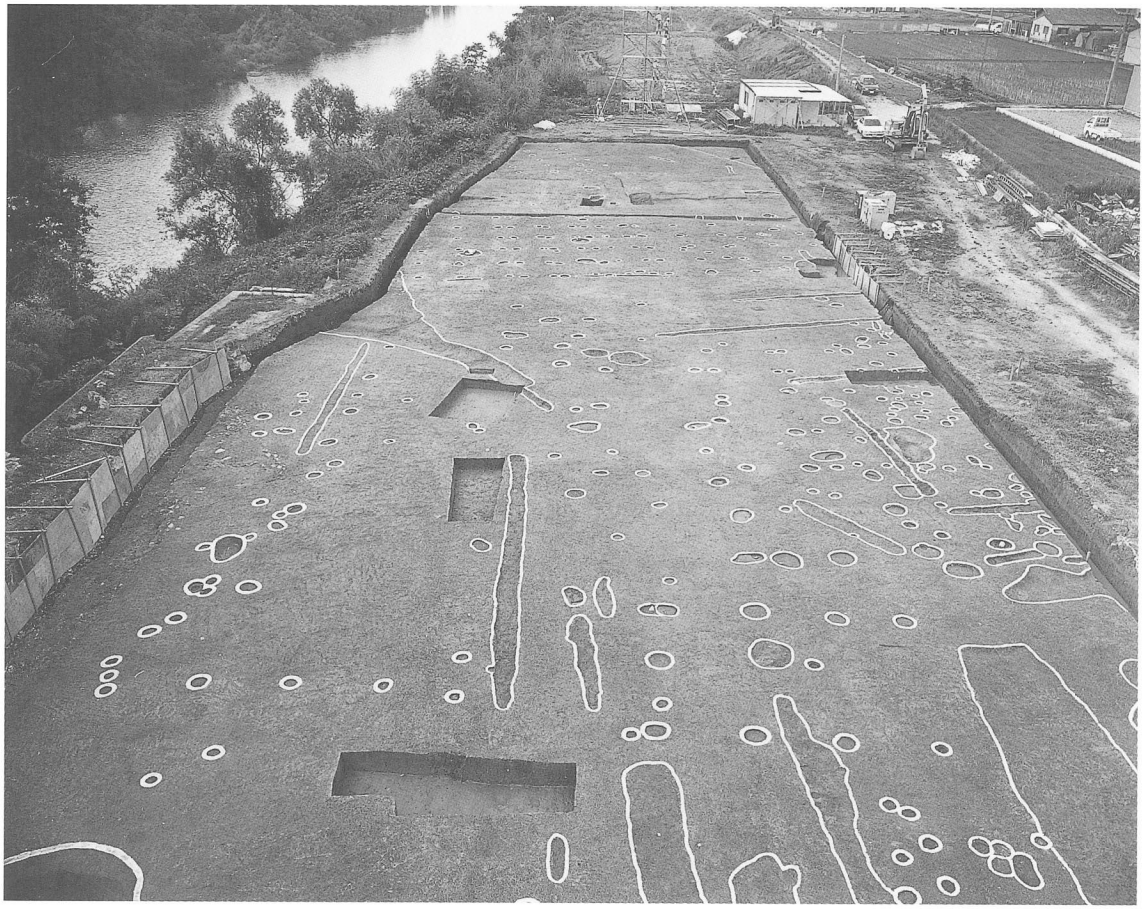
写真図版３　第１面



Ⅰ区　全景

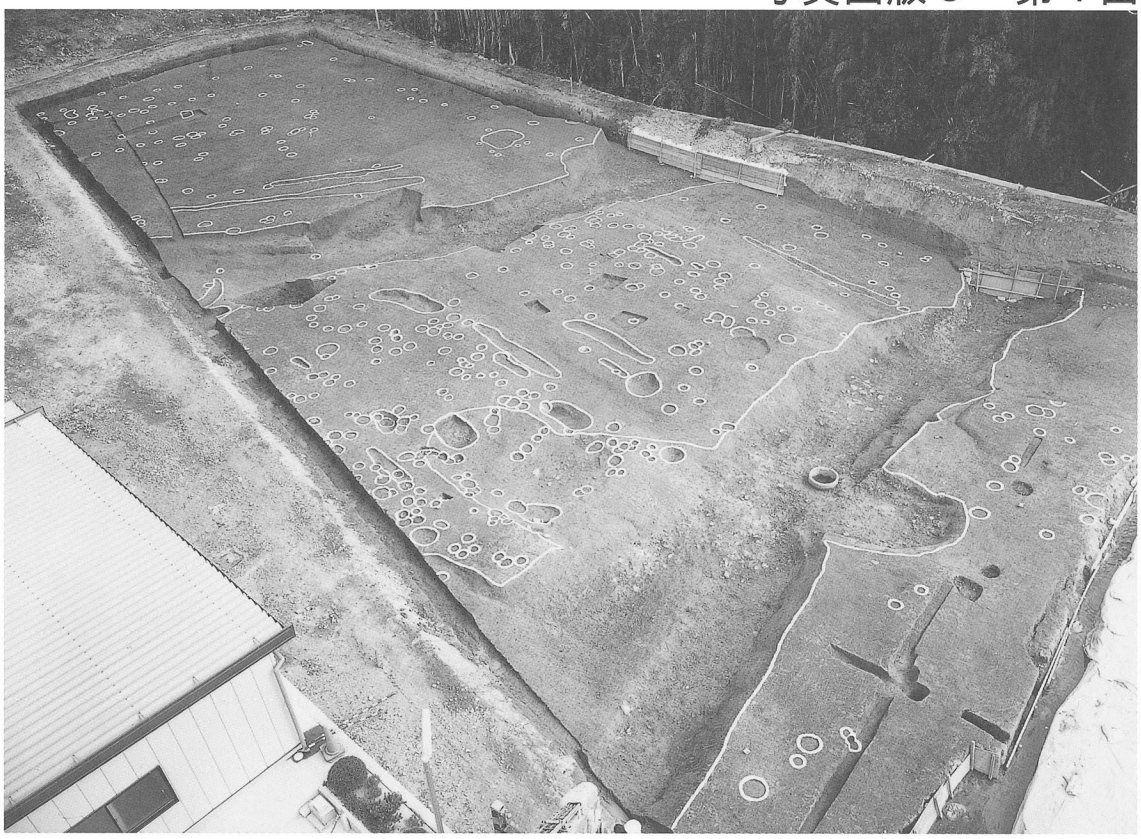


Ⅰ区全景　南から



Ⅰ区全景　北から

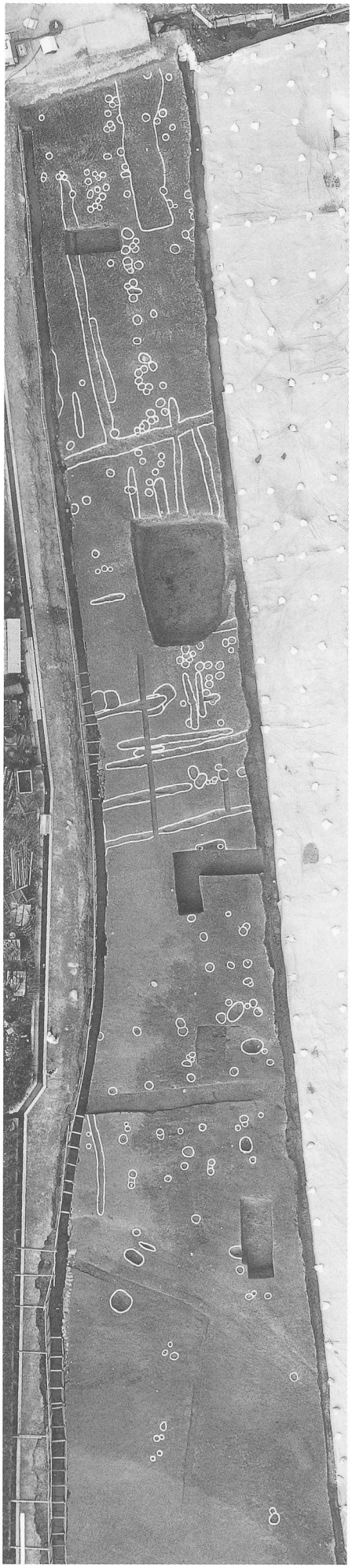
Ⅱ区　全景

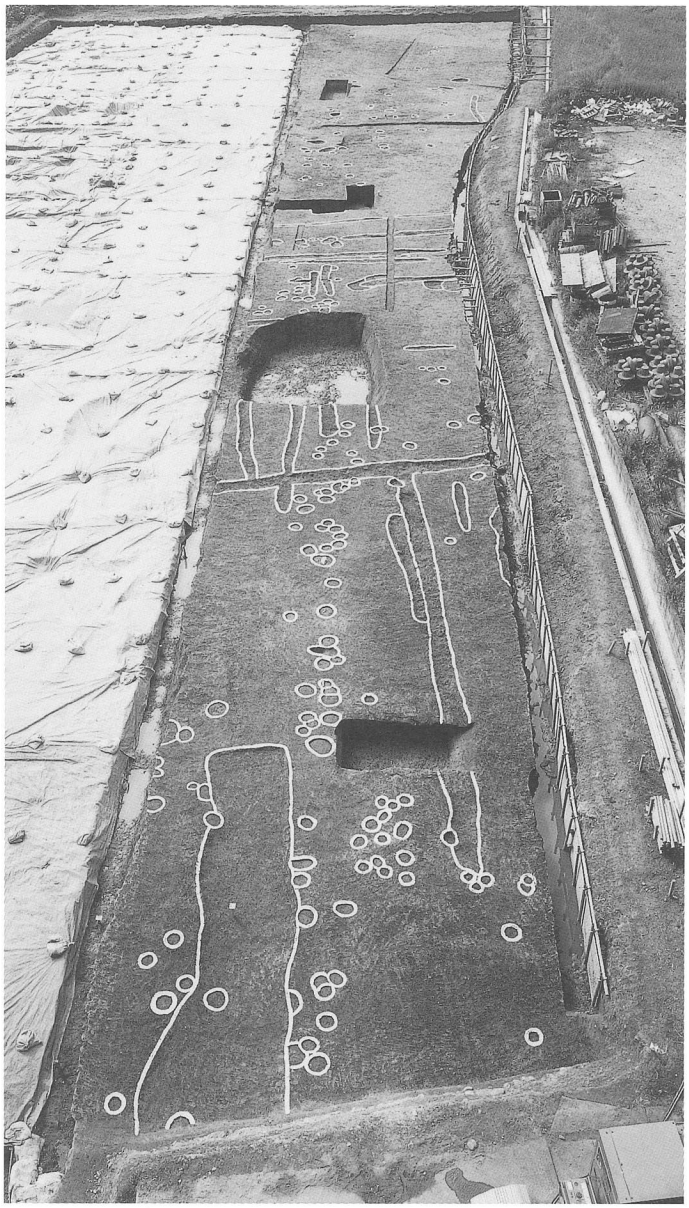


Ⅱ区全景　南西から

Ⅱ区全景　北から

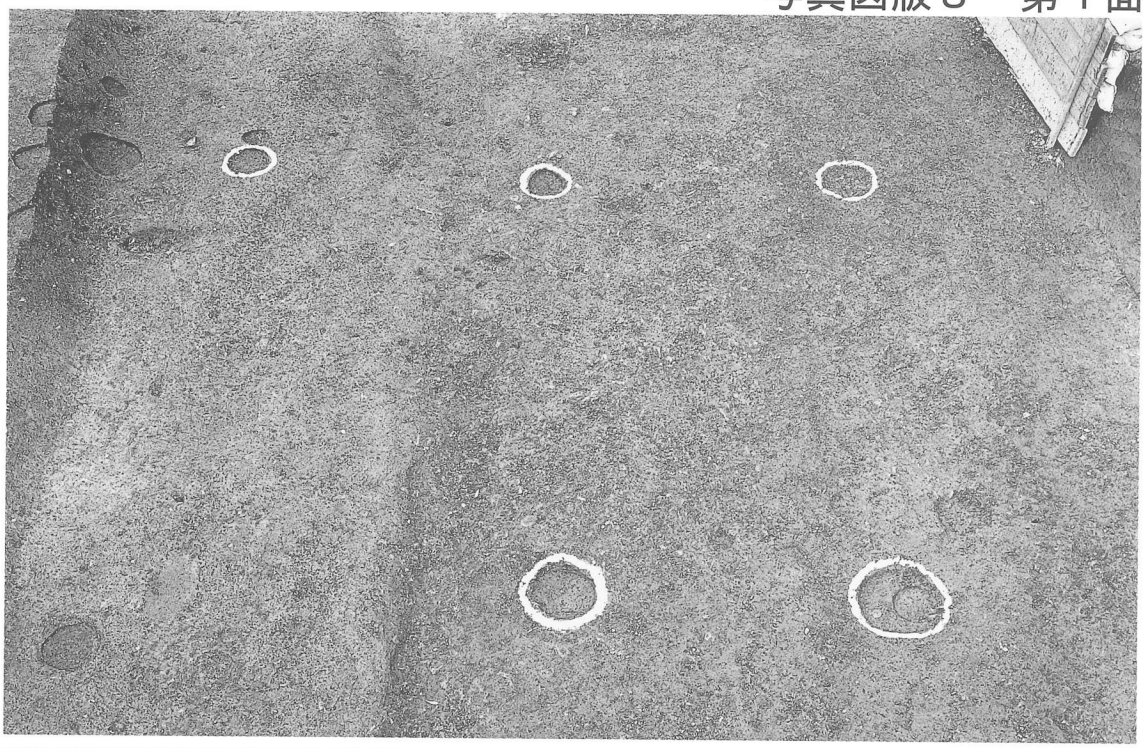
写真図版７　第１面





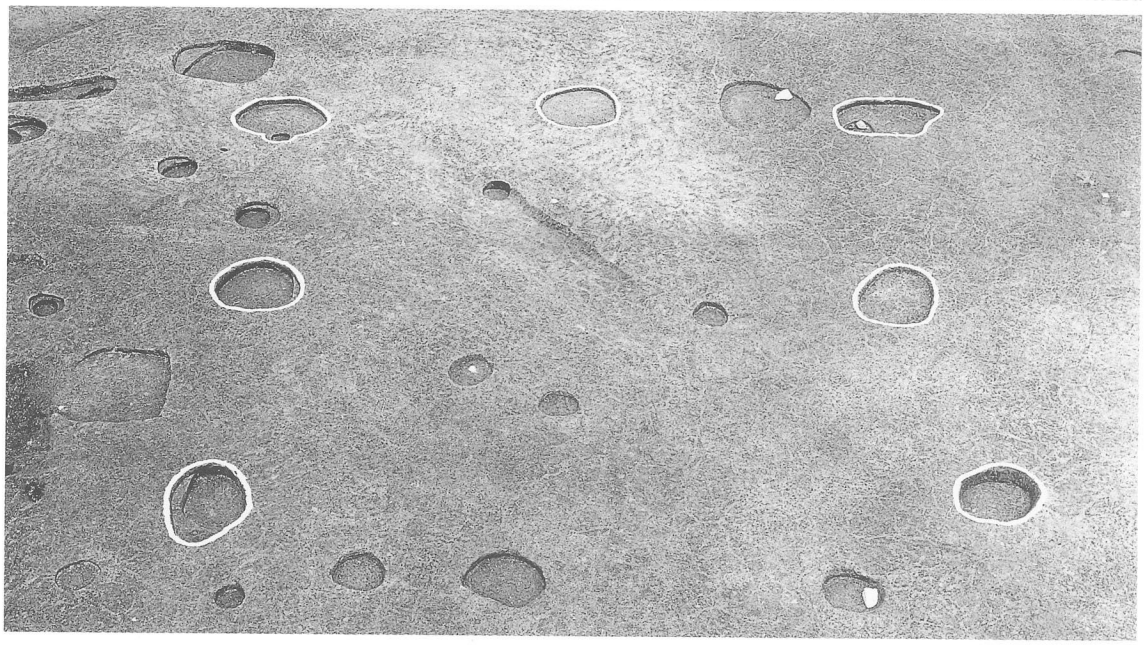
Ⅲ区全景　北から

（左）Ⅲ区全景　上空から
（右）Ⅲ区全景　南から



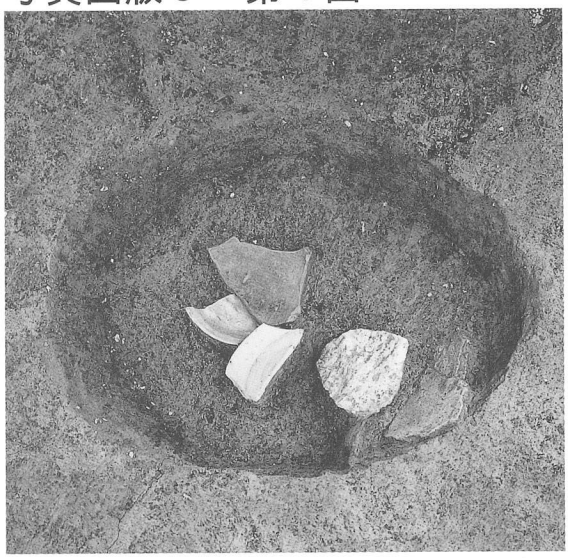
ＳＢ02　南から

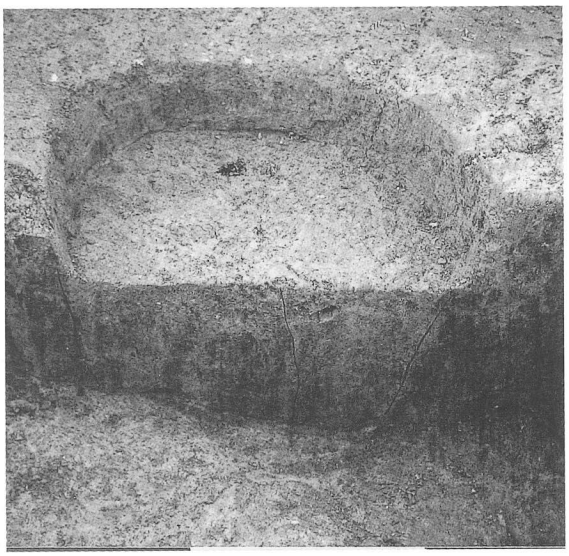
ＳＢ06　南から



ＳＢ08　南から

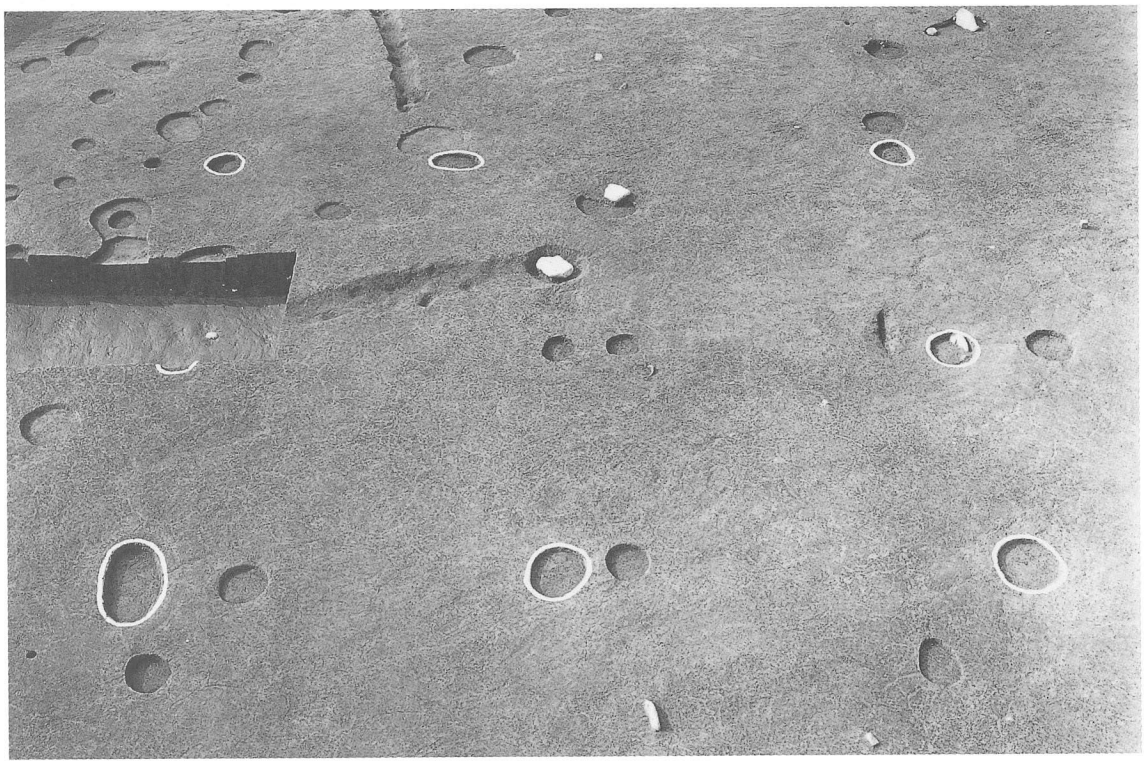
写真図版９　第１面





（左）
ＳＢ08　Ｐ３　平面
（右）
ＳＢ08　Ｐ３　断面

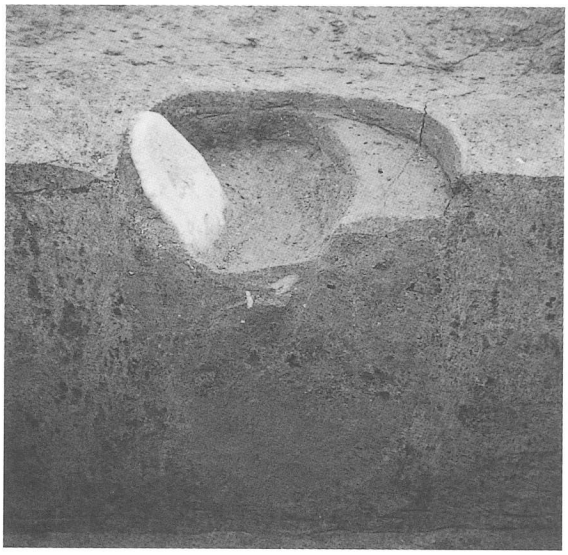
ＳＢ09　南から



ＳＢ10　南から

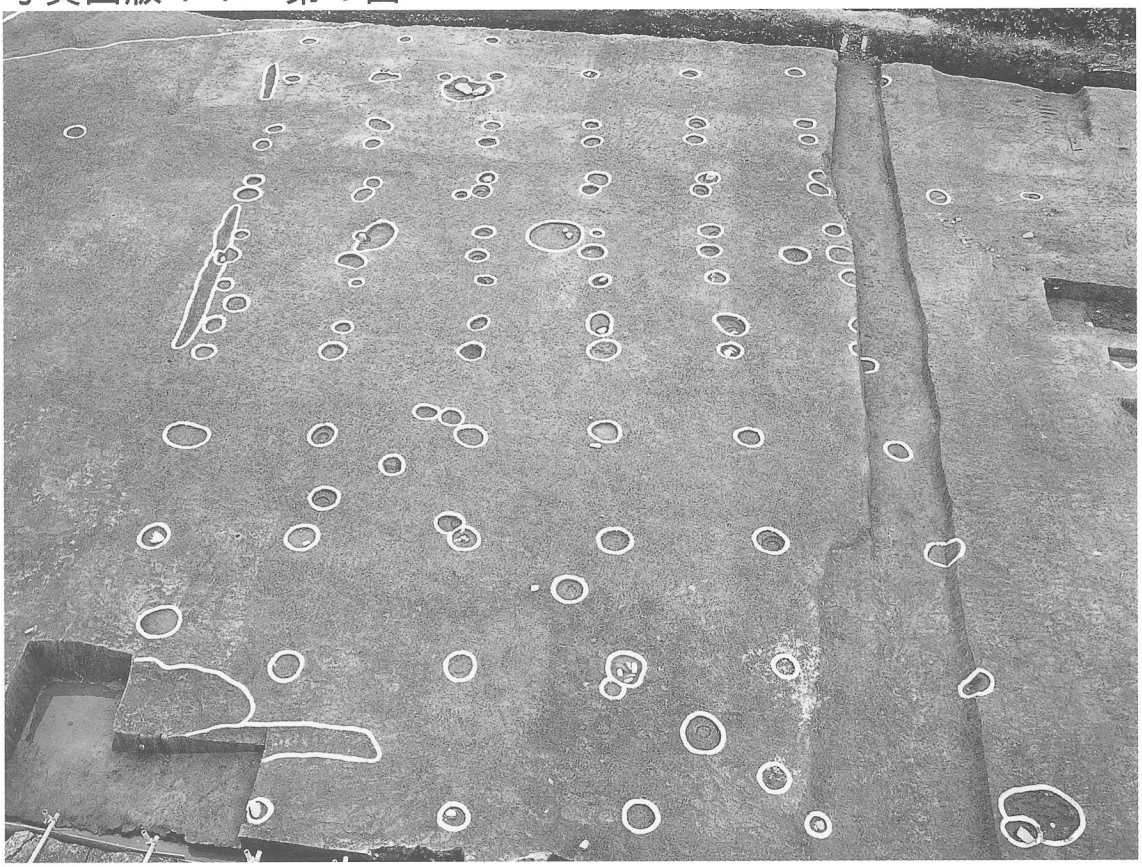
ＳＢ13　東から

(左)ＳＢ13
　Ｐ９　南から
(右)ＳＢ13
　Ｐ９　東から



(左)ＳＢ13
　Ｐ11　南から
(右)ＳＢ13
　Ｐ12　南から

写真図版１１　第１面

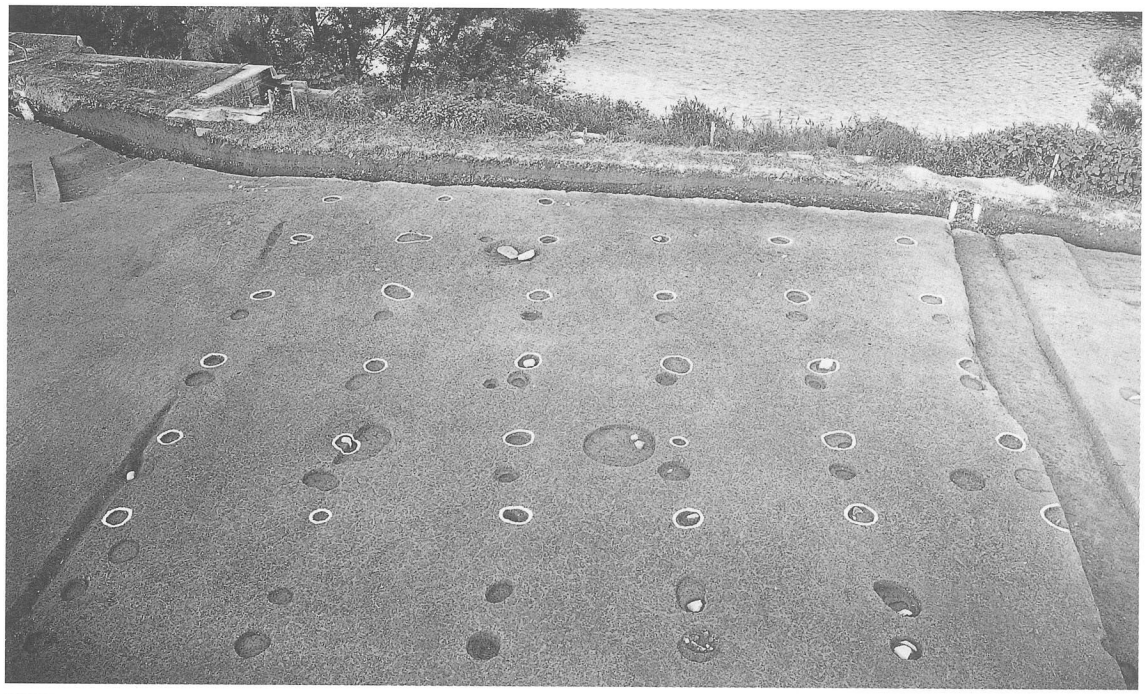


ＳＢ14～16　西から

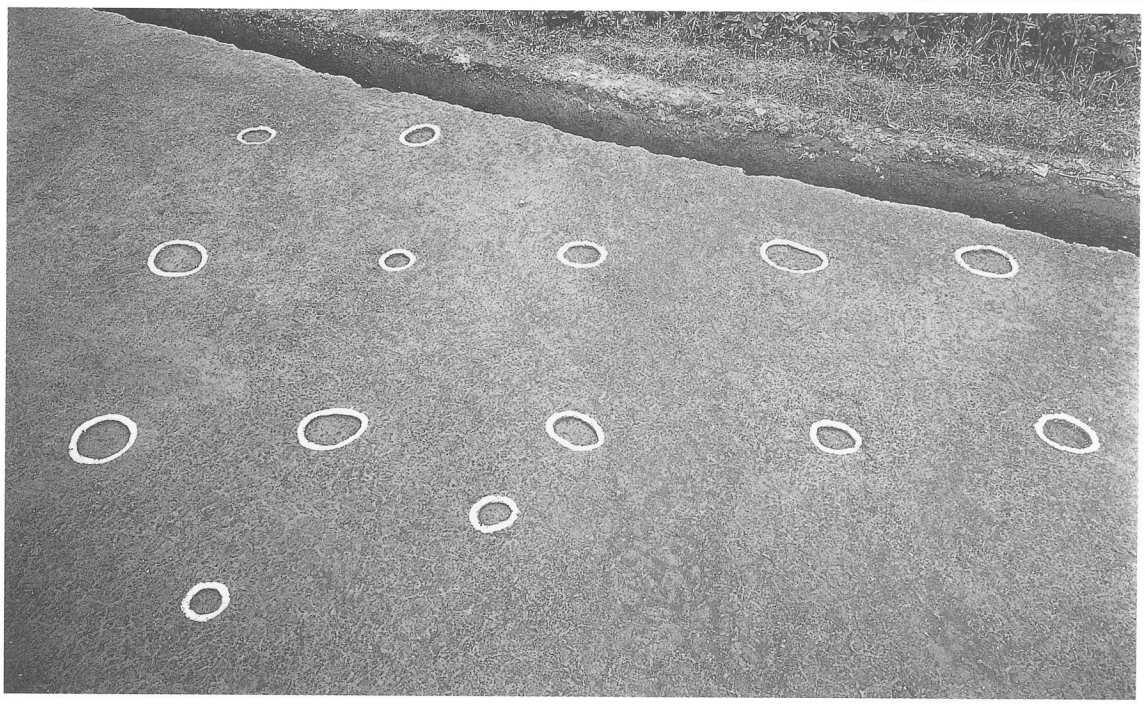
ＳＢ14　東から

ＳＢ14　南から

（左）ＳＢ14
　　Ｐ12　東から
（右）ＳＢ14
　　Ｐ12　南から



ＳＢ16　西から



ＳＢ17　西から

写真図版１３　第１面

ＳＫ04　北から

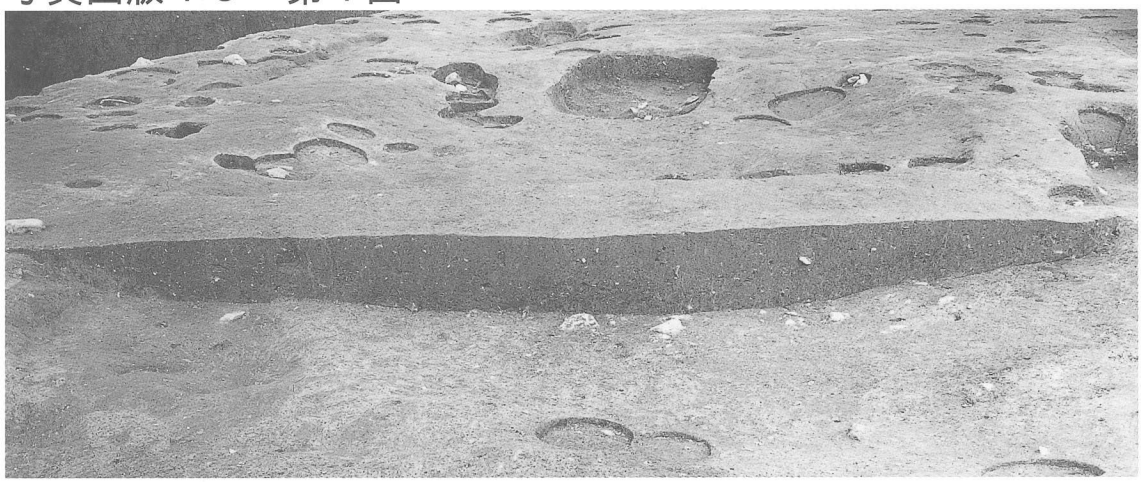
ＳＫ07　北から

ＳＫ09　北東から

ＳＫ09　完掘状況
北東から

ＳＤ03　西から

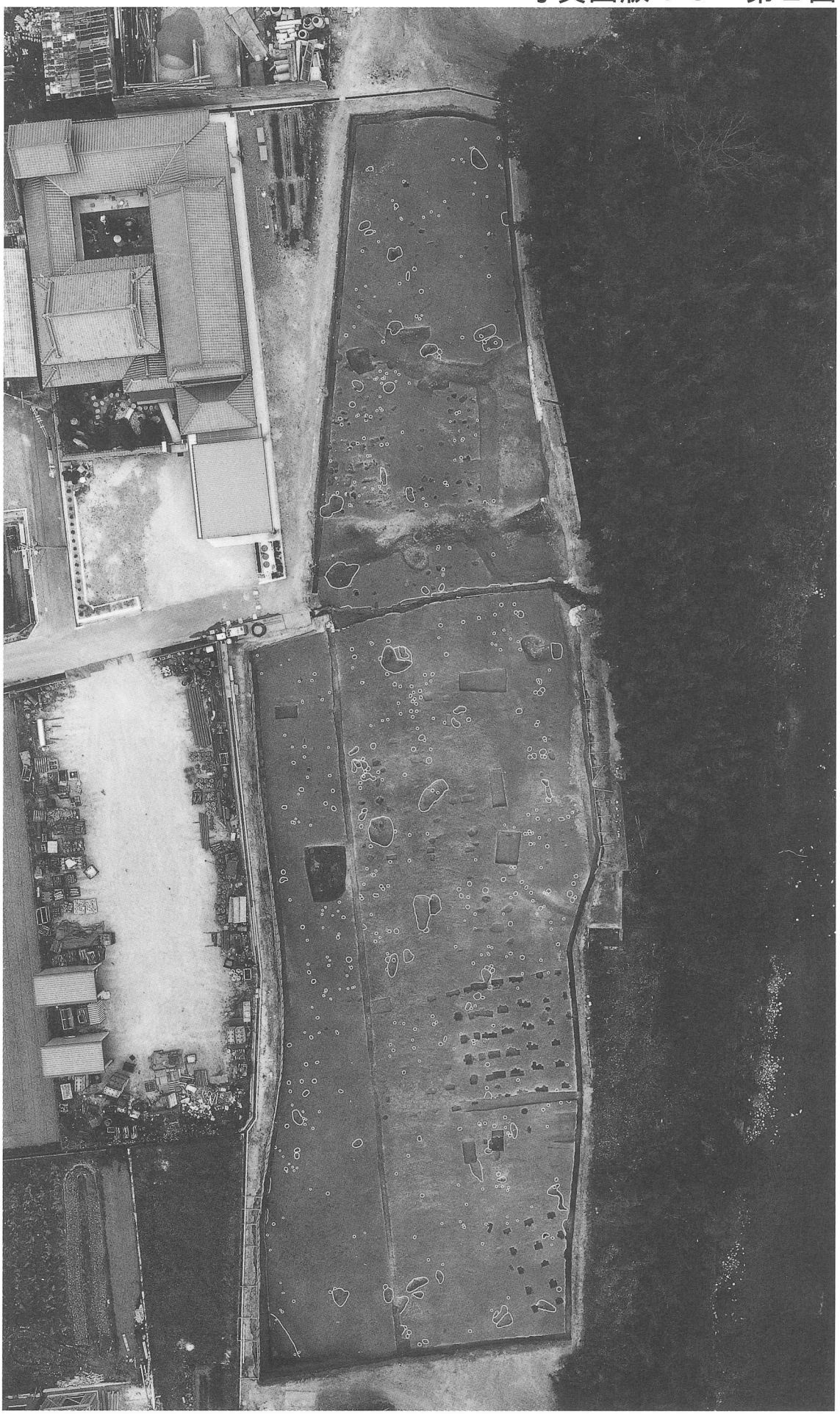
写真図版１５　第１面



ＳＤ07　南から

ＳＤ09　東から

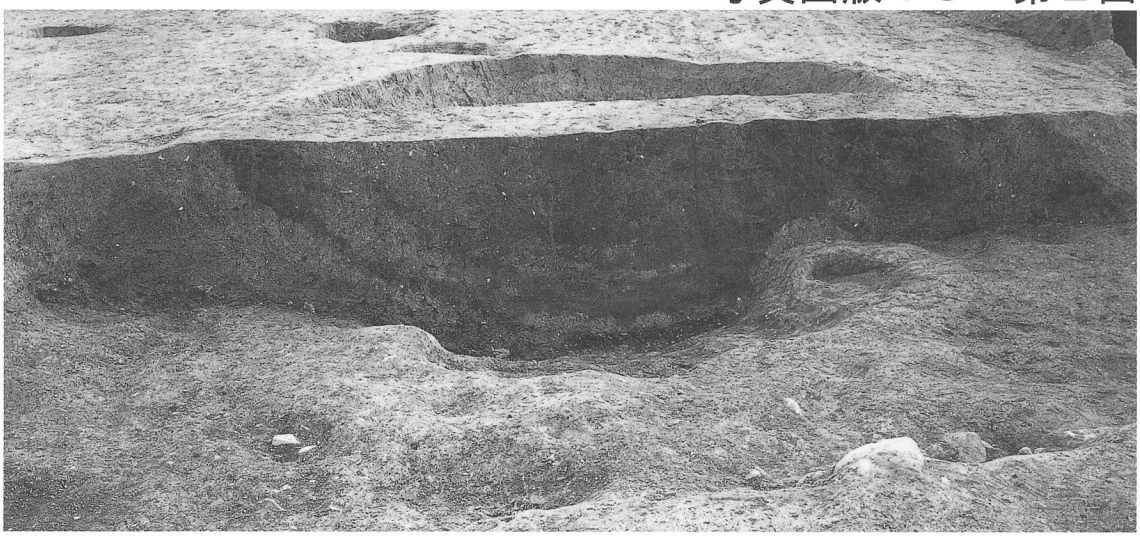
ＳＤ13　北から



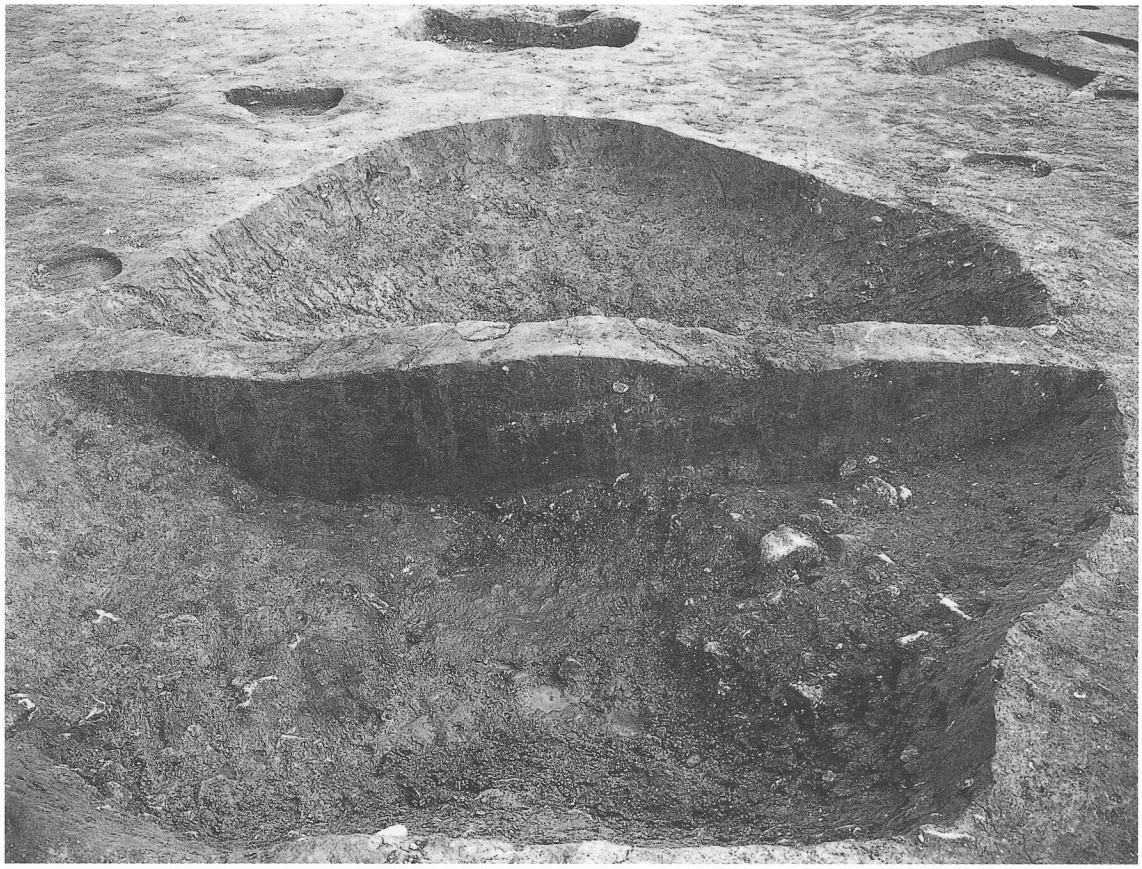
全景　真上から

全景　北から

全景　西から

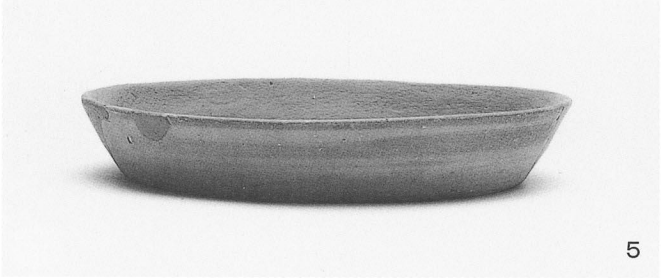


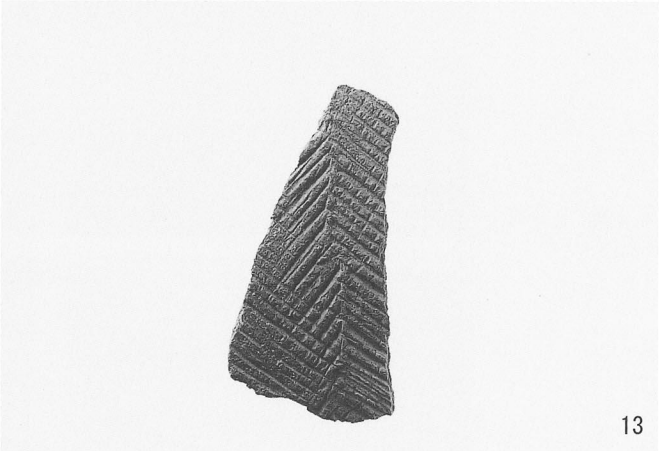
ＳＫ33　北から

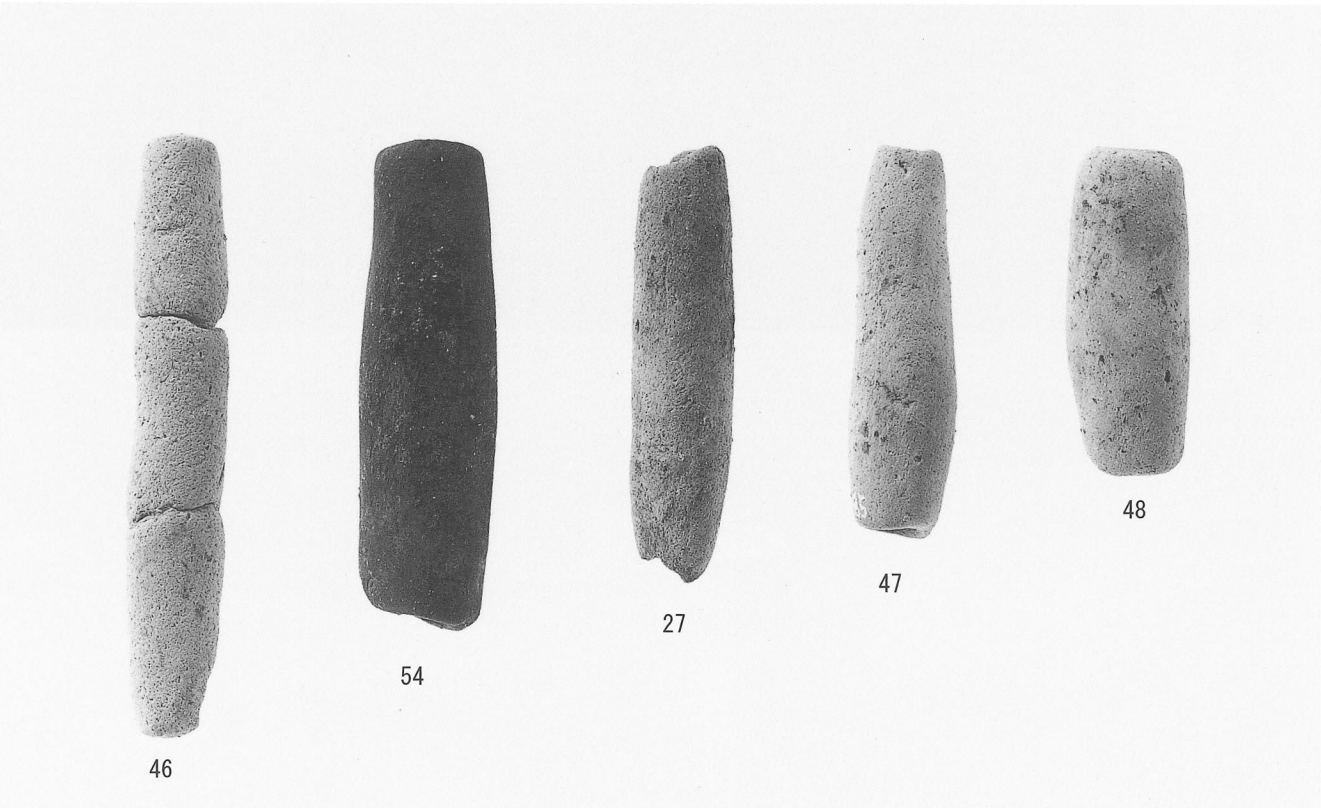


ＳＫ42　北から

写真図版１９　出土遺物



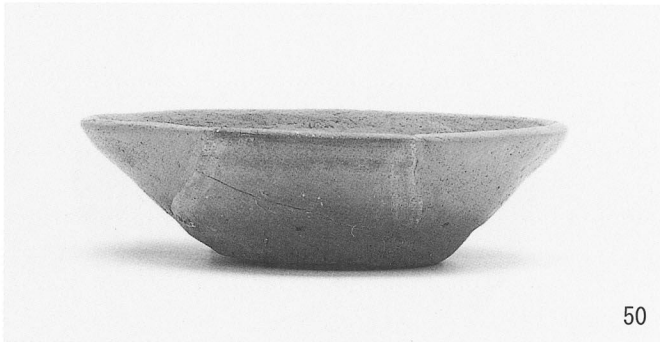


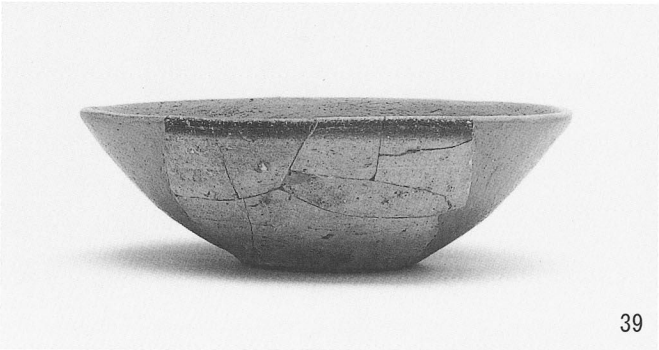


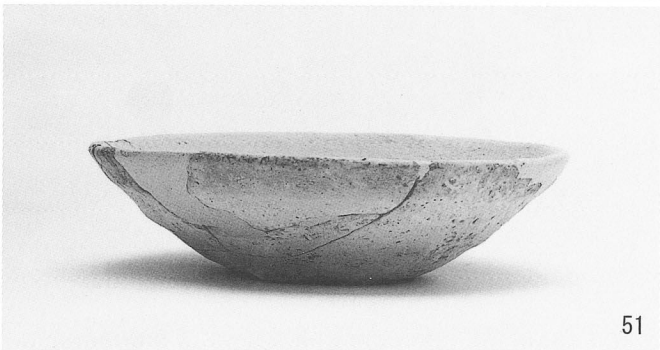
第１面出土土器（５・７・13・20・27）　ＳＢ08出土土器（31・33）

ＳＢ14出土土製品（46～48）　ＳＢ16出土土製品（54）

37

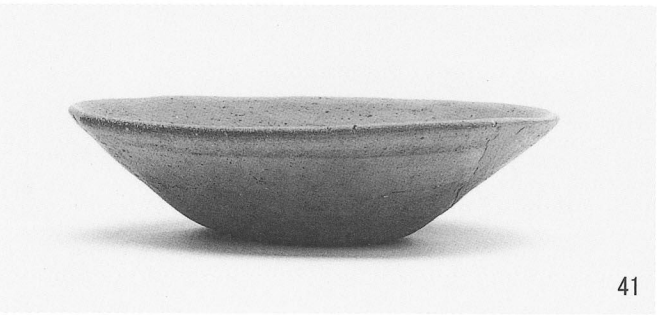

50

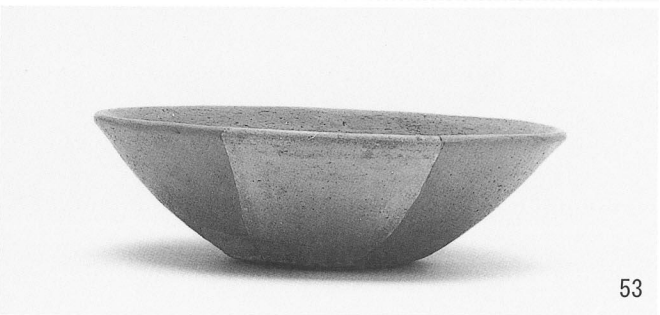

39


51

40

49


41


53

45

56

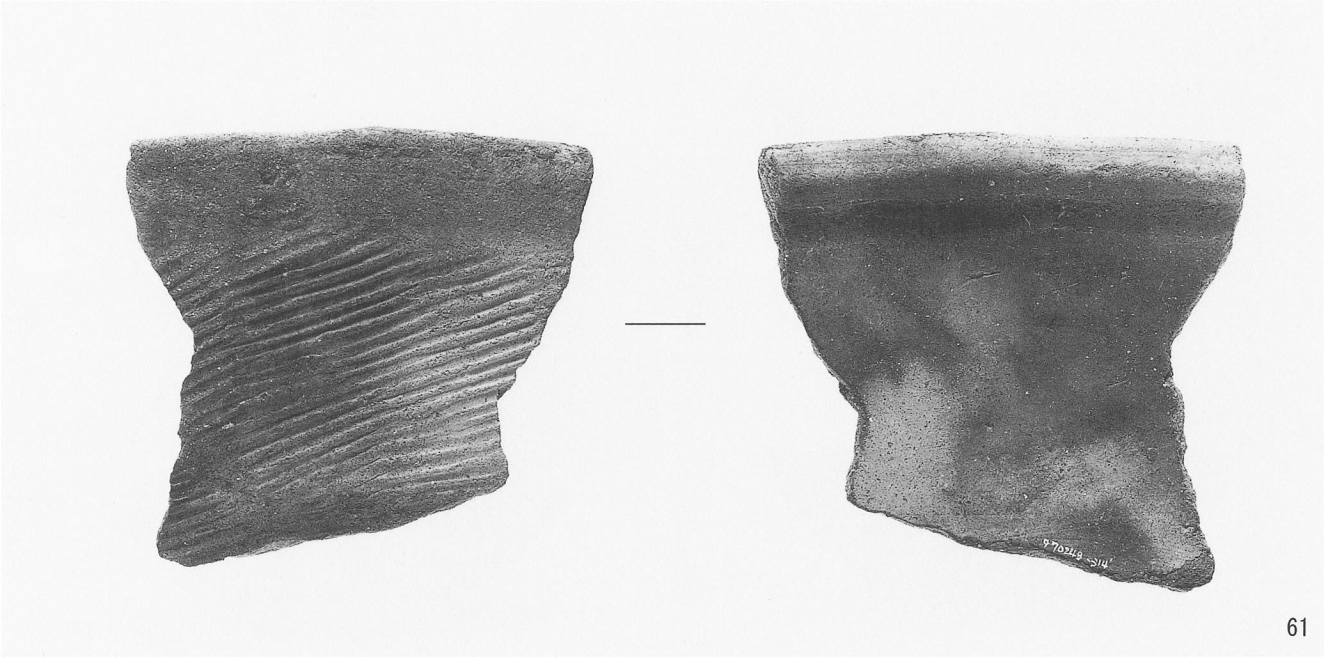
52

57

ＳＢ13出土土器(37)　ＳＢ14出土土器(39～41・45)　ＳＢ15出土土器(49～52)

ＳＢ16出土土器(53)　Ｐ1出土土器(56)　Ｐ４出土土器(57)

写真図版２１　出土遺物



Ｐ２出土土器(61)　Ｐ６出土土器(62～66)　Ｐ7出土土器(67)　Ｐ８出土土器(68)

Ｐ14出土土器(69)

77

80

84

87

88

85

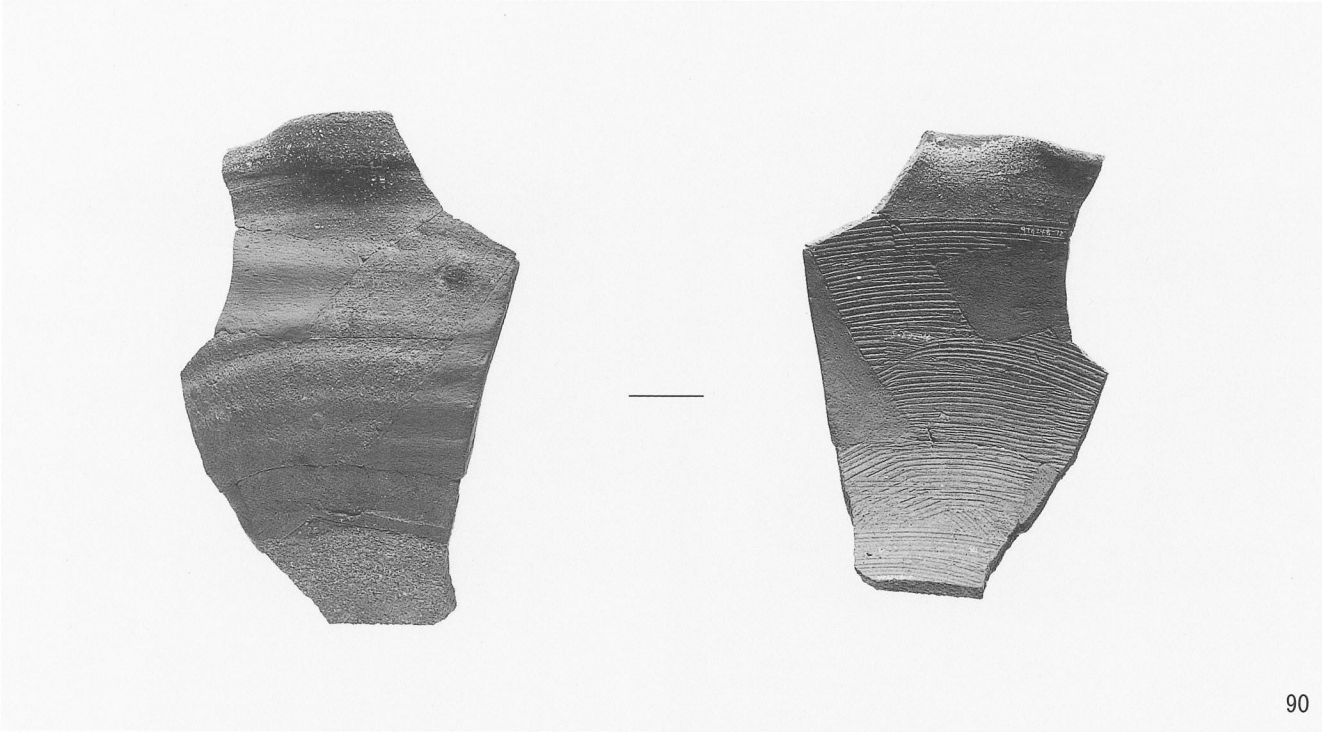
89

86

103

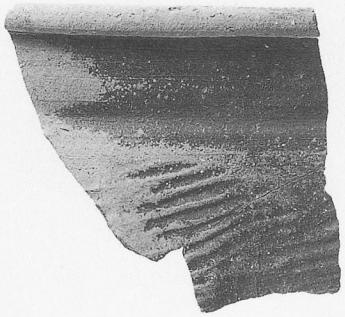
Ｐ17出土土器(77)　Ｐ18出土土器(80)　ＳＫ04出土土器(84～89)　ＳＫ15出土土器(103)

写真図版２３　出土遺物



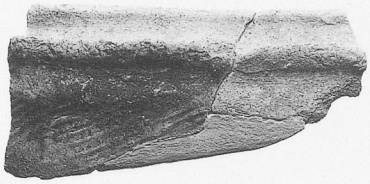
ＳＫ07出土土器(90)　ＳＫ15出土土器(105)　ＳＤ03出土土器(119・120・124)

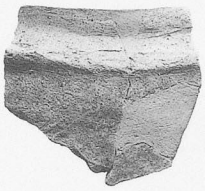
121

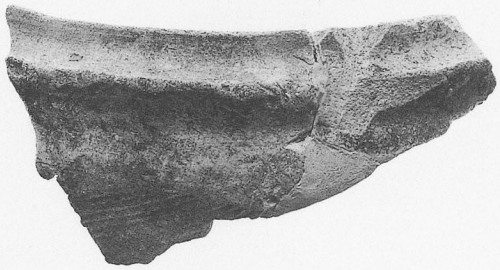

130

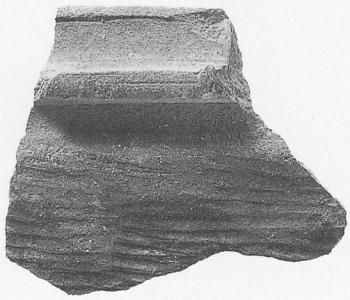
131

133



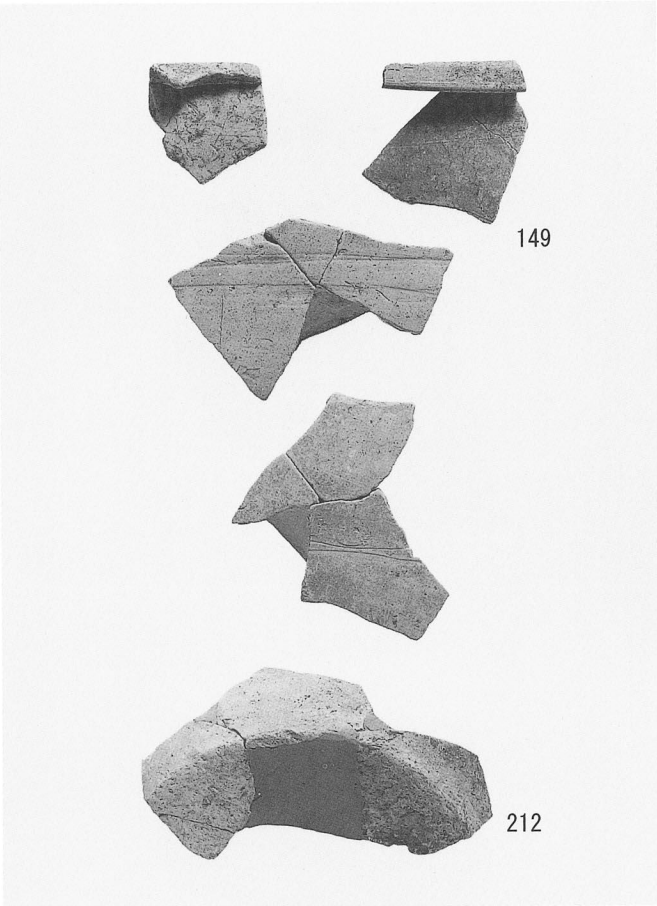

135

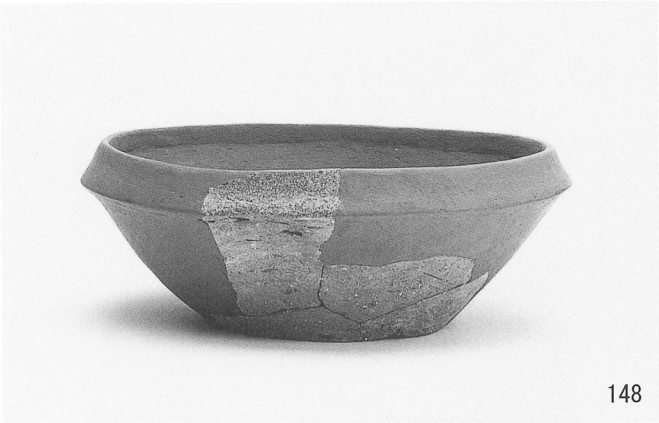

139

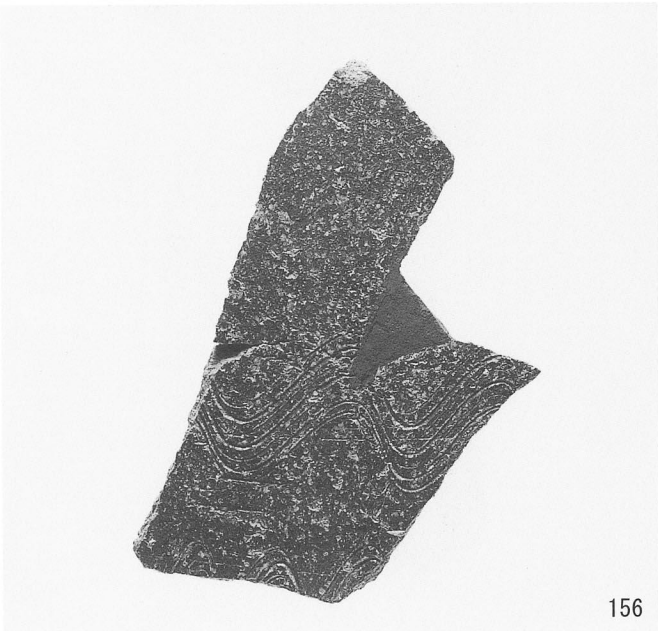

142

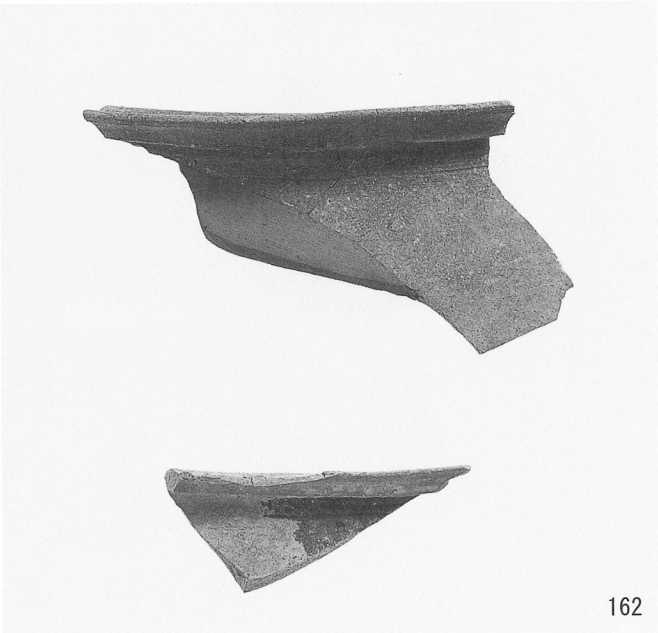
ＳＤ03出土土器(121・130・131・133・135・139・142)

写真図版２５　出土遺物

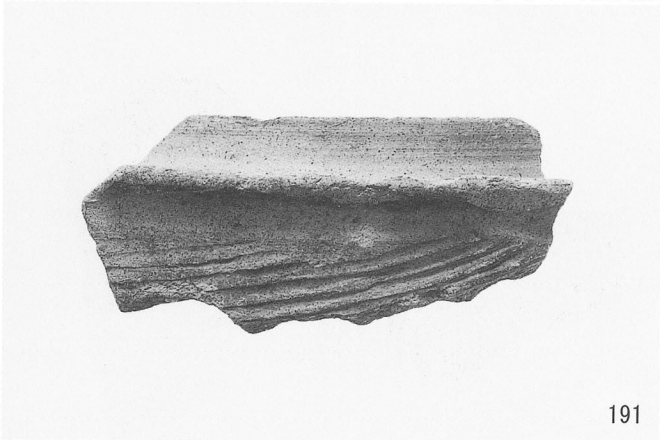






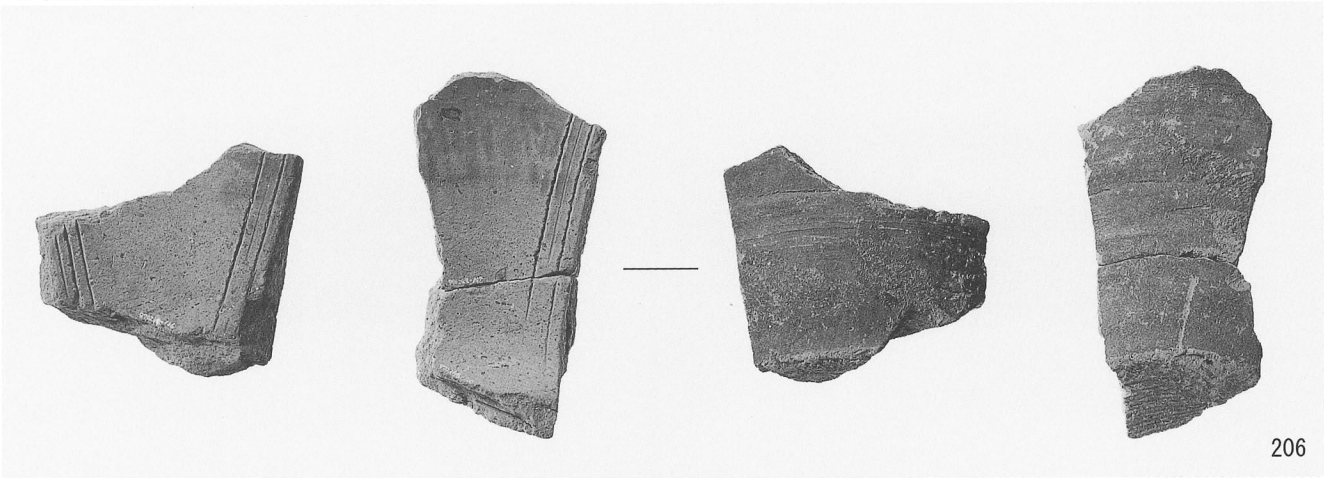


ＳＤ03出土土器(145・148・149・153・156・158)　ＳＤ06出土土器(162)　ＳＤ09出土土器(212)



ＳＤ06出土土器(167)　ＳＤ09出土土器(181・182・191・192・196・201)

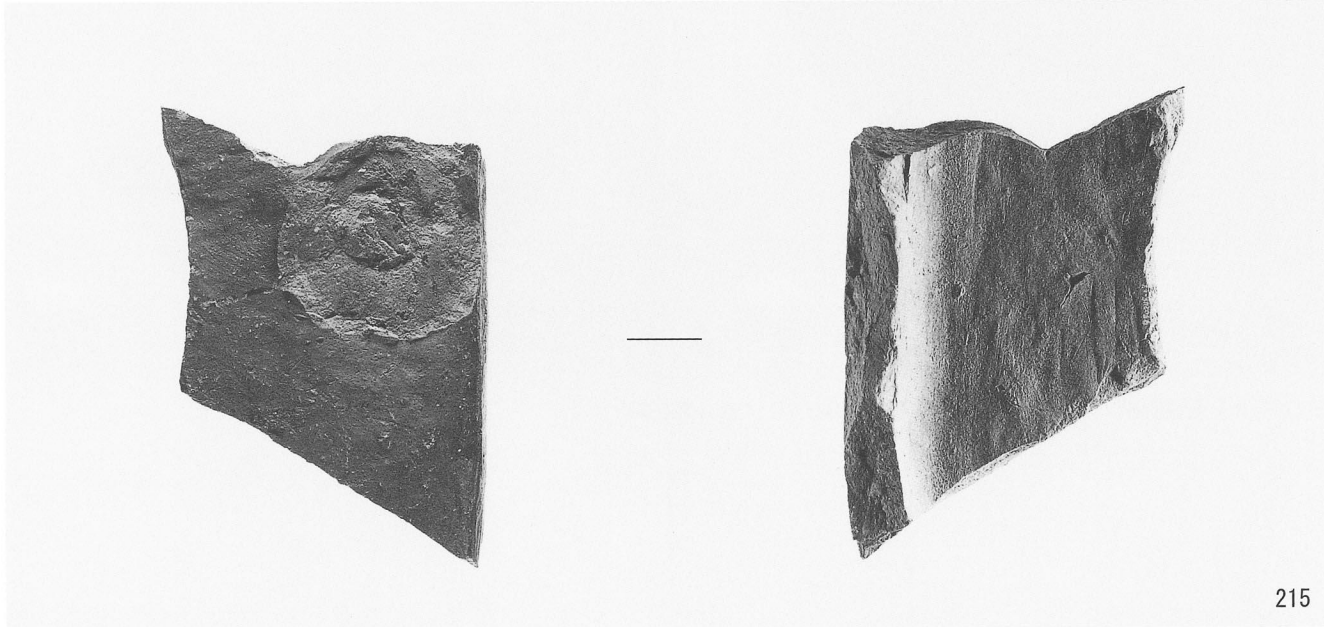
写真図版２７　出土遺物



206

207

208

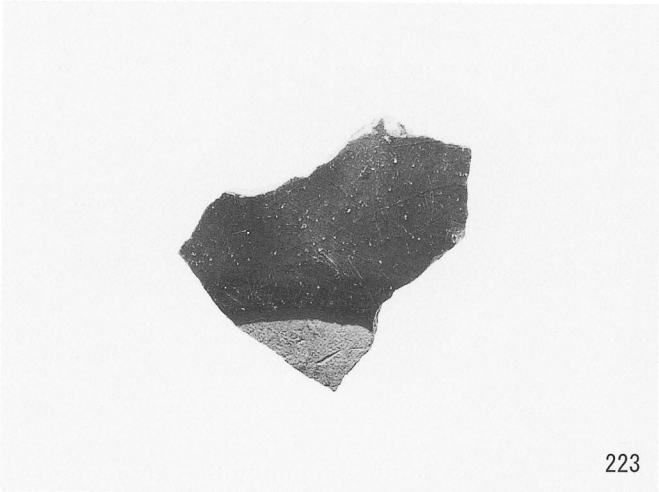


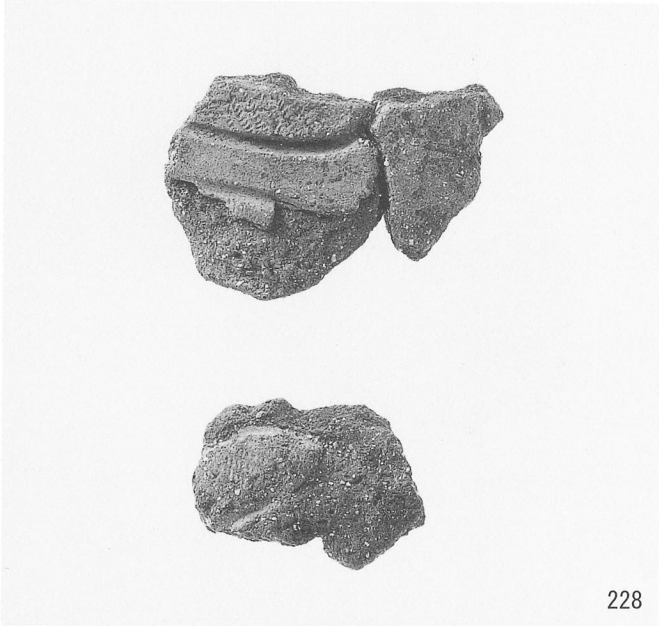
215

ＳＤ09出土土器(206～208・215)

220

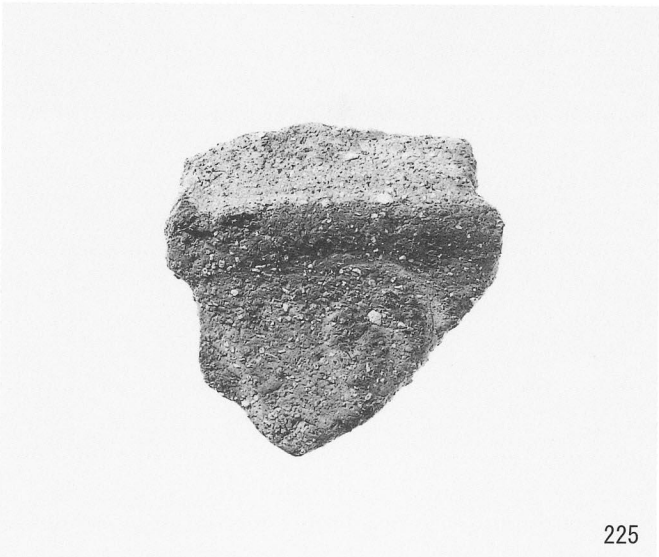
226


223


228

224

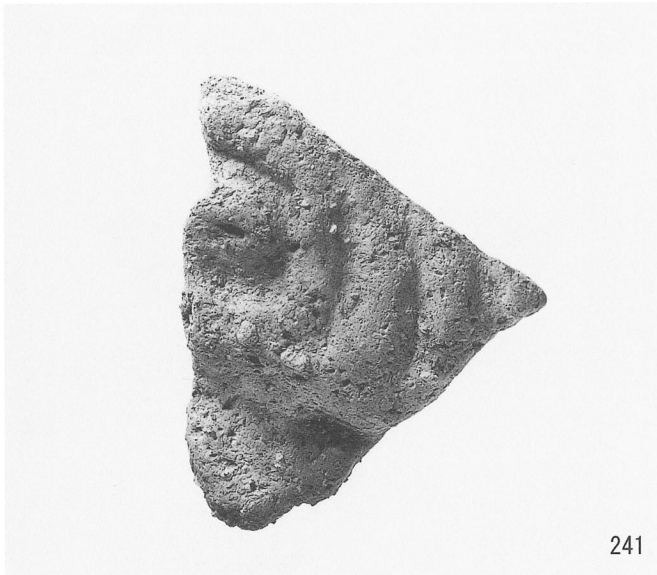
229


225

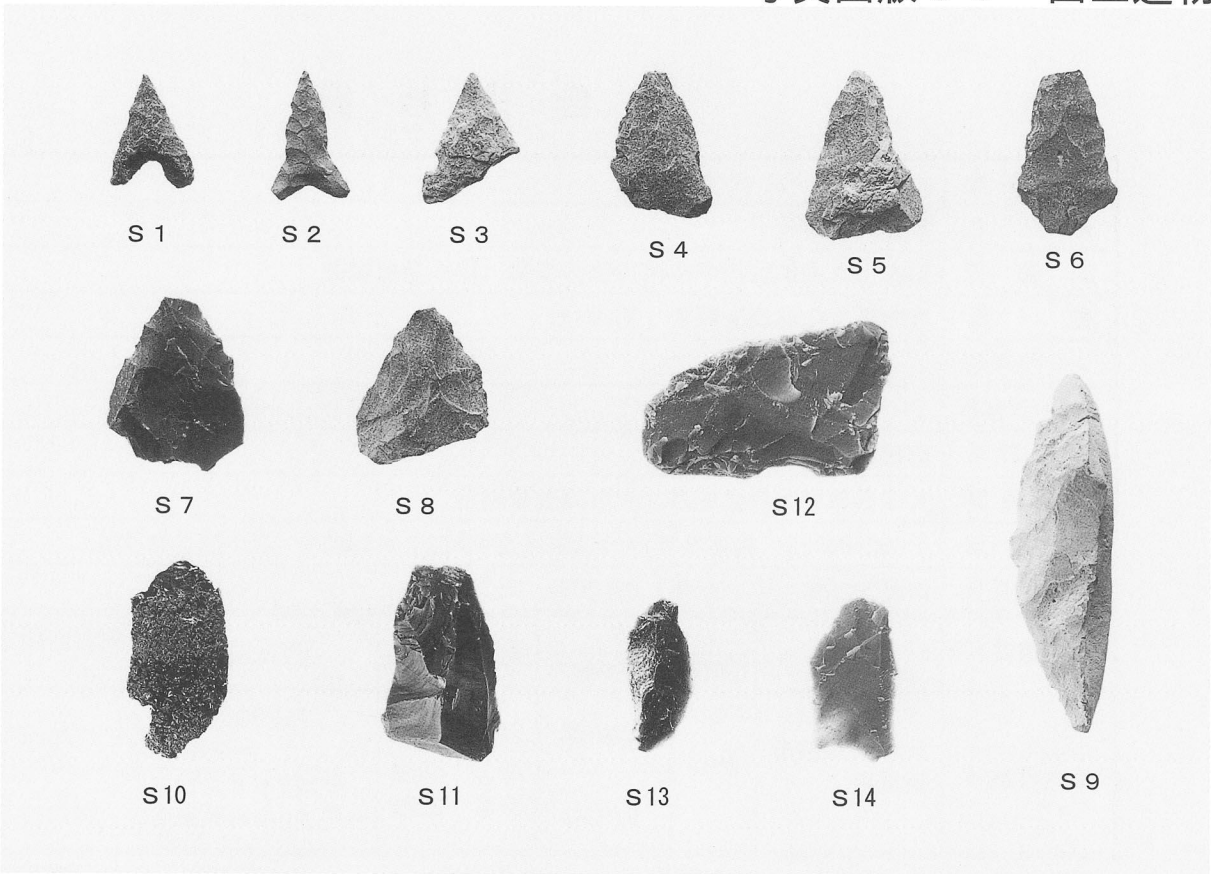
230

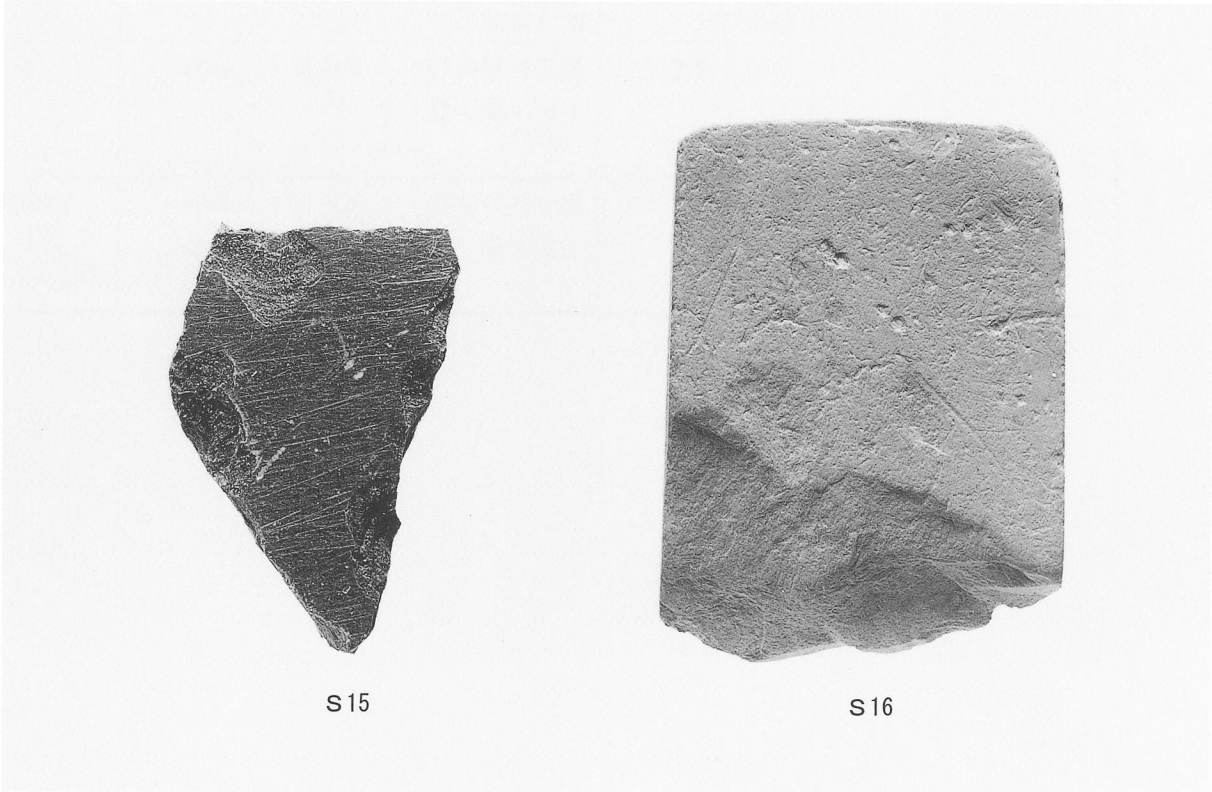
ＳＤ09出土土器(220・223)　畠２出土土器(224)　第２面包含層出土土器(225・226・228・229・230)

写真図版２９　出土遺物



第２面出土土器(231～234)　ＳＫ50出土土器(240・241)





第１面出土石器（Ｓ１～Ｓ16）

報 告 書 抄 録

ふりがな	いたばちょういせき
書名	板波町遺跡
副書名	加古川水系加古川中小河川改修事業に伴う発掘調査
巻次	兵庫県文化財調査報告　第294冊
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著書名	山田清朝・藤田　淳
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-00312　兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号　℡078-531-7011
発行年月日	西暦2006年（平成18年）3月20日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	調査番号					
いたばちょういせき 板波町遺跡	兵庫県西脇市 板波町	2814	970156	34度 57分 54秒	134度 58分 20秒	平成9年5月7日 ～8月8日	1736㎡	加古川水系加古川中小河川改修事業
			970248			平成9年８月18日 ～平成9年11月21日	1873㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
板波町遺跡	集落跡	縄文時代後期		土器・石器	
		奈良時代	掘立柱建物跡	土器	
		平安～鎌倉時代	掘立柱建物跡・土坑・溝・畠	須恵器・土師器	
		室町時代	掘立柱建物跡・土坑・溝	須恵器・土師器・丹波焼・備前焼	土師器すり鉢

兵庫県文化財調査報告　第294冊
西脇市板波町遺跡
— 加古川水系加古川中小河川改修事業に伴う発掘調査 —
平成18年3月20日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2-1-5
発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5-10-1
印　刷　岸　本　印　刷　所